松山市文化財調査報告書53

古照遺跡

—第8・9次調査—

（第1分冊）

1996

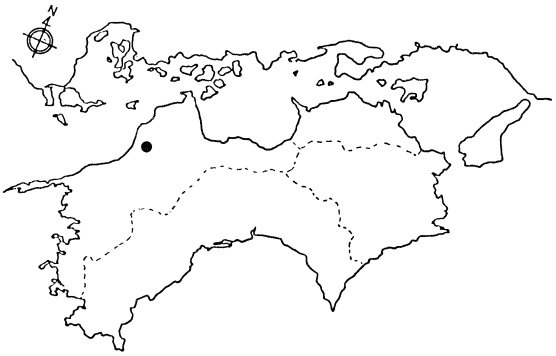
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

こでらいせき

古照遺跡

—第8・9次調査—



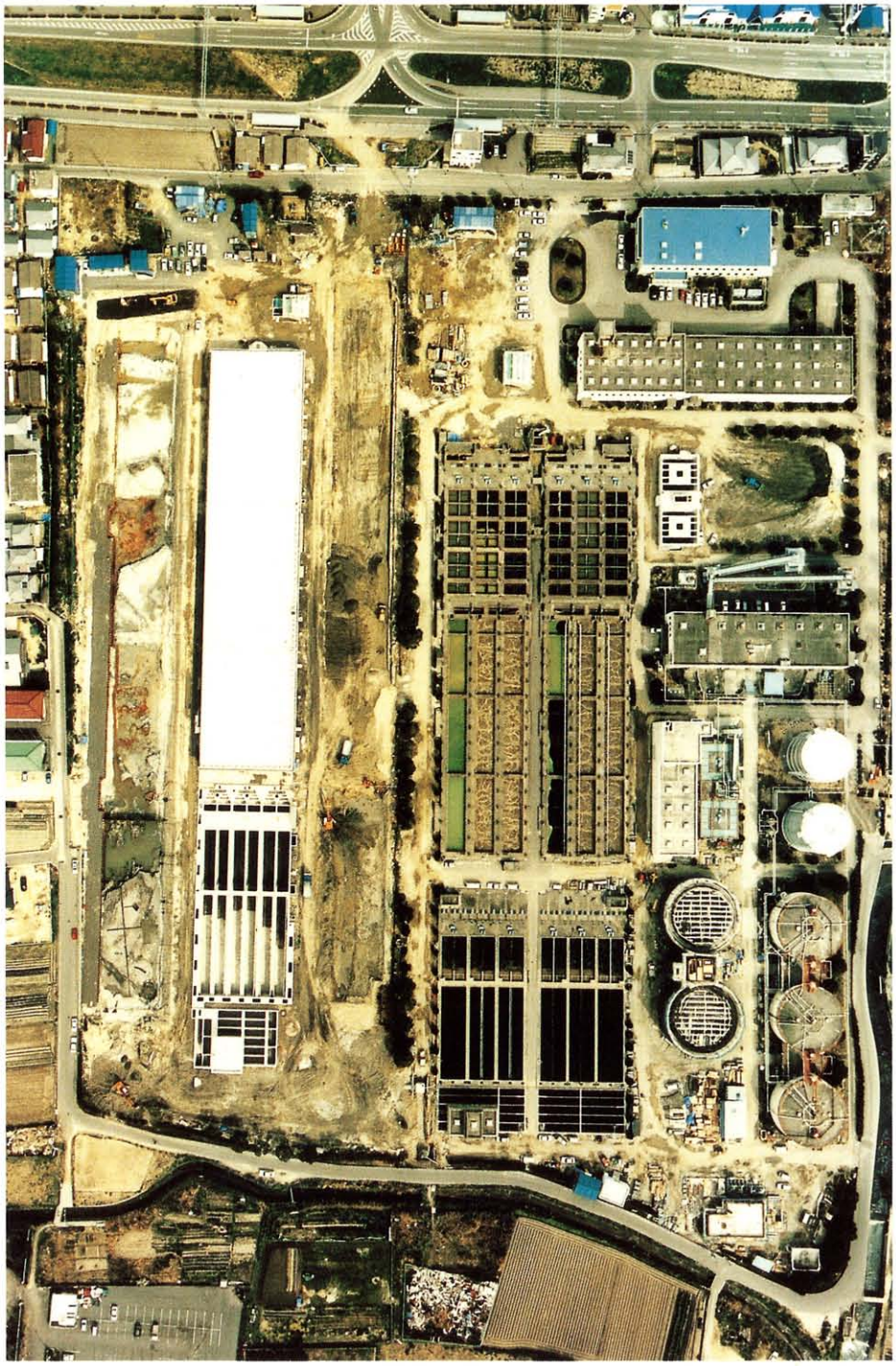
（第1分冊）

1996

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

図版１　湖洲六花鏡



図版２　第８次下層調査の空中写真

序

松山市には古照遺跡をはじめ多くの貴重な文化財が残されています。これら数多くの文化遺産を顕彰し、後世に残すことはわれわれの使命であり義務でもあります。

古照遺跡は、松山市中央下水処理場建設工事に伴う調査によって古墳時代前期の大洪水で埋没した潅漑土木施設「井堰」３基が確認され、わが国農耕文化の実態を知る重要な遺跡であることが判明しています。

本報告書は、平成４年度に調査しました古照遺跡の第８・９次調査の報告書です。本調査では、「井堰」周辺の旧地形が明らかとなり、当時の遺物も出土しており、古照遺跡を中心に古代の人々の営みが少なからず解ってきました。また、中世においては、検出された遺構や出土遺物などから、松山平野の中でも重要な集落があったと考えられます。

この報告書が埋蔵文化財に対するご理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりなにかとご指導、ご教授いただいた先生方に厚くお礼を申し上げ、今後とも一層のご協力、ご支援をお願い申し上げます。

平成８年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　田　中　誠　一

例　　言

1．本書は、松山市南江戸４丁目１－１　松山市下水道中央浄化センター内に所在する古照遺跡の第８・９次調査の概報である。

2．屋外調査は、松山市下水道建設課の委託をうけ、平成４年４月１日から平成５年３月31日までに（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが実施したものである。

3．整理・刊行作業は、下水道建設第１課並びに下水道建設第３課の委託をうけ、（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが実施したものである。

4．本書に使用した方位は磁北である。

5．遺構は、呼称を略号で記す場合がある。

掘立柱建物跡：ＳＢ、柵列：ＳＡ、墓遺構・土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、

自然流路：ＳＲ、柱穴：ＳＰ、性格不明：ＳＸ、井戸：ＳＥ

6．土色及び遺物観察表における色調は、『標準土色帖』1989年版による。

7．本文中における出土遺物の法量数値説明で、「推定」と明記されている場合には全ての数値が復元推定数値であり、明記されていない場合には完形なる数値である。

8．遺物の実測は、栗田正芳の責のもと、関正子、多知川富美子、萩野ちよみ、矢野久子、吉井信枝、喜安咲江、西島優子、篠森千里、室谷美也子、山内七重、石井美鈴、大谷志奈が行った。

9．遺構図・実測図等の浄書は、栗田正芳、田丸竜馬、鎌田譲二、上野山志保、岡市美紀、菅摩理、西島優子、山本仁美、喜安咲江、大谷志奈、山内七重、石井美鈴、篠森千里、越智司、本宮慎吾、末光博武、藤本数夫、重谷典夫、波多野恭久、岩岡慎一、横田佳直、堀内哲也が行った。

10．遺構の写真撮影は、栗田正芳と河野史知、一部を大西朋子が、遺物の写真撮影は大西朋子が行った。

11．本書の執筆・編集は、栗田正芳、出土歯牙については小笠原善治が行った。

12．本遺跡の報告にあたっては、下記の各氏・各機関に依頼し玉稿を頂いた。

脂肪酸分析・・中野益男（帯広畜産大学教授）・㈱ズコーシャ総合科学研究所

自然科学分析・・㈱古環境研究所

13．出土遺物並びに図面・写真類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管している。

14．調査・整理にあたっては、工楽善通（奈良国立文化財研究所）、下條信行・平井幸弘・田崎博之・村上恭通（愛媛大学）、高橋学（立命館大学）、宮本一夫（九州大学）、本田光子（別府大学）、外山秀一（皇學館大学）、橋本久和（高槻市立埋蔵文化財センター）、山本信夫（太宰府市教育委員会）、佐藤良二郎（宇佐市教育委員会）、大瀧雅嗣（愛媛県教育

委員会)、作田一耕・中野良一・柴田昌児・沖野新一・谷若倫郎・柴田圭子 (㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター)の各氏からご指導並びにご教示頂き、記して感謝します(敬称略)。

15. 調査中、㈱日本上下水道設計、㈱月島機械、㈱井原工業、㈱伸和建設、㈱オオノ開発、㈱浦本企工、㈱ワキタ、㈱ソガベ機械、㈱セットアップ、㈱パスコの各社に便宜を計って頂き、記して感謝します。

本　文　目　次（第１分冊）

Ⅰ　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1
1　遺跡の立地 …… 1
2　歴史的環境 …… 3
3　既往調査成果 …… 9
Ⅱ　調査に至る経緯と組織 …… 13
1　調査に至る経緯 …… 13
2　調査組織 …… 17
3　整理・刊行組織 …… 18
Ⅲ　第８次上層調査の概要 …… 20
1　調査の経過 …… 20
2　江戸時代の遺構と遺物 …… 21
1.土層　2.検出遺構　3.出土遺物
3　Ａ地区の遺構と遺物 …… 29
1.土層　2.掘立柱建物跡　3.柵列状遺構
4.墓遺構　5.土坑状遺構　6.溝状遺構
7.柱穴状遺構　8.性格不明遺構　9.遺構外出土遺物
4　Ｂ地区の遺構と遺物 …… 117
1.土層　2.掘立柱建物跡　3.土坑状遺構
4.溝状遺構　5.池状遺構　6.柱穴状遺構
7.遺構外出土遺物
Ⅳ　第８次下層調査の概要 …… 139
1　調査の経過 …… 139
2　土層 …… 141
3　最終沈殿池地区の遺構と遺物 …… 151
1.黒褐色粘土　2.出土遺物
4　エアレーションタンク地区の遺構と遺物 …… 168
1.遺構　2.出土遺物
5　最初沈澱池地区の遺構と遺物 …… 197
1.溝状遺構　2.出土遺物

－第２分冊－　　目　次

Ⅴ　第９次上層調査の概要

Ⅵ　第９次下層調査の概要

Ⅶ　分析編

1　古照遺跡８次調査の土坑に残存する脂肪の分析

2　古照遺跡８次調査Ａ地区出土の人の歯牙について

3　植物珪酸体（プラント・オパール）分析

4　放射性炭素年代測定結果

5　種実同定

6　樹種同定（1）

7　樹種同定（2）

8　古照遺跡１１次調査の植物珪酸体分析

Ⅷ　調査の成果と課題

Ⅸ　付編

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次（第１分冊）

〈Ⅰ〉
第１図　松山平野の地形分類図 …… 2
第２図　古照遺跡周辺の遺跡分布図（縮尺1/50000） …… 4
第３図　古照遺跡周辺の遺跡分布図（縮尺1/25000） …… 7
〈Ⅱ〉
第４図　古照遺跡既往調査地位置図（縮尺1/2400） ……12
第５図　８次調査地グリット設定図（縮尺1/1500） ……15
第６図　９次調査地グリット設定図（縮尺1/600） ……16
〈Ⅲ－２〉
第７図　基本柱状土層図（縮尺1/50） ……21
第８図　江戸期遺構測量図（縮尺1/200） ……23
第９図　畑遺構測量図（縮尺1/200） ……25
第10図　第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1/4・1/2） ……28
〈Ⅲ－３〉
第11図　基本柱状土層図（縮尺1/40） ……29
第12図　第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺1/4） ……29
第13図　調査地グリット設定図（縮尺1/600） ……30
第14図　遺構平面図（縮尺1/200） ……31
第15図　ＳＢ１測量図（縮尺1/60） ……33
第16図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺1/4） ……36
第17図　ＳＢ２測量図（縮尺1/60） ……37
第18図　ＳＢ２出土遺物実測図（縮尺1/4） ……39
第19図　ＳＢ３測量図（縮尺1/60） ……40
第20図　ＳＢ３出土遺物実測図（縮尺1/4） ……41
第21図　ＳＢ４測量図（縮尺1/60） ……42
第22図　ＳＢ４出土遺物実測図（縮尺1/4） ……43
第23図　ＳＢ５測量図（縮尺1/60） ……44
第24図　ＳＢ６測量図（縮尺1/60） ……45
第25図　ＳＡ１測量図（縮尺1/60） ……46
第26図　ＳＡ１出土遺物実測図（縮尺1/4） ……47
第27図　ＳＫ１測量図（縮尺1/20） ……49

第28図　ＳＫ１出土遺物実測図（縮尺1/4・1/2）……50
第29図　ＳＫ１４測量図（縮尺1/20）……51
第30図　ＳＫ１４出土遺物実測図（縮尺1/4）……51
第31図　ＳＫ３測量図（縮尺1/40）……52
第32図　ＳＫ３出土遺物実測図（縮尺1/4）……52
第33図　ＳＫ４測量図（縮尺1/40）……53
第34図　ＳＫ４出土遺物実測図（縮尺1/4）……53
第35図　ＳＫ５測量図（縮尺1/20）……54
第36図　ＳＫ５出土遺物実測図（縮尺1/4）……55
第37図　ＳＫ７測量図（縮尺1/40）……56
第38図　ＳＫ７出土遺物実測図（縮尺1/4）……56
第39図　ＳＫ１５測量図（縮尺1/40）……57
第40図　ＳＫ１５出土遺物実測図（縮尺1/4）……57
第41図　ＳＤ１・３・５・６・１５・１６測量図（縮尺1/100）……59
第42図　ＳＤ１・３・５・６・１５・１６土層図（縮尺1/100）……61
第43図　ＳＤ１出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……62
第44図　ＳＤ１出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……63
第45図　ＳＤ２測量図（縮尺1/60）……64
第46図　ＳＤ２出土遺物実測図（縮尺1/4）……64
第47図　ＳＤ３出土遺物実測図（縮尺1/4）……65
第48図　ＳＤ４測量図（縮尺1/60）……66
第49図　ＳＤ４出土遺物実測図（縮尺1/4）……66
第50図　ＳＤ５出土遺物実測図（縮尺1/4）……67
第51図　ＳＤ７測量図（縮尺1/60）……69
第52図　ＳＤ７出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……71
第53図　ＳＤ７出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……72
第54図　ＳＤ８・１８測量図（縮尺1/60）……73
第55図　ＳＤ８・１８出土遺物実測図（縮尺1/4）……73
第56図　ＳＤ１５出土遺物実測図（縮尺1/4）……74
第57図　ＳＤ１６出土遺物実測図（縮尺1/4）……75
第58図　ＳＰ１測量図（縮尺1/40）……76
第59図　ＳＰ１出土遺物実測図（縮尺1/4）……76
第60図　ＳＰ３測量図（縮尺1/40）……77
第61図　ＳＰ３出土遺物実測図（縮尺1/4）……77

第62図　ＳＰ４測量図（縮尺1/40）……77
第63図　ＳＰ４出土遺物実測図（縮尺1/4）……77
第64図　ＳＰ２７測量図（縮尺1/40）……78
第65図　ＳＰ２７出土遺物実測図（縮尺1/4）……78
第66図　ＳＰ４８測量図（縮尺1/40）……78
第67図　ＳＰ４８出土遺物実測図（縮尺1/4）……78
第68図　ＳＰ５４測量図（縮尺1/40）……79
第69図　ＳＰ５４出土遺物実測図（縮尺1/4）……79
第70図　ＳＰ８２測量図（縮尺1/40）……80
第71図　ＳＰ８２出土遺物実測図（縮尺1/4）……80
第72図　ＳＰ８５測量図（縮尺1/40）……80
第73図　ＳＰ８５出土遺物実測図（縮尺1/4）……80
第74図　ＳＰ９０測量図（縮尺1/40）……81
第75図　ＳＰ９０出土遺物実測図（縮尺1/4）……81
第76図　ＳＰ９１測量図（縮尺1/40）……81
第77図　ＳＰ９１出土遺物実測図（縮尺1/4）……81
第78図　ＳＰ１０２測量図（縮尺1/40）……82
第79図　ＳＰ１０２出土遺物実測図（縮尺1/4）……82
第80図　ＳＰ１３３測量図（縮尺1/40）……83
第81図　ＳＰ１３３出土遺物実測図（縮尺1/4）……83
第82図　ＳＰ１４８測量図（縮尺1/40）……83
第83図　ＳＰ１４８出土遺物実測図（縮尺1/4）……83
第84図　ＳＰ１７０測量図（縮尺1/40）……84
第85図　ＳＰ１７０出土遺物実測図（縮尺1/4）……84
第86図　ＳＰ１９１測量図（縮尺1/40）……84
第87図　ＳＰ１９１出土遺物実測図（縮尺1/4）……84
第88図　ＳＰ２０３測量図（縮尺1/40）……85
第89図　ＳＰ２０３出土遺物実測図（縮尺1/4）……85
第90図　ＳＰ２１９測量図（縮尺1/40）……85
第91図　ＳＰ２１９出土遺物実測図（縮尺1/4）……85
第92図　ＳＰ２２４測量図（縮尺1/40）……86
第93図　ＳＰ２２４出土遺物実測図（縮尺1/4）……86
第94図　ＳＰ２２７測量図（縮尺1/40）……87
第95図　ＳＰ２２７出土遺物実測図（縮尺1/4）……87

第96図　ＳＰ２３４測量図（縮尺1/40）……87
第97図　ＳＰ２３４出土遺物実測図（縮尺1/4）……87
第98図　ＳＰ２６８測量図（縮尺1/40）……88
第99図　ＳＰ２６８出土遺物実測図（縮尺1/4）……88
第100図　ＳＰ３００測量図（縮尺1/40）……88
第101図　ＳＰ３００出土遺物実測図（縮尺1/4）……89
第102図　ＳＰ３０６測量図（縮尺1/40）……89
第103図　ＳＰ３０６出土遺物実測図（縮尺1/4）……89
第104図　ＳＰ３３１測量図（縮尺1/40）……90
第105図　ＳＰ３３１出土遺物実測図（縮尺1/4）……90
第106図　ＳＰ３４８測量図（縮尺1/40）……90
第107図　ＳＰ３４８出土遺物実測図（縮尺1/4）……90
第108図　ＳＰ３８３測量図（縮尺1/40）……91
第109図　ＳＰ３８３出土遺物実測図（縮尺1/4）……91
第110図　ＳＰ４２６測量図（縮尺1/40）……92
第111図　ＳＰ４２６出土遺物実測図（縮尺1/4）……92
第112図　ＳＰ４４２測量図（縮尺1/40）……92
第113図　ＳＰ４４２出土遺物実測図（縮尺1/4）……92
第114図　ＳＰ５２５測量図（縮尺1/40）……93
第115図　ＳＰ５２５出土遺物実測図（縮尺1/4）……93
第116図　ＳＰ５５２測量図（縮尺1/40）……94
第117図　ＳＰ５５２出土遺物実測図（縮尺1/4）……94
第118図　ＳＸ２・３測量図（縮尺1/40）……95
第119図　ＳＸ２・３出土遺物実測図（縮尺1/4）……96
第120図　ＳＸ５測量図（縮尺1/40）……97
第121図　ＳＸ５出土遺物実測図（縮尺1/4）……97
第122図　ＳＸ７測量図（縮尺1/40）……98
第123図　ＳＸ７出土遺物実測図（縮尺1/4）……98
第124図　遺構外出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……100
第125図　遺構外出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……102
第126図　遺構外出土遺物実測図（３）（縮尺1/4）……103
第127図　遺構外出土遺物実測図（４）（縮尺1/4）……105
第128図　遺構外出土遺物実測図（５）（縮尺1/4）……105
第129図　遺構外出土遺物実測図（６）（縮尺1/4）……106

第130図　遺構外出土遺物実測図（７）（縮尺1/4）……107
第131図　遺構外出土遺物実測図（８）（縮尺1/4）……108
第132図　遺構外出土遺物実測図（９）（縮尺1/4）……110
第133図　遺構外出土遺物実測図（10）（縮尺1/4）……111
第134図　遺構外出土遺物実測図（11）（縮尺1/4）……112
第135図　遺構外出土遺物実測図（12）（縮尺1/4）……113
第136図　遺構外出土遺物実測図（13）（縮尺1/4）……114
第137図　遺構外出土遺物実測図（14）（縮尺1/4）……115
第138図　遺構外出土遺物実測図（15）（縮尺1/2･1/3･1/4）……115
〈Ⅲ－４〉
第139図　調査地グリット設定図（縮尺1/600）……117
第140図　基本土層柱状図（縮尺1/40）……118
第141図　遺構平面図（縮尺1/200）……119
第142図　ＳＢ１測量図（縮尺1/60）……122
第143図　ＳＢ２測量図（縮尺1/60）……123
第144図　ＳＢ３測量図（縮尺1/60）……124
第145図　ＳＫ２測量図（縮尺1/20）……126
第146図　ＳＫ２出土遺物実測図（縮尺1/4）……126
第147図　ＳＫ６測量図（縮尺1/20）……127
第148図　ＳＤ１１・１５測量図（縮尺1/100･1/60）……129
第149図　ＳＤ１１・１５出土遺物実測図（縮尺1/4）……131
第150図　ＳＧ１測量図（縮尺1/40）……132
第151図　ＳＧ１土層図（縮尺1/40）……133
第152図　ＳＰ３１測量図（縮尺1/20）……134
第153図　ＳＰ３１出土遺物実測図（縮尺1/4）……134
第154図　遺構外出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……136
第155図　遺構外出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……138
〈Ⅳ－２〉
第156図　西壁・南壁土層図（１）（縮尺1/100）……143
第157図　南壁土層図（２）（縮尺1/100）……145
第158図　南壁土層図（３）（縮尺1/100）……147
第159図　南壁土層図（４）（縮尺1/100）……149
〈Ⅳ－３〉
第160図　粘土土層図（縮尺1/20）……152

第130図　遺構外出土遺物実測図（７）（縮尺1/4）……107
第131図　遺構外出土遺物実測図（８）（縮尺1/4）……108
第132図　遺構外出土遺物実測図（９）（縮尺1/4）……110
第133図　遺構外出土遺物実測図（10）（縮尺1/4）……111
第134図　遺構外出土遺物実測図（11）（縮尺1/4）……112
第135図　遺構外出土遺物実測図（12）（縮尺1/4）……113
第136図　遺構外出土遺物実測図（13）（縮尺1/4）……114
第137図　遺構外出土遺物実測図（14）（縮尺1/4）……115
第138図　遺構外出土遺物実測図（15）（縮尺1/2･1/3･1/4）……115
〈Ⅲ－４〉
第139図　調査地グリット設定図（縮尺1/600）……117
第140図　基本土層柱状図（縮尺1/40）……118
第141図　遺構平面図（縮尺1/200）……119
第142図　ＳＢ１測量図（縮尺1/60）……122
第143図　ＳＢ２測量図（縮尺1/60）……123
第144図　ＳＢ３測量図（縮尺1/60）……124
第145図　ＳＫ２測量図（縮尺1/20）……126
第146図　ＳＫ２出土遺物実測図（縮尺1/4）……126
第147図　ＳＫ６測量図（縮尺1/20）……127
第148図　ＳＤ１１・１５測量図（縮尺1/100･1/60）……129
第149図　ＳＤ１１・１５出土遺物実測図（縮尺1/4）……131
第150図　ＳＧ１測量図（縮尺1/40）……132
第151図　ＳＧ１土層図（縮尺1/40）……133
第152図　ＳＰ３１測量図（縮尺1/20）……134
第153図　ＳＰ３１出土遺物実測図（縮尺1/4）……134
第154図　遺構外出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……136
第155図　遺構外出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……138
〈Ⅳ－２〉
第156図　西壁・南壁土層図（１）（縮尺1/100）……143
第157図　南壁土層図（２）（縮尺1/100）……145
第158図　南壁土層図（３）（縮尺1/100）……147
第159図　南壁土層図（４）（縮尺1/100）……149
〈Ⅳ－３〉
第160図　粘土土層図（縮尺1/20）……152

第161図　最終沈殿池地区遺構平面図（縮尺1/160）……153
第162図　粘土東側土層図（縮尺1/50）……155
第163図　杭列測量図（縮尺1/40）……156
第164図　流木群測量図（縮尺1/40）……157
第165図　杭列出土遺物実測図（縮尺1/6･1/4）……160
第166図　流木群出土遺物実測図（縮尺1/4）……161
第167図　出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……162
第168図　出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……163
第169図　出土遺物実測図（３）（縮尺1/4）……165
第170図　出土遺物実測図（４）（縮尺1/4）……166
第171図　出土遺物実測図（５）（縮尺1/4）……167
〈Ⅳ－４〉
第172図　エアレーションタンク地区遺構平面図（縮尺1/160）……169
第173図　粘土西側土層図（縮尺1/40）……171
第174図　小自然堤防土層図（縮尺1/40）……171
第175図　粘土東肩土層図（縮尺1/40）……172
第176図　小自然堤防出土遺物実測図（縮尺1/4･1/8）……174
第177図　緑灰色粘土東肩出土遺物実測図（縮尺1/4）……175
第178図　出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……177
第179図　出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……178
第180図　出土遺物実測図（３）（縮尺1/4）……179
第181図　出土遺物実測図（４）（縮尺1/4）……181
第182図　出土遺物実測図（５）（縮尺1/4）……182
第183図　出土遺物実測図（６）（縮尺1/4）……184
第184図　出土遺物実測図（７）（縮尺1/4）……186
第185図　出土遺物実測図（８）（縮尺1/4）……187
第186図　出土遺物実測図（９）（縮尺1/4）……189
第187図　出土遺物実測図（１０）（縮尺1/4）……191
第188図　出土遺物実測図（１１）（縮尺1/3･1/4）……192
第189図　出土遺物実測図（１２）（縮尺1/4）……193
〈Ⅳ－５〉
第190図　最初沈殿池地遺構平面図（縮尺1/160）……195
第191図　粘土東側土層図（縮尺1/40）……197
第192図　ＳＤ１出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……200

第193図　ＳＤ１出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……201
第194図　ＳＤ１出土遺物実測図（３）（縮尺1/4）……202
第195図　ＳＤ１出土遺物実測図（４）（縮尺1/4）……203
第196図　ＳＤ１出土遺物実測図（５）（縮尺1/4）……204
第197図　ＳＤ１出土遺物実測図（６）（縮尺1/4）……205
第198図　ＳＤ１出土遺物実測図（７）（縮尺1/4）……206
第199図　ＳＤ１出土遺物実測図（８）（縮尺1/4）……208
第200図　ＳＤ１出土遺物実測図（９）（縮尺1/4）……209
第201図　出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）……211
第202図　出土遺物実測図（２）（縮尺1/4）……213
第203図　出土遺物実測図（３）（縮尺1/4）……214
第204図　出土遺物実測図（４）（縮尺1/4）……215
第205図　出土遺物実測図（５）（縮尺1/4）……216
第206図　出土遺物実測図（６）（縮尺1/4）……217
第207図　出土遺物実測図（７）（縮尺1/4）……217

表　目　次（第１分冊）

〈Ⅱ〉
表１　申請地一覧……14
〈Ⅲ〉
表２　水田遺構一覧……22

写真図版目次（第１分冊）

巻頭カラー図版１　湖洲六花鏡
巻頭カラー図版２　第８次下層調査の空中写真

Ⅰ　遺跡の立地と歴史的環境

1　遺跡の立地

松山平野は、愛媛県のほぼ中央部、高縄半島の付け根部分に位置する。この高縄半島中央部には、半島最高峰の東三方ケ森をはじめ、北三方ケ森、伊之子山、高縄山からなる高縄山地が形成されている。この高縄山地に源を発した河川によって形成された沖積平野が松山平野である。

古照遺跡はこの松山平野の西側にあり、東に勝山（132.1m）、北に大峰ケ台（133.7m）、北西に岩子山（116m）、西に弁天山（129.7m）などの分離丘陵に囲まれて立地している。

松山平野を流れる河川のうち、北東から南西方向に平野を斜めに横切って流れる石手川があり、古照遺跡の南々西約3.8㎞の地点で平野の南よりのところを東の山地から西に向かって流れる重信川と合流して伊予灘へ注いでいる。

古照遺跡と関係の深い石手川は、高縄山地に水源を発し、山地を激しく浸蝕開析し、山麓部から平野部に出てから急激に土砂礫を堆積させ扇状地を形成している。さらに下流で宮前川などの小河川に分流している。

宮前川は、岩堰で石手川から分岐した後、道後城北地区を流れて大峰ケ台丘陵の東麓で大きく右折し、古照遺跡の北側を流れている。また、古照遺跡の南側を西流する石手川支流の中ノ川と古照遺跡の南西で合流し、更に分岐し北・西の２条の流れとなって伊予灘に注いでいる。

石手川などによって形成された扇状地は、標高約50ｍの石手寺付近を扇頂とし半径は約４㎞、標高約20ｍまでの部分であり、これより西方は氾濫・堆積によって形成された氾濫原の地域である。扇状地の地表勾配は約1000分の５～10程度である。この扇状地の扇端付近、標高約12.8ｍに古照遺跡が位置している。

前述の氾濫原面には、松山市駅付近より西方に向かって長さ約４㎞、幅約100ｍ前後の自然堤防が延びており、やや南側に同様の自然堤防状の微高地も認められている。これら微地形は、江戸時代に石手川の河川改修（1601～1602年）が行われた以前に形成されたものと考えられている。

周辺丘陵の地質については、大峰ヶ台丘陵は南半分が和泉層群の頁岩・砂岩・礫岩、東側一部は石鎚層群の閃緑玢岩、北半分は領家貫入岩類の花崗閃緑岩である。岩子山は石鎚層群の安山岩、弁天山は南側が和泉砂岩群、北側は領家変成岩類塩基性ホルンヘルスである。

古照遺跡周辺には、「正水（しょうすい）」・「宮ノ前」・「ゴウラ」・「斎院井手（さや

いで)」・「轟（どんどろ)」・「鬮目（くじゅめ)」など水利に関係する字名が現在も残っている。

【参考文献】

1．平井幸弘．「石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」『愛媛大学教育学部紀要Ⅲ　自然科学．9』　愛媛大学　1989

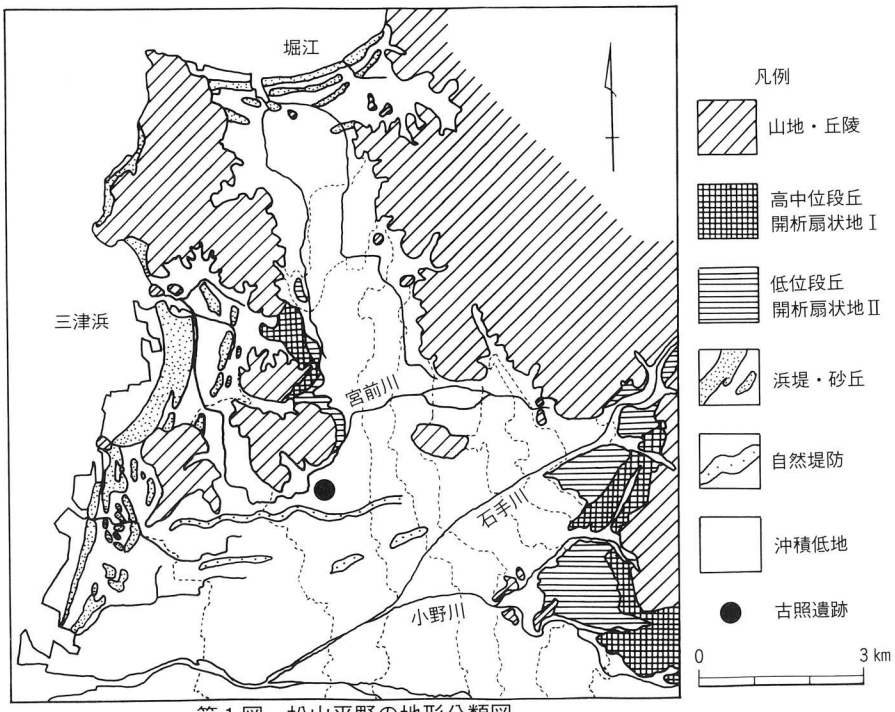
2．平井幸弘　「鷹子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子遺跡・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室　1989

3．『古照遺跡』古照遺跡調査本部・松山市教育委員会　1974

4．森　光晴・大山正風　『古照遺跡Ⅱ』松山市教育委員会　1976

5．愛媛県史編さん委員会　『愛媛県史－原始・古代Ⅰ－』　1892

6．松山市史編集委員会　『松山市史－第１巻－』　1992



第１図　松山平野の地形分類図

2　歴史的環境

古照遺跡周辺には数多くの遺跡が分布しており、これらの遺跡について最近の調査結果から時代別に述べていくことにする。

◇縄文時代

松山市内では、縄文晩期の遺跡として船ケ谷遺跡(1)・大渕遺跡(2)が知られている。古照遺跡周辺では未だ縄文時代の遺跡の調査例がなく、土器・石器などの散布がみられる程度である。古照遺跡の北、大峰ヶ台丘陵東裾部の朝美澤遺跡２次調査(3)、松環美沢遺跡(4)から縄文土器が出土している。古照遺跡でも河川の氾濫などによって堆積した砂礫層から前期末～晩期にいたる土器の出土がみられるため、宮前川の上流域、大峰ケ台丘陵の東側周辺域に縄文時代の遺跡が存在するものと考えられる。

◇弥生時代

弥生時代は、各丘陵及び宮前川下流周辺に遺跡の分布が認められ、特に後期段階において集落遺跡の分布に広がりがみられる。

前期では、朝美澤遺跡２次調査から前期前半の土器を包含する土層が確認されている。松環美沢遺跡でも前期後半段階の溝が検出され、石庖丁や有柄式磨製石鏃などが出土している。また、弁天山丘陵の東側に突出する小丘陵上にある斎院烏山遺跡(5)からは前期末段階の濠状遺構を検出されており、同丘陵中央東麓の宮前川左岸の後背湿地に立地する宮前川別府遺跡(6)からも前期末～中期前半の土器や朝鮮系無文土器などが出土している。

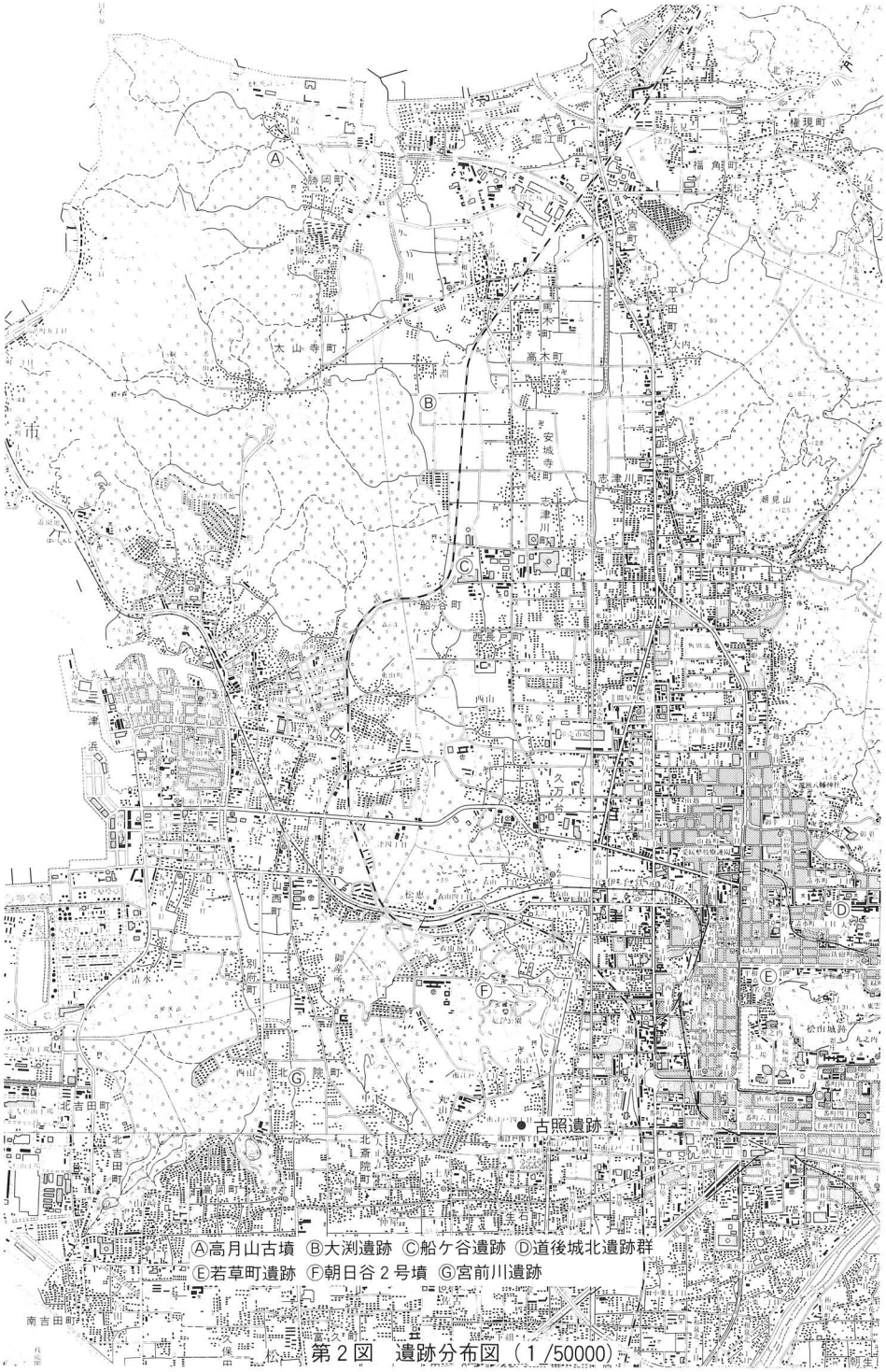
中期では、大峰ケ台丘陵の山頂部では大峰ケ台遺跡第４次調査(7)として高地性集落が調査され、また、同丘陵東裾部の朝美澤遺跡１次調査(8)・辻遺跡１次調査(9)からは中期中葉段階の土器が出土している。

後期では、弁天山丘陵の東麓緩斜面に位置する津田鳥越遺跡(10)で竪穴住居址群が検出され、後期後半～古墳時代初頭の土器と共に土錘・石錘などの漁撈具が出土している。また、古照遺跡の東側にある松環古照遺跡(11)からも同時期の土器の出土がみられ、前述の朝美澤遺跡１次調査から壺棺墓や竪穴式住居址などが検出されている。

◇古墳時代

古墳時代には、弥生時代と同様に遺跡が分布している。また、各丘陵には多数の古墳が確認されている。

前期古墳としては、大峰ケ台丘陵の北西尾根部に朝日谷２号墳(12)があり、主体部内から２面の舶載鏡（二禽二獣鏡など）と40本を越える銅鏃・鉄鏃のほか直刀・ガラス玉などが出土し、墳丘くびれ部からは壺型土器が出土している。また、弁天山丘陵には前期古墳と思われる弁天山０号墳(13)が墳丘調査で確認されている。古照遺跡より約70㎞北方にある高月山２号



第２図　遺跡分布図（１/50000）

墳(14)の周溝からは祭祀的使用の壺型土器や銅鏃なども出土している。

中期末から後期にかけては、各丘陵に群集墳が出現している。大峰ケ台丘陵には客谷古墳群(15)が、岩子山丘陵に岩子山古墳群(16)と同丘陵の尾根周辺に斉院茶臼山古墳(17)、御産所11号墳(18)、御産所権現山遺跡の１・２号墳(19)などがある。弁天山丘陵には弁天山古墳群(20)として乳文鏡や五鈴鏡の出土がみられる。

古墳時代初頭の集落遺跡として、宮前川下流の宮前川北斎院遺跡(21)では火災焼失住居址を含む竪穴住居址群が検出され、またクスノキの巨木周辺約20ｍの範囲から古墳時代初頭の遺物が多量に出土している。この宮前川北斎院遺跡を含め宮前川周辺の低湿地の遺跡群からは弥生時代末～古墳時代初頭にかけての遺物が多量に出土しており、それらの中には骨角器や卜占に使用された鹿の肩胛骨などのほか、注口土器や動物型土製品、絵画土器などもある。また山陰系土器や畿内系土器等の外来系土器もあり、当時の流通・交易の経路を考える上で貴重な遺物の出土がみられる。さらに、下流に位置する宮前川三本柳遺跡(22)からも同時期の遺物の出土がみられる。

また、古照遺跡の北東方約２㎞、城北遺跡群に含まれる若草町遺跡(23)からは、環濠状遺構や周溝墓などから弥生時代末～古墳時代初頭にかけての遺物や「重圏日光鏡」などが出土しており当該期の集落・墓域などが明らかにされている。しかし、井堰の埋没時期（４世紀後半頃）と同時期の集落遺跡はまだ確認されていない。

中期前半では、古照ゴウラ遺跡３次調査地(24)と古照遺跡第10次調査(25)から祭祀的土師器が出土している。

中期後半では、大峰ヶ台丘陵の東側の宮前川左岸にある辻町遺跡２次調査地(26)では竪穴住居址３棟が検出され、周辺に集落が存在していることが考えられる。

後期には、前述の辻町遺跡２次調査地並びに１次調査地(27)から祭祀関連遺構が調査され、土師器・須恵器が多量に出土している。また、松環古照遺跡でも河川祭祀に伴う土師器の出土がみられ、古照遺跡の周辺で祭祀的行為の痕跡が数多く調査されている。また、同丘陵東麓の緩斜面にある辻遺跡２次調査(28)、松環大峰ケ台Ⅱ遺跡(29)からは掘立柱建物跡が検出され、大峰ヶ台丘陵の東側に後期の集落が存在している。

◇古代以降

古照遺跡は、大宝律令以後、温泉郡味酒郷に属していたと思われる。本遺跡周辺には現在も長地型の条里的地割りが残っており、古代荘園制との関係が指摘されている。

前述の御産所権現山遺跡からは７～８世紀代の土師器・須恵器が出土している。

古代寺院としては、大峰ヶ台東裾部にある親和園前遺跡(30)から「澤廃寺」に関連する複弁蓮華軒丸瓦が出土し掘立柱建物跡などが検出されている。また、同丘陵南麓には大宝元年（701年）創立の太宝寺があり、同寺本堂は県下でも最古の鎌倉時代前期の建造物であり国宝に指定されている。

古照遺跡周辺では、11～14世紀にいたる集落址が確認されている。澤遺跡からは平安時代の掘立柱建物跡が、松環古照遺跡と古照ゴウラ遺跡４次調査地(31)からは掘立柱建物跡、区画溝、土坑、曲物井戸などが検出され、花辨形石製硯、楠葉型・和泉型瓦器、黒色土器、東播系鉢・甕、亀山焼甕、常滑焼甕、滑石製石鍋などが出土している。古照遺跡第６・７次調査(32)においても11～16世紀前半の遺構や遺物を出土し、集落が点在していることが解る。

中世城郭には、大峰ヶ台丘陵の南西尾根部に中世の花見山城跡(33)が記録上残っている。

古照遺跡の北方約30ｍに位置する南江戸闘目遺跡(34)からは、13世紀後半から14世紀にかけての集落・生産関連遺構が検出され、多数の土師器が出土している。また、朝美澤遺跡２次調査では中世の掘立柱建物跡、辻遺跡２次調査地では土坑墓が検出されている。

宮前川下流域でも古代から中近世にかけての遺跡が分布しており、古照遺跡の西方約１㎞の北斎院地内遺跡(35)では15～16世紀代の集落址が、宮前川三本柳遺跡では奈良時代の井戸関連遺構や中近世の畑・井戸などが検出されている。また、江戸時代の生活関連遺跡には、親和園前遺跡で江戸時代末の陣屋跡、美沢遺跡の屋敷跡からは水琴窟、南江戸桑田遺跡(36)からは多数の桶棺墓(墓域)が調査されているため、古照遺跡の北部域が生活域として認識される。江戸時代の生産域としては、古照遺跡第６次調査によって江戸時代中期の洪水によって埋没した水田・畑・大畦畔跡などが検出されているため、本遺跡周辺が田園地帯であったと思われる。

［註］

(1)阪本安光　『松山市・船ケ谷遺跡－愛媛県青果農業協同組合連合会関連埋蔵文化財調査報告書－』愛媛県教育委員会　1984

(2)①栗田茂敏　「大渕遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会　1989

②武正良浩　「大渕遺跡２次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991

(3)梅木謙一・宮内慎一　「朝美澤遺跡２次調査」『朝美澤遺跡・辻町遺跡』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1992

(4)岡田敏彦　『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－松環古照遺跡－』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター　1993

(5)梅木謙一・加島次郎　「斎院烏山遺跡」『斎院の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994

(6)大滝雅嗣他　「宮前川別府遺跡」『宮前川遺跡』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター　1987

(7)栗田茂敏　『大峰ケ台遺跡－第４次調査－』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1995

(8)松村　淳・梅木謙一　「朝美澤遺跡１次調査地」『大峰ヶ台丘陵の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994

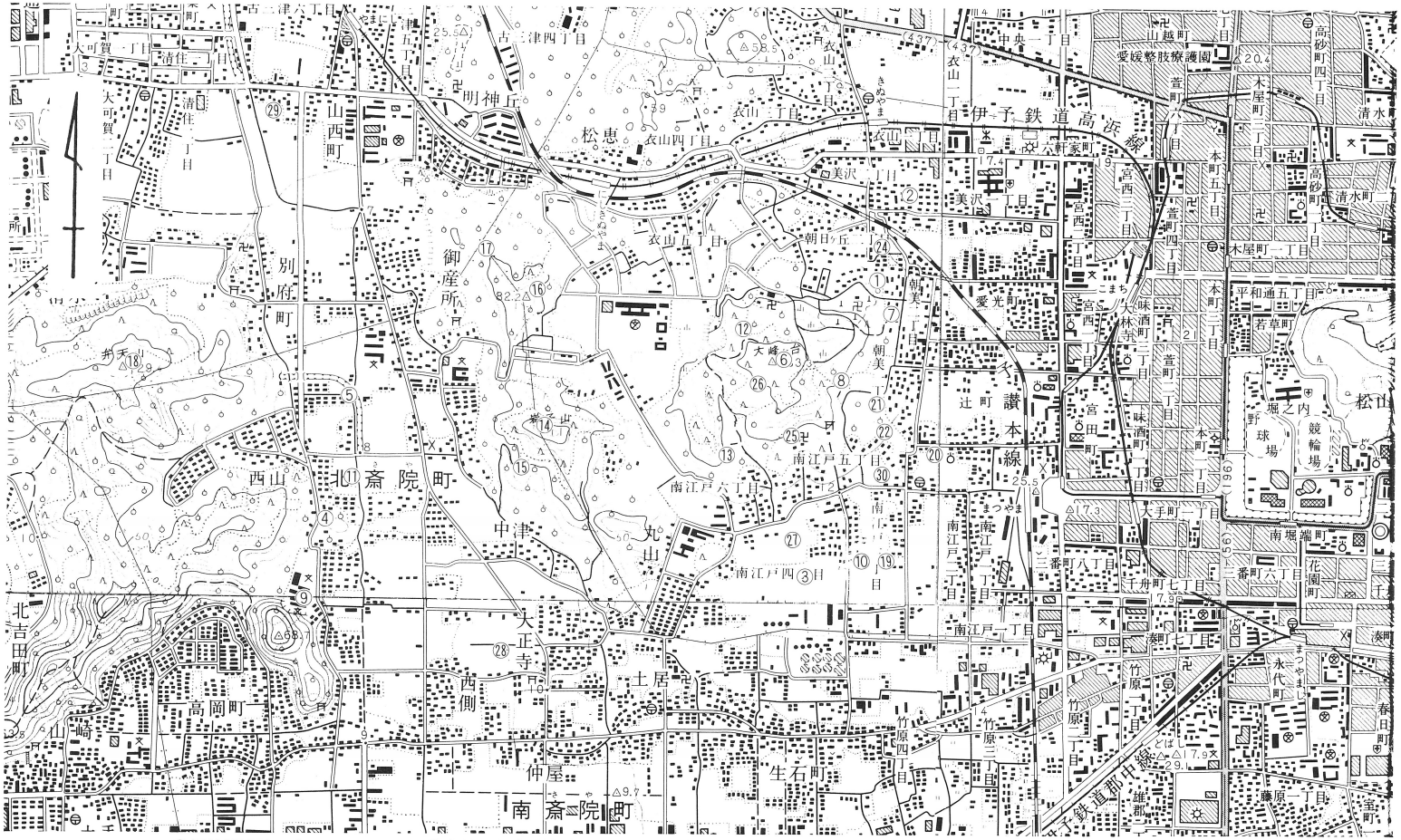
(9)栗田茂敏　「辻遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会　1989

(10)西尾幸則　「津田鳥越遺跡（津田中学校構内）」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会　1987

(11)前掲註(4)文献

(12)①梅木謙一　「松山市朝日谷２号墳の概要」『斉灘・燧灘の考古学』大西町教育委員会　1993

②梅木謙一　「愛媛県朝日谷２号墳」『季刊 考古学』第52号　1995



①朝美澤遺跡２次
②松環美沢遺跡
③古照遺跡既往調査
④斉院鳥山遺跡
⑤宮前川別府遺跡
⑥大峰ケ台遺跡
⑦澤遺跡
⑧辻遺跡
⑨津田鳥越遺跡
⑩松環古照遺跡
⑪宮前川北斎院遺跡
⑫朝日谷２号墳
⑬客谷古墳群
⑭岩子山古墳群
⑮斉院茶臼山古墳
⑯御産所11号墳
⑰御産所権現山１号墳
⑱弁天山０号墳
⑲古照ゴウラ遺跡
⑳辻町遺跡
㉑辻遺跡２次
㉒松環大峰ケ台遺跡
㉔親和園前遺跡
㉕太宝寺
㉖花見山城跡
㉗南江戸鬮目遺跡
㉘北斉院地内遺跡
㉙宮前川三本柳遺跡
㉚南江戸桑田遺跡

第３図　古照遺跡周辺の遺跡分布図（1/25000）

(13)①西田　栄　「津田山古墳」『愛媛県史資料編 考古』愛媛県史編さん委員会　1986
②松山市史編集委員会　『松山市史－第１巻－』1992
(14)宮崎泰好　『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会　1988
(15)①宮崎泰好　「大峰台客谷地区古墳群」　前掲註(10)文献
②松村　淳・梅木謙一・平岡直美　「客谷古墳群Ｂ地区」　前掲註(8)文献
(16)名本二六雄　『岩子山古墳』松山市教育委員会　1975
(17)西尾幸則　『斉院茶臼山古墳』松山市教育委員会　1983
(18)森　光晴　『御産所11号墳』松山市教育委員会　1976
(19)栗田茂敏・大森一成　「御産所権現山遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991
(20)森　光晴　「津田弁天山鷲ケ巣の山頂古墳」『松山市史料集－第１巻－』松山市史編集委員会　1990
(21)大滝雅嗣他　「宮前川北斎院遺跡」　前掲註(6)文献
(22)重松佳久・小笠原善治・水本完児　「宮前川三本柳遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ 』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1992
(23)①相原浩二・栗田茂敏　「若草町遺跡」　前掲註(19)文献
②『若草町遺跡２次－現地説明会資料－』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
③相原浩二・河野史知　「若草町遺跡３次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994
(24)松村　淳・宮崎泰好　「古照ゴウラ遺跡（３次）」　前掲註(9)文献
(25)栗田正芳・小笠原善治　「古照遺跡第10次調査」『古照遺跡－第10・11次調査－』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1995
(26)相原浩二・河野史知　『辻町遺跡―２次調査地―』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1995
(27)梅木謙一・真木　潔　「辻町遺跡」　前掲註(3)文献
(28)栗田正芳　「辻遺跡２次調査」　前掲註(19)文献
(29)岡田敏彦　「大峰ヶ台Ⅱ遺跡」『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター　1994
(30)前掲註(4)文献
(31)松村　淳・山本健一　「古照ゴウラ遺跡（４次）」　前掲註(23)③文献
(32)①栗田正芳・河野史知他　『古照遺跡－第６次調査－』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1993
②栗田正芳　『古照遺跡－第７次調査－』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994
(33)『愛媛県中世城館跡－分布調査報告－』愛媛県教育委員会　1987
(34)上田　真・水本完児　『南江戸鬮目遺跡』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991
(35)武正良浩　「北斉院地内遺跡」　前掲註(5)文献
(36)①重松佳久・丹下道一　「南江戸桑田遺跡」　前掲註(19)文献

【参考文献】

１．愛媛県史編さん委員会　『愛媛県史－原始・古代Ⅰ－』　1892
２．松山市史編集委員会　『松山市史－第１巻－』　1992
３．松山市教育委員会　『松山市の文化財』　1980

3　既往調査成果

古照遺跡は、昭和47年11月、下水道中央処理場建設工事中に木組み遺構が発見され、当初は弥生時代の竪穴住居址として全国的に注目された。早速、国・県・市内外の研究者による調査団が組織された。同年12月～翌48年１月にかけて処理場敷地内に予備調査として1,755本のボーリング調査を実施し、遺構周辺の地質を調査した結果、木質が集中する地点が４カ所確認された。本格的調査までの間、発見された木組み遺構を仮保存するため貯水が行われた。

◇第１次調査（文献１）

昭和48年７～８月にかけて発掘調査が実施された。発見された木組み遺構は、農業潅漑用の「堰」であることが確認された。結果、堰が２基検出された。「第１堰」は南北13.2ｍ、「第２堰」は東西23.8ｍを測り古墳時代前期に機能していたことが判明した。

「第１堰」北側の取付部は青灰色粘土、「第１堰」南側と「第２堰」との共通取付部は黒色粘土、「第２堰」東側は青灰色粘土である。この「第２堰」東端粘土で幅1.2ｍの畔状遺構が検出され、この両縁に20～30㎝間隔で杭が打たれていた。

堰による河川基底層は、青灰色砂質土である。

これら堰周辺の青灰色粘土・黒色粘土層から少量のイネ花粉が確認され、水田の早期的段階のものと指摘されている。また、これら堰を被覆する砂礫層上部の黒色泥層（上部互層－Ⅲ）から多量のイネ花粉を確認している。この黒色泥層を被覆する砂礫層から須恵器などが出土しているが黒色泥層について明確な時期決定はなされていない。

調査報告書では、堰の構築方法、自然・地形環境、保存方法、当時の切妻造り高床建物の復元などについて言及されている。

◇第２次調査（文献２）

昭和49年12月～翌50年１月にかけて、「第２堰」から東方に延びる青灰色粘土の調査を主目的として調査を実施した。結果、「第２堰」東の青灰色粘土は、青灰色細砂層から砂礫層へと変わり残塊的なものであることが解った。また、「第２堰」東端から南西方向へ延びる全長約20ｍを測る「第３堰」（堰としての機能は約5.8ｍ）が検出され、この堰の南側で幅約２ｍの取水口も検出された。この「第３堰」南西端の取付部は青灰色粘土である。

第１・２次調査において検出された、３基の堰について工楽善通氏(1)は、第１・２堰が同時に機能していたことは確かで、堰構築当初は第１・３堰が存在し、第３堰が早くに崩壊したため第２堰に切り替えて第１・２堰が同時に機能していたところへ大きな出水があり埋没したのではないかと指摘されている。

◇**第３次調査**

昭和51年９月、第２次調査地のやや南東部を第３次調査として実施した。調査では青灰色粘土層などは検出されていない。流木や土器などが出土している。

◇**第４次調査**

翌52年９～10月にかけて第３次調査地の西側を第４次調査として実施した。結果、「第１・２堰」共通取付部の延長とみられる黒色粘土層を確認し、この黒色粘土層と連続する青灰色粘土層が検出された。この青灰色粘土層は自然堤防状を呈し、この南東端付近で多量の流木が出土した。

◇**第５次調査**（文献３）

平成元年８月、第３次調査地の南側において第５次調査を実施した。結果、残塊的な青灰色粘土や青灰色細砂層を検出した。縄文時代～古墳時代にいたる土器などが出土している。

以上の調査地は、第１・２次調査地の南側におけるものである。「第３堰」の南東部は河川の氾濫や蛇行の影響が激しい地域であるが、「第３堰」の西側は河川の影響がそれほど見られず、堰に伴う水田跡が存在する可能性がある。また、いずれの調査は、堰を検出している標高約8.0ｍ前後の調査であったが、調査掘削時の表土層から中近世の土器が出土し、遺跡の存在が考えられていた。

◇**第６次調査**（文献４）

平成２年４月～翌年３月にかけて第１次調査地の北側、東西約238ｍ、南北70ｍ、面積約16,660㎡を調査した。この調査では、まず、江戸時代中期前半の水田・畑遺構、15・16世紀代の遺構、13世紀代の遺構が、現地表から約２ｍまでの間に遺存していることを確認し、上層調査として実施した。次に、「堰」と同等の深さを下層調査として実施し、調査地の北側では、標高約9.50ｍを測る黒褐色粘土が広がり、この粘土より以東では残塊的な緑灰色粘土が検出された。また、第１次調査前のボーリング調査で「木質集中地点」とチェックされていた箇所からは、縄文時代後期の流木群が検出された。

古墳時代前後の時期、調査地では河川の影響が全域で見られた。本調査では、緑灰色粘土を自然堤防、黒褐色粘土を後背湿地とする「同時異相」の関係と捉えることができた。

◇**第７次調査**（文献５）

平成３年10月～翌年３月までの間、Ａ・Ｂ地区の２箇所を調査した。まず、Ａ地区では、平安時代の農耕遺構、13世紀代の水田遺構、中世の土坑群が検出され、当該期の土器が出土している。標高約8.00ｍにおいては、層厚約50㎝を測る緑灰色シルトが調査区全域に堆積していた。次に、Ｂ地区は、13世紀前後の遺構・遺物が調査された。標高約9.40ｍで黒褐色粘土が堆積していた。この黒褐色粘土は、第６次下層調査の最終沈澱池地区で検出された黒褐

色粘土であり、西方へ連続していることが判明した。

◇第８次調査（文献６）

本調査の概報は、『年報Ⅴ』に収録している。

◇第９次調査（文献６）

本調査の概報は、『年報Ⅴ』に収録している。

◇第10次調査（文献７）

６次調査地の南東部、９次調査地の東隣接地を調査し、古墳時代中期前半の祭祀遺物と水田土層を確認した。この土層下には砂礫層が堆積し、ブロック状の黒褐色粘土を確認した。

◇第11次調査（文献７）

７次調査Ａ地区の西隣接地を調査し、中世の水田面、掘立柱建物跡や地鎮祭遺構・遺物が確認された。

［註］

(1)工楽 善通　『水田の考古学』東京大学出版会　1991

【文献】

1．古照遺跡調査本部・松山市教育委員会『古照遺跡』　1974

2．森　光晴・大山正風　『古照遺跡Ⅱ』松山市教育委員会　1976

3．松村　淳　「古照遺跡５次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1991

4．栗田正芳・河野史知 他　『古照遺跡－第６次調査－』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1993

5．栗田正芳　『古照遺跡－第７次調査－』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994

6．栗田正芳・河野史知　「古照遺跡８・９次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1993

7．栗田正芳・小笠原善治・河野史知　『古照遺跡－第10・11次調査－』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1995

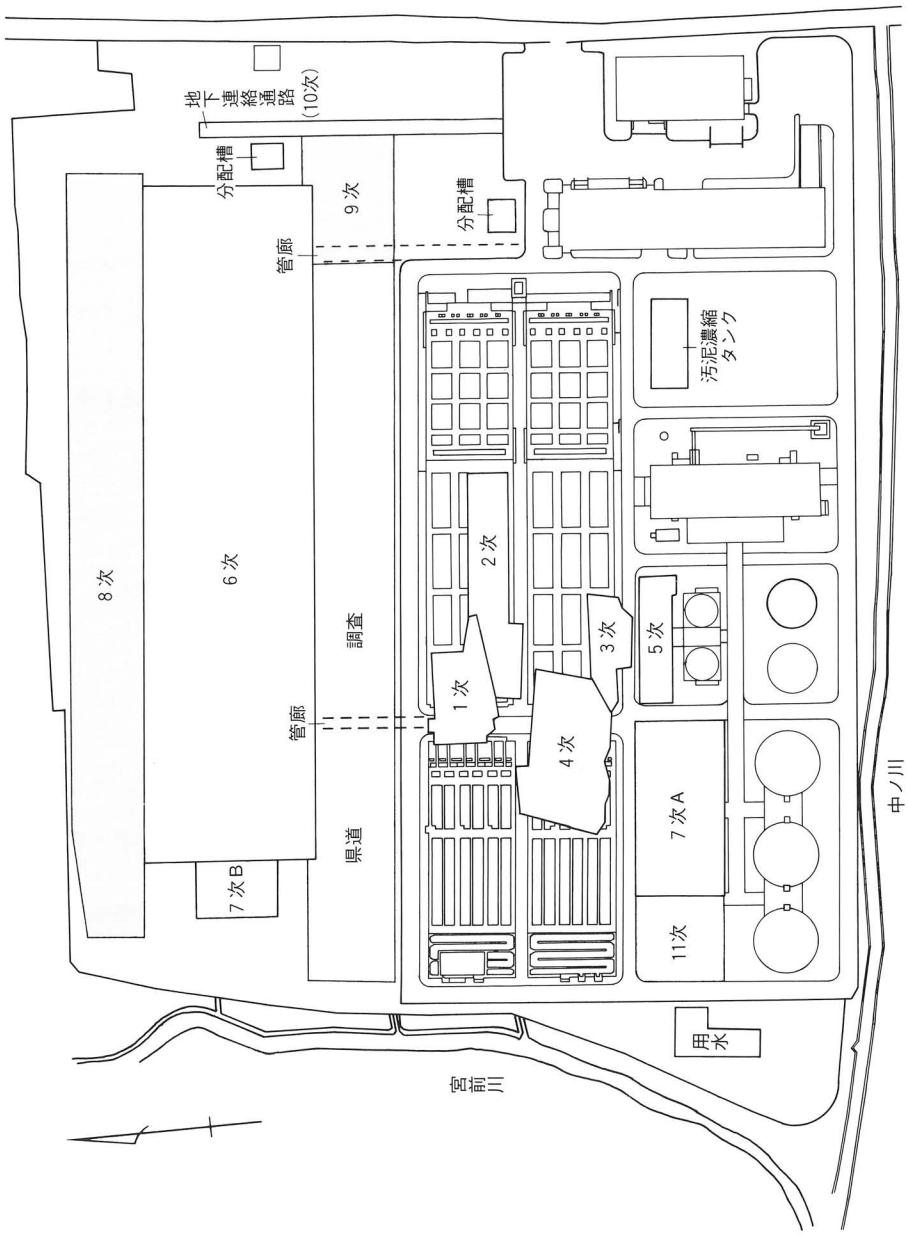
【参考文献】

1．笠原安夫 他　『古照遺跡－資料編－』松山市教育委員会・松山市文化財協会　1977

2．愛媛県史編さん委員会　『愛媛県史－原始・古代Ⅰ－』　1982

3．松山市史編集委員会　『松山市史第１巻－自然・原始・古代・中世－』　1993

4．坪井清足 他　『古照遺跡とその時代－遺跡発見20年を経過して－（講演会資料)』松山市考古館　1993


地下連絡通路（10次）
分配槽
9次
分配槽
管廊
8次
6次
調査
2次
汚泥濃縮タンク
3次
5次
1次
4次
管廊
7次A
県道
7次B
11次
用水
宮前川
中ノ川
0
200m
（S＝1：2400）

第4図　調査地位置図

Ⅱ　調査に至る経緯と組織

1　調査に至る経緯

（1）確認申請

平成２年10月29日、松山市都市整備部公共下水道課課長より、松山市南江戸４丁目１－１の松山市下水道中央処理場（現、松山市下水道中央浄化センター、以下「浄化センター」という）内における下水処理施設建設工事に伴う埋蔵文化財確認願（以下「申請１」という）が松山市教育委員会文化教育課（以下「市教委」という）に提出された。

この「申請１」の建設予定施設は、汚泥消化タンク・汚泥濃縮タンク・汚泥消毒タンク・ガスタンク・連絡管廊・分配槽・地下連絡通路などである。

平成３年10月16日、松山市下水道部下水道建設課（松山市の機構改革により前述の公共下水道課名が変更され、以下「下水課」という）課長より、松山市南江戸４丁目１－１の浄化センター内の下水処理施設建設工事に伴う埋蔵文化財確認願（以下「申請２」という）が市教委に提出された。

この「申請２」は、平成２年度の第６次調査地の北側隣接地で対象面積は7,200㎡ある。

（2）確認調査及び協議

平成４年３月９日から同年３月21日にかけて「申請１・２」の予定地を市教委の指導のもと（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下「市埋文」という）が試掘調査を実施した。

この試掘調査は、湧水等のために現地表面から約２ｍ余の深さにおける確認である。調査の結果、第６次調査と同様に中近世の遺構・遺物が出土したため、下水課と市教委並びに市埋文の三者は工事を着手するにあたり事前の埋蔵文化財発掘調査について協議を行った。

協議の結果、「申請２」における発掘調査は、平成４年度当初から実施することとなる。調査方法は２回に分けて行い、まず中・近世遺構について調査（上層調査）を実施し、その後、「井堰」と同等の深さ（現地表面から約５ｍ）を調査（下層調査）することとなる。ただし、翌５年度の工事着手に支障のないようにするため下層調査は、第６次調査と同様に各処理施設の工事対象深さまでを調査対象とするものである。この「申請２」に対する発掘調査を、第８次調査として平成４年４月１日から実施した。

「申請１」の発掘調査地は、浄化センター敷地の中央を南北に二分する県道整備工事に伴う発掘調査予定地に分散して位置しているため（第４図参照）、発掘調査の効率化を図るた

め松山市の関係機関と愛媛県松山地方局（以下「地方局」という）及び愛媛県教育委員会文化財保護課（以下「県教委」という）並びに(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター（以下「県埋文」という）との合同協議を行うこととなった。

平成４年４月13日、地方局、県教委、県埋文、下水課、浄化センター、市教委、市埋文の七者による合同会議が開かれ、県道整備工事に伴う発掘調査と「申請１」の連絡管廊と地下連絡通路工事部分についての発掘調査等について調整が行われた。その内容・結果は、以下の通りである。

1．浄化センター内の県道整備工事予定地の東端部分は、現在の処理施設工事や発掘調査のための掘削機械などの搬入路として残す。

2．「申請１」の連絡管廊と地下連絡通路工事部分の発掘調査面積分を県道発掘調査予定地の東側、東西約45ｍ余、南北約25ｍ余に集約して市埋文が発掘調査を実施し（地下連絡通路より西側、第４図参照)、連絡管廊部分の調査は県が対応する。

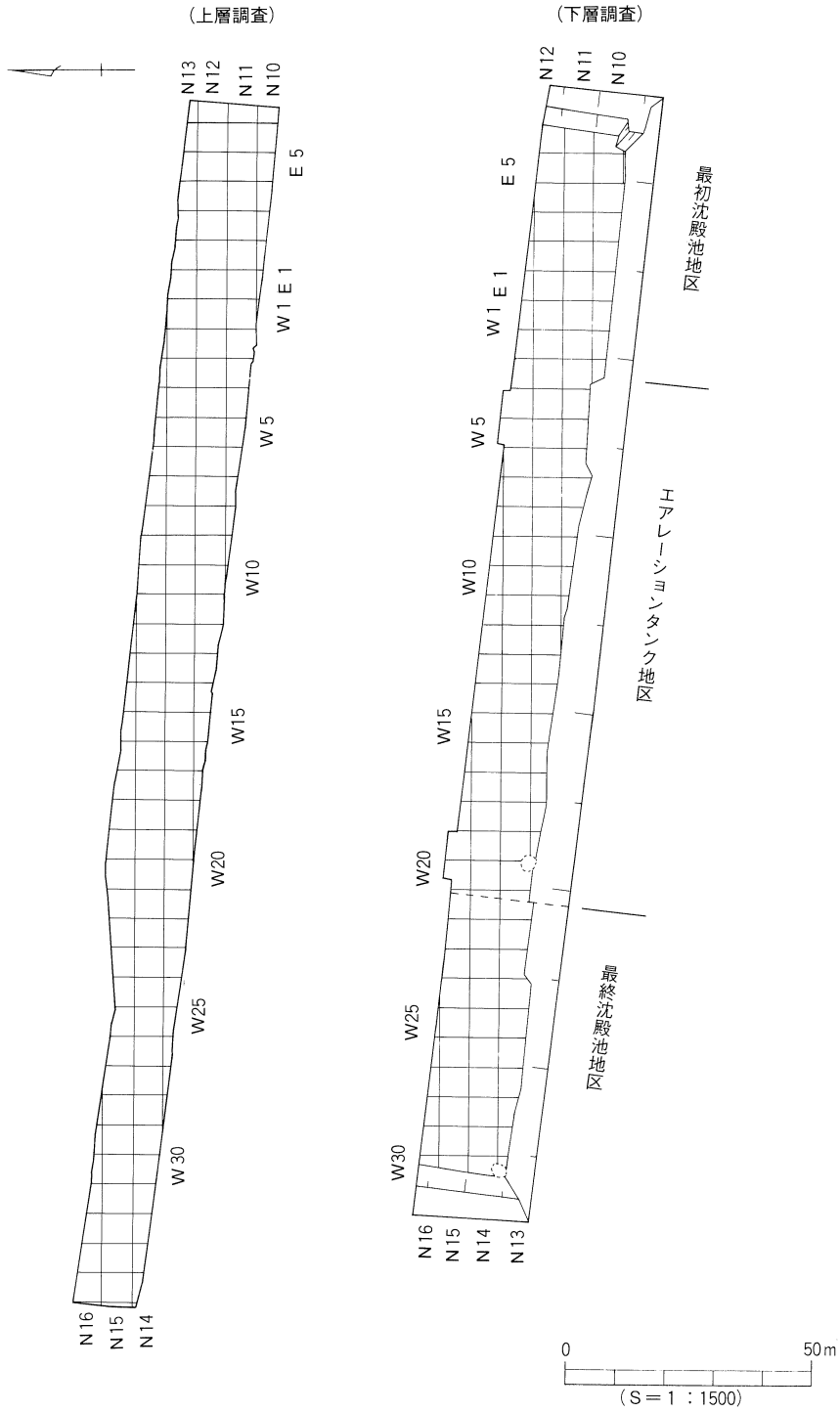
3．前述２の集約部分の発掘調査に係る矢板工事については、県埋文の一連の発掘調査で対応する。

以上の協議結果によって、集約部分を第９次調査として市埋文が平成５年２月８日から発掘調査を実施する。

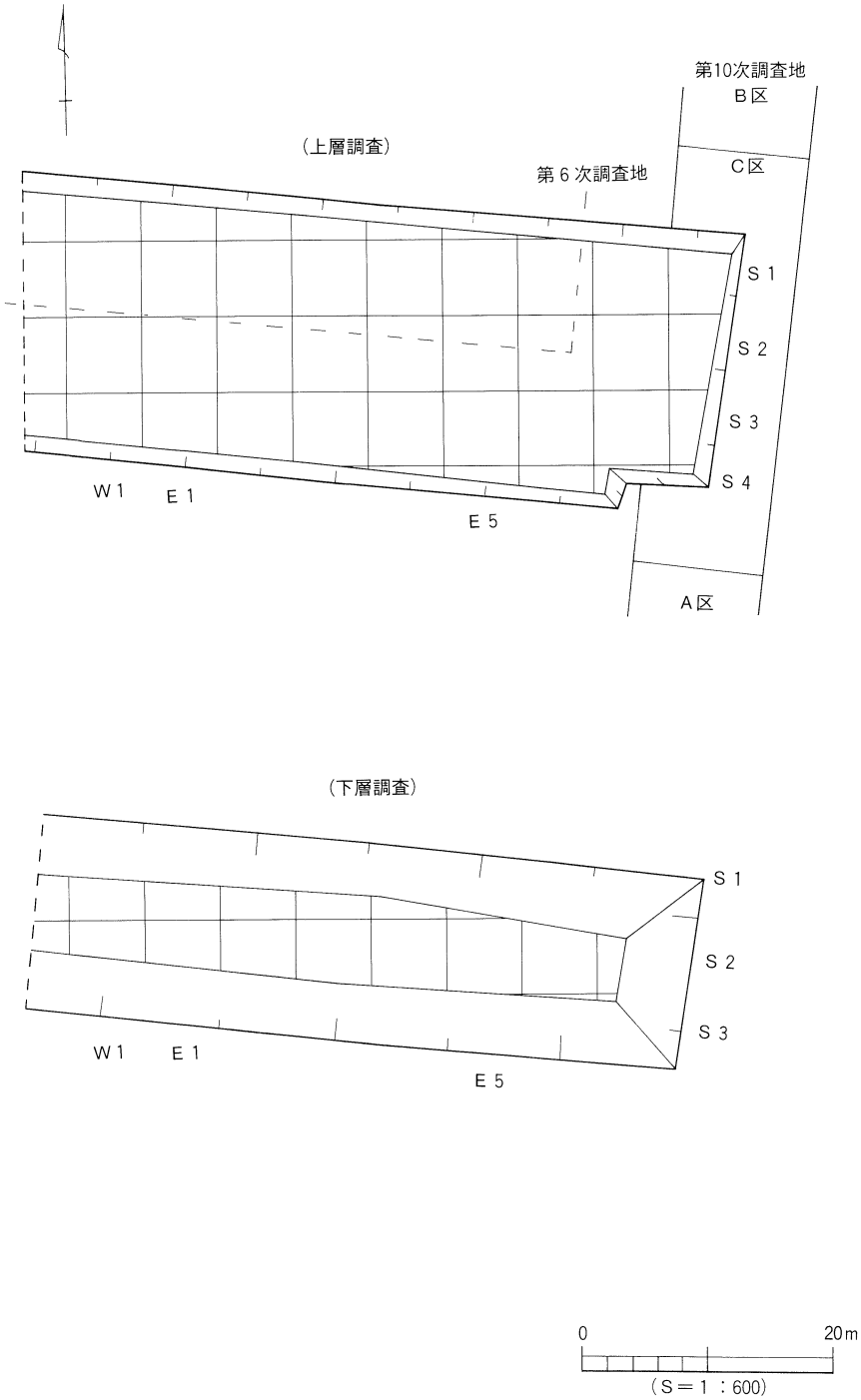
第８・９次調査では、第６次調査で使用した６ｍのグリットを使用している。

表１　申請地一覧

	工　事　場　所	面積(㎡)	調　査　地　名
申請１	汚泥消化タンク……２槽	1,000	第７次調査Ａ地区
	消毒タンク……１池	600	第７次調査Ｂ地区
	連絡管廊、分配槽　他……一式	800	第９・10調査地
	汚泥濃縮タンク……２槽	450	(試掘調査のみ)
		計 2,850	
申請２	下水道処理施設	7,200	第８次調査地



第5図　第8次調査地グリット設定図



第６図　第９次調査地グリット設定図

2　調査組織

第８・９次調査の野外調査は、松山市下水道部下水道建設課の委託を受けて平成４年度に（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが行う。

◎野外調査（期間：平成４年４月１日～平成５年３月31日）

(財)松山市生涯学習振興財団	理　事　長	田中　誠一
	事務局長	渡辺　和彦
	事務局次長	鶴井　茂忠
埋蔵文化財センター	所　　長	和田祐三郎
	次　　長	田所　延行
	調査係長	西尾　幸則
	〃　主任	田城　武志
調査担当	〃　主事	栗田　正芳（文化教育課主事）
調査担当	調　査　員	河野　史知

調査作業員　石井　孝也・大野　功喜・大塚　隆重・片岡　大輔・片岡　宏文・
片山　裕二・金澤　　進・鎌田　譲二・川井　　正・河本　英志・
黒河　正人・佐川友五郎・渋谷　厚夫・高橋　康志・田部井　陽・
田丸　竜馬・仁井田　誠・新谷　　誠・波多野禎彦・松田　　剛・
松本　哲郎・松本　正義・宮脇　和人・八木　欣道・今井　　伸・
上野山志保・遠藤久仁子・岡市　美紀・岡田　久子・岡田　弥生・
菅　　摩理・清水　淳子・白形　安子・白玉　典子・関　　正子・
竹村　志津・多知川富美子・谷口よし子・常廣　一恵・永井かおり・
中矢富士子・乗松　和枝・萩野ちよみ・藤田　潤子・宮中　行代・
矢野　久子・横田三都子・吉井　信枝　　ほか

3　整理・刊行組織

本調査の整理及び刊行作業等は、平成５・６・７年度にかけて（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが実施する。

平成５年度は、下水道建設第１課の委託を受けて第10次調査終了後から整理作業を行い、平成６・７年度は、下水道建設第３課の委託を受けて整理作業並びに刊行作業を行う。

各年度組織は、以下のとおりである。

◎屋内調査（期間：平成５年５月31日～平成８年３月31日）

＊平成５年５月31日～平成６年３月31日

(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	渡辺　和彦
	事務局次長	一色　正士
埋蔵文化財センター	所長	河口　雄三
	次長	田所　延行
	調査係長	田城　武志
整理担当	〃　主任	栗田　正芳（文化教育課主任）
整理担当	調査員	小笠原善治

整理作業員　鎌田　譲二・田丸　竜馬・上野山志保・遠藤久仁子・岡市　美紀・岡田　久子・岡田　弥生・菅　摩理・白形　安子・白玉　典子・関　正子・多知川富美子・谷口よし子・常廣　一恵・西島　優子・乗松　和枝・萩野ちよみ・藤田　潤子・矢野　久子・山本　仁美・横田三都子・吉井　信枝　ほか

＊平成６年４月１日～平成７年３月31日

(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	一色　正士
埋蔵文化財センター	所長	河口　雄三
	次長	田所　延行
	調査係長	田城　武志
整理担当	〃　主任	栗田　正芳（文化教育課主任）
整理担当	調査員	小笠原善治

整理作業員　鎌田　譲二・田丸　竜馬・岩岡　慎一・末光　博武・田崎　哲哉・

越智　　司・河端　篤志・本宮　慎吾・堀内　哲也・大西　　等・
平川　　隆・河原田　晋・藤本　数夫・石井　美鈴・岡市　美紀・
岡本真理子・菅　　摩理・喜安　咲江・関　　正子・多知川富美子・
西島　優子・萩野ちよみ・室谷美也子・矢野　久子・山内　七重・
吉井　信枝・篠森　千里・大谷　志奈・岡本真理子　　ほか

＊平成７年４月１日～平成８年３月31日

(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	一色　正士
埋蔵文化財センター	所長	河口　雄三
	次長	田所　延行
	調査係長	田城　武志
整理担当	〃　主任	栗田　正芳（文化教育課主任）

整理作業員　重谷　典男・末光　博武・藤本　数夫　ほか

Ⅲ　第８次上層調査の概要

１　調査の経過

本調査は、下水道処理施設建設工事に伴う平成４年度の緊急発掘調査である。調査地は、平成２年度に行った第６次調査地の北側部分にあたり、南北幅約245ｍ、東西幅約30ｍ、面積約7,200㎡が工事対象範囲である。ただし、工事範囲の南半分が第６次調査と重複する部分であるため、本調査の対象は南北幅約21ｍ、東西幅約245ｍ、面積約3,920㎡である。

本調査では、第６次調査で使用した６ｍのグリット割を都市計画図から使用する。

まず、平成４年５月11日より、重機による掘削・搬出を行い調査を開始する。その結果、洪水・氾濫によって埋没している水田・畑遺構などを検出する。洪水・氾濫の砂礫層からは、唐津焼碗・土師器・キセルなどが出土する。検出遺構は、第６次調査における江戸時代中期前半の水田遺構と連続しているものである。

これら遺構の調査終了後、調査地の中央やや東寄り地点において中世遺構を調査するため、同年７月20日から東西約35ｍ範囲の掘削を行う。この調査範囲をＡ地区とし、掘立柱建物跡、土坑墓、溝などが検出され、土師器・瓦器・コネ鉢・貿易陶磁器などが出土する。この掘削範囲の調査は、同年10月３日に終了する。

Ａ地区調査後、Ａ地区の北側部分が矢板工事による掘削がなされることになり、同年10月10日その部分の掘削を行い、同年10月12日より調査を開始し、同年11月16日に屋外調査を終了する。

調査地の西端、東西約92ｍ分は第７次調査Ｂ地区並びに第６次調査で渡来銭の入った備前焼の壺が出土している周辺部であるため、それら遺跡と関連する遺構を調査するため、江戸時代の水田跡よりも更に深く掘削し、調査を行う。その結果、柱穴・溝などが検出され、土師器・瓦器・貿易陶磁器などが出土する。この調査範囲をＢ地区とする。Ｂ地区の調査は、同年９月21日に終了する。

＊屋外調査期間：平成４年５月11日～同年11月16日
＊実　施　面　積：近世遺構面2,579㎡
　　中世遺構面1,501㎡（Ａ地区665㎡・Ｂ地区846㎡）

2　江戸時代の遺構と遺物

1　土層

江戸時代の遺構の調査対象範囲は、N10～16E７～W18までを対象とした。

調査地における基本土層は、第Ⅰ層が造成土で層厚約60～70cmを測る。

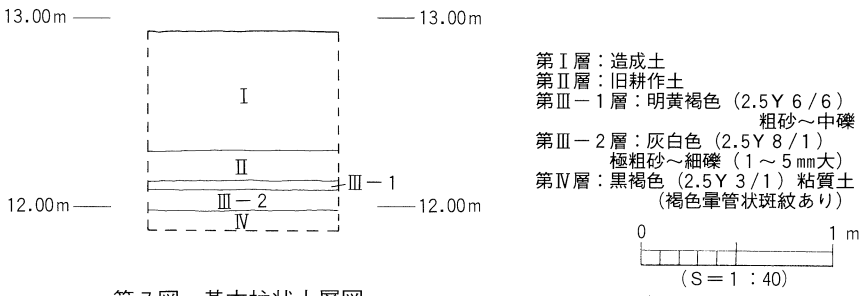
第Ⅱ層は、暗黄灰色（2.5Y4/2）土の旧耕作土で層厚約20～30cmを測り、極粗砂粒が若干含まれ、赤褐色（7.5YR4/6）の暈管状斑紋もみられる。

第Ⅲ層は、粗砂・礫などが堆積する洪水氾濫堆積層で、層厚約10～20cmを測る。第Ⅲ層からは、陶磁器や渡来銭などが出土している。

第Ⅳ層は、黒褐色（2.5Y3/1）土で層厚約40～80cmを測る。

第Ⅲ層を除去し、第Ⅳ層上面で水田・畑跡等の遺構を検出する。また、水田跡には人・牛の足跡の他に鋤跡も検出される。これら検出遺構は、第６次調査で調査された遺構が北側に連続しているものである。これら遺構検出面は、調査地内で西下がりの地形をしめしている。

また、第Ⅱ層直下からは南北方向の暗渠２条を検出している。この暗渠には、割竹が敷き詰められており、焼夷弾の爆発によって生じた土坑に切られている。そのためアジア太平洋戦争以前の暗渠と考えられる。



第７図　基本柱状土層図

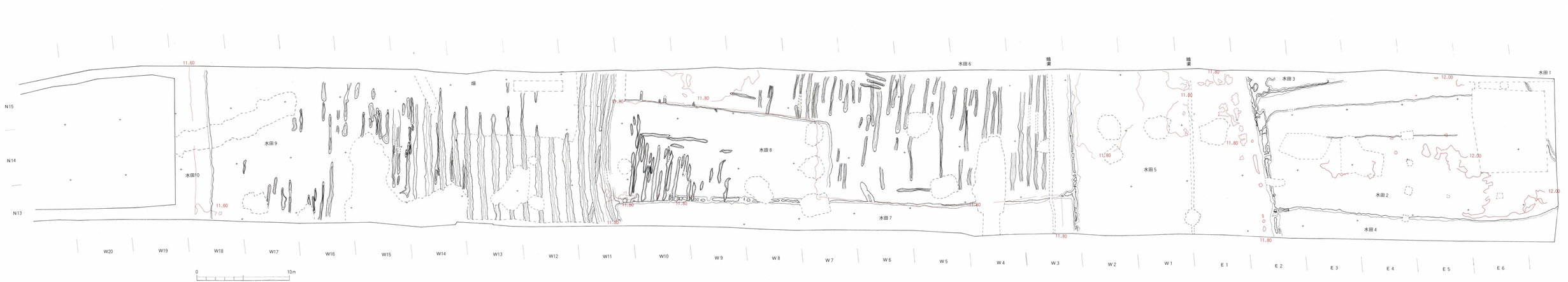
2　検出遺構

（1）水田遺構（第８図）

小畦畔等によって区画された水田10面が検出される。各水田面には人・牛の足跡が残っており、更には鋤跡が残る水田が４面みられる。この鋤跡は南北方向のものを多数検出している。小畦畔は、断面台形状を呈するものと段状のものの２種類があり、部分的に水口部が設けられている。

表２　水田遺構表

No	面積（㎡）	特　　徴
1	12㎡　以上	西側：台形状の小畦畔、人・牛の足跡
2	461㎡　以上	南側：段状の小畦畔、北・東・西側：台形状の小畦畔、 西側に水口１基、人・牛の足跡
3	13㎡　以上	南・西側：台形状の小畦畔、人・牛の足跡
4	90㎡　以上	北側：段状の小畦畔、南側：台形状の小畦畔、 西側に水口１基、人・牛の足跡
5	360㎡　以上	東・西側：台形状の小畦畔、西側に水口２基、人・牛の足跡
6	490㎡　以上	南側：段状の小畦畔、東側：台形状の小畦畔、 東側に水口１基、人・牛の足跡、鋤跡
7	144㎡　以上	北側：段状の小畦畔と一部台形状の小畦畔、 東側：台形状の小畦畔、人・牛の足跡
8	約228㎡	西側：台形状の小畦畔、北・東側：段状の小畦畔、 南側：段状の小畦畔と一部台形状の小畦畔、人・牛の足跡、鋤跡
9	360㎡　以上	東側：明確な小畦畔は不明で畑の畝か？、 西側：段状の小畦畔、人・牛の足跡、鋤跡
10	60㎡　以上	東側：段状の小畦畔、人・牛の足跡、鋤跡

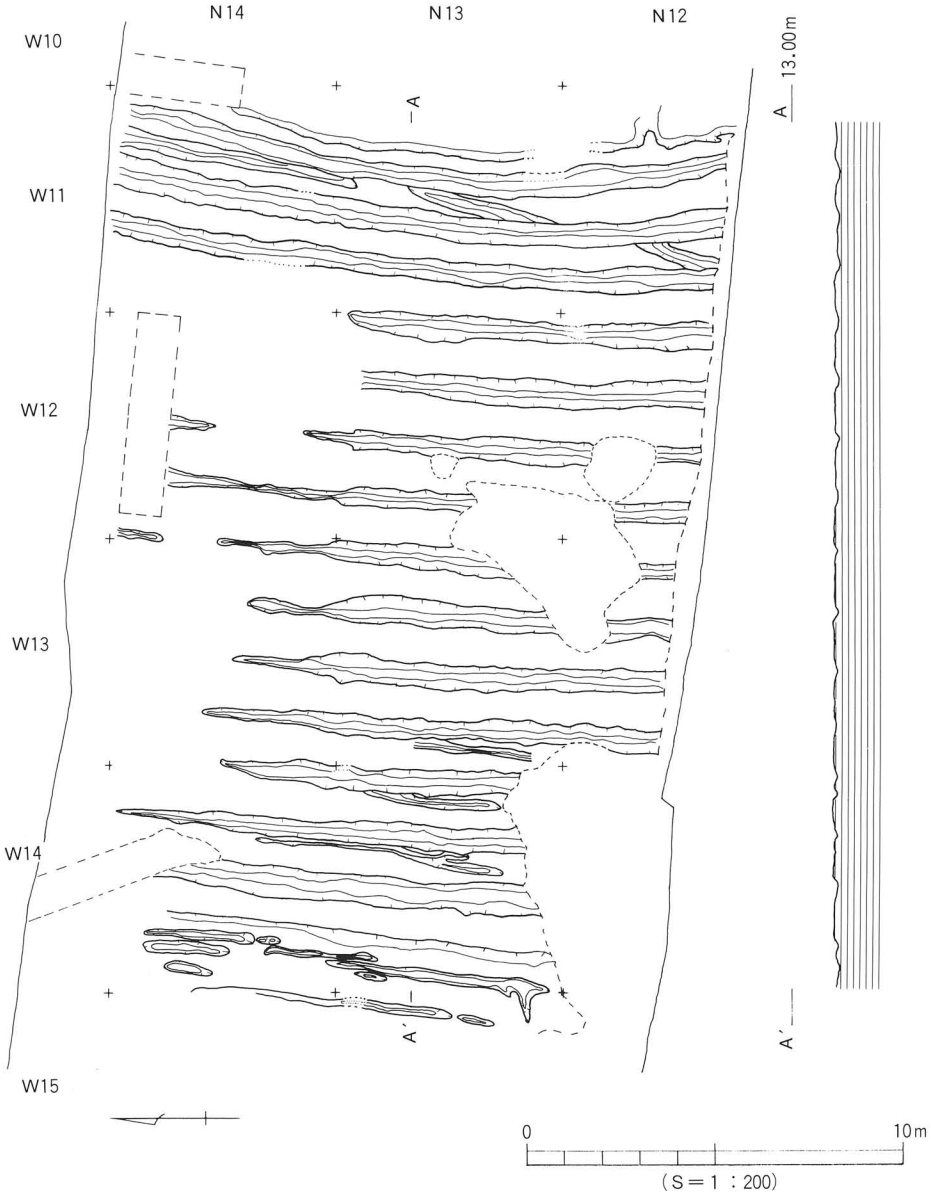


第8図　江戸期遺構測量図

（2）畑遺構（第９図）

調査地の西側で、南北方向に緩やかにカーブする畝状遺構を検出し、この遺構は第６次調査Ｆ区で検出されている畑遺構と連続するものである。検出面積は約346㎡である。

畝14本、畝溝14条を検出する。畝上部は削平を受けているが、畝幅60～120㎝、畝高20㎝前後を測る。畝上面に小溝や足跡がみられるものもある。



第９図　畑状遺構測量図

3　出土遺物

（1）第Ⅲ層出土遺物（第10図、1～12）

第Ⅲ層は洪水・氾濫によって堆積した砂礫層であるため、ほとんどの出土遺物は原位置を留めていないものと考えられる。

＊陶磁器＊

1は瀬戸・美濃系天目碗の口縁部である。内外面に黒釉が施されている。推定口径12.8㎝を測る。N12W2出土。

2は玉縁状の口縁を呈し、外面には明黄褐色（2.5Y7/6）、内面には灰白色（7.5Y8/1）の釉薬が塗られている。また、口縁内面には褐色（7.5YR4/6）の釉がかかっている。推定口径11㎝を測る。N12W7出土。

3は唐津焼碗の底部である。高台部内面には回転糸切りの痕跡があり、高台部は削り出されている。内面には灰オリーブ色（5Y5/3）の釉がかかっている。体部外面下には横方向のケズリが施され無釉である。高台径4.8㎝、高台高0.3㎝を測る。北壁（東端から84ｍ付近）から出土している。

4は碗の底部で、内面には灰白色（7.5Y8/2）、外面にはオリーブ灰色（10Y5/2）の釉が施されている。高台径3㎝、高台高0.4㎝を測り、貼り付け高台である。N14W3出土。

5・6は陶器の小皿で、いずれも体部外面には横方向のケズリ、内面にはナデ調整が施されている。いずれもにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し硬質である。5は推定口径7㎝、底径3.6㎝を測り、6は推定口径6.8㎝、底径4.6㎝を測る。ともにN14W10出土。

7・8は摺鉢で、いずれも備前系と思われる。7は内面に凸帯があり、推定口径26.4㎝を測る。8は推定口径34.6㎝を測る。7はN13E2、8はN12E1出土。

＊土製品＊

9は管状土錘で、全体が二次焼成を受けたためか黒色を呈している。残存長約3.5㎝、径約1.2㎝、孔径0.5㎝を測る。N12E5出土。

＊キセル＊

10は雁首部である。火皿から首部にかけて緩いカーブを持つ。

＊銭貨＊

11は北宋銭の「景徳元寶」で、外径2.43～2.45㎝、内径2.02～2.08㎝、孔径0.59～0.61㎝、重さ2.371ｇを測る。初鋳年は1004年である。N13W11出土。

12は無文銅銭で、銭径2.08～2.10㎝、孔径0.71～0.72㎝、重さ1.210ｇを測る。N13W2出土。是光吉基氏の分類(1)ではB－1－1型に相当する。

（2）第Ⅳ層出土遺物（第10図、13～15）

第Ⅳ層は江戸期水田耕土層である。出土地は、調査地の北・南壁のトレンチ、東端の深掘り部並びにＡ地区からである。

＊陶磁器＊

13は唐津焼系の小碗で高台部は欠損している。内外面には灰黄色（2.5Y6/2）、口縁部内面周囲にはオリーブ黒色（5Y3/1）の釉がかけられている。推定口径10.6㎝を測る。N13W2出土。

14・15は擂鉢である。14は口縁部、15は底部である。14の外面には３本の凹線が巡っている。15の内面と見込み部には６本単位の櫛目が施されている。14は推定口径22.6㎝を測り、15は推定底径8.8㎝を測る。いずれも備前焼系と思われる。

これらの外に、上田秀夫氏分類(2)の青磁碗Ｂ－ⅡまたはⅢ類と思われる口縁部片１点がN14W15から出土している。

［註］

(1)是光吉基　「国内出土のいわゆる「無文銭」について」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』　1993

(2)上田秀夫　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究　No.2』　1982

【参考文献】

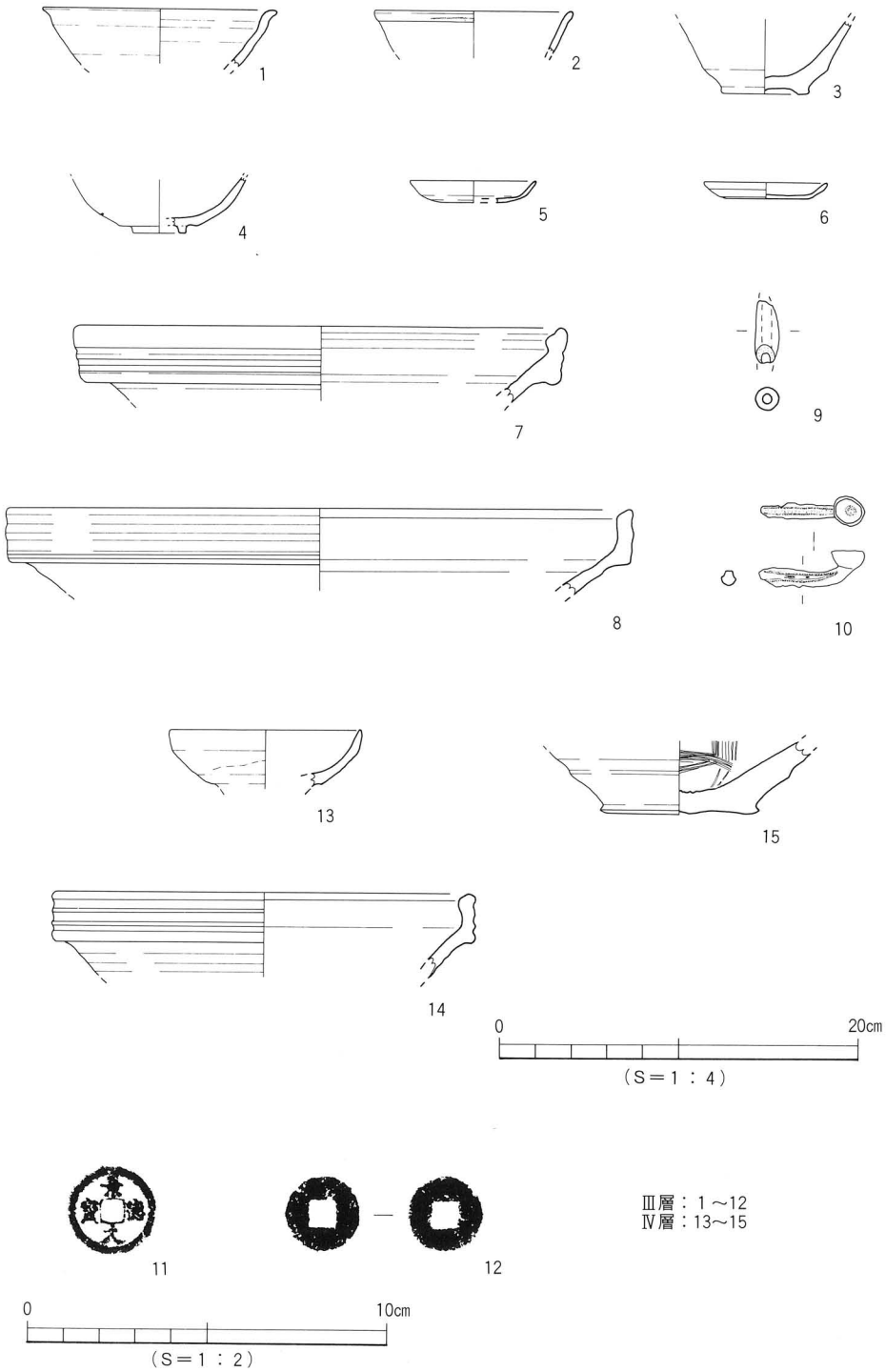
1．白神典之　「堺摺鉢と明石摺鉢」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第３回大会　1990

2．白神典之　「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号　1992

3．小川　望　「出土遺物からみた江戸の喫煙風景」『江戸遺跡研究会第５回大会－考古学と江戸文化－』江戸遺跡研究会　1992

4．小泉　弘　「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学』第13号　1985

5．嶋谷和彦　「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会　1994



第10図　第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図

3　A地区の遺構と遺物

A地区は、調査地の中央やや東側、N11～15W１～７の範囲において調査を行う。

検出された遺構は、掘立柱建物跡６棟、柵列１条、溝25条、墓遺構２基、土坑20基、柱穴556基、性格不明遺構14基である。出土遺物には、土師器椀・杯・小皿、土鍋、土釜、和泉型瓦器椀・小皿、東播系・亀山系の甕やコネ鉢、貿易陶磁器、柱材、木杭、漆器片などがある。これら遺物は、12世紀後半から13世紀前半にかけてのものと思われる。

また、下層調査のための掘削中において木組み井戸１基を確認している。この井戸埋土からは、底部回転糸切りの土師器小皿片１点が出土している。おそらく、A地区の検出遺構と関連する井戸と思われる。

以下、A地区の土層及び検出遺構・遺物について説明する。

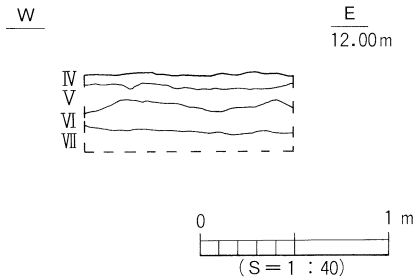
1　土層

A地区の基本土層は、第Ⅳ層の江戸時代の洪水埋没水田土層より下層について説明する。

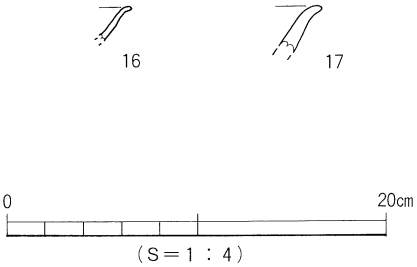
第Ⅴ層は、灰黄色(2.5Y7/2)シルトで層厚約10～15cm前後を測る。調査地全域にみられ、中世後半の備前焼摺鉢片、白磁碗片、青磁碗片などの遺物を若干包含している土層である。

第Ⅵ層は、暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土～シルトで、層厚約10～18cmを測る。土師器、瓦器、陶磁器などの遺物を包含する土層で調査地全域にみられる。

第Ⅶ層は、黄褐色(2.5Y5/4)シルトで、この上面において遺構を検出している。



第11図　基本柱状土層図



第12図　第Ⅴ層出土遺物実測図

（1）第Ⅴ層出土遺物（第12図）

＊貿易陶磁器＊

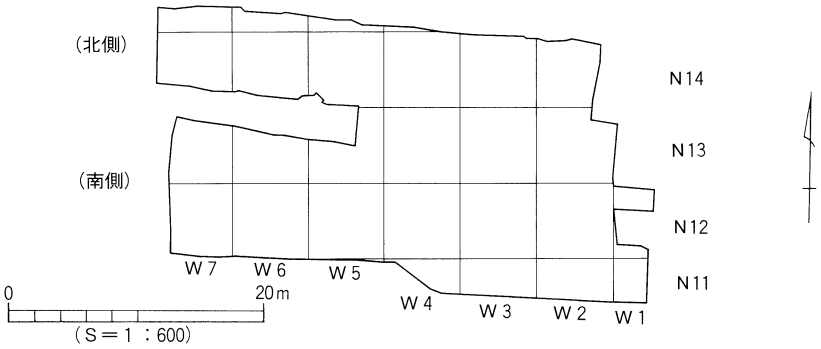
16は白磁碗の口縁部である。外反する口縁をもち森田分類(1)のＥ類にあたる。Ｎ12Ｗ２出土。

17は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。外反する口縁をもち、内外面に緑灰色（7.5ＧＹ6/1）の釉がかかっている。ⅣまたはⅤ類(2)と思われる。

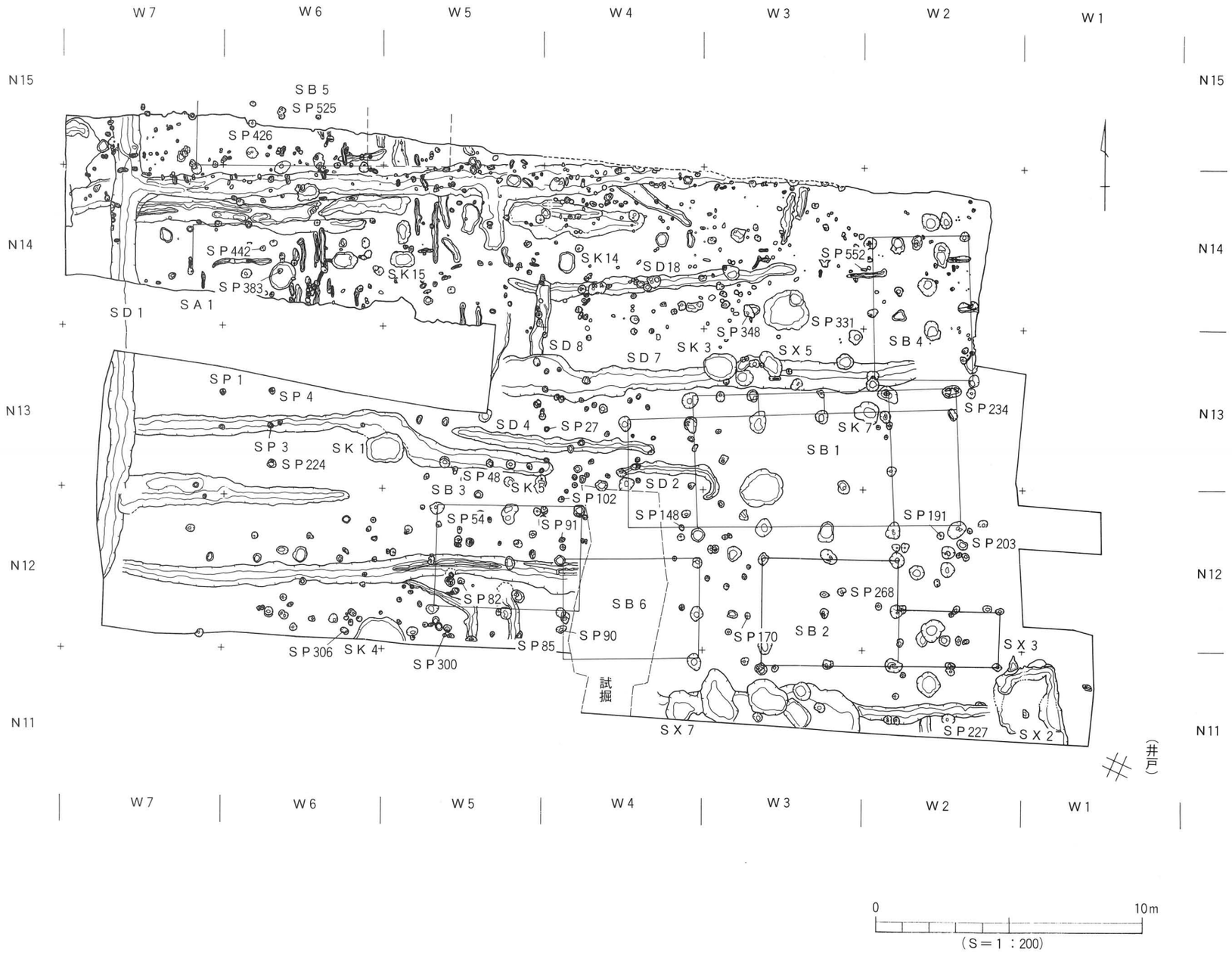
[註]

（1）森田　勉　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究　No.2』　1982

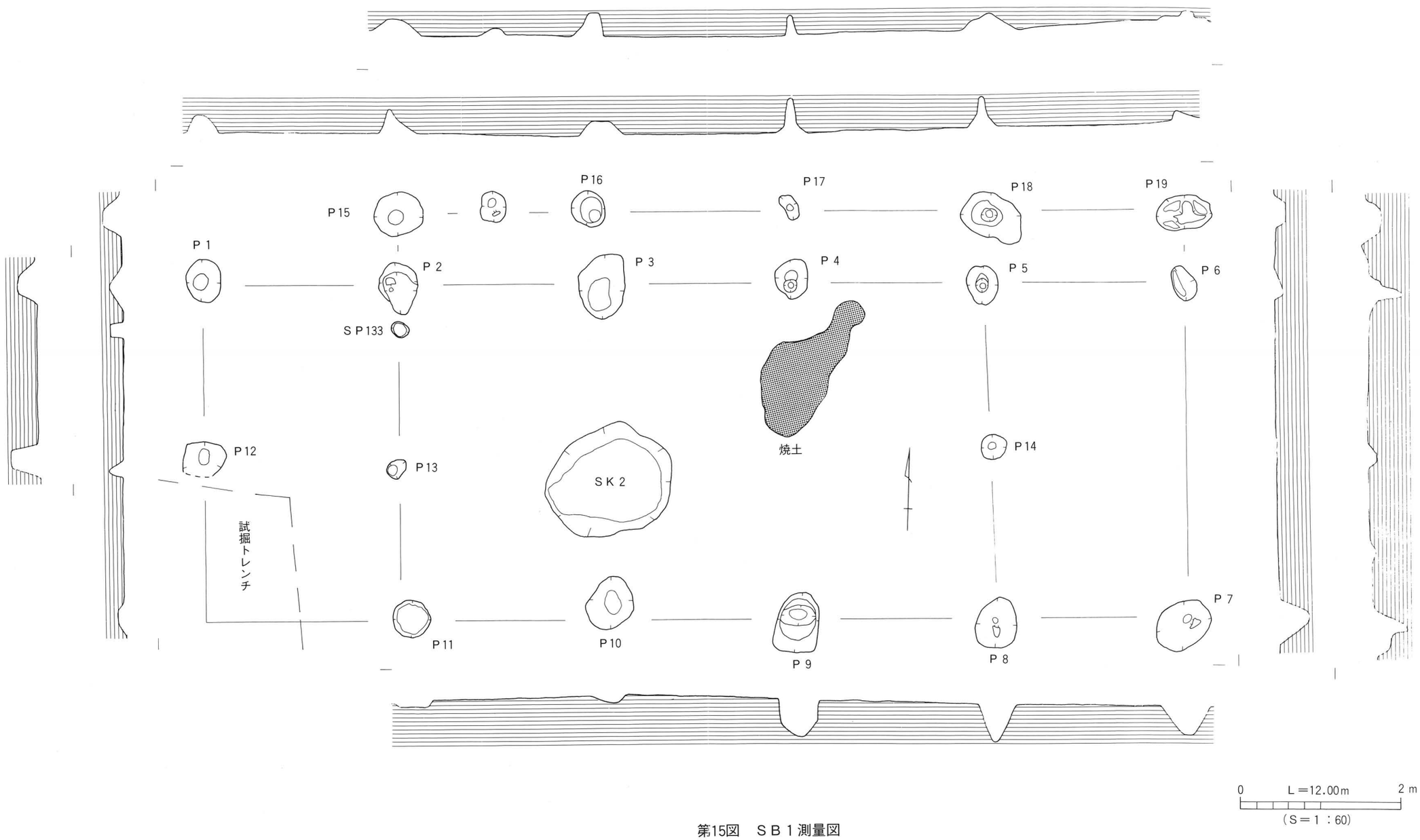
（2）山本　信夫　「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995



第13図　調査地グリット設定図


W7
W6
W5
W4
W3
W2
W1
N15
N14
N13
N12
N11
SB5
SP525
SP426
SP442
SP383
SK15
SA1
SD1
SK14
SD18
SP552
SP348
SP331
SK3
SX5
SB4
SD8
SD7
SP1
SP4
SP3
SP224
SK1
SD4
SP27
SK7
SP234
SB1
SP48
SK5
SB3
SP102
SD2
SP148
SP191
SP203
SP54
SP91
SP268
SB6
SP82
SP90
SP170
SB2
SX3
SP306
SK4
SP300
SP85
試掘
SX7
SP227
SX2
(井戸)
0
10m
(S＝1：200)

第14図　遺構平面図


P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P 10
P 11
P 12
P 13
P 14
P 15
P 16
P 17
P 18
P 19
S P 133
S K 2
焼土
試掘トレンチ
0
L＝12.00m
2 m
（S＝1：60）

第15図　ＳＢ１測量図

2　掘立柱建物跡

（1）１号掘立柱建物跡（ＳＢ１）（第15図）

調査区の中央東側、N12・13W２～４に位置する梁行２間×桁行５間の東西棟である。北側に幅約90㎝桁行４間分の庇がつく。また、東側と西側には１間分の間仕切りがある。南西隅の柱穴は、試掘トレンチによって残存していない。主軸は南に２度ふれている。規模は、梁行4.2ｍ、桁行12.2ｍを測り、床面積は庇部も含め約60㎡である。建物内では焼土と土坑（ＳＫ２）を検出するが、ＳＢ１に関わる遺構なのかは不明である。柱穴は、直径20～70㎝の円形または不整形プランで、深さ10～50㎝を測る。いずれの柱穴も柱痕跡は認められなかった。柱穴の埋土は、黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトを主体とし黄褐色（10ＹＲ5/6）シルトがみられる。

出土遺物（第16図）

－Ｐ16－

18は土師器杯である。全体に磨滅しているが底部の切り離しは回転糸切りと思われる。推定口径14㎝、器高3.6㎝、底径6.6㎝を測る。

19は瓦器椀である。内面見込みには平行線状のミガキが施されている。断面三角形の高台が貼り付けられている。推定口径14.4㎝、器高５㎝、高台径4.6㎝を測る。

－Ｐ15－

20は平瓦である。凹面には布目痕と糸または針金などによって切り離しされた痕跡が残り、凸面には細縄叩きが施され、さらに若干のナデが加えられている。端面には２条の沈線が巡っている。全体に浅黄橙色（7.5ＹＲ8/3）を呈している。

－Ｐ11－

21は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径8.6㎝、器高1.3㎝、底径６㎝を測る。

－Ｐ10－

22・23は土師器小皿である。いずれも底部の切り離しは回転糸切りである。22は推定口径8.8㎝、器高1.7㎝、底径5.8㎝を測り、Ｐ14出土片と接合した。23はほぼ完形品で、やや上げ底を呈し、外底面には板状圧痕がみられる。口径８㎝、器高1.3㎝、底径６㎝を測る。

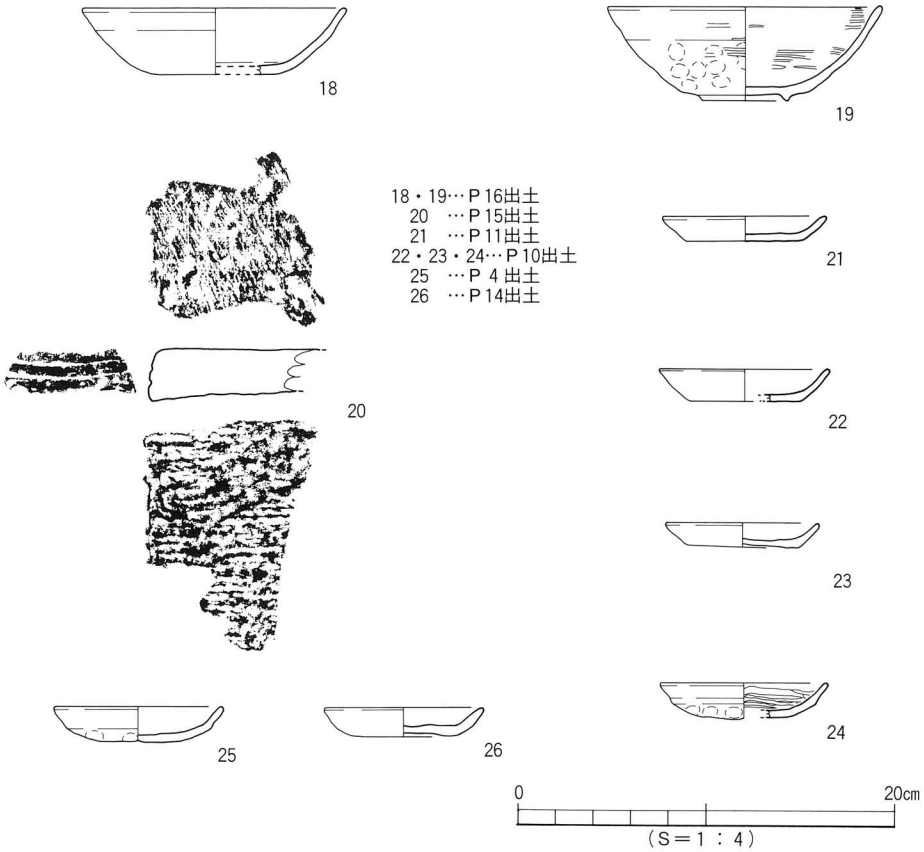
24は瓦器小皿である。内面には横方向のミガキが施されている。推定口径8.8㎝、器高1.9㎝を測る。

－Ｐ４－

25は瓦器小皿である。推定口径8.8㎝、器高1.9㎝を測る。

－Ｐ14－

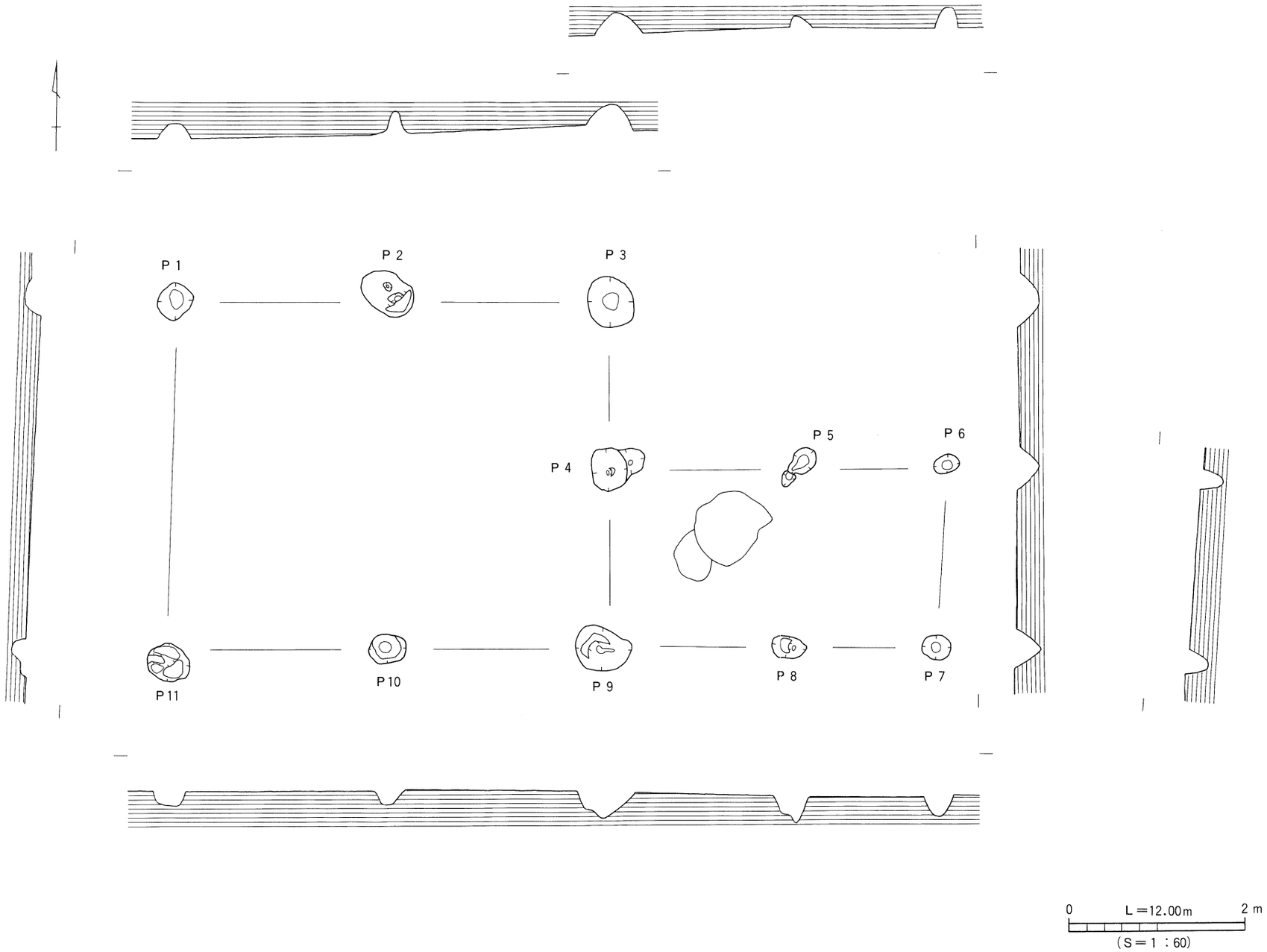
26は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りで、やや上げ底を呈している。口径8.4㎝、器高1.6㎝、底径５㎝を測る。



第16図　ＳＢ１出土遺物実測図

（2）２号掘立柱建物跡（ＳＢ２）（第17図）

N11・12W２・３に位置するＬ字形の建物である。東側の１×２間の建物は梁行２ｍ、桁行3.7～3.8ｍを測り、床面積は約7.6㎡である。西側の１×２間の建物は梁行４ｍ、桁行4.9～５ｍを測り、床面積は約19.11㎡である。総床面積は約26.71㎡である。Ｐ３－Ｐ４－Ｐ９間は、1.85ｍ－２ｍを測る。南北のＰ３－Ｐ９間は磁北に沿い、東西のＰ７－Ｐ11間は磁北に直交している。柱穴は、直径20～60㎝の円形または不整形プランで、深さ10～30㎝を測る。東側のＰ５～８は、他の柱穴よりも小さい。いずれの柱穴も柱痕跡は認められなかった。柱穴の埋土は、ＳＢ１と同様に黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトを主体としている。Ｐ１からは、土師器小皿５枚がまとまって出土している。



第17図　ＳＢ２測量図

出土遺物（第18図）

－Ｐ３－

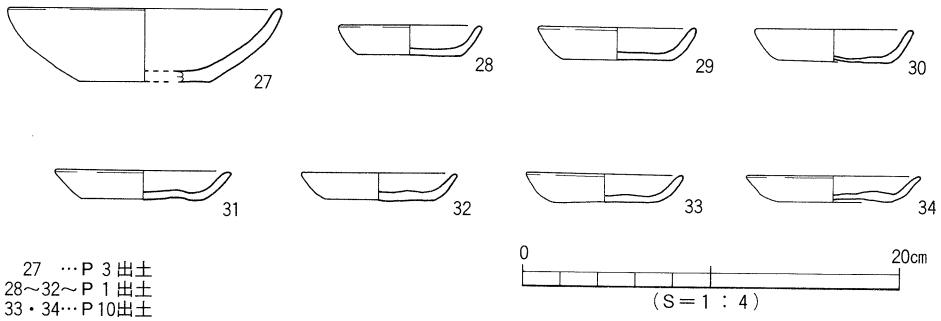
27は土師器杯である。全体にやや磨滅しているが底部の切り離しは回転糸切りである。体部は口縁部近くでやや内傾している。推定口径14.3㎝、器高3.9㎝、底径７㎝を測る。

－Ｐ１－

28～32は土師器小皿である。いずれも磨滅しているが底部の切り離しは回転糸切りである。30はほぼ完形品で口径8.2㎝、器高1.8㎝、底径６㎝を測る。32もほぼ完形品で口径8.2㎝、器高1.4㎝、底径5.6㎝を測る。28は推定口径7.4㎝、器高1.6㎝、底径5.4㎝を測る。29は推定口径8.2㎝、器高1.7㎝、底径5.8㎝を測る。31は推定口径9.2㎝、器高1.5㎝、底径6.4㎝を測る。

－Ｐ10－

33・34は土師器小皿で、いずれも底部の切り離しは回転糸切りである。33は完形品で、口径8.2㎝、器高1.5㎝、底径5.4㎝を測る。34は全体的に灰白色（2.5Ｙ8/2）を呈し、推定口径9.2㎝、器高1.4㎝、底径６㎝を測る。



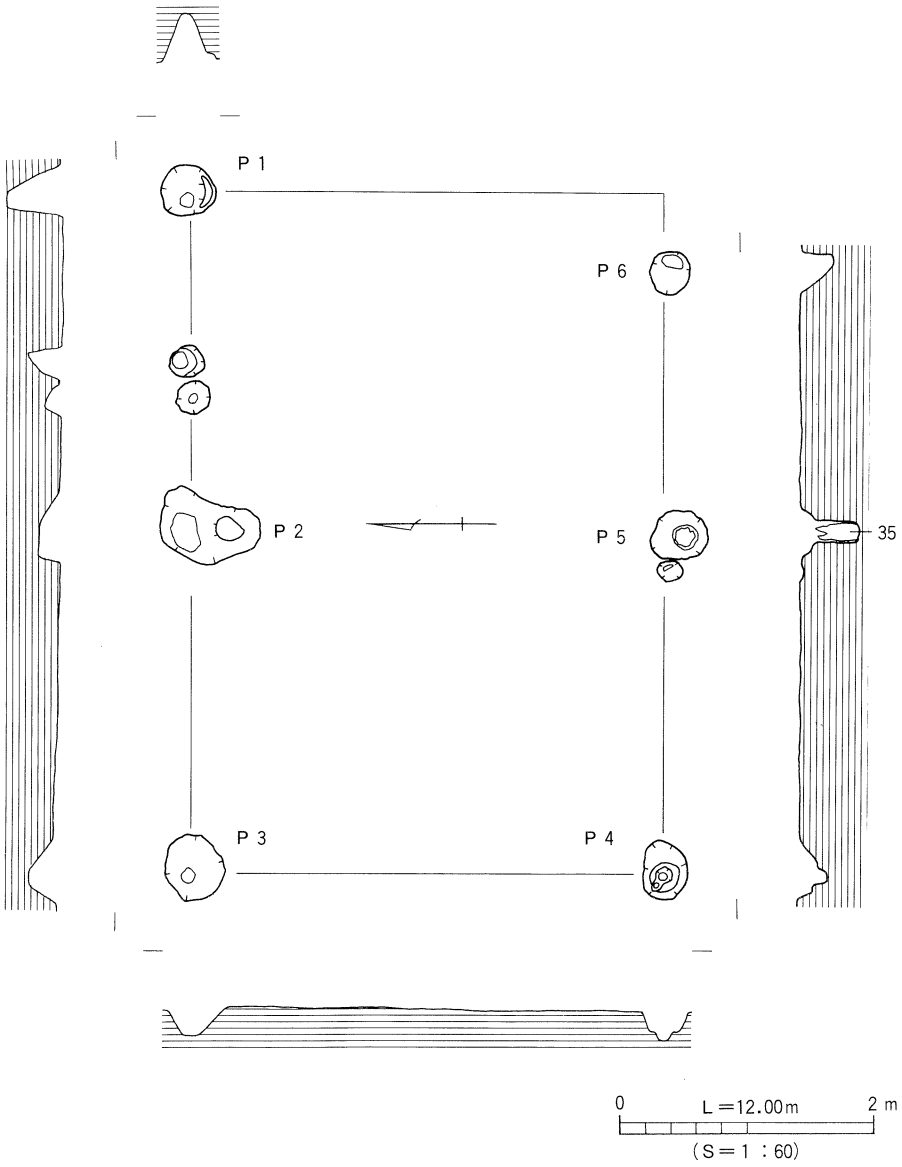
第18図　ＳＢ２出土遺物実測図

（３）３号掘立柱建物跡（ＳＢ３）（第19図）

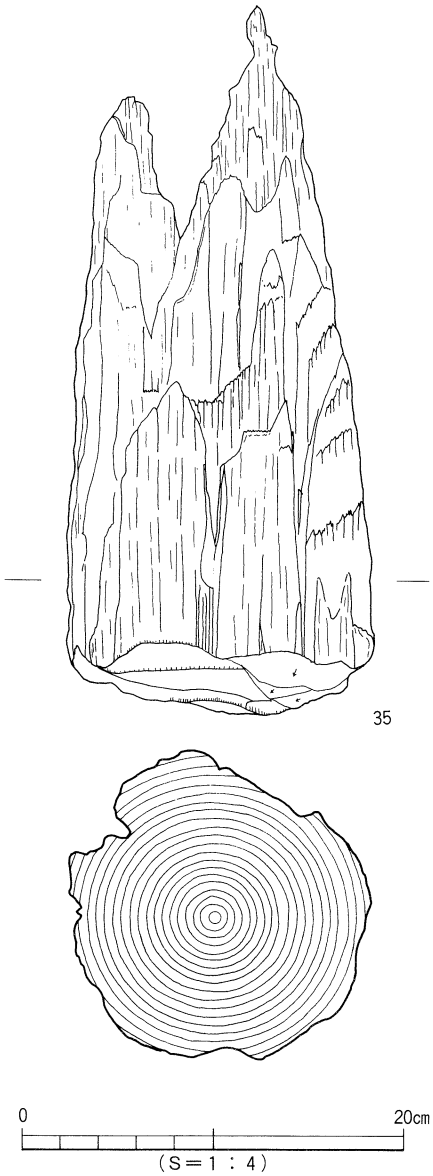
Ｎ12Ｗ４・５に位置する１×２間の東西棟である。規模は、梁行約3.7ｍ、桁行約5.4ｍを測り、床面積は約19.98㎡である。主軸は北へ１度振れている。柱穴は、直径30～60ｍの円形プランで、深さ20～50ｍを測る。Ｐ２のみ平面プランは不整形である。Ｐ５からは柱材が出土しているが、他の柱穴においては柱痕跡は認められなかった。柱穴の埋土は、灰色（Ｎ5/0）シルトを主体としている。柱穴からは、土師器や瓦器片などが出土しているが、細片のため実測できない。

出土遺物（第20図）

35はＰ５から出土した柱材である。樹種は分析の結果、ヒノキが使用されている（第２分冊、Ⅶ－７）。径15.8㎝、残存長37.4㎝を測る。



第19図　ＳＢ３測量図



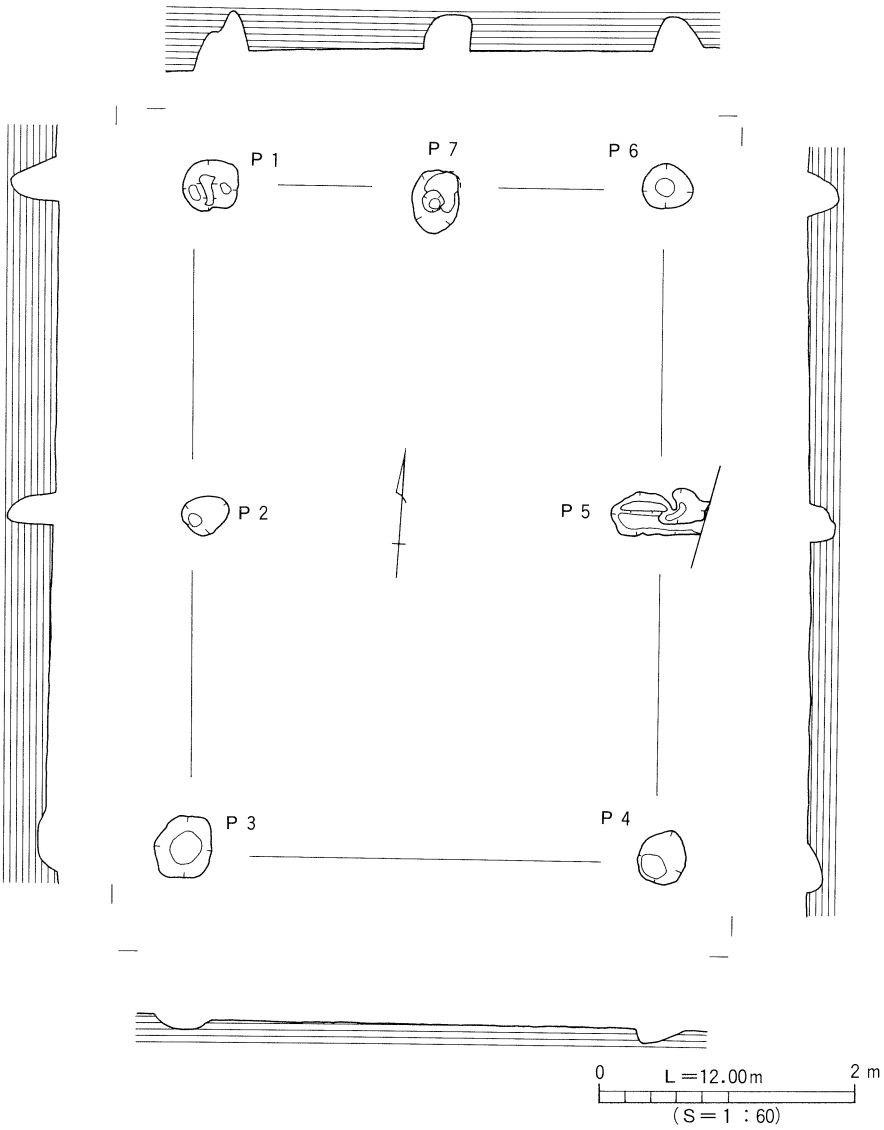
第20図　ＳＢ３出土遺物実測図

（４）４号掘立柱建物跡（ＳＢ４）（第21図）

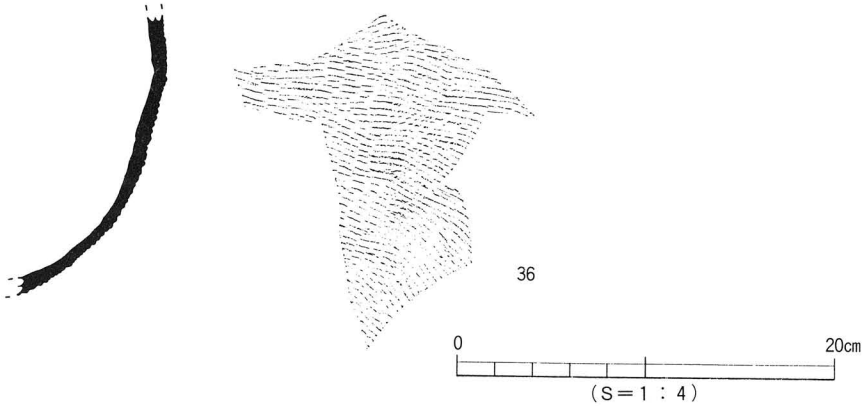
Ｎ13・14Ｗ２に位置する１×２間の南北棟で、ＳＢ１の北側に位置している。規模は、梁行約3.7ｍ、桁行約5.3ｍを測り、床面積は約19.61㎡である。北辺のみやや中央に柱穴１基（Ｐ７）がある。主軸は西に約４度振れている。柱穴は、直径約30～50ｍのほぼ円形プランで、深さ約10～40ｍを測る。Ｐ５の平面プランは不整形である。柱穴の埋土は、ＳＢ１と同様に黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトを主体としている。柱穴からの遺物には、瓦器片、土師器片、須恵器片などがある。

出土遺物（第22図）

36は須恵器甕の体部片でＰ３出土である。外面に平行叩きが施され、東播系と思われる。



第21図　ＳＢ４測量図



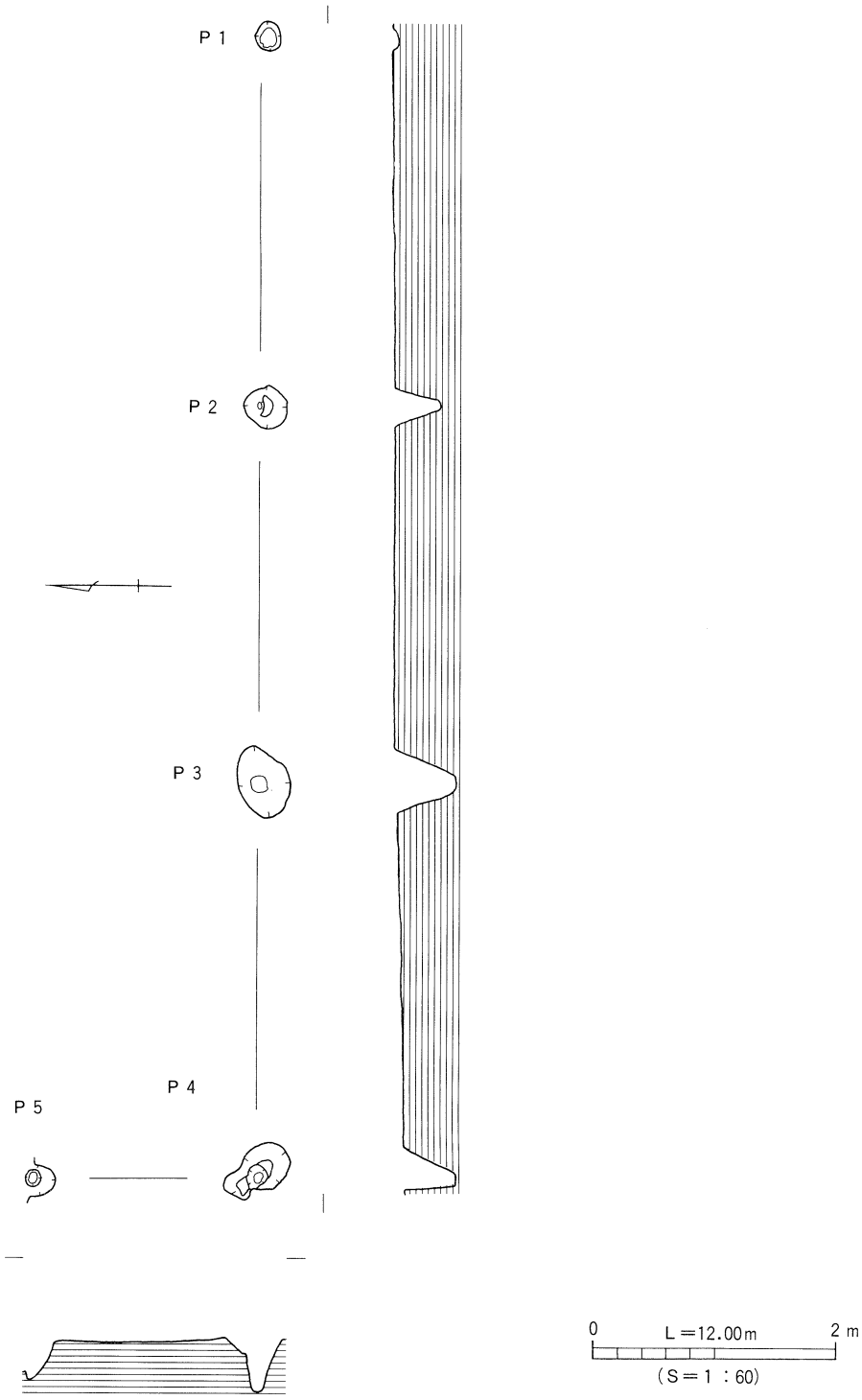
第22図　ＳＢ４出土遺物実測図

（5）５号掘立柱建物跡（ＳＢ５）（第23図）

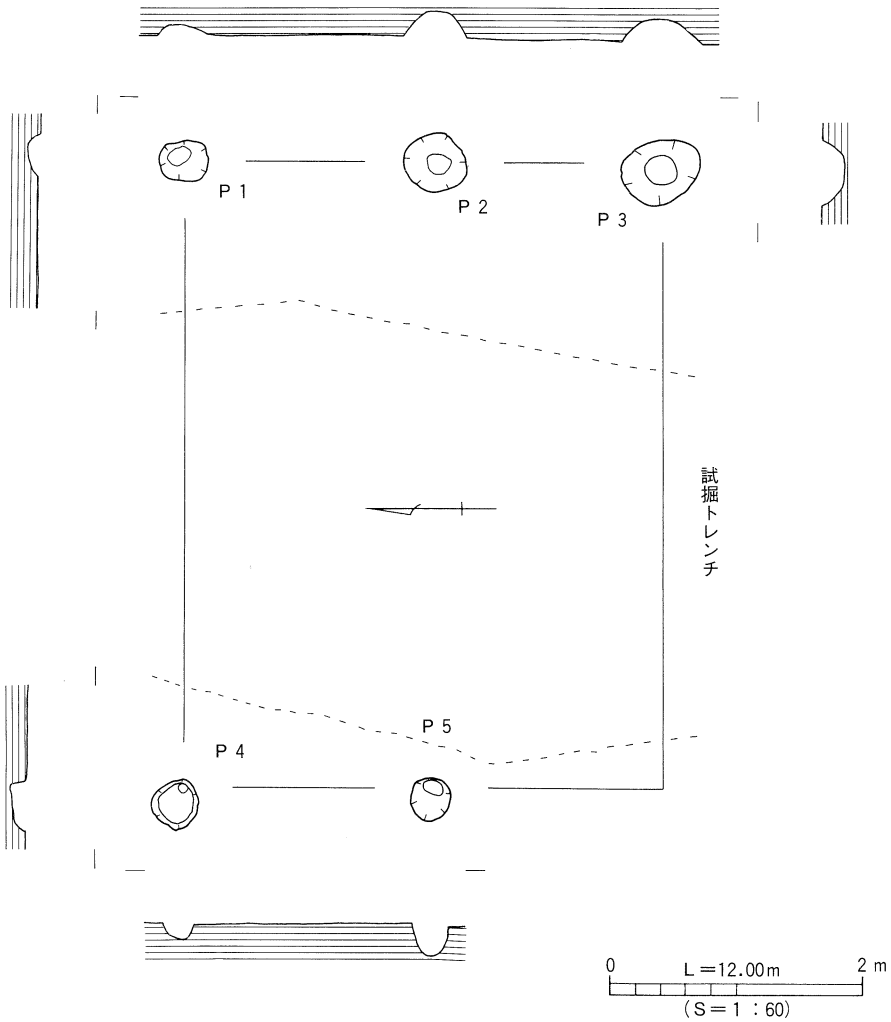
Ｎ15Ｗ６・７に位置する南辺３間、西辺１間分を検出した建物である。北側は調査区外である。規模は、南辺5.35ｍ、西辺約3.65ｍを測り、床面積は約19.53㎡である。西辺は磁北に沿い、南辺は磁北に直交している。ＳＢ２と同様の方向性がみられる。柱穴は、直径約20～30㎝の円形または楕円プランで、深さはＰ１を除き約30～50㎝を測る。柱穴の埋土はＰ１・３は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトで、ＳＢ１と同じである。Ｐ２は黒色（7.5ＹＲ2/1）シルト、Ｐ４は黒褐色（7.5ＹＲ3/1）シルト、Ｐ５は黒色（10ＹＲ2/1）シルトを主にしている。柱穴からの遺物には、瓦器片、土師器片などがあるが、細片のため実測できない。

（6）６号掘立柱建物跡（ＳＢ６）（第24図）

Ｎ11・12Ｗ４に位置する東西棟である。東梁行３間、西梁行は２間分の柱穴を確認する。中央部は試掘トレンチのために他の柱穴は確認できていない。規模は、梁行約3.8ｍ、桁行約4.95ｍを測り、床面積は約18.81㎡である。主軸は磁北に直交し、ＳＢ２と同様の方向性がみられる。柱穴は、直径約30～60ｍの円形または楕円形プランで、深さ約10～30ｍを測る。いずれの柱穴も柱痕跡は認められなかった。柱穴の埋土は、Ｐ１・３はＳＢ１と同様に黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘質土で、Ｐ２は黄褐色（2.5Ｙ5/4）シルト、Ｐ４・５はＳＢ３と同じ灰色（Ｎ5/0）シルトを主にしている。柱穴からの遺物には、土師器片、瓦器片、土鍋片などがあるが、細片のため実測できない。



第23図　ＳＢ５測量図



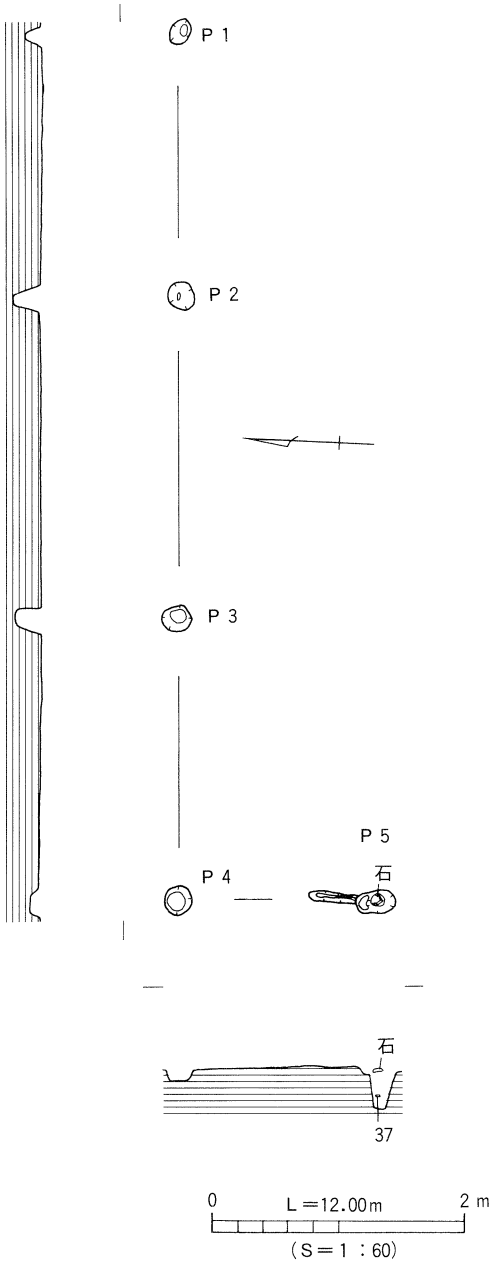
第24図　ＳＢ６測量図

3　柵列状遺構

（1）１号柵列状遺構（ＳＡ１）

（第25図）

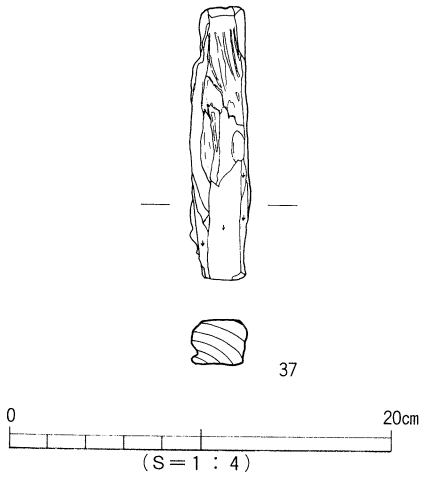
Ｎ14Ｗ６・７に位置するＬ字形の柵列である。北辺は３間分、西辺１間分を検出している。北辺長は約6.9ｍ、西辺長は約1.6ｍを測る。北辺は約３度南に振れ、ＳＤ１と並走しているため同時期と思われる。柱穴は直径20～30㎝の円形に近いプランで、深さは20～30㎝を測る。柱穴の埋土は、Ｐ１・４・５はＳＢ１と同様に黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘質土で、Ｐ２は黒色（10ＹＲ2/1）シルト、Ｐ３は黒色（7.5ＹＲ2/1）シルトを主にしている。Ｐ５では上部に石が置かれ、柱穴内のやや下層から角材が１点出土している。外の柱穴からは、土師器片や瓦器片など出土しているが、細片のため実測できない。



第25図　ＳＡ１測量図

出土遺物（第26図）

37は角材で、樹種の分析結果ではヒノキである（第２分冊、Ⅶ－７）。厚さ約2.5～３㎝、残存長14.5㎝を測り、面取りがなされている。



第26図　ＳＡ１出土遺物実測図

4　墓遺構

調査区において墓遺構２基を検出した。

（1）ＳＫ１（第27図）

Ｎ13Ｗ５・６においてＳＤ５を切って検出した。墓坑は、長軸1.4ｍ、短軸約１ｍ、深さ約30㎝を測り、平面形は隅丸長方形を呈している。

遺構検出段階から多数の礫が密集していた。これらの礫は20～60㎝大の角・円礫で、石材は花崗岩、砂岩系、安山岩系、泥岩系などである。また、火を受けた礫や加工痕跡が残る礫（第28図、43）もあった。これら礫群は、墓の標石であったと考えられる。

埋土中からは粘土化した人骨片、歯牙片、土師器片、瓦器片、貿易陶磁器片、炭化米、炭化材などの外に、床面から湖州鏡１面が出土している。木棺による埋葬行為がなされていたかは不明である。

遺構埋土と遺構外土壌について脂肪酸分析を行い、また、炭化材樹種同定なども行う。その結果は、第２分冊分析編Ⅶ－１・７に載せている。出土している歯牙はＳＫ14の歯牙と併せて第２分冊Ⅶ－２で検討している。

出土遺物（第28図）

38は土師器椀である。約１/３は欠損している。高台は、やや丸味を帯びた断面四角形の高台が貼り付けられ、高台内面には焼成前に刻まれた「×」記号がみられる。体部外面にはヘラ状工具によると思われる沈線３本が巡っている。推定口径15㎝、器高4.8㎝、高台径６㎝を測る。

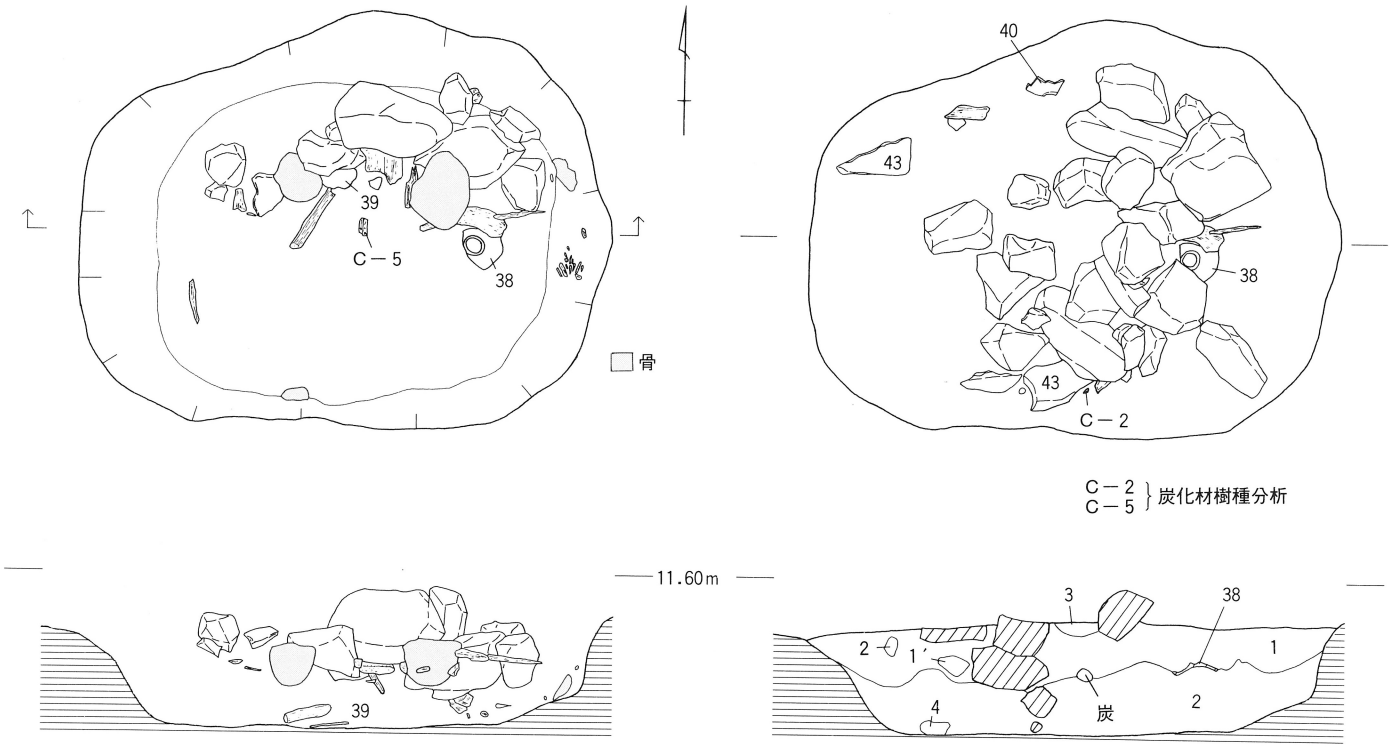
39は湖州六花鏡である。直径約10.7㎝を測り、縁はカマボコ状の断面を呈し、中央に低い紐が付く。紐の右側に約４㎝×2.2㎝の銘帯がある。その中は縦半分に区分けされ、銘文がある。その銘文は「湖州石十五／郎錬銅照子」と思われる。

40は白磁碗ＶまたはＶ－４類の底部である。高台部は欠損している。遺構検出時の礫中から出土している。

41は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。

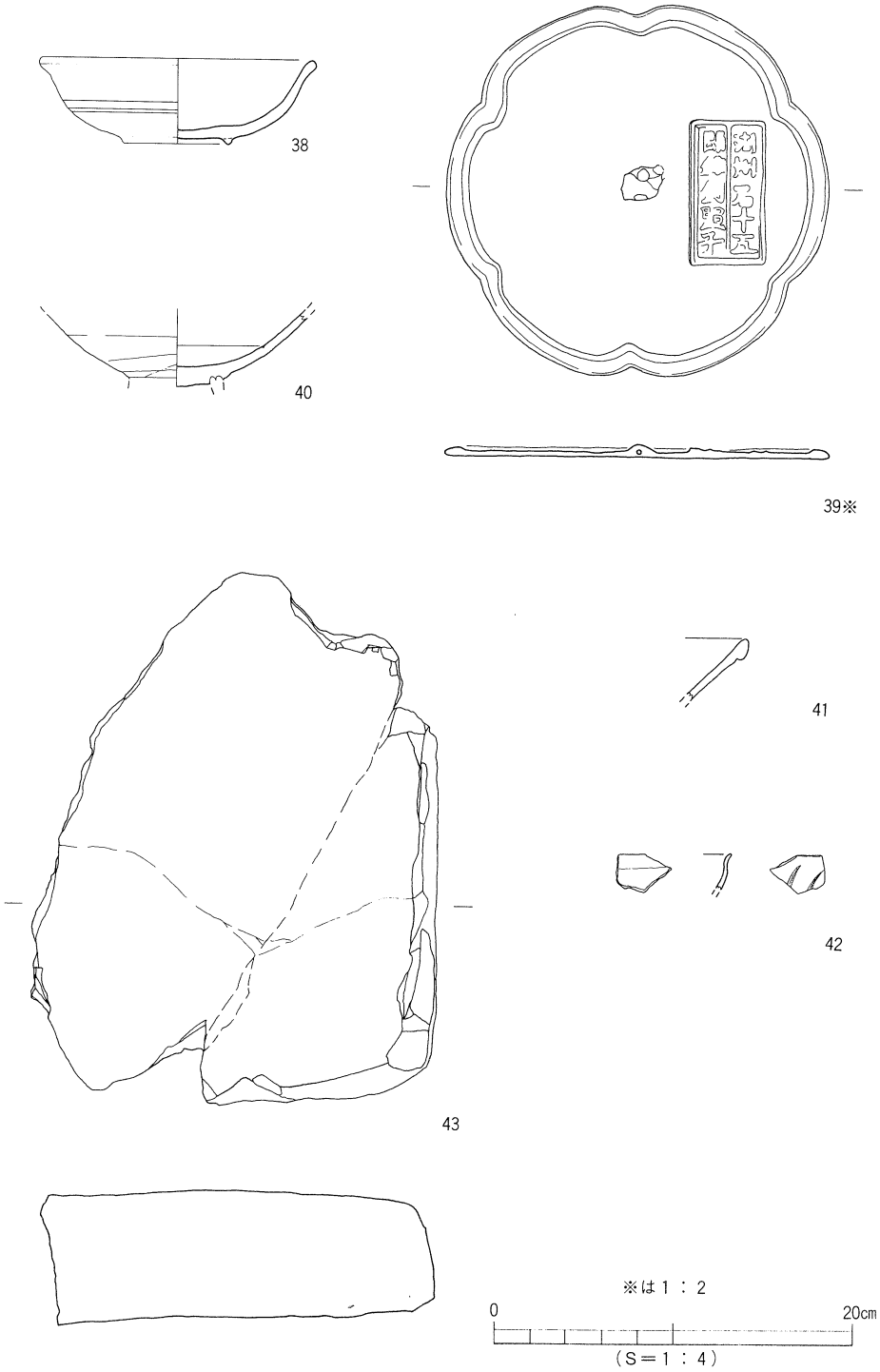
42は白磁碗ＸⅡ－１ｂ類（博多０－Ⅲ類？）の口縁部である。

43は加工石である。上面と底面は研磨による面取りがなされている。火を受けた痕跡があり、そのために割れたものと思われる。重さ8.45㎏を測る。



1．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト
1′　〃　〃　（淡黄色2.5Y 8/5混じり）
2．暗青灰色（5B 4/1）シルト
3．黄灰色（2.5Y 6/1）シルト
4．明緑灰色（7.5GY 8/1）微砂

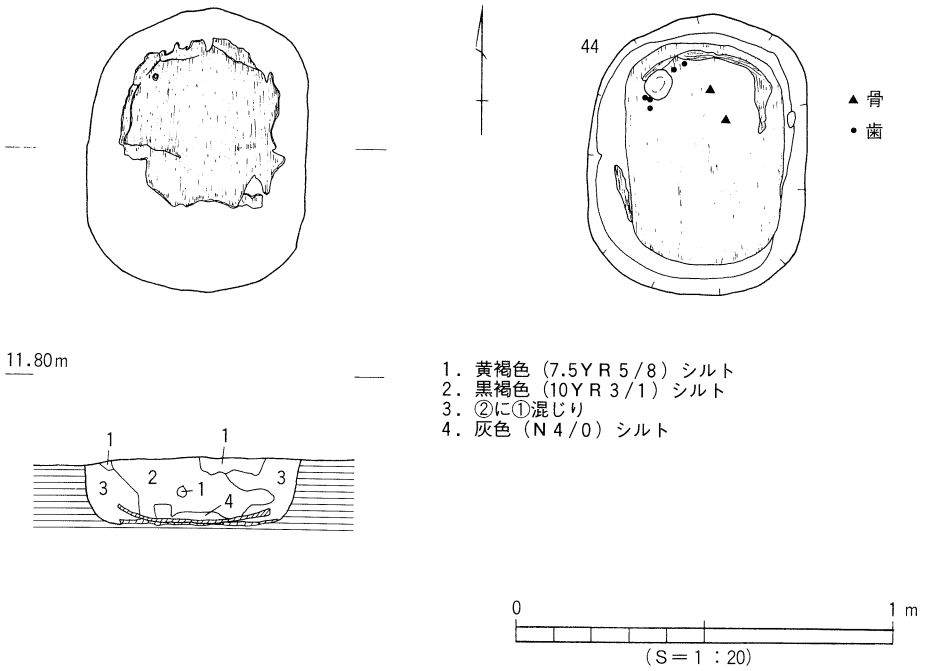
第27図　SK1測量図



第28図　ＳＫ１出土遺物実測図

（2）ＳＫ１４（第29図）

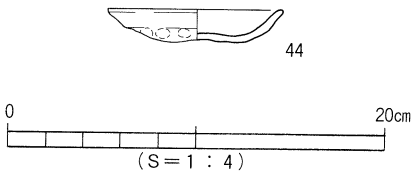
Ｎ14Ｗ４において検出した。長軸75㎝、短軸58㎝、深さ20㎝を測り、平面形は隅丸長方形を呈している。粘土化した骨片と歯牙を検出し、完形品の瓦器小皿１点を出土した。頭位は出土した歯牙の位置から北と考えられる。木棺には杉材が使用されている（第２分冊、Ⅶ－６参照）。出土歯牙については、ＳＫ１と同様に第２分冊Ⅶ－２で検討している。



第29図　ＳＫ14測量図

出土遺物（第30図）

44は瓦器小皿の完形品である。口径9.2㎝、器高1.7㎝を測る。和泉型瓦器と思われる。



第30図　ＳＫ14出土遺物実測図

5　土坑状遺構

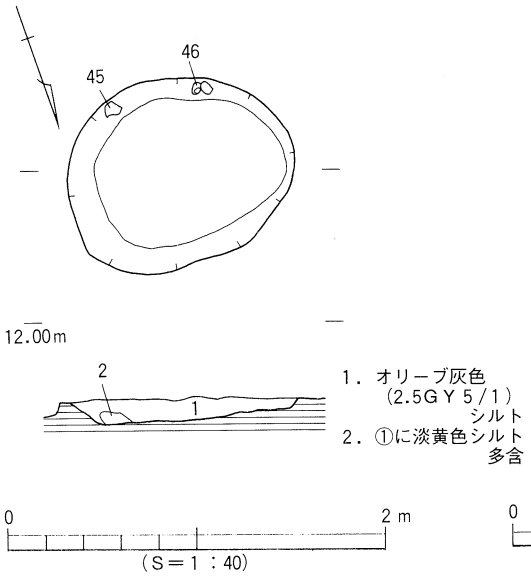
調査区において、墓遺構以外の土坑状遺構20基を検出した。以下、主要なものについて記す。

（1）ＳＫ３（第31図）

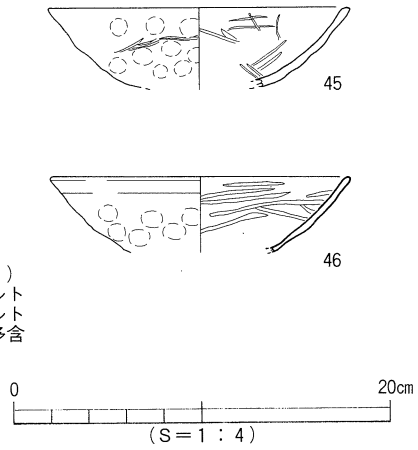
Ｎ13Ｗ３においてＳＤ７を切って検出した。長軸約1.2ｍ、短軸約１ｍ、深さ約13㎝を測り、平面形は隅丸方形を呈している。埋土はオリーブ灰色（2.5ＧＹ5/1）シルトである。土坑内からは、瓦器片、土師器小皿片、土師質鍋・釜片を出土している。

出土遺物（第32図）

45・46は瓦器椀である。45の内面には横方向のミガキ、外面にも若干のミガキが施され、推定口径15.9㎝を測る。46の内面には横方向のミガキが施され、推定口径15.6㎝を測る。いずれも和泉型瓦器と思われる。



第31図　ＳＫ３測量図



第32図　ＳＫ３出土遺物実測図

（2）ＳＫ４（第33図）

Ｎ12Ｗ５・６の調査地南端において検出した。調査地の南側に広がるものと思われる。検出長軸約２ｍ、短軸約75㎝、深さ約20㎝を測り、平面形はやや円形を呈している。埋土は大きく三層に分かれる。土坑上面からは、土師器鉢（47）が出土し、掲載遺物以外に土師器杯・小皿、瓦器椀、土師質鍋、白磁碗Ⅳ類の口縁部片１点などが出土している。

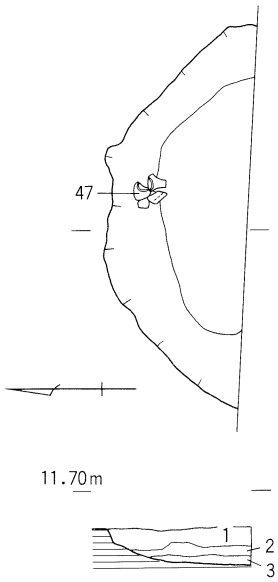
出土遺物（第34図）

47は土師器の鉢型土器である。底部の切り離しは回転糸切りで、若干の板状圧痕がみられる。推定口径16.8cm、器高7.4cm、底径９cmを測る。

48は白磁碗ＸⅡ－１ｂ類の口縁部である。

49は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－１類である。推定口径16cm、器高6.8cm、高台径6.4cmを測る。この青磁碗はＳＰ14から出土している破片と接合している。

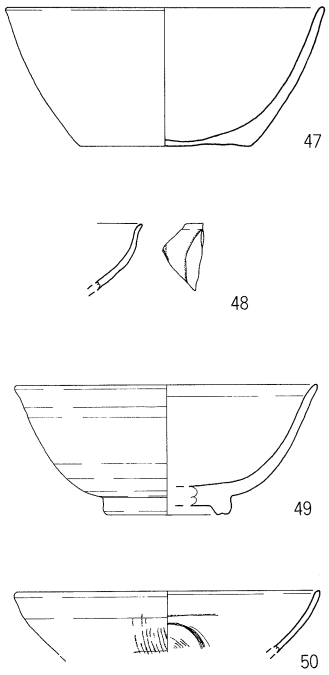
50は同安窯系青磁碗Ⅰ－１ｂ類の口縁部である。推定口径16.2cmを測る。



1．黒褐色（10ＹＲ３/１）シルト～粘質土
2．黄褐色（10ＹＲ５/６）シルト
3．灰色（５Ｙ５/１）シルト

0　2 m
（Ｓ＝１：40）

第33図　ＳＫ４測量図

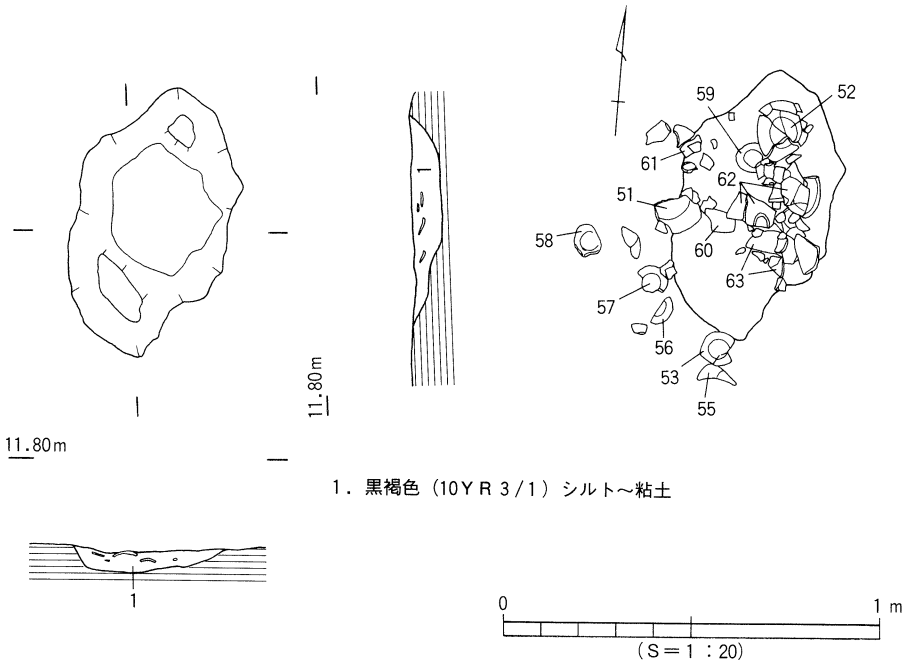


0　20cm
（Ｓ＝１：４）

第34図　ＳＫ４出土遺物実測図

（３）ＳＫ５（第35図）

Ｎ12・13Ｗ４・５において検出した。ＳＤ１の東南隅に位置している。長軸約70cm、短軸約40cm、深さ８cmと浅い遺構である。平面形はやや菱形に近いプランである。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトである。土坑内及び周辺部に土器が密集して出土している。おもな遺物には、土師器杯・小皿、瓦器椀、土師質鍋片がある。



第35図　ＳＫ５測量図

出土遺物（第36図）

51は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径15cm、器高３cm、底径8.6cmを測る。

52は土師器杯の完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径14.8cm、器高3.5cm、底径7.5cmを測る。

53は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径12.8cm、器高４cm、底径７cmを測る。

54は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径13cm、器高2.9cm、底径7.6cmを測る。

55は土師器杯の口縁部である。全体に灰白色（N8/0）を呈している。推定口径16cmを測る。

56は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径8.7cm、器高1.6cm、底径5.7cmを測る。

57は土師器小皿でほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径８cm、器高1.2cm、底径5.2cmを測る。

58は土師器小皿でほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。全体に灰白色（2.5Ｙ8/1）を呈している。口径９cm、器高1.6cm、底径5.9cmを測る。

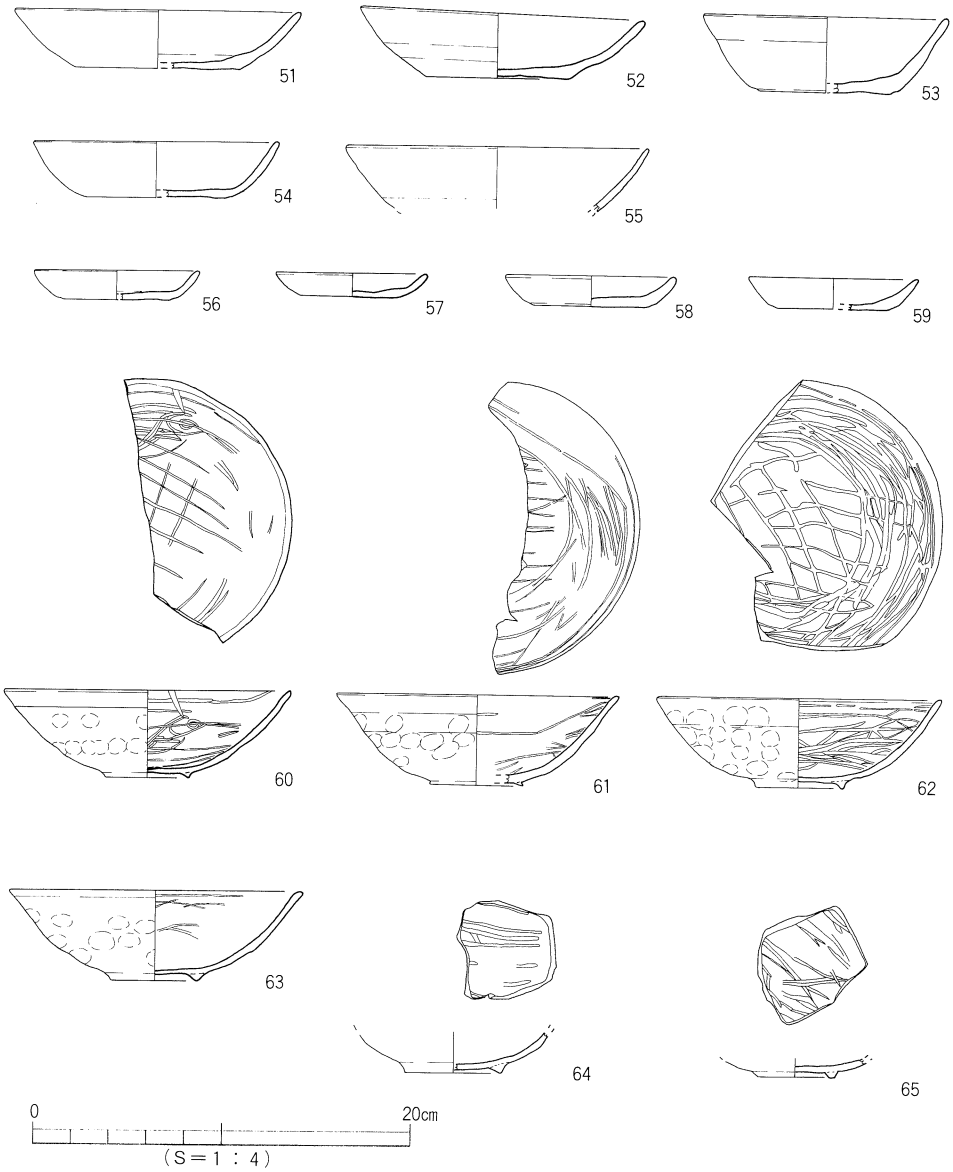
59は土師器小皿でほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径９cm、器高1.6cm、底径5.6cmを測る。

60は瓦器椀である。全体に灰白色（5Ｙ5/1）を呈している。内面には横方向のミガキ、見

込みには格子状のミガキが施されている。断面三角形の高台が貼り付けられている。推定口径15cm、器高4.6cm、高台径4.4cmを測る。

61は瓦器椀である。内面は横方向のミガキ、見込みには平行線状のミガキが施されている。断面四角形の低い高台が貼り付けられている。推定口径15cm、器高4.7cm、高台径5cmを測る。

62は瓦器椀である。内面は横方向のミガキ、見込みには格子状のミガキが施され、断面三角形の高台が貼り付けられている。推定口径14.8cm、器高4.8cm、高台径4.7cmを測る。



第36図　ＳＫ５出土遺物実測図

63は瓦器椀である。内面がやや磨滅しているが横方向のミガキが若干看取れる。断面三角形の高台が貼り付けられている。推定口径15.4㎝、器高4.8㎝、高台径4.6㎝を測る。

64は瓦器椀の底部である。見込みには平行線状のミガキが若干みられる。断面三角形の高台が貼り付けられている。推定高台径５㎝を測る。

65は瓦器椀の底部である。見込みには雑なミガキがみられる。断面四角形の低い高台が貼り付けられている。推定高台径4.1㎝を測る。

（４）ＳＫ７（第37図）

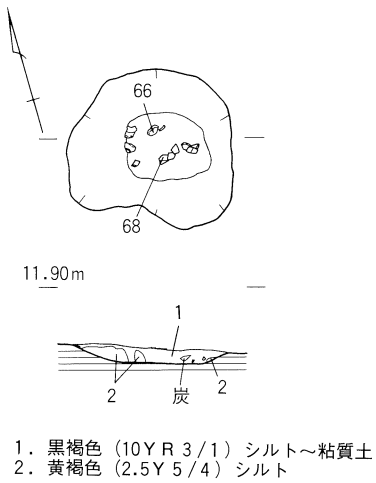
Ｎ13Ｗ２において、ＳＢ１のＰ５の南側で検出した。南北長約80㎝、東西長約85㎝、深さ約８㎝を測り、平面形はやや馬蹄形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘質土を主にしている。土坑からは、土師器杯・小皿片、瓦器椀・小皿片、土師質鍋片などを出土している。

出土遺物（第38図）

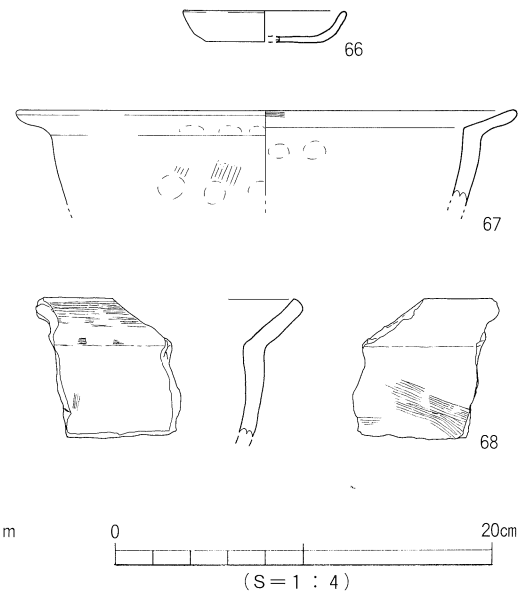
66は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径8.6㎝、器高1.6㎝、底径６㎝を測る。

67は土師質の鍋の口縁部である。内面には横ハケ、外面には縦ハケが施されている。推定口径26.4㎝を測る。

68は土師質の鍋の口縁部である。内外面に横ハケが施されている。



第37図　ＳＫ７測量図



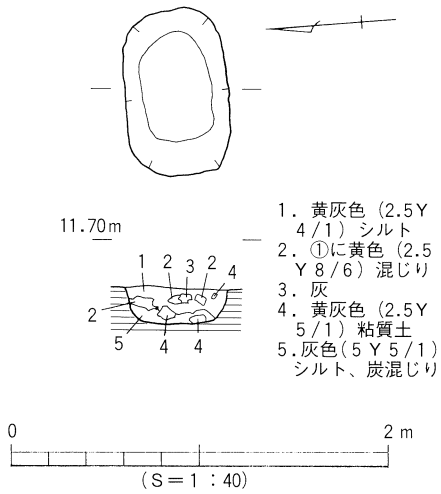
第38図　ＳＫ７出土遺物実測図

（5）ＳＫ１５（第39図）

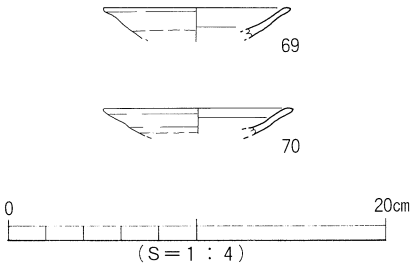
Ｎ14Ｗ５において検出した。長軸約90㎝、短軸55㎝、深さ20㎝を測り、平面形は隅丸長方形を呈している。埋土は黄灰色（2.5Ｙ3/1）シルトが上部、灰色（5Ｙ5/1）シルトが下部をしめる。土坑内からは、土師器杯・小皿片、瓦器椀片、土師質鍋片、白磁碗Ｖまたは Ⅷ類の口縁部片１点などが出土している。

出土遺物（第40図）

69・70は白磁皿Ⅲ－１類の口縁部である。いずれも見込みの釉をカキ取っている。69は推定口径9.8㎝を測る。70は推定口径10㎝を測る。



第39図　ＳＫ15測量図



第40図　ＳＫ15出土遺物実測図

6　溝状遺構

調査区において溝状遺構25条を検出した。以下、主要なものについて記す。

（1）ＳＤ１（第41図）

Ｎ12～14Ｗ３～７において「Ｔ」字状に検出した。南北長約17.5ｍ、東西長約22.2ｍ、幅約90㎝、深さ約10～20㎝を測り、断面形はレンズ状を呈している。また、ＳＤ５・６・15・16を切って検出している。Ｎ14Ｗ５の地点で南へ約２ｍ分延びている。このＳＤ１は、おそらく調査区内の掘立柱建物に付随する区画溝と思われる。

南側の南北方向の埋土からは、土師器杯・小皿・椀片、瓦器椀・小皿片、土師質鍋片、白磁碗Ⅷ－２類？の口縁部片１点、白磁碗Ⅳ類の体部片１点、白磁碗の体部片５点、龍泉窯系青磁碗の底部片１点、白磁碗ⅤまたはⅧ類の口縁部片１点、白磁碗Ⅷ類の底部片１点、白磁碗Ⅷ－２類の口縁部片１点、白磁碗の体部片７点などが出土している。

北側の「Ｔ」字状の埋土からは、土師器杯・小皿・椀片、瓦器椀・小皿片、土師質鍋・竈・釜片、白磁碗Ⅳ類の体部片１点、白磁碗の体部片６点などが出土している。

出土遺物（第43・44図）

－南側－（第43図）

71は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径８㎝、器高1.5㎝を測る。

72は瓦器椀である。内面に横方向のミガキが２本施されている。推定口径14.8㎝を測る。

73は瓦器椀である。内面に横方向のミガキが施されている。粘土紐状の高台が貼り付けられている。推定口径14㎝を測る。

74は瓦器椀である。内面には横方向のミガキ、見込みには平行線状のミガキが施されている。断面四角形の低い高台が貼り付けられている。高台径3.5㎝を測る。

75は瓦器小皿である。推定口径９㎝を測る。

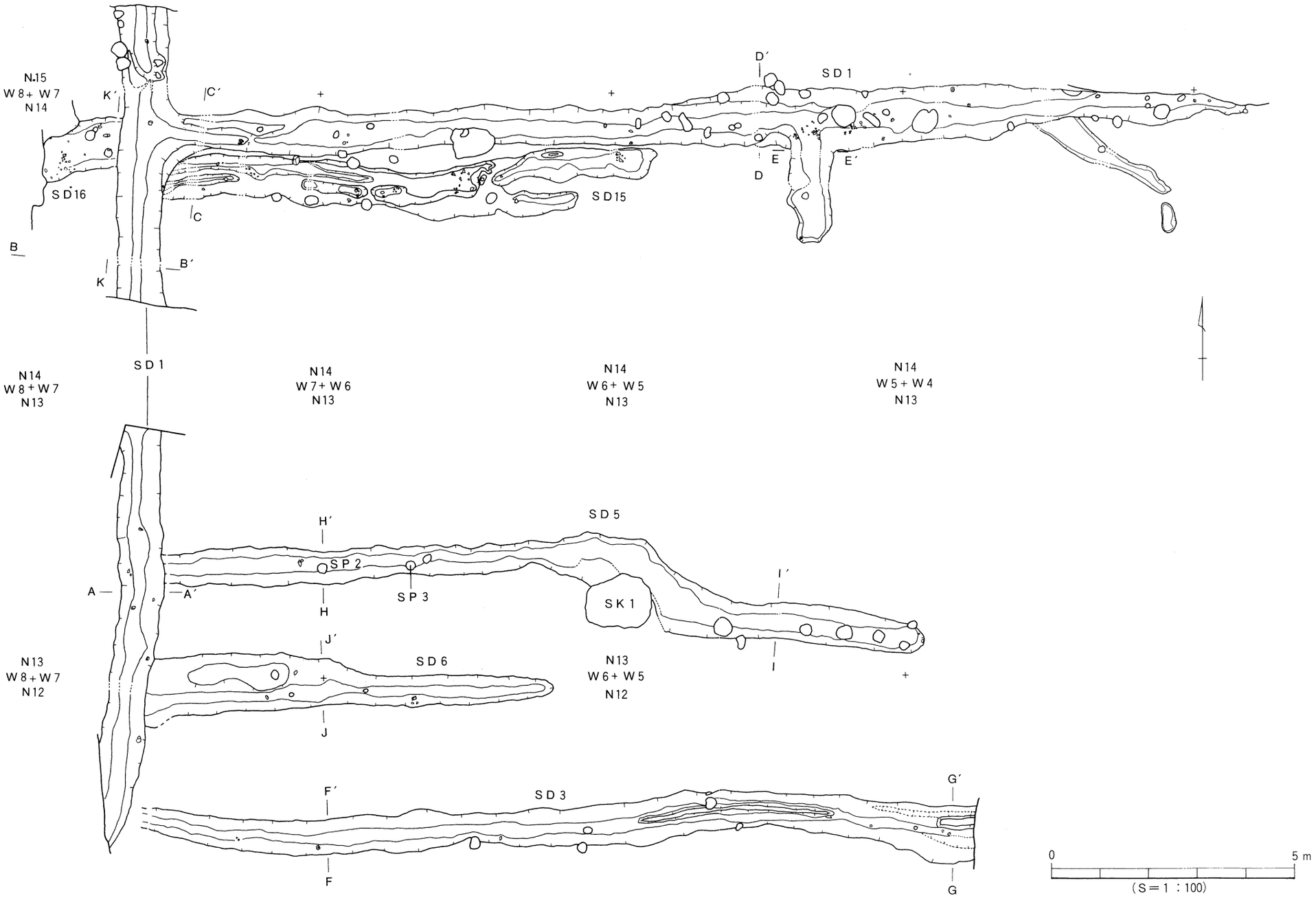
76は土師質の鍋である。推定口径36㎝を測る。

77は須恵器コネ鉢底部である。底部の切り離しは回転糸切りで、推定底径８㎝を測る。東播系と考えられる。

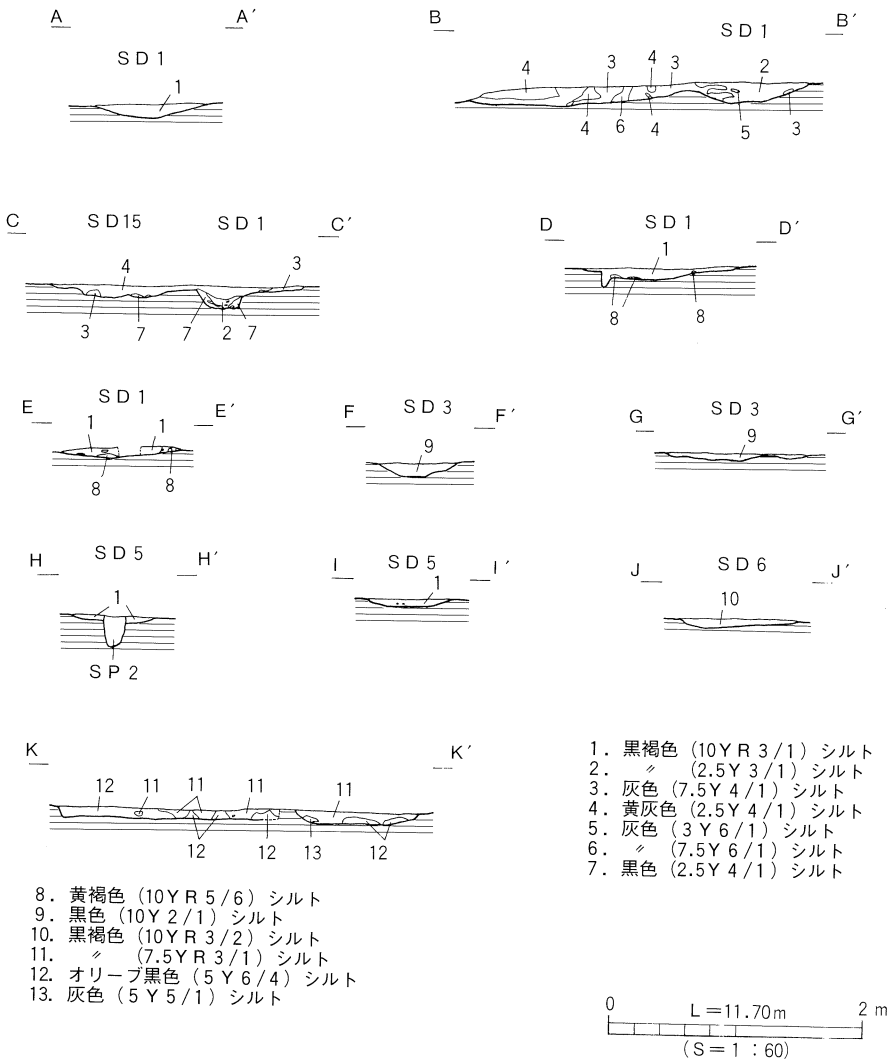
78は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。

79は白磁碗Ⅴ－４類の口縁部である。推定口径17㎝を測る。

80は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２ｂ類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。



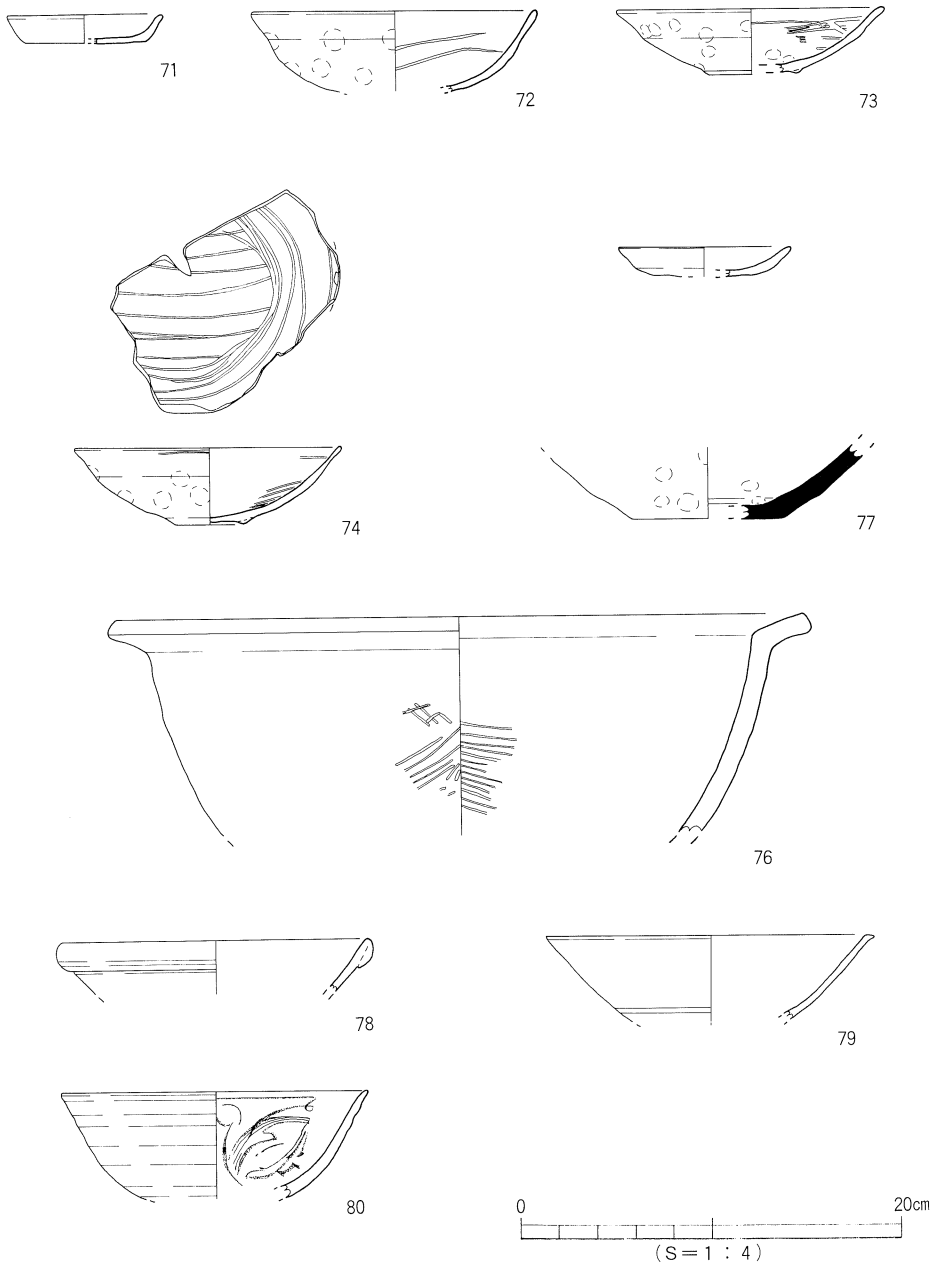
第41図　ＳＤ１・３・５・６・15・16測量図



1．黒褐色（10YR 3/1）シルト
2．〃（2.5Y 3/1）シルト
3．灰色（7.5Y 4/1）シルト
4．黄灰色（2.5Y 4/1）シルト
5．灰色（3Y 6/1）シルト
6．〃（7.5Y 6/1）シルト
7．黒色（2.5Y 4/1）シルト
8．黄褐色（10YR 5/6）シルト
9．黒色（10Y 2/1）シルト
10．黒褐色（10YR 3/2）シルト
11．〃（7.5YR 3/1）シルト
12．オリーブ黒色（5Y 6/4）シルト
13．灰色（5Y 5/1）シルト

0　L＝11.70m　2 m
（S＝1：60）

第42図　SD1・3・5・6・15・16土層図



第43図　ＳＤ１出土遺物実測図 (1)

－北側－（第44図）

81は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径９㎝、器高1.7㎝、底径5.2㎝を測る。

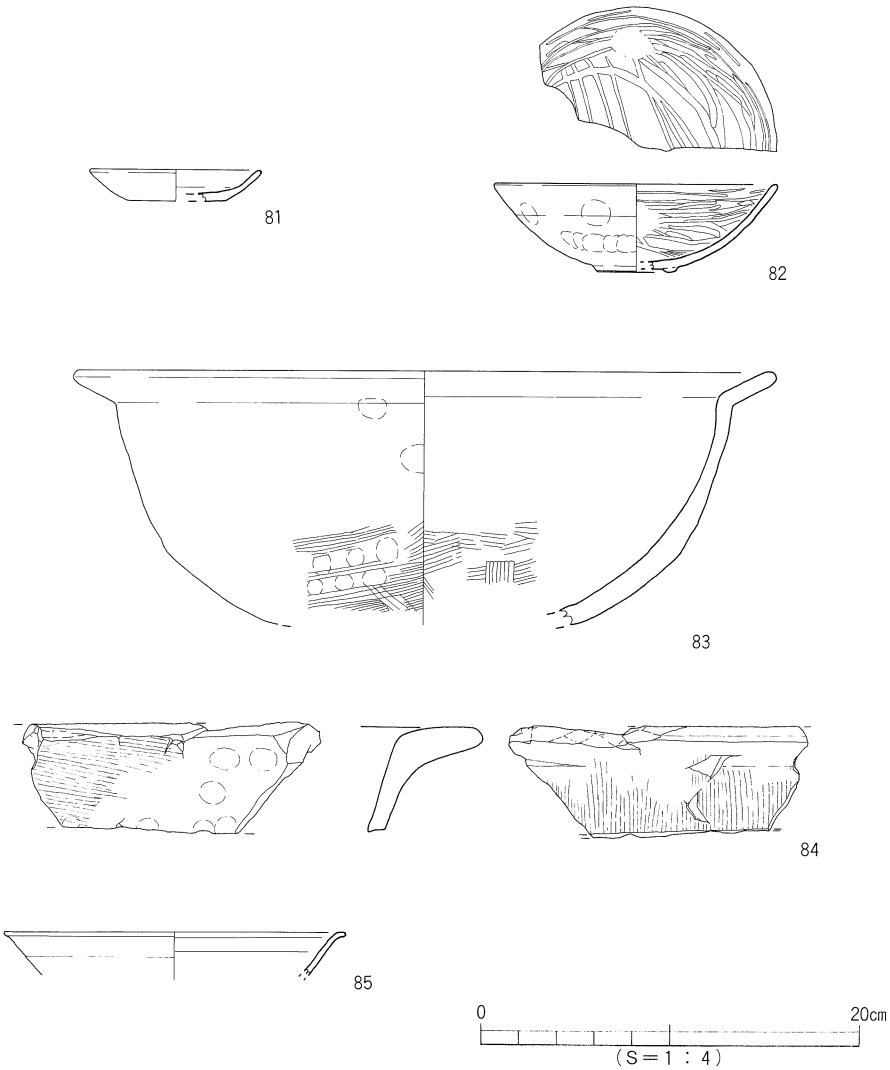
82は瓦器椀である。内面に横方向のミガキ、見込みには平行線状のミガキが施されている。

断面四角形の高台が貼り付けられている。推定口径14.8㎝、器高4.7㎝、高台径4.2㎝を測る。

83は土師質の鍋である。内面は横・縦ハケ、外面は斜め方向のハケ目が施されている。推定口径36.7㎝を測る。

84は土師質の置き竈の焚き口上部である。内面は横ハケ、外面は縦ハケが施されている。

85は白磁碗Ⅴまたは㈧類の口縁部である。推定口径19㎝を測る。



第44図　ＳＤ１出土遺物実測図 (2)

（2） ＳＤ２ （第45図）

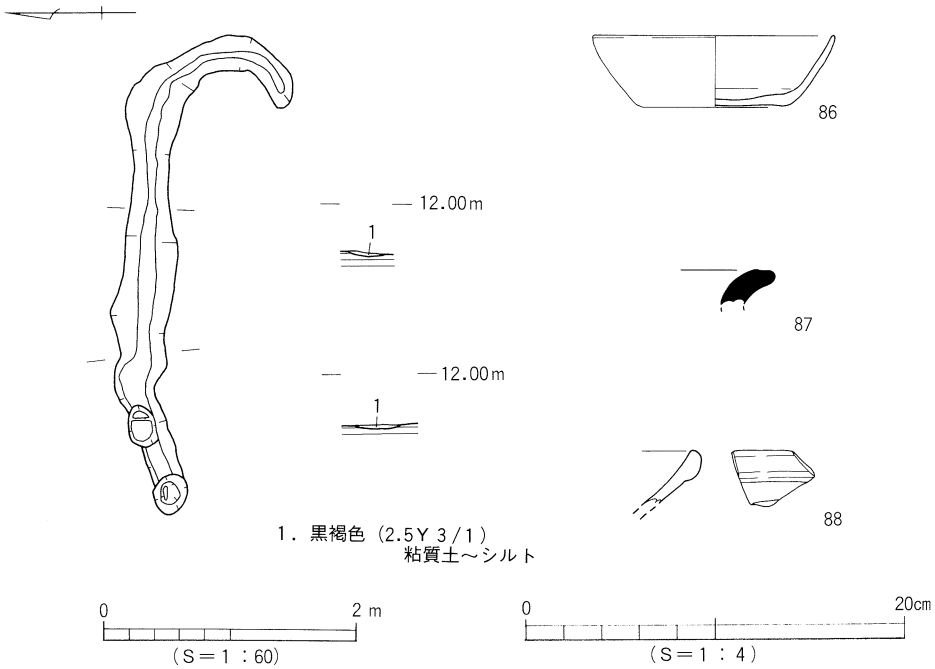
Ｎ12・13Ｗ３・４において検出した。東側は「Ｕ」字状に南へ湾曲している。検出長約4.5ｍ、幅約25～40㎝、深さ４㎝を測り、断面形はレンズ状を呈している。溝埋土からは、土師器杯・小皿片、瓦器椀・小皿片などを出土している。

出土遺物 （第46図）

86は土師器杯でほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。口径12.6㎝、器高3.7㎝、底径7.6㎝を測る。

87は須恵器甕の口縁部で、おそらく東播系と思われる。

88は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。



第45図　ＳＤ２測量図　　第46図　ＳＤ２出土遺物実測図

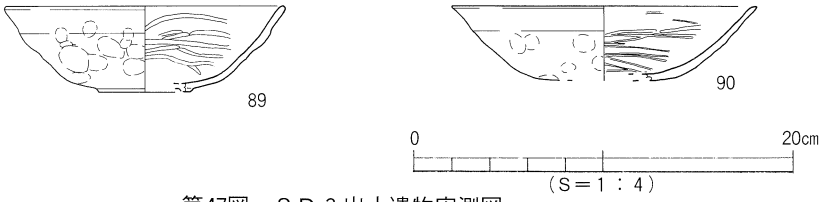
（3） ＳＤ３ （第41図）

Ｎ12Ｗ４～７において検出した。検出長約17.1ｍ、幅約0.4～1.1ｍ、深さ約10㎝を測り、断面形はレンズ状を呈している。溝の東寄りの底には若干の高まりがある。溝埋土からは、土師器杯・小皿・椀片、瓦器椀・小皿片、土師質鍋片、同安窯系青磁碗Ｉ－１ｂ類の体部片１点などを出土している。

出土遺物（第47図）

89は瓦器椀である。内面には横方向のミガキが施され、断面四角形の高台が貼り付けられている。推定口径14.7㎝、器高4.5㎝、高台径５㎝を測る。

90は瓦器椀である。二次焼成を受けているため全体に灰白色（10ＹＲ1/1）を呈している。内面には横方向のミガキが施されている。推定口径16㎝を測る。



第47図　ＳＤ３出土遺物実測図

（４）ＳＤ４（第48図）

Ｎ13Ｗ４・５において検出した。検出長約7.8ｍ、幅約30～50㎝、深さ約８㎝を測り、断面形はレンズ状を呈している。溝埋土からは、土師器小皿片、瓦器椀・小皿片、土師質鍋片、白磁皿Ⅳ－２類の口縁部片１点などを出土している。

出土遺物（第49図）

91は土師器杯である。全体にやや磨滅しているが底面には回転糸切りの痕跡がみられる。口径14.4㎝、器高3.5㎝、底径７㎝を測る。

92は土師器小皿でほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。口径９㎝、器高1.7㎝、底径６㎝を測る。

93は土師器小皿でほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。口径8.5㎝、器高1.2㎝、底径5.6㎝を測る。

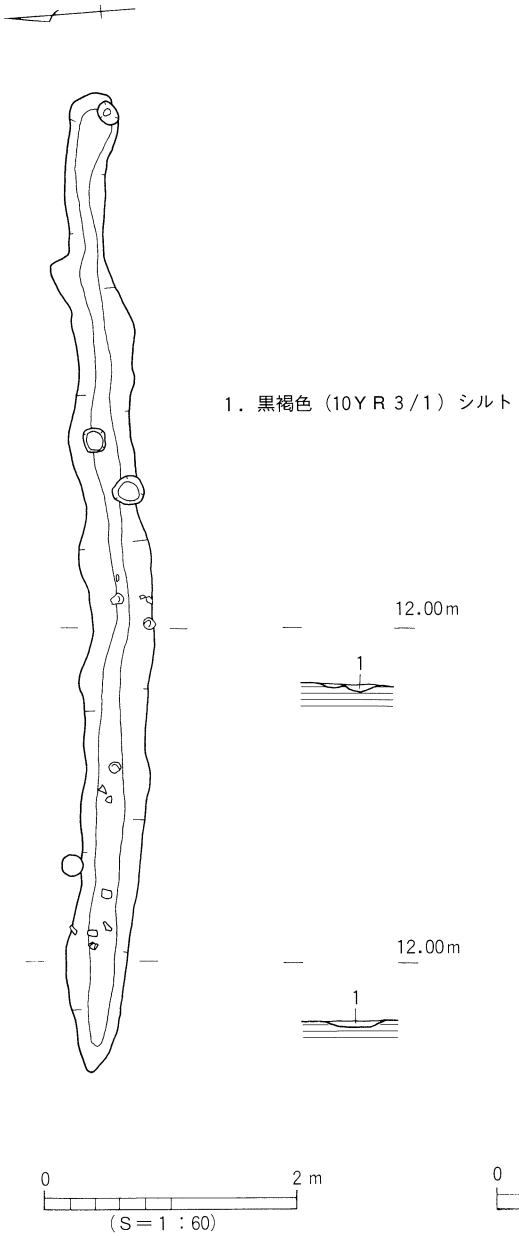
94は円柱状の底部をなす土師器杯である。内底面が抉れている。推定底径７㎝を測る。

95は瓦器椀の口縁部である。内面には横方向のミガキが施されている。推定口径15.8㎝を測る。

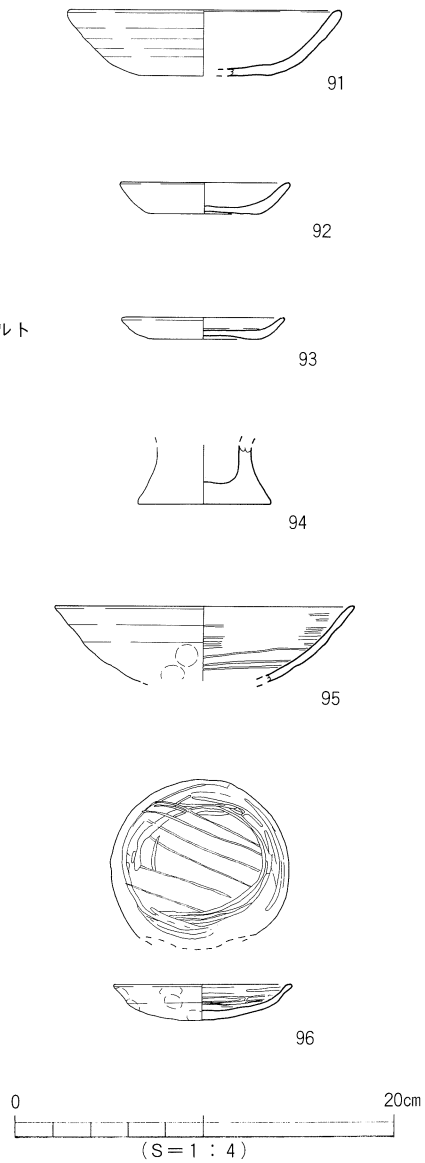
96は瓦器小皿の完形品である。内面には横方向のミガキ、見込みには平行線のミガキが施されている。口径9.4㎝、器高1.9㎝を測る。

（５）ＳＤ５（第41図）

Ｎ13Ｗ４～７において検出した。検出長約10ｍ、幅約35～60㎝、深さ約８㎝を測り、断面形はレンズ状を呈している。ＳＫ１に切られている部分から屈曲している。溝埋土からは、



第48図　ＳＤ４測量図

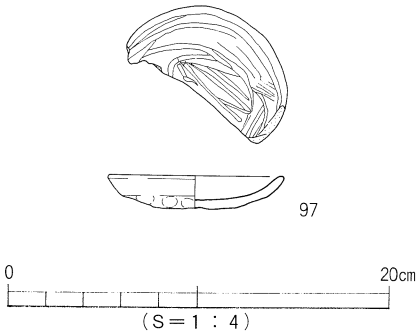


第49図　ＳＤ４出土遺物実測図

土師器小皿片、瓦器椀・小皿片などを出土している。

出土遺物（第50図）

97は瓦器小皿である。内面には幅広い横方向のミガキが施されている。口径9.1㎝、器高1.8㎝を測る。



第50図　ＳＤ５出土遺物実測図

（6）ＳＤ７（第51図）

Ｎ13Ｗ２～５において検出し、ＳＢ１の北側にありＳＢ４に切られている。検出長約15.5ｍ、幅約0.8～1.5ｍ、深さ約６㎝を測り、断面形はレンズ状を呈している。溝の中央あたりにおいて一段と幅が狭くなっている。溝の埋土からは、土師器杯・小皿・椀片、瓦器椀・小皿片、土師質鍋片、白磁碗の体部片１点、白磁碗Ⅳ類の体部片１点などを出土している。

出土遺物（第52・53図）

98は土師器杯である。全体に磨滅しているため底部の切り離し技法は不明である。推定口径15㎝、器高4.6㎝、底径7.1㎝を測る。

99土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径15㎝、器高3.7㎝、底径8.1㎝を測る。

100は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径15.4㎝、器高3.6㎝、底径7.6㎝を測る。

101は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径14.2㎝、器高2.7㎝、底径7.6㎝を測る。

102は円柱状の高台を呈する土師器杯の高台部である。外底面には回転糸切りの痕跡がみられる。切り離し後に高台内部を抉り取り中空に成形したものと思われる。推定高台径5.5㎝を測る。

103は円柱状の高台を呈する土師器杯の高台部である。高台径5.3㎝を測る。

104は土師器小皿である。底部は円盤高台状を呈している。全体に磨滅しているが切り離しは、回転糸切りと思われる。推定口径8.2㎝、器高1.5㎝、底径５㎝を測る。全体に灰白色（10ＹＲ8/2）を呈している。

105は土師器小皿である。全体に磨滅しているため底部の切り離し方法は不明である。推

定口径10㎝、器高1.8㎝、底径6.2㎝を測る。

106は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径8.8㎝、器高1.8㎝、底径6.4㎝を測る。

107は土師器小皿である。全体にやや磨滅しているが、底面に回転糸切りの痕跡がかすかにみられる。推定口径８㎝、器高1.7㎝、底径４㎝を測る。

108は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径９㎝、器高1.4㎝、底径６㎝を測る。

109は土師器小皿でほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径8.7㎝、器高1.6㎝、底径5.8㎝を測る。

110は瓦器椀である。全体に磨滅している。推定口径16.5㎝を測る。

111は瓦器椀である。内面には横方向のミガキが施されている。推定口径16㎝を測る。

112は瓦器椀の底部である。見込みには格子状のミガキが施され、断面三角形の高台が貼り付けられている。高台径4.8㎝を測る。

113は瓦器椀の底部である。見込みには格子状のミガキが施され、断面三角形の高台が貼り付けられている。高台径5.6㎝を測る。

114は瓦器椀の底部である。見込みにはやや波状のミガキが施され、断面四角形の高台が貼り付けられている。高台径5.9㎝を測る。

115は瓦器小皿の完形品である。内面にミガキが施されている。口径8.8㎝、器高2.2㎝を測る。

116は瓦器小皿で、内面にはコテあての痕跡がみられる。口径9.3㎝、器高2.3㎝を測る。

117は瓦器小皿である。口径8.8㎝、器高２㎝を測る。

118は瓦器小皿のほぼ完形品である。口径9.4㎝、器高２㎝を測る。

119は瓦器小皿である。口径9.6㎝、器高1.9㎝を測る。

120は瓦器小皿である。口径９㎝、器高1.7㎝を測る。

121は土師質鍋である。内面は横ハケ、外面には縦ハケが施されている。推定口径35.8㎝を測る。

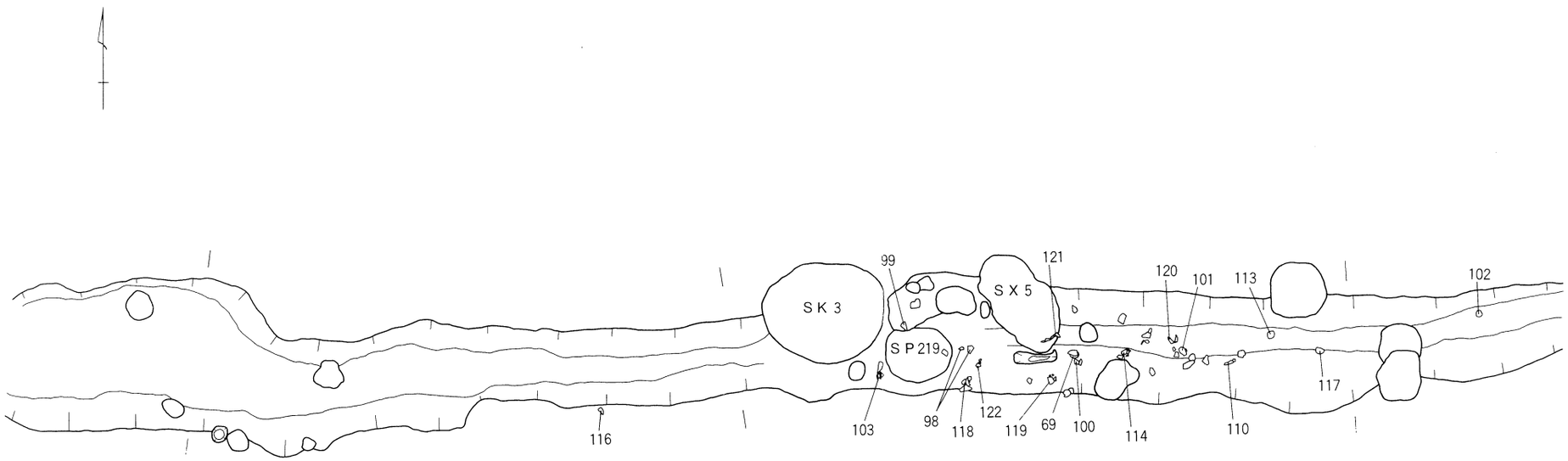
122は土師質の土器で、片口（注ぎ口）部をもつためコネ鉢と考えられる。

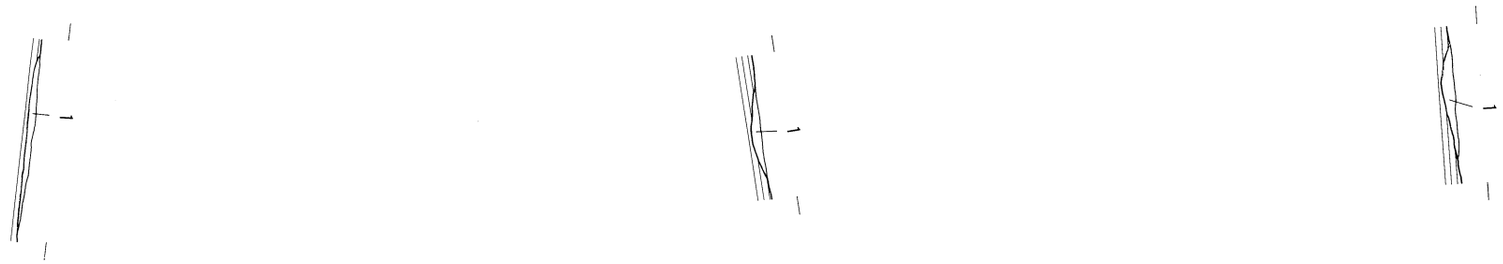
123は須恵器甕の口縁部と思われる。体部には荒い平行叩きが施されている。推定口径26㎝を測る。

124は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。

125は白磁碗Ⅳ－１ａ類の底部である。高台部は無釉である。推定底径6.2㎝を測る。

126は白磁皿Ⅵ－１ａ類である。内面と体部外面の一部に釉が施されている。推定口径10.2㎝、底径2.8㎝、器高2.8㎝を測る。N13W11から出土している破片と接合している。

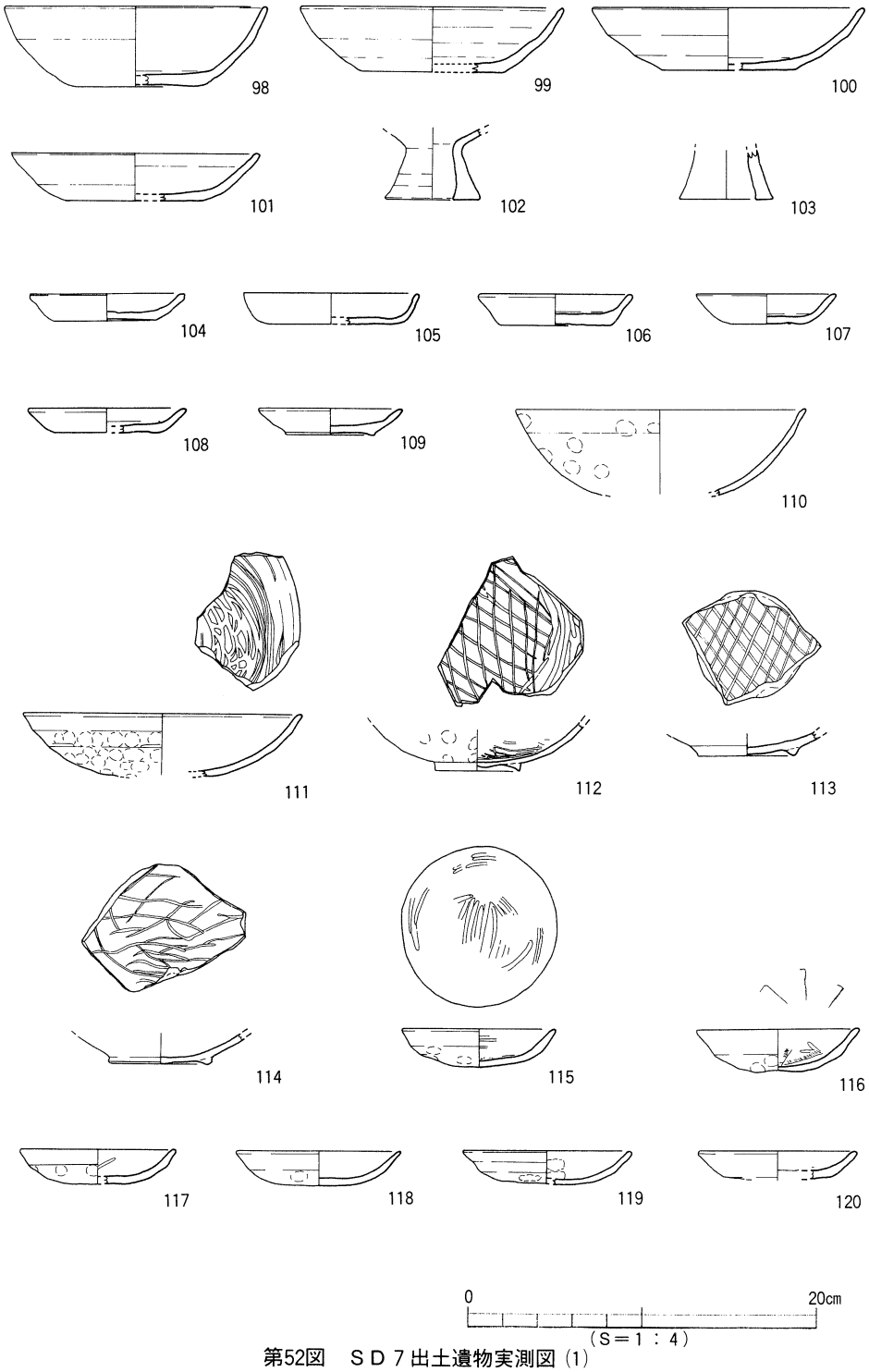




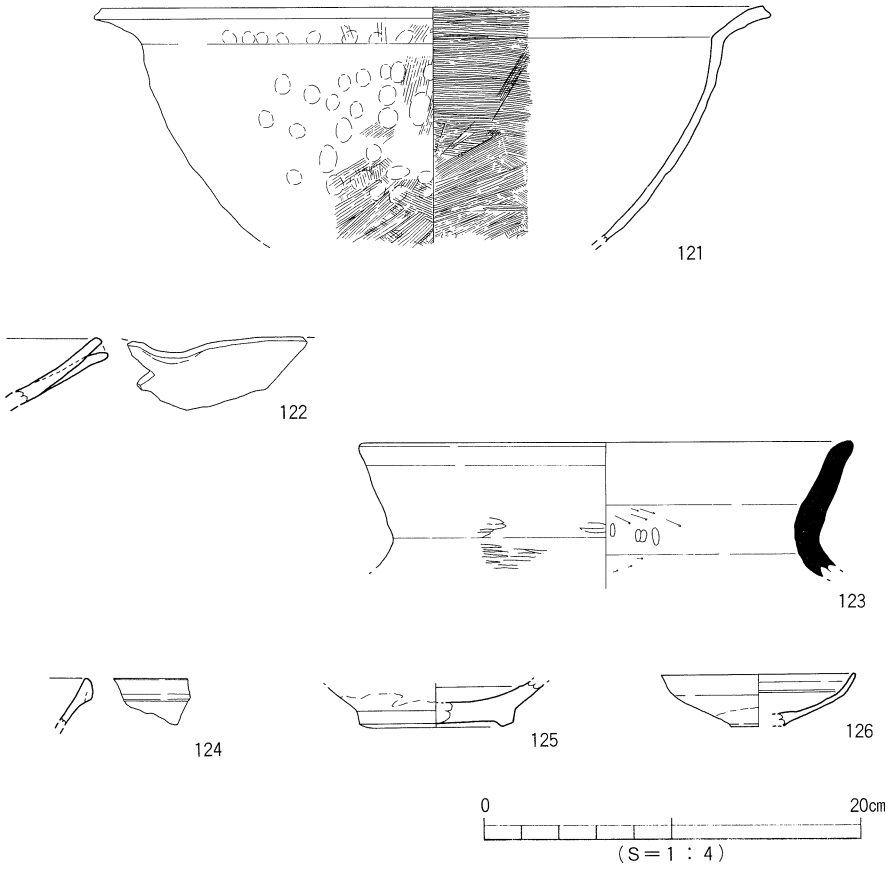
1．黒褐色（10YR 3/1）シルト

0　L＝11.80m　20m
（S＝1：60）

第51図　SD 7 測量図



第52図　ＳＤ７出土遺物実測図（1）



第53図　ＳＤ７出土遺物実測図 (2)

(7) ＳＤ８・18 (第54図)

N13・14W３～５において検出した。ＳＤ８がＳＤ18を切っている。ＳＤ８は、検出長約2.8m、幅約50cm、深さ約８cmを測り、断面形はレンズ状を呈している。ＳＤ18は、検出長約10.6m、幅約40～60cm、深さ約８cmを測り、断面形はレンズ状を呈している。いずれの溝埋土からは、土師器小皿片、瓦器椀片を出土している。

出土遺物 (第55図)

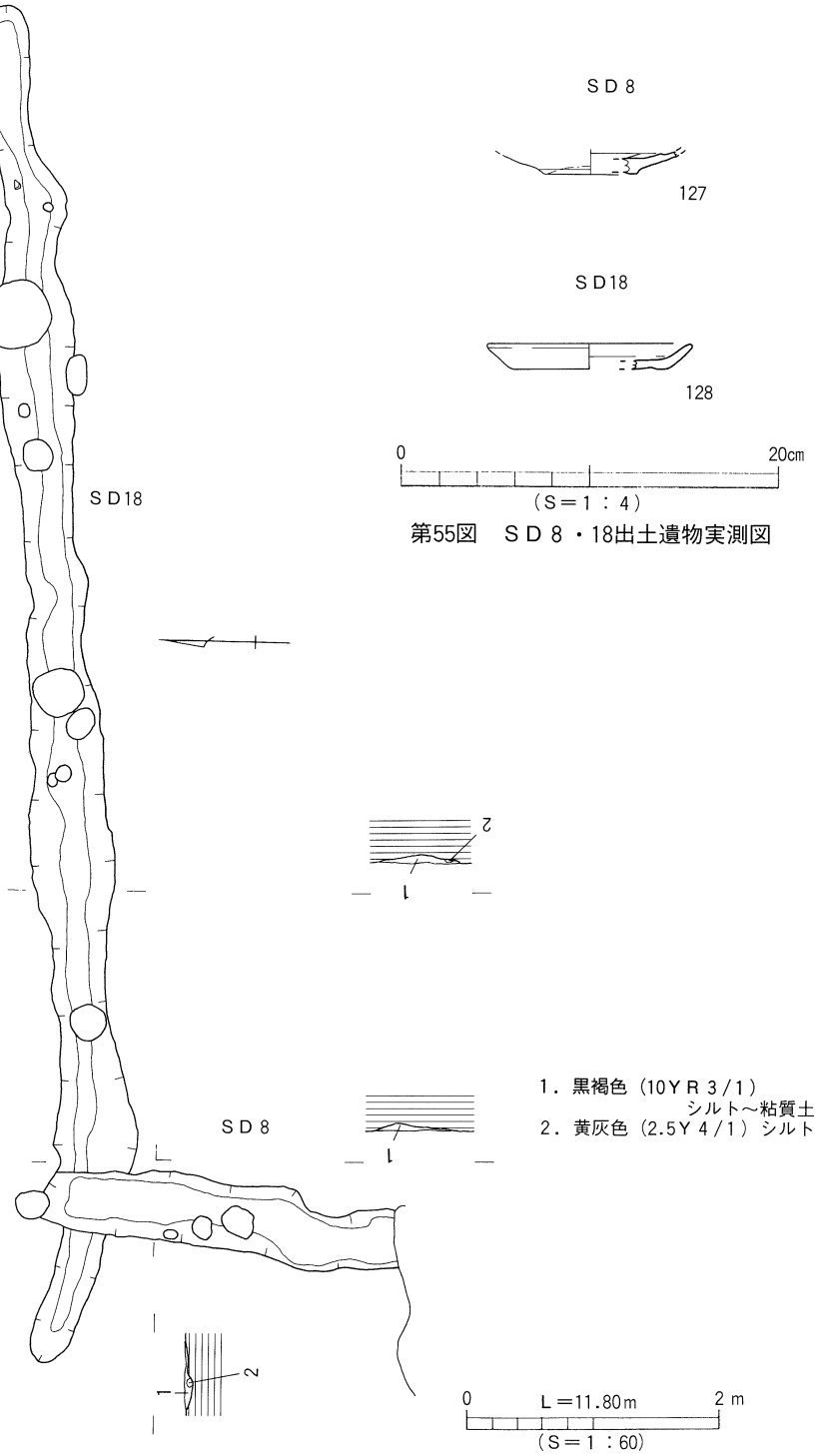
－ＳＤ８－

127は白磁皿Ⅵ－２類の底部である。内面には沈線が巡り、底部近くにまで施釉されている。底部は削り出しと思われる。推定底径５cmを測る。

－ＳＤ18－

128は土師器小皿である。全体に磨滅しているため底部の切り離しは不明である。口径10.8cm、器高1.4cm、底径８cmを測る。

第55図　ＳＤ８・18出土遺物実測図



第54図　ＳＤ８・18測量図

（8）ＳＤ１５（第41図）

Ｎ14Ｗ５～７において検出し、ＳＤ１に切られている。検出長約10.2ｍ、幅約0.7～１ｍ、深さ約10㎝を測り、断面形は逆台形状を呈している。中央あたりでやや屈曲し、東側で二股に分かれている。溝埋土からは、土師器杯・小皿・椀片、瓦器椀片、白磁碗の体部片２点、白磁碗Ⅳ類の口縁部片２点などを出土している。

出土遺物（第56図）

129は土師器椀の底部である。全体にやや磨滅しているが、底面に回転糸切りと板状圧痕がみられ、断面三角形の高台が貼り付けられている。高台径6.3㎝を測る。

130は土師器杯の底部である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。底径7.4㎝を測る。

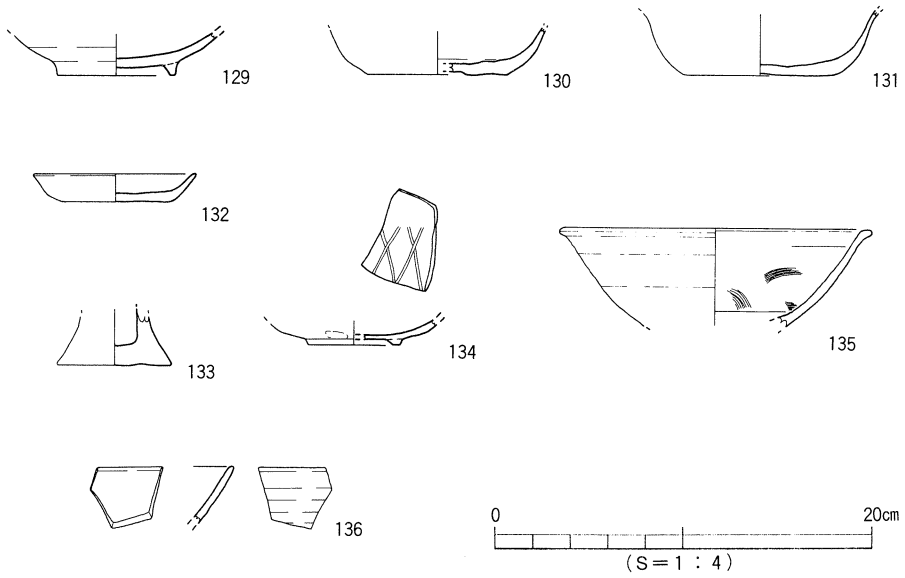
131は土師器杯の底部である。全体に磨滅しているが、底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。底径８㎝を測る。

132は土師器小皿の完形品である。全体にやや磨滅しているが、底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。口径8.6㎝、器高1.5㎝、底径5.7㎝を測る。

133は円柱状の高台を呈する土師器杯である。内底面は抉られている。底径６㎝を測る。

134は瓦器椀の底部である。断面四角形の高台が貼り付けられ、内面見込みには格子状のミガキが施されている。全体に灰白色（5Y8/1）を呈する。推定高台径4.8㎝を測る。

135は白磁碗Ｖ－４ｂ類である。内面にはクシ目の文様がつけられている。推定口径16.6㎝を測る。



第56図　ＳＤ15出土遺物実測図

136は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－１類の口縁部である。

（9）ＳＤ１６（第41図）

Ｎ14Ｗ７において検出し、ＳＤ１に切られている。検出長約1.5ｍ、幅約１ｍ、深さ約10㎝を測り、断面形はレンズ状を呈している。溝埋土からは、土師器杯・小皿・椀片、瓦器椀・小皿片、白磁碗Ⅷ類の口縁部片１点、白磁碗Ⅳ類の口縁部片１点などを出土している。

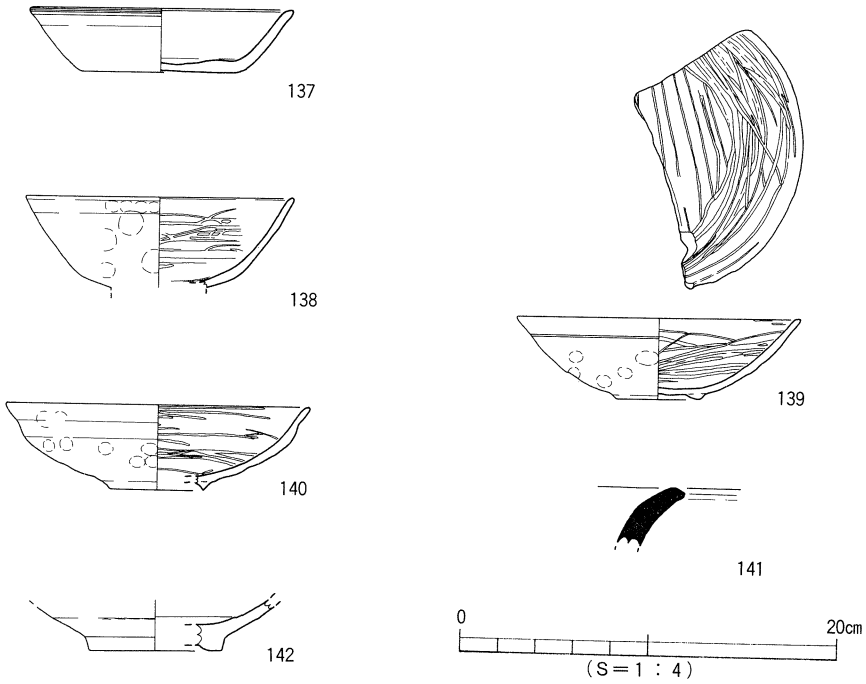
出土遺物（第57図）

137は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径13.8㎝、器高3.4㎝、底径８㎝を測る。

138・139・140は瓦器椀である。138は内面に幅広い横方向のミガキが施され、推定口径14.1㎝を測る。139は内面には横方向のミガキ、見込みには平行線状のミガキが施され、断面四角形の低い高台が貼り付けられている。推定口径15㎝、器高4.3㎝、高台径4.6㎝を測る。140は内面に横方向のミガキ、見込みにはおそらく螺旋状のミガキが施され、断面三角形の低い高台が貼り付けられている。推定口径16㎝、器高4.5㎝、高台径５㎝を測る。

141は須恵器甕の口縁部で、外反している。やや軟質の焼きである。

142は白磁碗Ⅳ－１ａ類の底部である。推定底径７㎝を測る。



第57図　ＳＤ16出土遺物実測図

7　柱穴状遺構

調査区において柱穴状遺構556基を検出した。以下、遺構から出土している遺物で実測できた主要な遺構について記す。

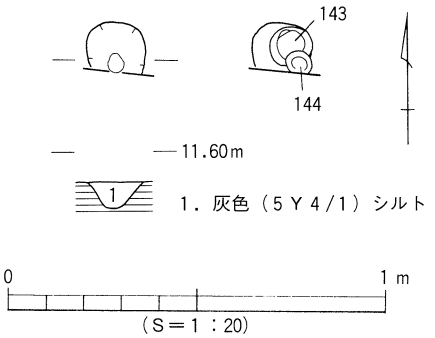
（1）ＳＰ１（第58図）

Ｎ13Ｗ６・７において検出した。長軸約0.15ｍ、短軸約0.13ｍ、深さ0.07ｍを測り、平面形は南側が調査区外ではあるが、ほぼ円形と思われる。埋土は灰色（5Ｙ4/1）シルトである。遺物には土師器杯・小皿が重なり合って出土している。他に土師質鍋などの破片も出土している。

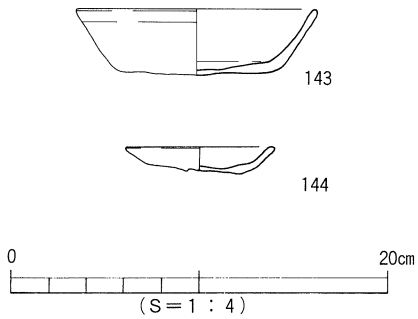
出土遺物（第59図）

143は土師器杯の完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径12.6㎝、器高3.5㎝、底径7.7㎝を測る。

144は土師器小皿の完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径7.8㎝、器高1.3㎝、底径５㎝を測る。



第58図　ＳＰ１測量図



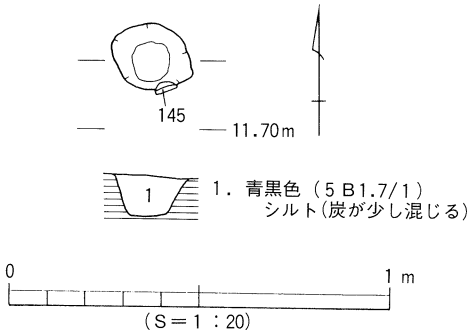
第59図　ＳＰ１出土遺物実測図

（2）ＳＰ３（第60図）

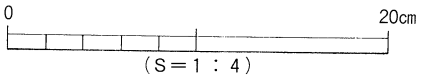
Ｎ13Ｗ６において検出した。長軸0.2ｍ、短軸0.18ｍ、深さ0.11ｍを測り、平面形はやや楕円形を呈している。埋土は青黒色（5Ｂ1.7/1）シルトである。遺物には土師器椀・杯・小皿、瓦器椀、土師質鍋などの破片を出土している。

出土遺物（第61図）

145は土師器杯の口縁部である。二次的焼成を受けているため灰白色（7.5ＹＲ8/1）を呈している。推定口径13㎝を測る。



第60図　ＳＰ３測量図



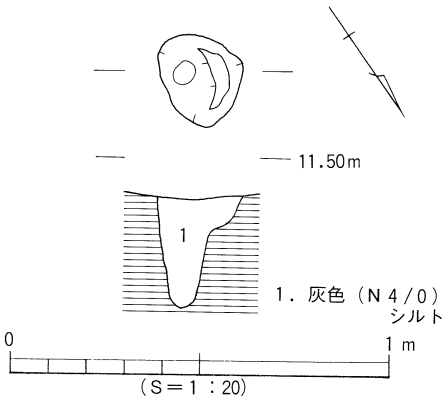
第61図　ＳＰ３出土遺物実測図

（3）ＳＰ４（第62図）

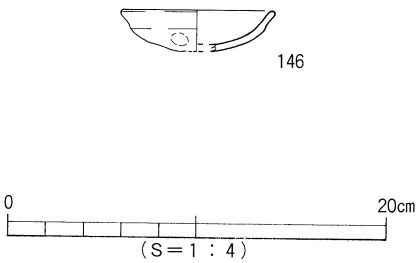
N13W６において検出した。長軸0.25ｍ、短軸0.21ｍ、深さ0.29ｍを測り、平面形はやや円形を呈している。埋土は灰色（N4/0）シルトである。遺物には土師器杯、瓦器小皿、土師質鍋などの破片を出土している。

出土遺物（第63図）

146は瓦器小皿である。二次的焼成を受けているため部分的ではあるが赤灰色（2.5ＹＲ5/1）を呈している。推定口径7.8㎝、器高2.2㎝を測る。底部外面には指頭痕がみられる。おそらく和泉型瓦器と思われる。



第62図　ＳＰ４測量図



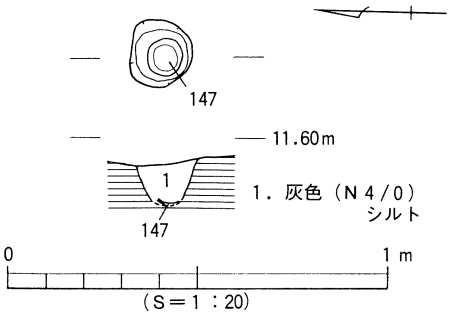
第63図　ＳＰ４出土遺物実測図

（4）ＳＰ２７（第64図）

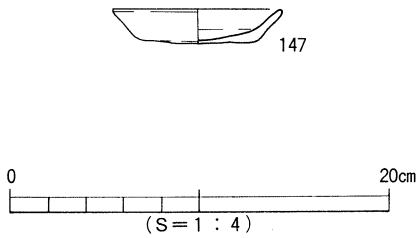
N13W４において検出した。長軸0.18ｍ、短軸0.17ｍ、深さ0.11ｍを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は灰色（N4/0）シルトである。遺構床面で土師器小皿１点を出土し、埋土からは瓦器椀などの破片も出土している。

出土遺物（第65図）

147は土師器小皿の完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径９㎝、器高1.8㎝、底径5.9㎝を測る。



第64図　ＳＰ27測量図



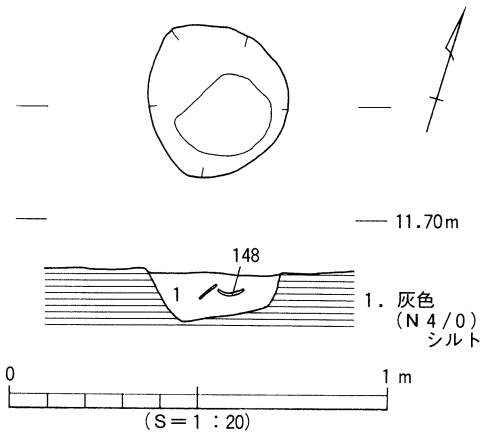
第65図　ＳＰ17出土遺物実測図

（５）ＳＰ４８（第66図）

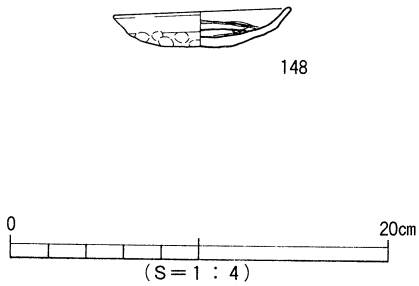
N13W５において検出した。長軸0.4ｍ、短軸0.37ｍ、深さ0.13ｍを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は灰色（N4/0）シルトである。遺物には土師器椀、瓦器椀・小皿などの破片を出土している。

出土遺物（第67図）

148は瓦器小皿の完形品である。内面にはミガキが施されている。口径9.4㎝、器高1.9㎝を測る。おそらく和泉型瓦器と思われる。



第66図　ＳＰ48測量図



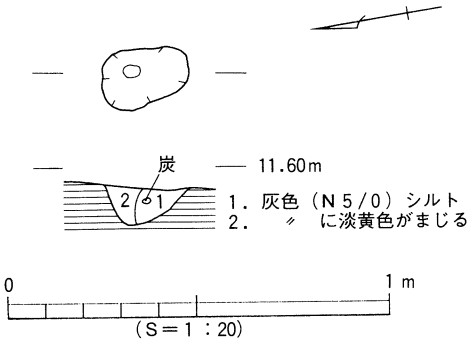
第67図　ＳＰ48出土遺物実測図

（6）ＳＰ５４（第68図）

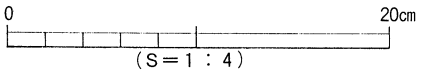
Ｎ12Ｗ５において検出した。長軸0.23ｍ、短軸0.16ｍ、深さ0.1ｍを測り、平面形はほぼ隅丸長方形を呈している。埋土は灰色（N5/0）シルトを主にする。遺物には土師器杯、瓦器椀、白磁皿Ⅳ－２類などの破片を出土している。

出土遺物（第69図）

149は瓦器椀の口縁部である。内面には平行線のミガキ、口縁内面には横方向のミガキが施されている。推定口径15.8㎝を測る。おそらく和泉型瓦器と思われる。



第68図　ＳＰ54測量図



第69図　ＳＰ54出土遺物実測図

（7）ＳＰ８２（第70図）

Ｎ12Ｗ５において検出した。長軸0.23ｍ、短軸0.21ｍ、深さ0.04ｍを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は灰色（N6/0）シルトである。遺物には土師器杯、瓦器椀などの破片を出土している。

出土遺物（第71図）

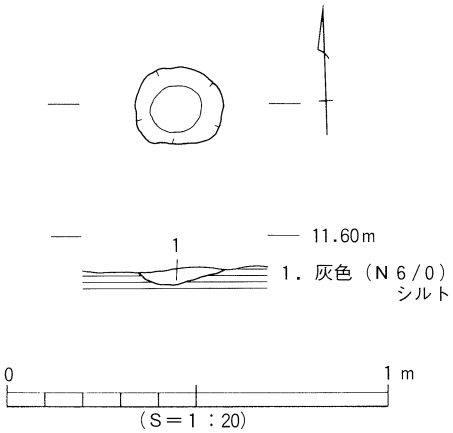
150は瓦器椀である。内面には螺旋状のミガキが施されている。断面四角形の高台が貼り付けられている。推定口径14.6㎝、器高4.3㎝、高台径4.6㎝を測る。おそらく和泉型瓦器と思われる。

（8）ＳＰ８５（第72図）

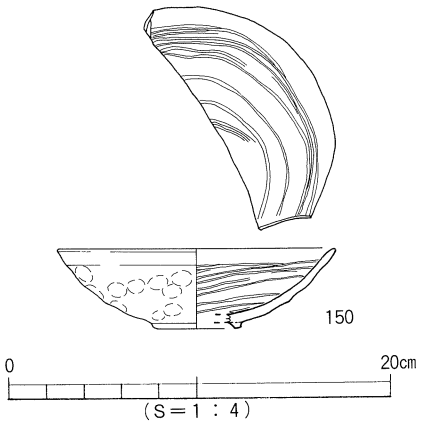
Ｎ12Ｗ５において検出した。長軸0.27ｍ、短軸0.19ｍ、深さ0.14ｍを測り、平面形は不整形を呈している。埋土は灰色（N5/0）シルトである。遺物には土師器杯、白磁碗などの破片を出土している。

出土遺物（第73図）

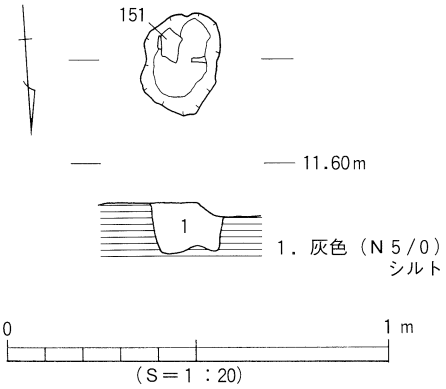
151は白磁碗Ⅴ－４ａ類である。外面には高台部近くまで釉がかかっている。推定口径16㎝を測る。



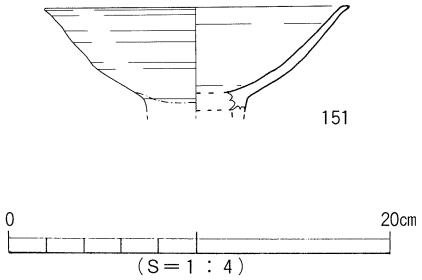
第70図　ＳＰ82測量図



第71図　ＳＰ82出土遺物実測図



第72図　ＳＰ85測量図



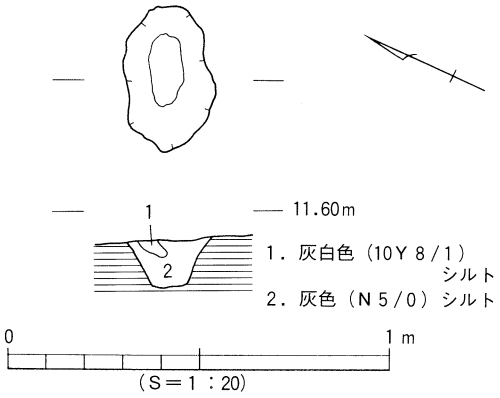
第73図　ＳＰ85出土遺物実測図

（9）ＳＰ９０（第74図）

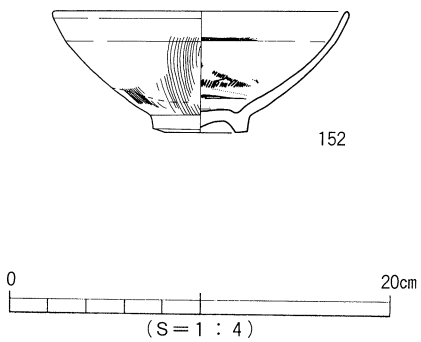
N12W４において検出した。長軸0.39ｍ、短軸0.23ｍ、深さ0.13ｍを測り、平面形は不整形を呈している。埋土は灰色（N5/0）シルトに一部灰白色（10ＹＲ8/1）シルトが混じっている。遺物には土師器、青磁碗などの破片を出土している。

出土遺物（第75図）

152は同安窯系青磁碗Ｉ－１ｂ類である。N11W３とN12W５から出土した破片と接合している。外面には櫛目、内面にはジグザク文様と片彫りが施されている。推定口径15.4㎝、器高6.4㎝、高台径５㎝を測る。



第74図　ＳＰ90測量図



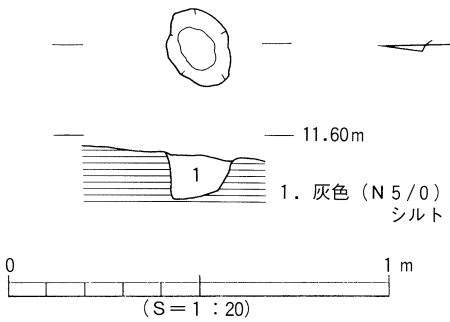
第75図　ＳＰ90出土遺物実測図

(10) ＳＰ９１（第76図）

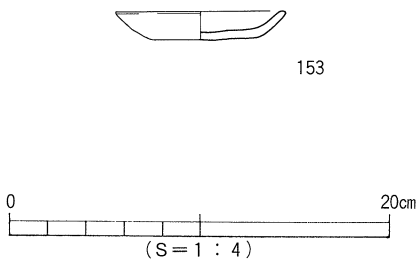
N12W４において検出した。長軸0.2m、短軸0.16m、深さ0.12mを測り、平面形は楕円形を呈している。埋土は灰色（N5/0）シルトである。遺物には土師器小皿、瓦器椀などの破片を出土している。

出土遺物（第77図）

153は土師器小皿の完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径8.9cm、器高1.5cm、底径5.7cmを測る。



第76図　ＳＰ91測量図



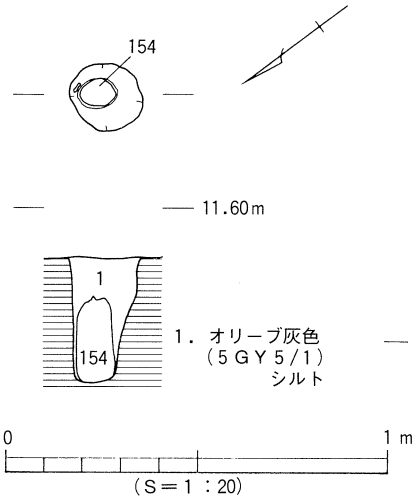
第77図　ＳＰ91出土遺物実測図

(11) ＳＰ１０２（第78図）

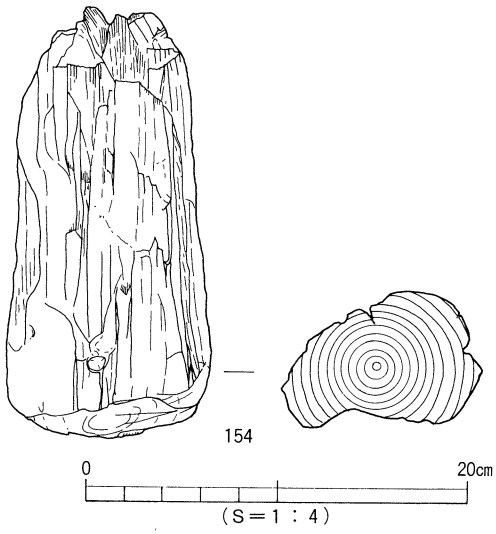
N12W４において検出した。長軸0.19m、短軸0.18m、深さ0.33mを測り、平面形は円形を呈している。埋土はオリーブ灰色（5GY5/1）シルトである。遺構内には柱材１点が遺存していた。

出土遺物（第79図）

154は柱材である。樹種は分析結果からマツ属のものである（分析編Ⅶ－７）。直径約10.5㎝、残存長23㎝を測る。



第78図　ＳＰ102測量図



第79図　ＳＰ102出土遺物実測図

(12) ＳＰ１３３（第80図）

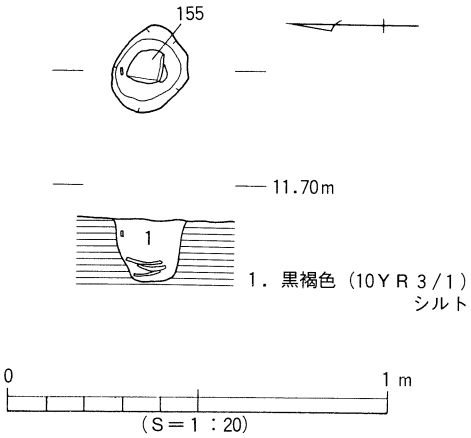
Ｎ13Ｗ４において検出した。長軸0.23ｍ、短軸0.2ｍ、深さ0.16ｍを測り、平面形はやや円形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトである。この柱穴からは瓦器椀１個体が出土している。出土状況は、四分割に割られ重ねられていた。そのことは、投棄行為または廃棄時の祭祀的行為が行われていたと考えられる。出土遺物には瓦器椀の他に、白磁皿Ⅳ類などの破片がある。

出土遺物（第81図）

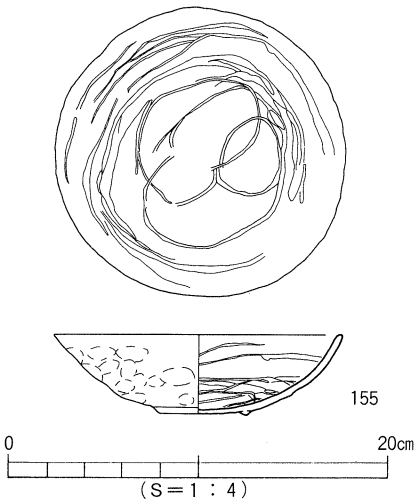
155は瓦器椀のほぼ完形品である。内面には横方向のミガキ、見込みには螺旋状のミガキが施されている。断面三角形の高台が貼り付けられている。口径15.2㎝、器高4.3㎝、高台径4.5㎝を測る。おそらく和泉型瓦器と思われる。

(13) ＳＰ１４８（第82図）

Ｎ12Ｗ４において検出した。長軸0.19ｍ、短軸0.18ｍ、深さ0.09ｍを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘土である。遺物には土師器杯・小皿、瓦器椀などの破片を出土している。



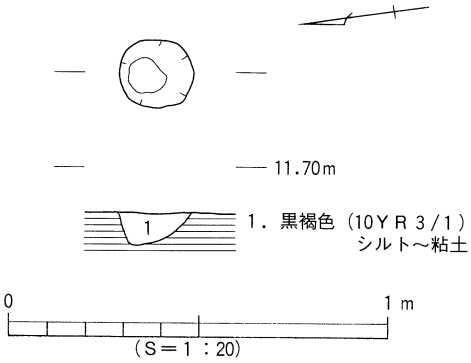
第80図　ＳＰ133測量図



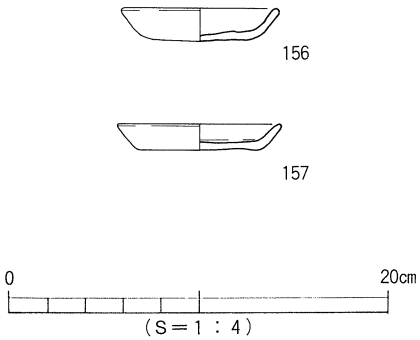
第81図　ＳＰ133出土遺物実測図

出土遺物（第83図）

156・157は土師器小皿である。ともに底部の切り離しは回転糸切りである。156は口径8.2cm、器高1.8cm、底径５cmを測る。157は口径8.6cm、器高1.4cm、底径6.2cmを測る。



第82図　ＳＰ148測量図



第83図　ＳＰ148出土遺物実測図

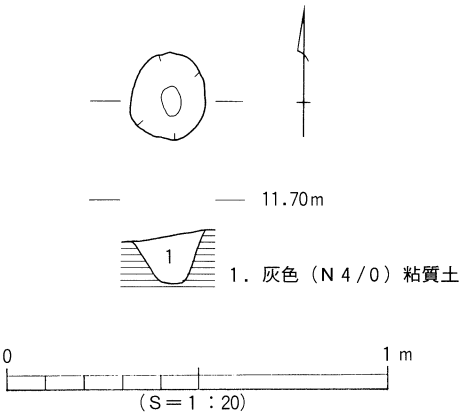
(14) ＳＰ１７０（第84図）

N12W３において検出した。長軸0.23m、短軸0.2m、深さ0.13mを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は灰色（N4/0）粘質土である。遺物には土師器杯・小皿、瓦器椀などの破片を出土している。

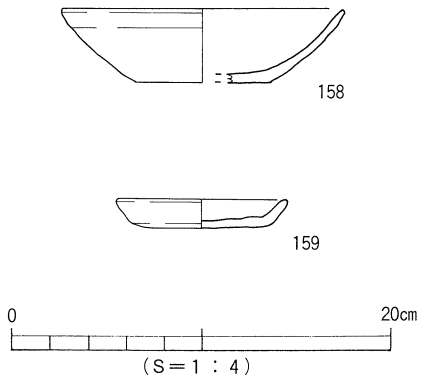
出土遺物（第85図）

158は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径14.7cm、器高3.9cm、底径７cmを測る。

159は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径９㎝、器高1.5㎝、底径６㎝を測る。



第84図　ＳＰ170測量図



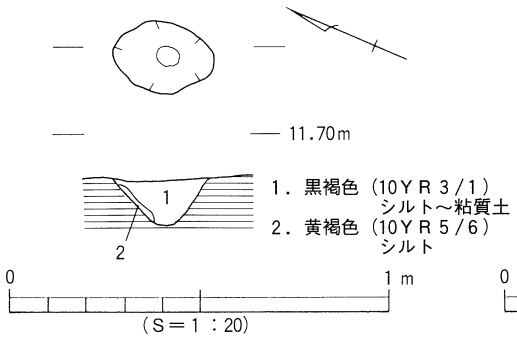
第85図　ＳＰ170出土遺物実測図

(15) ＳＰ１９１（第86図）

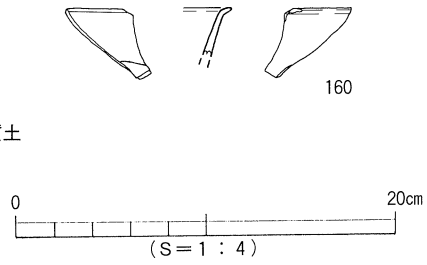
N12W２において検出した。長軸0.26ｍ、短軸0.19ｍ、深さ0.12ｍを測り、平面形は楕円形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘質土で一部に黄褐色（10ＹＲ5/6）シルトがみられる。遺物には土師器小皿、瓦器椀、白磁碗などの破片を出土している。

出土遺物（第87図）

160は白磁碗Ｖ－４ｂ類の口縁部である。



第86図　ＳＰ191測量図



第87図　ＳＰ191出土遺物実測図

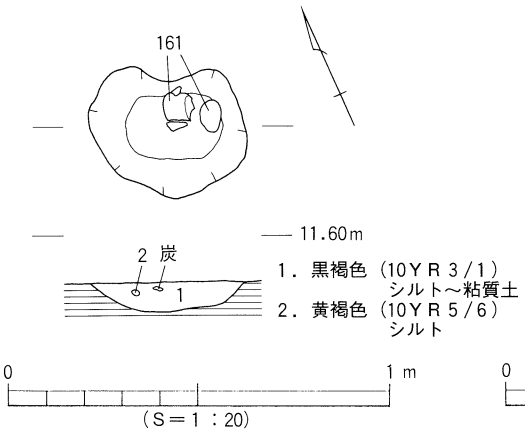
(16) ＳＰ２０３（第88図）

N12W２において検出した。長軸0.41ｍ、短軸0.31ｍ、深さ0.08ｍを測り、平面形は不整形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘質土でブロック状の黄褐色（10Ｙ

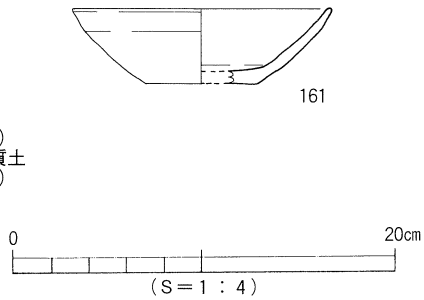
R5/6）シルトが混じっている。遺物には土師器杯を出土している。

出土遺物（第89図）

161は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径13.6㎝、器高４㎝、底径６㎝を測る。



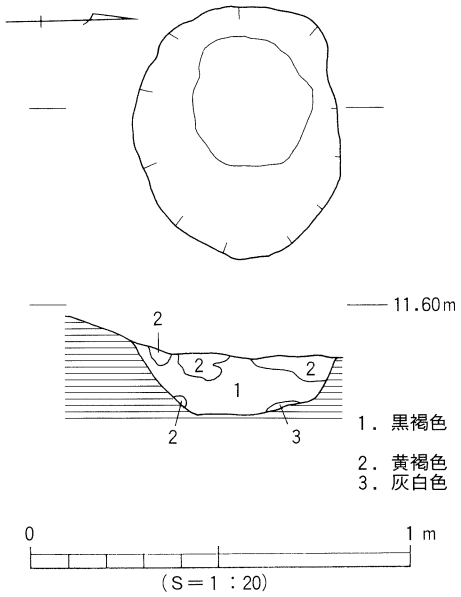
第88図　ＳＰ203測量図



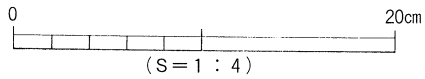
第89図　ＳＰ203出土遺物実測図

(17) ＳＰ２１９（第90図）

N13W３において検出した。長軸0.66ｍ、短軸0.54ｍ、深さ0.15ｍを測り、平面形はやや楕円形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘質土でブロック状の黄褐色（10



第90図　ＳＰ219測量図



第91図　ＳＰ219出土遺物実測図

ＹＲ5/6）シルトなどが混じっている。遺物には土師器杯・小皿、瓦器椀などの破片を出土している。

出土遺物（第91図）

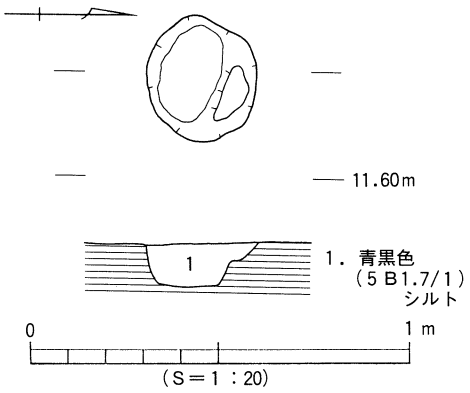
162は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径8.8㎝、器高1.6㎝、底径6.1㎝を測る。

(18) ＳＰ２２４（第92図）

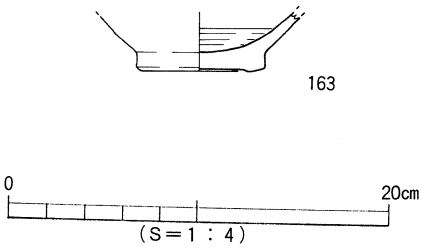
Ｎ13Ｗ６において検出した。長軸0.33ｍ、短軸0.29ｍ、深さ0.11ｍを測り、平面形はやや円形を呈している。埋土は青黒色（5Ｂ1.7/1）シルトである。遺物には白磁碗の破片を出土している。

出土遺物（第93図）

163は白磁碗Ⅳ－１ａ類の底部である。底径6.8㎝を測る。



第92図　ＳＰ224測量図



第93図　ＳＰ224出土遺物実測図

(19) ＳＰ２２７（第94図）

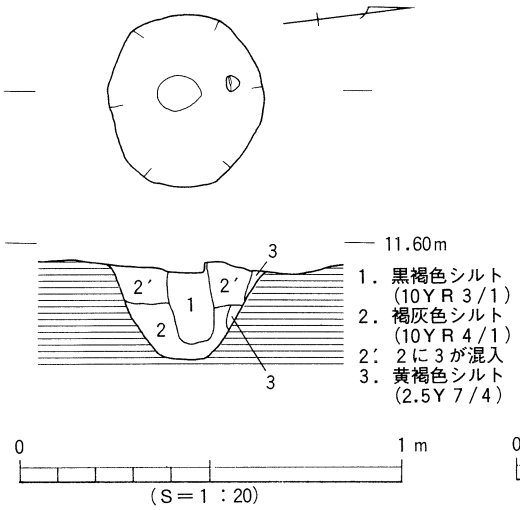
Ｎ11Ｗ２において検出した。長軸0.46ｍ、短軸0.41ｍ、深さ0.23ｍを測り、平面形はやや円形を呈している。柱痕跡の埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトである。遺物には土師器杯、瓦器椀、白磁碗などの破片を出土している。

出土遺物（第95図）

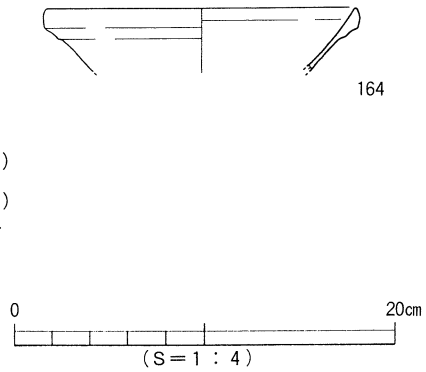
164は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径16.6㎝を測る。

(20) ＳＰ２３４（第96図）

Ｎ13Ｗ２において検出した。長軸0.39ｍ、短軸0.31ｍ、深さ0.09ｍを測り、平面形はやや円形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）粘質土である。遺物には瓦器椀、土師質鍋



第94図　ＳＰ227測量図

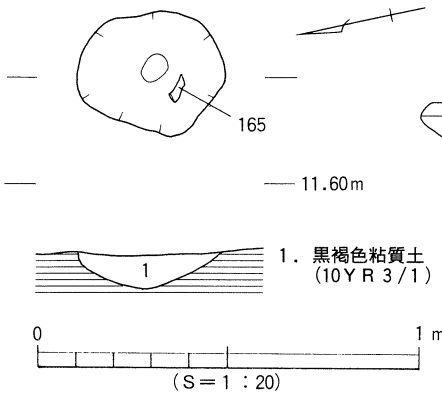


第95図　ＳＰ227出土遺物実測図

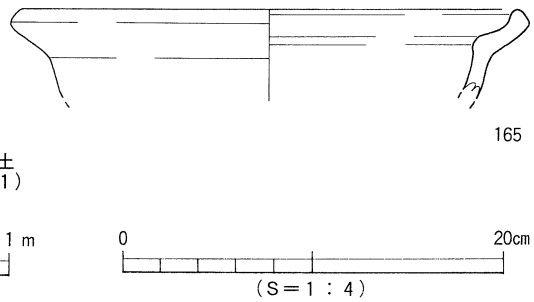
などの破片を出土している。

出土遺物（第97図）

165は土師質鍋の口縁部である。口縁は「く」字状に内傾している。推定口径26cmを測る。



第96図　ＳＰ234測量図



第97図　ＳＰ234出土遺物実測図

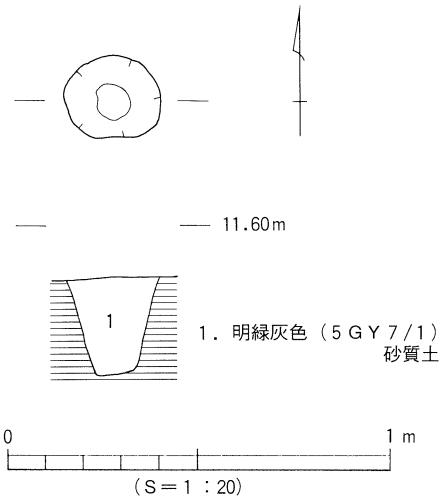
(21) ＳＰ２６８（第98図）

N12W２において検出した。長軸0.26m、短軸0.22m、深さ0.26mを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は明褐灰色（5GY7/1）砂質土である。遺物には土師器杯・小皿、瓦器椀、白磁碗などの破片を出土している。

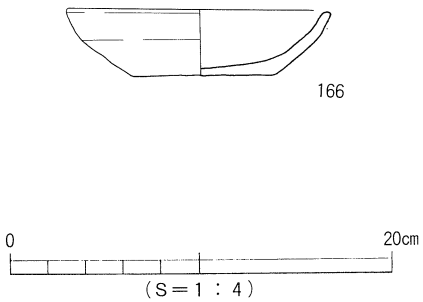
出土遺物（第99図）

166は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径９cm、器高1.6cm、底径

5.6cmを測る。



第98図　ＳＰ268測量図



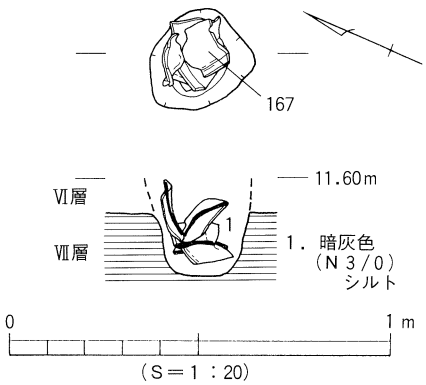
第99図　ＳＰ268出土遺物実測図

(22) ＳＰ３００（第100図）

N12W５において第Ⅵ層中で検出した。長軸0.22m、短軸0.21m、深さ0.17mを測り、平面形はやや円形を呈している。埋土は褐灰色（N3/0）シルトである。遺物には土師器杯・小皿、瓦器小皿、土師質鍋などの破片を出土している。土師質鍋は底部を欠損して廃棄せられている。

出土遺物（第101図）

167は土師質鍋で、底部は欠損しているが口縁・体部はほぼ残存している。内面は横方法のハケ目が施されている。口径37cmを測る。



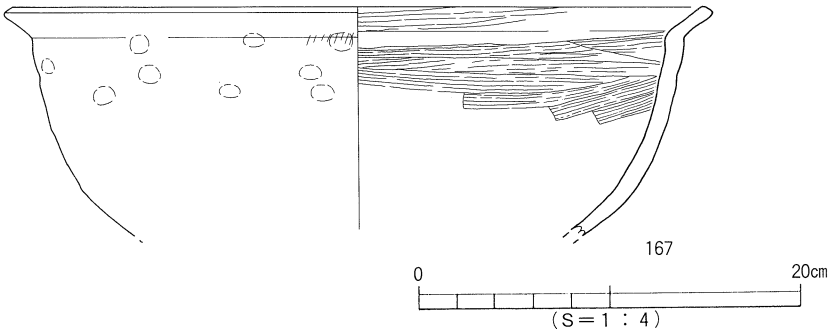
第100図　ＳＰ300測量図

(23) ＳＰ３０６（第102図）

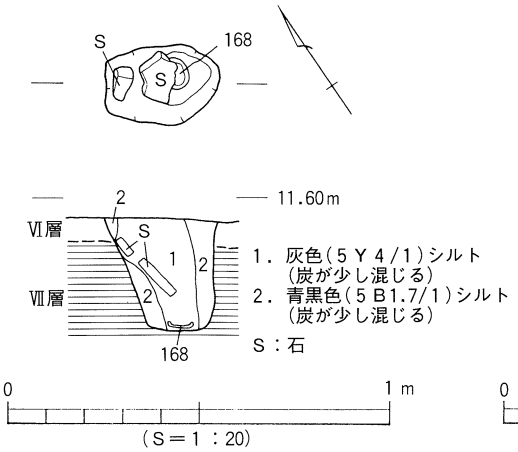
N12W６において第Ⅵ層中で検出される。長軸0.29m、短軸0.21m、深さ0.3mを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は灰色（N4/0）シルトである。遺物には土師器小皿、瓦器椀の破片などを出土している。

出土遺物（第103図）

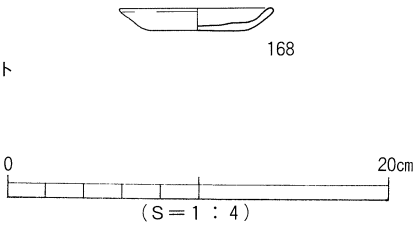
168は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径８cm、器高1.2cm、底径5.1cmを測る。



第101図　ＳＰ300出土遺物実測図



第102図　ＳＰ306測量図



第103図　ＳＰ306出土遺物実測図

(24) ＳＰ３３１（第104図）

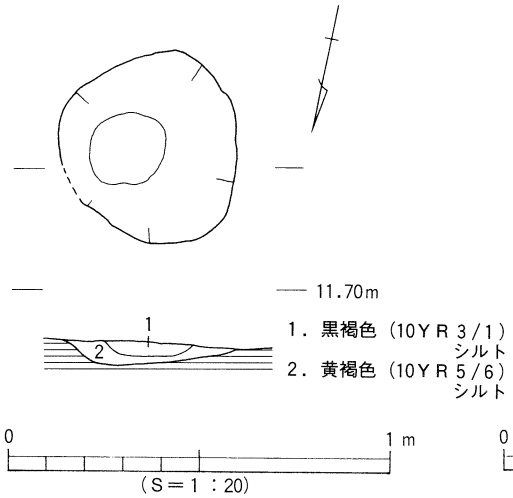
Ｎ13Ｗ３において検出した。長軸0.51ｍ、短軸0.45ｍ、深さ0.07ｍを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は上層が黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトで下層は黄褐色（10ＹＲ5/6）シルトである。遺物には土師器杯、白磁などの破片を出土している。

出土遺物（第105図）

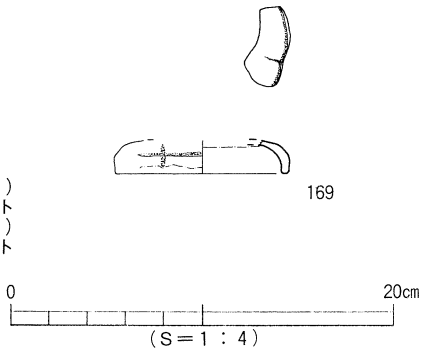
169は白磁合子の蓋Ⅱ類（広東産）である。推定口径９㎝を測る。

(25) ＳＰ３４８（第106図）

Ｎ14Ｗ３においてＳＰ３４９を切って検出した。長軸0.48ｍ、短軸0.34ｍ、深さ0.05ｍを測り、平面形は不整形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトである。遺物には土師器杯・小皿、瓦器などの破片を出土している。



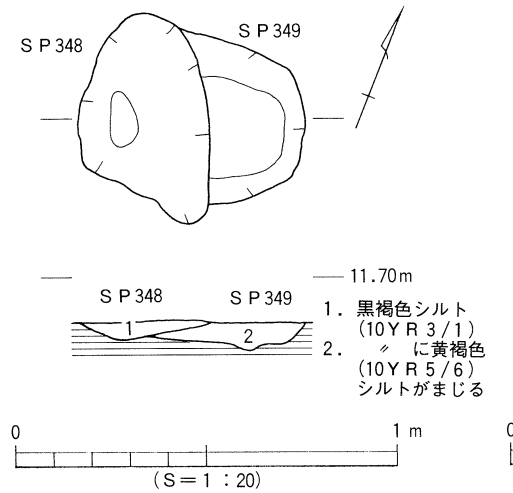
第104図　ＳＰ331測量図



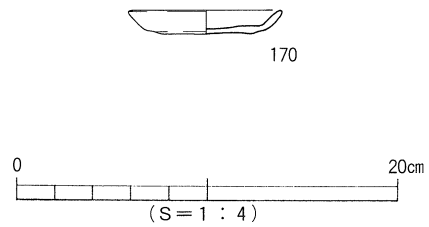
第105図　ＳＰ331出土遺物実測図

出土遺物（第107図）

170は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径８㎝、器高1.2㎝、底径５㎝を測る。



第106図　ＳＰ348測量図



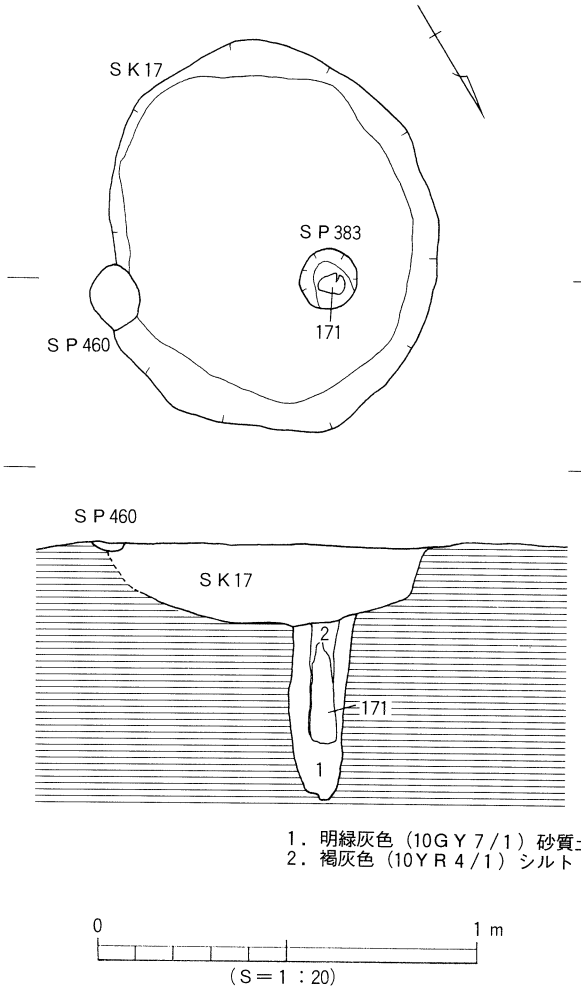
第107図　ＳＰ348出土遺物実測図

(26) ＳＰ３８３（第108図）

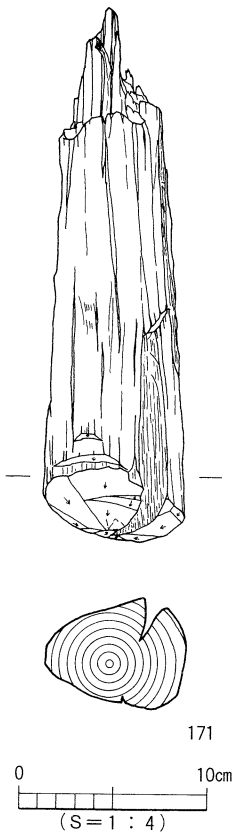
N14W６においてＳＫ１７の床面から検出した。直径0.16ｍ、深0.47ｍを測り、平面形は円形を呈している。埋土は褐灰色（10ＹＲ4/1）シルトである。遺物には木杭１点を出土している。

出土遺物（第109図）

171は木杭である。樹種は分析の結果、コナラ属である（分析編Ⅶ－７参照）。直径約7.5㎝、残存長27.1㎝を測る。



第108図　ＳＰ383測量図



第109図　ＳＰ383出土遺物実測図

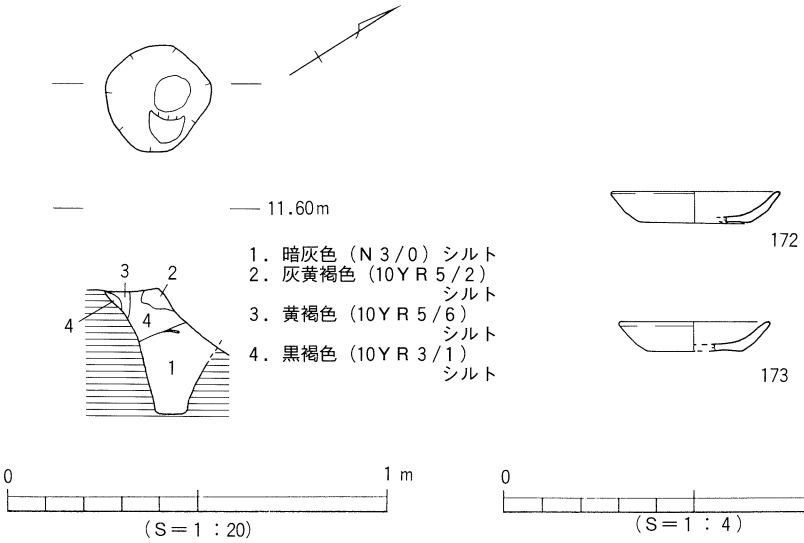
(27) ＳＰ４２６（第110図）

N15W６において検出した。直径0.28ｍ、深さ0.33ｍを測り、平面形はほぼ円形を呈している。埋土は下層は褐灰色（N3/0）シルトである。遺物には土師器杯・小皿、瓦器などの破片を出土している。

出土遺物（第111図）

172・173土師器小皿である。いずれも底部の切り離しは回転糸切りである。172は口径９㎝、

器高1.7㎝、底径5.6㎝を測る。173は口径８㎝、器高1.6㎝、底径５㎝を測る。



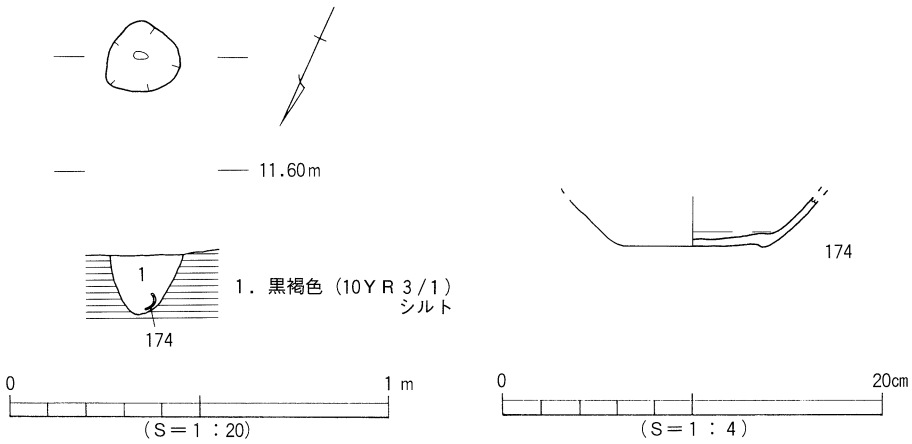
第110図　ＳＰ426測量図　　第111図　ＳＰ426出土遺物実測図

(28) ＳＰ４４２（第112図）

N14W６において検出した。長軸0.2m、短軸0.19m、深さ0.11mを測り、平面形はやや円形を呈している。埋土は黒褐色（10YR3/1）シルトである。遺物には土師器杯、瓦器などの破片を出土している。

出土遺物（第113図）

174は土師器杯の底部である。底部の切り離しは回転糸切りである。底径7.2㎝を測る。



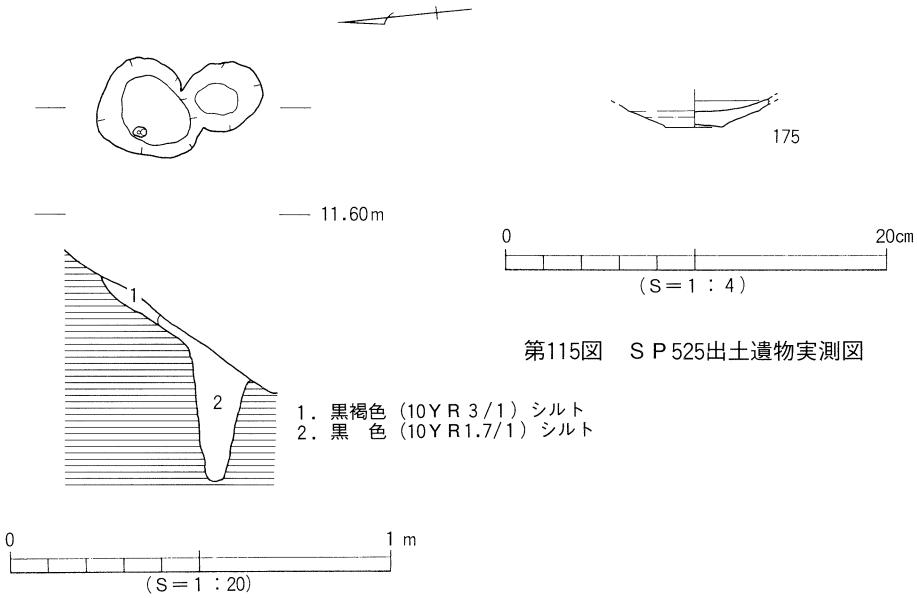
第112図　ＳＰ442測量図　　第113図　ＳＰ442出土遺物実測図

(29) ＳＰ５２５（第114図）

Ｎ15Ｗ６の調査区北壁において検出した。北側は抜き取り痕跡と思われる。長軸0.45ｍ、短軸0.19ｍ、深さ0.34ｍを測り、平面形は円形を呈している。埋土は黒色（10ＹＲ1.7/1）シルトである。遺物には土師器椀、瓦器、白磁皿などの破片を出土している。

出土遺物（第115図）

175は白磁皿Ⅵ－１ａ類の底部である。外底面には回転ヘラ切りの痕跡がみられる。内面及び外面の底部近くにまで施釉されている。推定底径3.2㎝を測る。



第115図　ＳＰ525出土遺物実測図

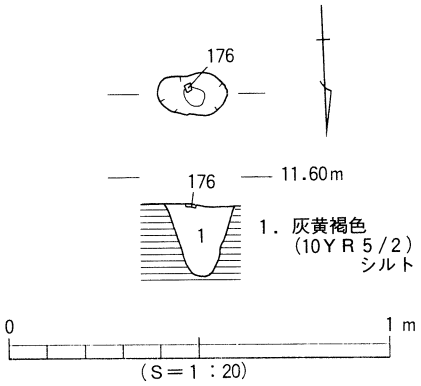
第114図　ＳＰ525測量図

(30) ＳＰ５５２（第116図）

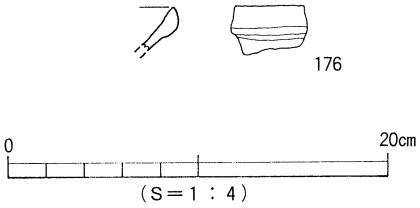
Ｎ14Ｗ２・３において検出した。長軸0.19ｍ、短軸0.11ｍ、深さ0.19ｍを測り、平面形は楕円形を呈している。埋土は灰黄褐色（10ＹＲ5/2）シルトである。遺物には土師器、白磁碗Ⅳ類などの破片を出土している。

出土遺物（第117図）

176は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。



第116図　ＳＰ552測量図



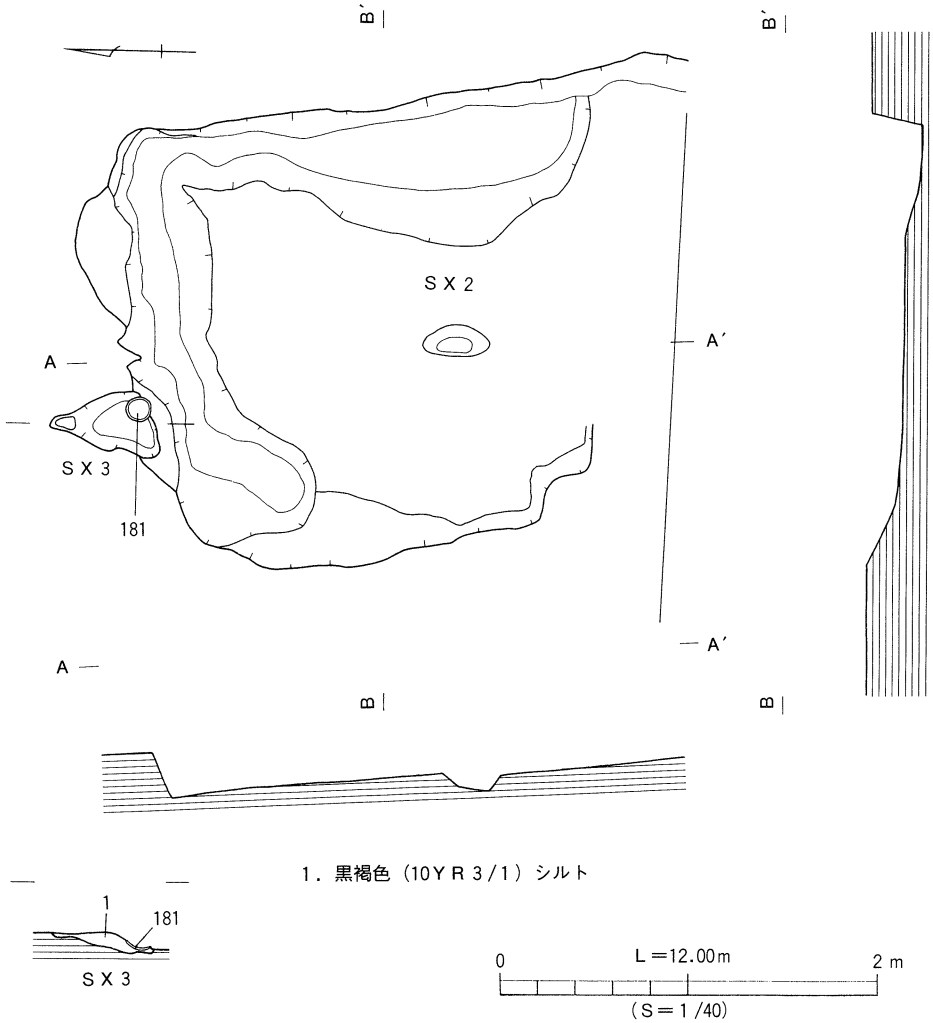
第117図　ＳＰ552出土遺物実測図

8　性格不明遺構

調査区において性格不明遺構14基を検出した。以下、出土遺物が実測できた主要なものについて記す。

（1）ＳＸ２（第118図）

N11W１・２においてＳＸ３に北端の一部が切られて検出した。南側は調査区外へ延びる。南北検出長約2.9ｍ、東西長約23.5ｍ、深さ約25㎝を測り、平面形は長方形を呈している。



第118図　ＳＸ２・３測量図

床面には、北・東の壁体に沿う溝状と中央部に楕円形の窪みがみられる。埋土は、褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト～粘質土である。遺物には土師器椀・杯・小皿、瓦器椀、白磁碗などの破片を出土している。

出土遺物（第119図、177～180）

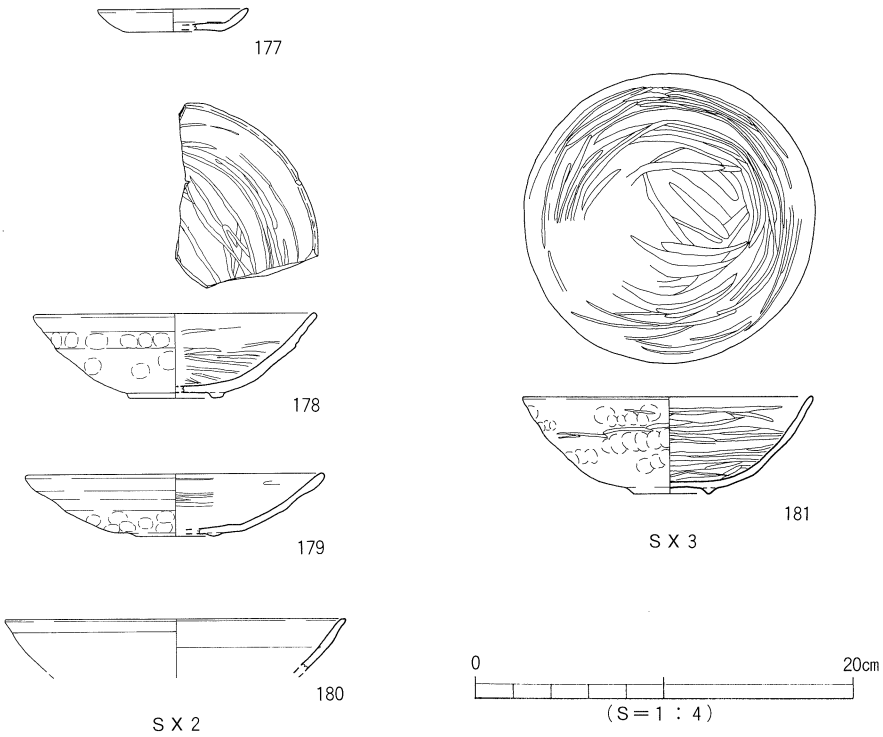
177は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径８㎝、器高1.2㎝、底径５㎝を測る。

178・179は瓦器椀である。178の内面には横方向のミガキが施されている。断面四角形の高台が貼り付けられている。推定口径15㎝、器高4.5㎝、高台径５㎝を測る。179は全体にやや磨滅しているが内面には横方向のミガキが施されている。粘土紐状の高台が貼り付けられている。推定口径15.7㎝、器高3.3㎝、高台径4.2㎝を測る。いずれも和泉型瓦器と思われる。

180は白磁碗Ｖ類と思われる口縁部である。推定口径18㎝を測る。

（２）ＳＸ３（第118図）

Ｎ11Ｗ２にＳＸ２の北端で検出した。長軸約51㎝、短軸約10～40㎝、深さ約10㎝を測り、隅丸の三角形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルトである。遺構内の南端で瓦



第119図　ＳＸ２・３出土遺物実測図

器椀１点を出土している。

出土遺物（第119図、181）

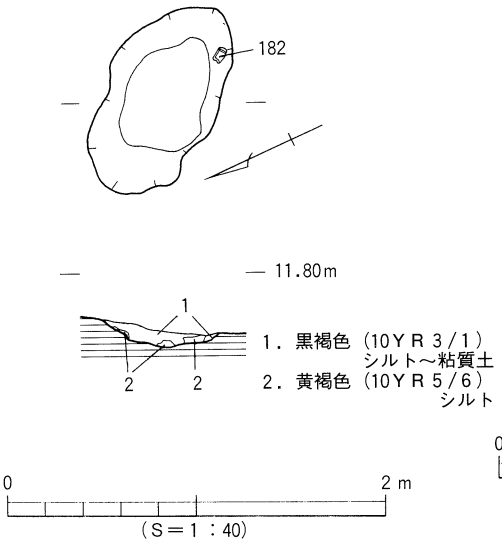
181は瓦器椀の完形品である。内面には横方向のミガキ、見込みと外面に若干のミガキが施されている。断面三角形の高台が貼り付けられている。口径15.2cm、器高5.1cm、高台径４cmを測る。和泉型瓦器と思われる。

（３）ＳＸ５（第120図）

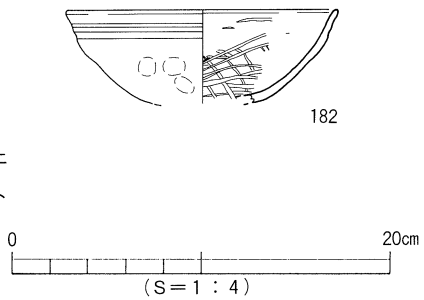
Ｎ13Ｗ３においてＳＤ７を切って検出した。長軸約1.1ｍ、短軸約0.6ｍ、深さ8cmを測り、平面形はやや楕円形を呈している。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト～粘質土である。遺物には土師器小皿、瓦器椀の破片などが出土している。

出土遺物（第121図）

182は瓦器椀である。内面には横方向のミガキ、見込みには格子状のミガキが施されている。口縁外面には凹線状の窪みが巡る。推定口径14.4cmを測る。和泉型瓦器と思われる。



第120図　ＳＸ５測量図



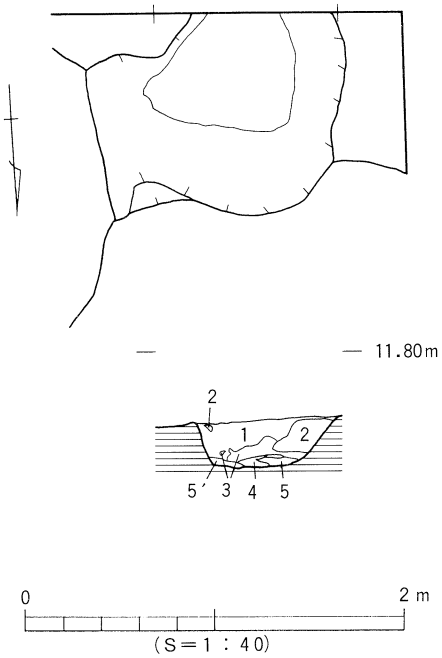
第121図　ＳＸ５出土遺物実測図

（４）ＳＸ７（第122図）

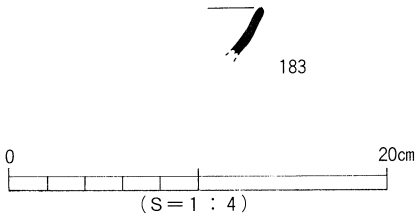
Ｎ11Ｗ４においてＳＫ11の西に隣接して検出した。南側は調査区外へ延びる。南北長約1.1ｍ、東西長約1.3ｍ、深さ25cmを測り、平面形は不整形を呈している。埋土は黒褐色（2.5Ｙ3/1）シルトから粘質土を主にしている。遺物には須恵器椀の破片などを出土している。

出土遺物（第123図）

183は須恵器椀の口縁部である。おそらく東播系と思われる。



第122図　ＳＸ７測量図



第123図　ＳＸ７出土遺物実測図

9　遺構外出土遺物（第124～138図）

ここでは、Ａ地区内の第Ⅵ層から出土している遺物について説明を行う。

＊土師器椀＊（第124図、184～188）

184はＡ類（内黒）の底部である。全体にやや磨滅しているが見込みに幅広いミガキが施されている。断面三角形の細長い高台が貼り付けられている。高台径7.2㎝を測る。Ｎ14Ｗ４出土。

185はＡ類（内黒）の底部である。全体に磨滅しているためミガキなどは不明である。断面四角形の細い高台が貼り付けられている。高台径6.7㎝、高台高0.7㎝を測る。Ｎ13Ｗ２出土。

186は非黒色処理の底部である。底部の切り離しは回転糸切りで、やや円盤高台状を呈する底部外周に断面四角形の高台が貼り付けられている。高台径6.6㎝、高台高0.2㎝を測る。Ｎ14Ｗ７出土。

187は非黒色処理の底部である。底部の切り離しは回転糸切りで、断面四角形の高台が貼り付けられている。高台径６㎝を測る。Ｎ14Ｗ４出土。

188は非黒色処理の底部である。底部の切り離しは回転糸切りで、断面三角形の高台が貼り付けられている。高台径7.2㎝、高台高0.4㎝を測る。Ｎ14Ｗ５出土。

＊土師器杯＊（第124図、189～200）

189の底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径14.1㎝、器高3.9㎝、底径6.5㎝を測る。Ｎ15Ｗ６出土。

190はほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径14.2㎝、器高3.9㎝、底径6.6㎝を測る。Ｎ13Ｗ３出土。

191はほぼ完形品である。全体に磨滅しているが、底部の切り離しは回転糸切りと思われる。口径14.3㎝、器高3.4㎝、底径7.7㎝を測る。出土グリット不明。

192の底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径15.5㎝、器高3.5㎝、底径6.4㎝を測る。出土グリット不明。

193は、全体に磨滅しているため底部の切り離しは不明であるが、板状圧痕がみられる。推定口径13.4㎝、器高3.3㎝、底径９㎝を測る。Ｎ12Ｗ６出土。

194は完形品である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。口径11.9㎝、器高3.4㎝、底径6.6㎝を測る。出土グリット不明。

195の底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径12.3㎝、器高2.9㎝、底径６㎝を測る。Ｎ12Ｗ５出土。

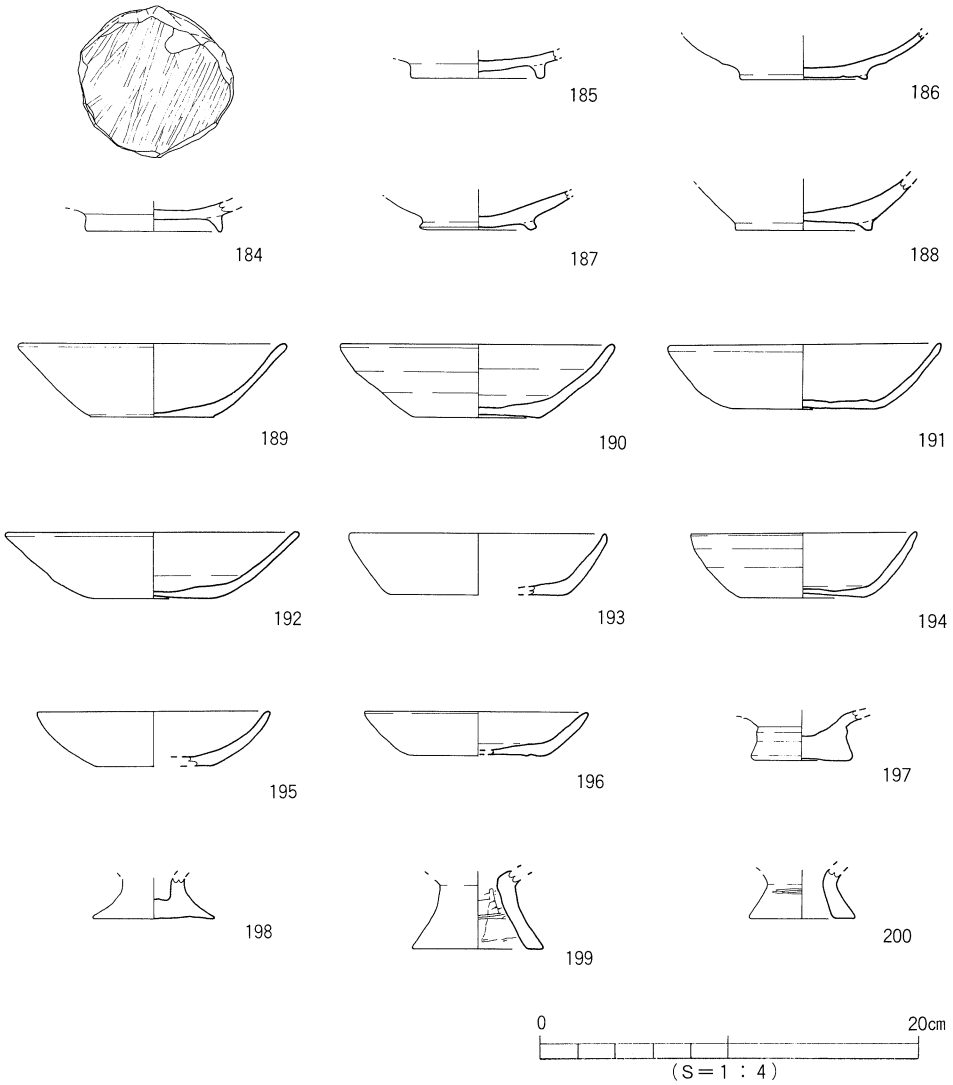
196の底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径11.6㎝、器高2.3㎝、底径6.6㎝を測る。Ｎ12Ｗ２出土。

197は円柱状の底部を呈する杯である。高台径５㎝、高台高1.8㎝を測る。N14W４出土。

198は円柱状の底部を呈する杯である。内底面は抉られている。底部の切り離しは回転糸切りである。底径6.4㎝を測る。N12W６出土。

199は中空の円柱状の底部を呈する杯である。中空部は削り空けられている。高台径6.8㎝、高台高3.4㎝、孔の直径５㎝を測る。出土グリット不明。

200は中空の円柱状の底部を呈する杯である。高台径5.6㎝、高台高1.8㎝、孔の直径3.4㎝を測る。出土グリット不明。



第124図　遺構外出土遺物実測図（1）

＊土師器小皿＊（第125図）

201は、磨滅しているため底部の切り離しは不明である。推定口径９㎝、器高1.7㎝、底径5.4㎝を測る。N14W４出土。

202はほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径9.5㎝、器高1.5㎝、底径6.5㎝を測る。N12W２出土。

203はほぼ完形品である。二次的な焼成を受けているためか全体に明赤灰色（2.5YR7/2）を呈している。底部の切り離しは回転糸切りである。口径９㎝、器高1.5㎝、底径6.6㎝を測る。N14W７出土。

204の底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径8.6㎝、器高1.5㎝、底径5.8㎝を測る。N16W６出土。

205はほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。口径8.2㎝、器高1.3㎝、底径６㎝を測る。N12W５出土。

206の底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径９㎝、器高1.2㎝、底径６㎝を測る。N12W５出土。

207の底部の切り離しは回転糸切りである。口径8.4㎝、器高1.4㎝、底径5.8㎝を測る。N14W７出土。

208はほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径8.4㎝、器高1.3㎝、底径5.8㎝を測る。N12W６出土。

209はほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。口径8.6㎝、器高1.3㎝、底径6.2㎝を測る。N13W３出土。

210の底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径９㎝、器高1.7㎝、底径５㎝を測る。N13W６出土。

211はほぼ完形品である。全体に磨滅しているが底部の切り離しは、回転糸切りである。口径８㎝、器高1.5㎝、底径5.8㎝を測る。N13W３出土。

212の底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径8.9㎝、器高1.5㎝、底径６㎝を測る。N14W５出土。

213の底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径８㎝、器高1.2㎝、底径5.6㎝を測る。N12W２出土。

214は完形品である。全体が磨滅しているが、底部の切り離しは回転糸切りと思われる。口径8.2㎝、器高1.2㎝、底径5.7㎝を測る。N14W４出土。

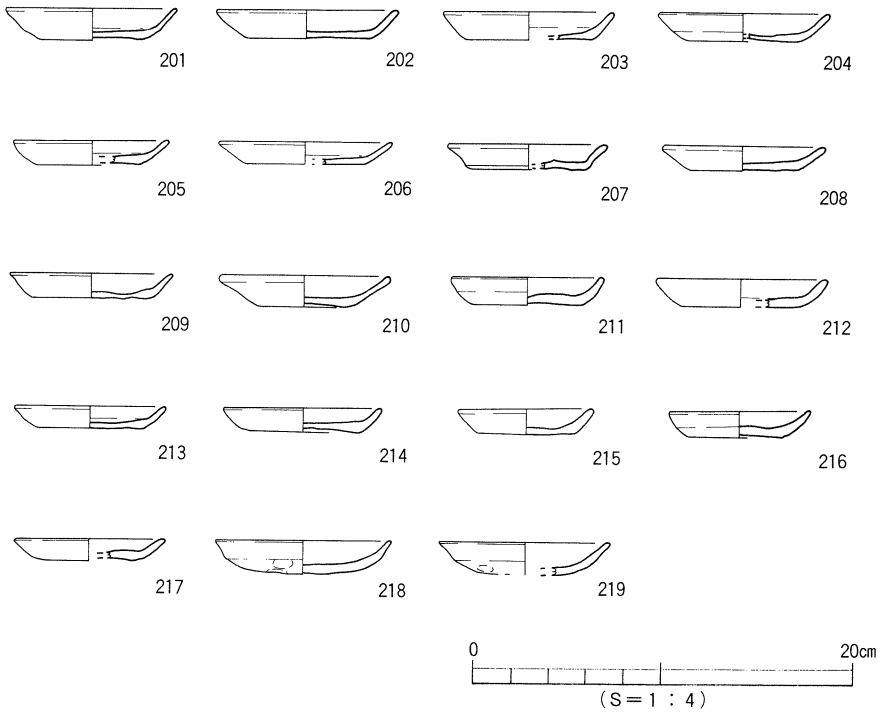
215はほぼ完形品である。全体にやや磨滅しているが底部の切り離しは回転糸切りである。口径7.2㎝、器高1.4㎝、底径５㎝を測る。N12W３出土。

216はほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。口径7.3㎝、器高1.4㎝、底径５㎝を測る。N12W６出土。

217の底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径８㎝、器高1.2㎝、底径4.8㎝を測る。N13W６出土。

218は手づくねの小皿で底部に指頭圧痕がある。推定口径９㎝、器高1.8㎝を測る。N15W６出土。

219は手づくねの小皿で底部に指頭圧痕がある。推定口径９㎝を測る。N15W６出土。



第125図　遺構外出土遺物実測図（2）

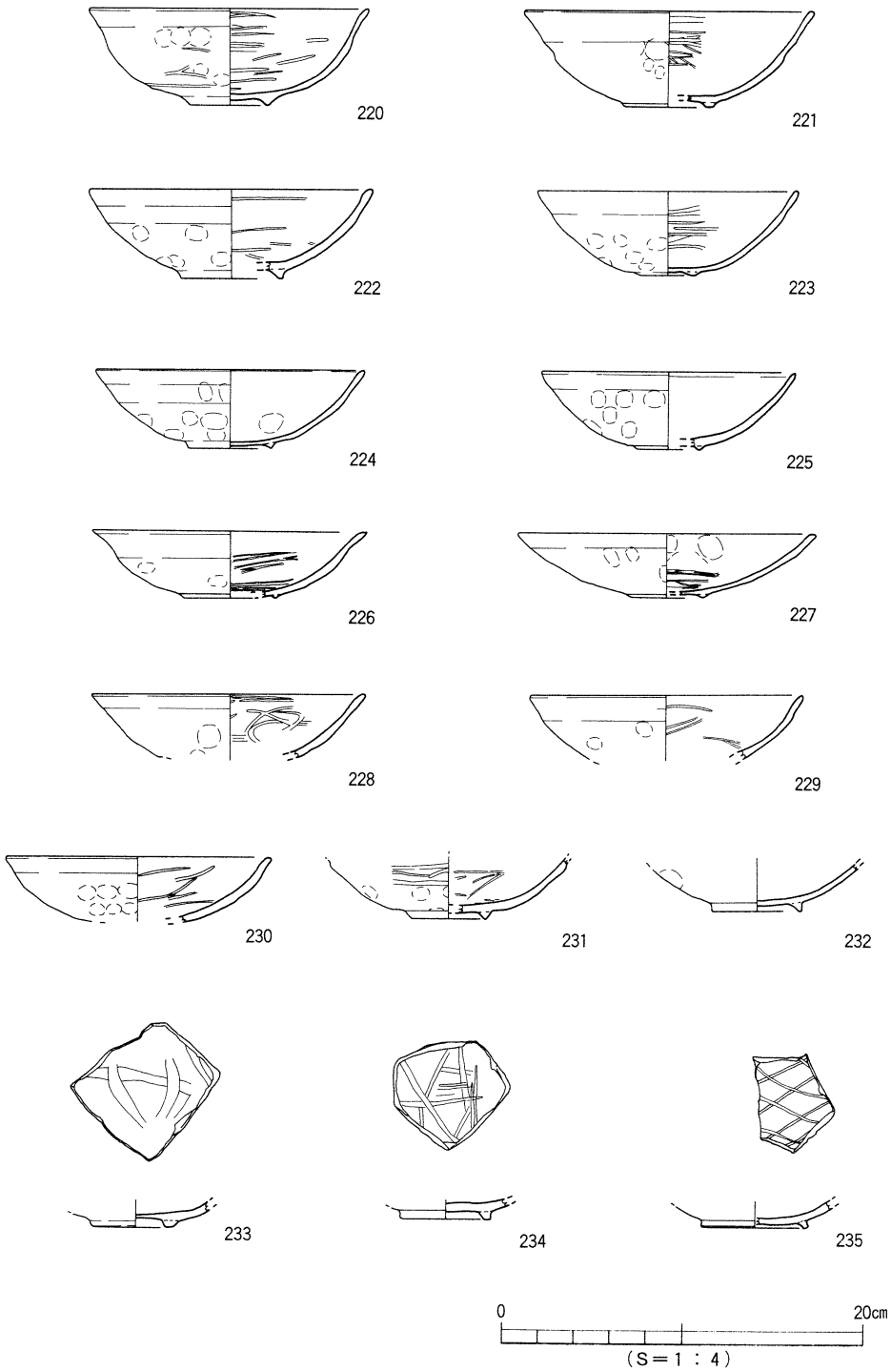
＊瓦器椀＊（第126図）

220の内外面には幅広いミガキが施されている。断面四角形の高台が貼り付けられている。推定口径15.2㎝、器高5.4㎝、高台径4.4㎝を測る。N14W５出土。

221の内面には横方向のミガキが施されている。断面四角形の低い高台が貼り付けられている。推定口径15.8㎝、器高5.3㎝、高台径4.8㎝を測る。N13W５出土。

222の内面には横方向のミガキが施されている。断面やや四角形の高台が貼り付けられている。推定口径15.5㎝、器高５㎝、高台径5.4㎝を測る。N12W３出土。

223は、二次的な焼成を受けたためか全体に橙色を呈している。内面には横方向のミガキが施されている。断面三角形の低い高台が貼り付けられている。推定口径14.2㎝、器高4.6㎝、高台径３㎝を測る。N12W６出土。



第126図　遺構外出土遺物実測図（3）

224は、全体に磨滅しているためミガキなどは不明である。断面三角形の高台が貼り付けられている。推定口径14.8㎝、器高4.4㎝、高台径4.6㎝を測る。N14W 4 出土。

225は、全体に磨滅している。断面三角形の高台が貼り付けられている。推定口径14㎝、器高4.3㎝、高台径3.5㎝を測る。出土グリット不明。

226の内面には横方向のミガキが施されている。断面三角形の高台が貼り付けられている。推定口径15㎝、器高3.8㎝、高台径4.8㎝を測る。N14W 7 出土。

227の内面には横方向のミガキが施されている。断面三角形の高台が貼り付けられている。推定口径16.4㎝、器高3.6㎝、高台径 4 ㎝を測る。N12W 6 出土。

228は口縁部である。内面にはミガキが施されている。推定口径15㎝を測る。N14W 6 出土。

229は口縁部である。内面にはミガキが施されている。推定口径15㎝を測る。N14W 6 出土。

230は口縁部である。内面には横方向のミガキが施されている。全体に炭素の付着がみられない。推定口径14.4㎝を測る。N12W 6 出土。

231は底部で内面にミガキが施されている。断面三角形の高台が貼り付けられている。高台径 4 ㎝を測る。N13W 4 出土。

232は底部である。全体に磨滅している。断面三角形の高台が貼り付けられている。高台径 5 ㎝を測る。N13W 3 出土。

233は底部である。内面に幅広いミガキが施されている。断面四角形の高台が貼り付けられている。高台径4.5㎝を測る。N14W 4 出土。

234は底部である。内面には幅広いミガキが施されている。断面四角形の高台が貼り付けられている。高台径 5 ㎝、高台高0.4㎝を測る。N14W 5 出土。

235は底部である。内面には格子状のミガキが施されている。断面四角形の細長い高台が貼り付けられている。全体に灰色（N8/0）を呈している。高台径5.9㎝、高台高0.3㎝を測る。N14W 7 出土。

＊瓦器小皿＊（第127図）

236はほぼ完形品である。内面にコテあての痕跡がみられる。口径9.7㎝、器高2.2㎝を測る。N13W 3 出土。

237はほぼ完形品である。口径8.9㎝、器高1.7㎝を測る。N12W 4 出土。

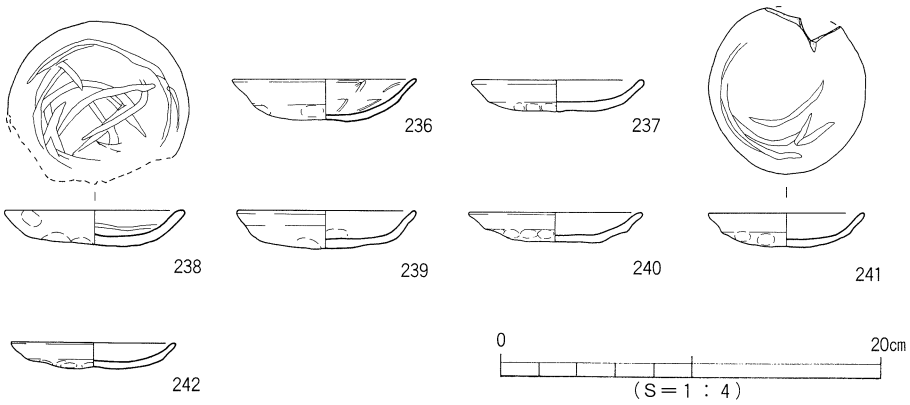
238はほぼ完形品である。内面にミガキが施されている。口径9.3㎝、器高1.9㎝を測る。N13W 3 出土。

239は完形品である。口径9.4㎝、器高 2 ㎝を測る。N13W 3 出土。

240は完形品である。口径 9 ㎝、器高1.5㎝を測る。出土グリット不明。

241はほぼ完形品である。内面に横方向のミガキが若干みられる。口径8.3㎝、器高1.5㎝を測る。出土グリット不明。

242はほぼ完形品である。口径8.6㎝、器高1.3㎝を測る。N13W 5 出土。

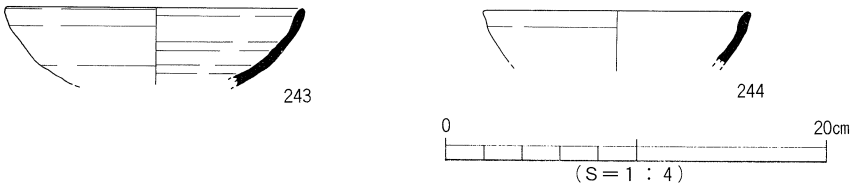


第127図　遺構外出土遺物実測図 (4)

＊須恵器椀＊（第128図）

243は口縁部である。内外面とも横ナデが施され、推定口径15.6cmを測る。東播系と思われる。N12W 6 出土。

244は口縁部である。内外面とも横ナデが施され、推定口径14cmを測る。東播系と思われる。N13W 4 出土。



第128図　遺構外出土遺物実測図 (5)

＊須恵器コネ鉢＊（第129・130図）

245は口縁部である。口縁断面は四角形を呈している。推定口径23cmを測る。東播系と思われる。N13W 2 ・N13W 3 出土。

246は口縁部である。断面四角形を呈している。推定口径24cmを測る。東播系と思われる。N13W 5 出土。

247は口縁部である。推定口径29.8cmを測る。東播系と思われる。N12W 3 ・N12W 5 ・N13W 4 出土。

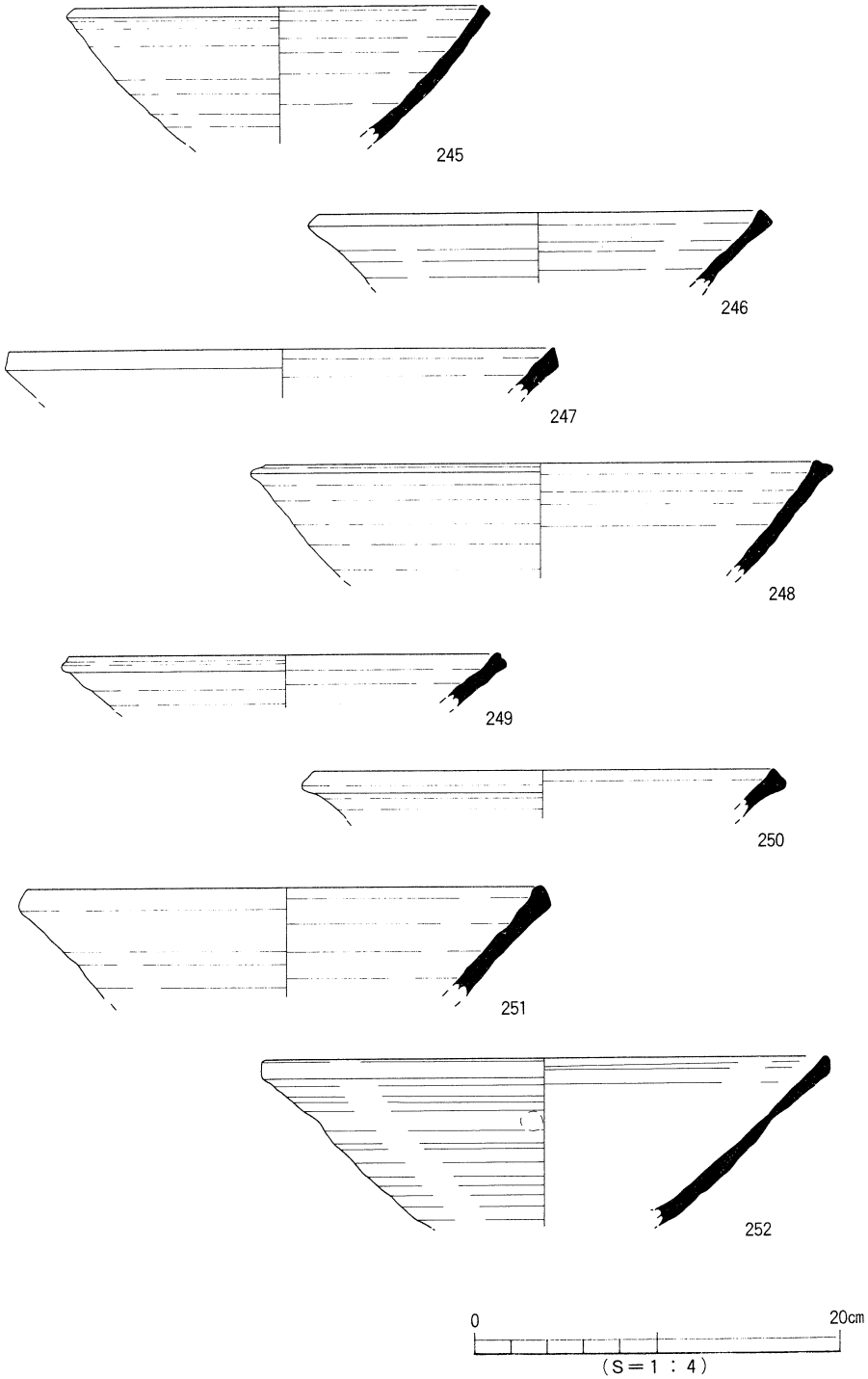
248は口縁部である。推定口径30cmを測る。東播系と思われる。N13W 3 出土。

249は口縁部である。推定口径23.6cmを測る。東播系と思われる。N14W 2 ・N14W 4 出土。

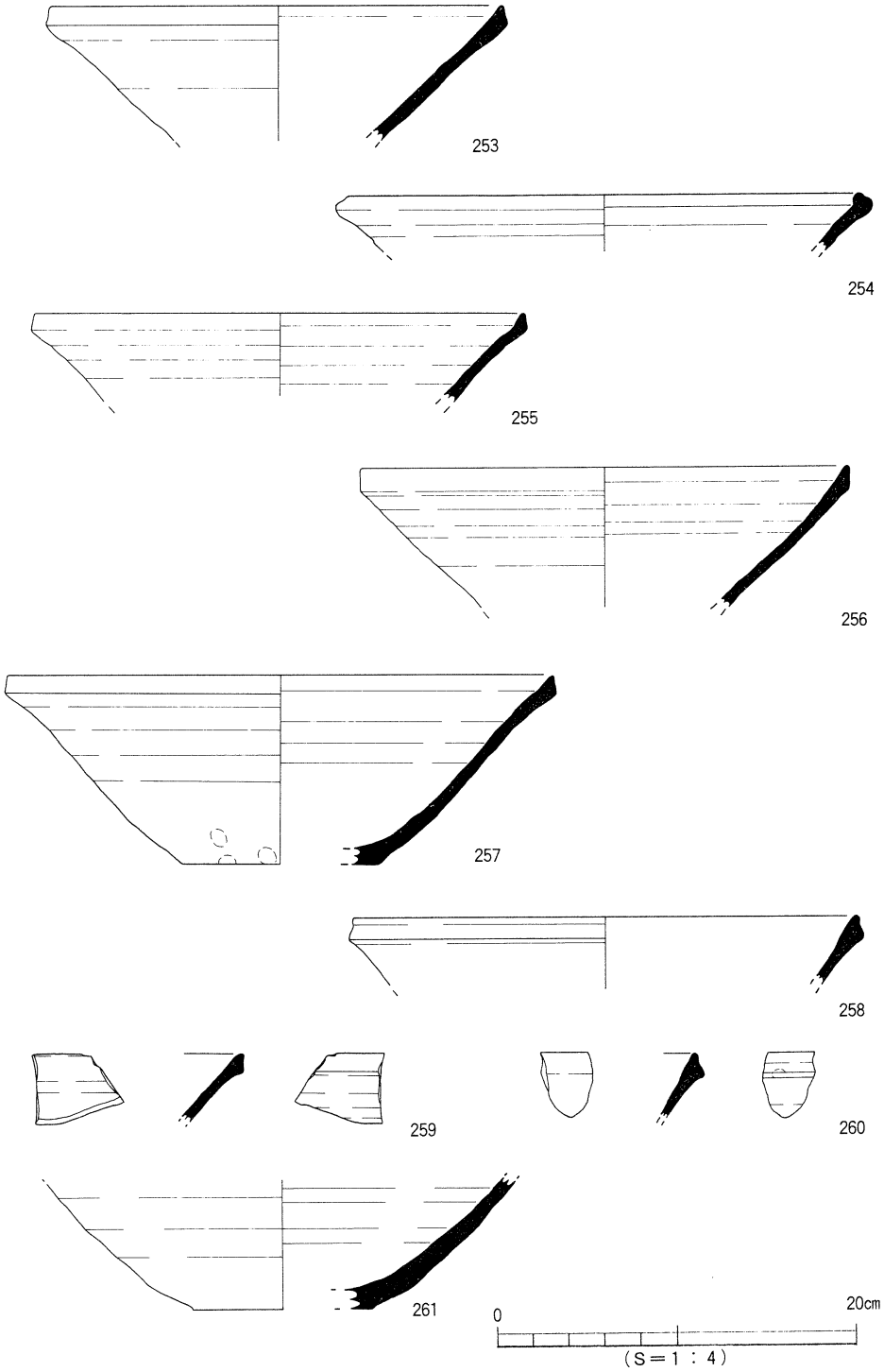
250は口縁部である。推定口径25cmを測る。東播系と思われる。N13W 3 出土。

251は口縁部である。推定口径28cmを測る。東播系と思われる。N14W 4 出土。

252は口縁部である。推定口径31cmを測る。東播系と思われる。N12W 6 出土。



第129図　遺構外出土遺物実測図 (6)



第130図　遺構外出土遺物実測図（7）

253は口縁部である。推定口径25cmを測る。東播系と思われる。口縁部はN12W５、体部はN13W５出土。

254は口縁部である。口縁端は内側に突出している。推定口径28cmを測る。東播系と思われる。N13W５出土。

255は口縁部である。口縁端部は上部に拡張している。推定口径27cmを測る。東播系と思われる。N12W７出土。

256は口縁部である。外面は煤けている。推定口径27cmを測る。東播系と思われる。出土グリット不明。

257の底部には回転糸切りの痕跡がみられる。推定口径30.2cm、器高10.5cm、底径11cmを測る。東播系と思われる。N13W４出土。

258は口縁部である。二次的な焼成を受けているためか全体に淡赤橙色（2.5ＹＲ7/4）を呈している。推定口径28cmを測る。東播系と思われる。N14W７出土。

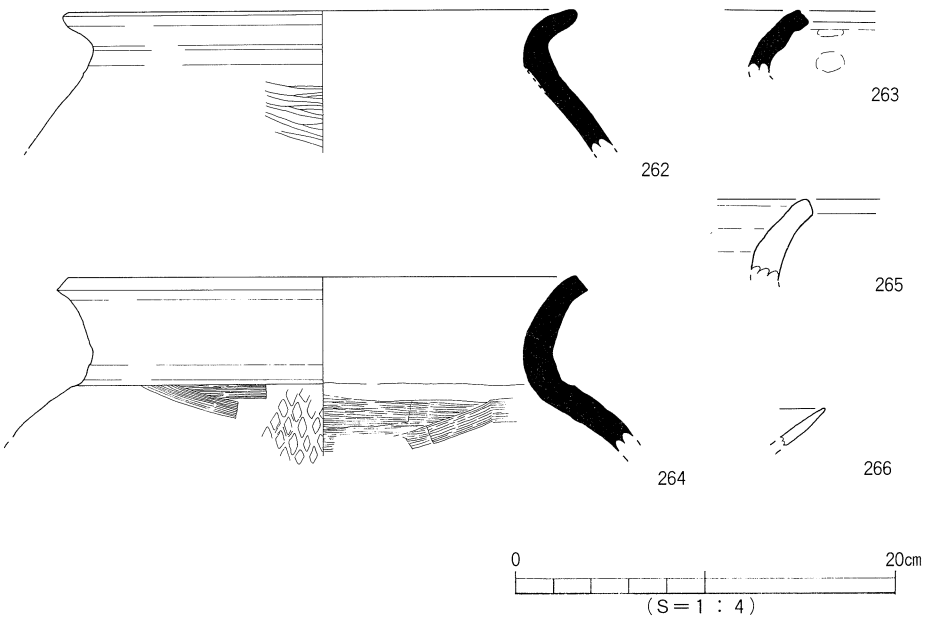
259は口縁部である。東播系と思われる。出土グリット不明。

260は口縁部である。二次的な焼成を受けているためか全体に淡橙色（5ＹＲ8/4）を呈している。東播系と思われる。N14W７出土。

261は底部～体部である。推定底径10cmを測る。東播系と思われる。N14W７出土。

＊須恵器甕＊（第131図、262～264）

262の体部外面には平行叩きが施されている。推定口径27cmを測る。東播系と思われる。



第131図　遺構外出土遺物実測図（8）

N12W 2 ・N13W 2 出土。

263は口縁部である。N12W 3 出土。

264は口縁部である。体部に格子叩きが施されている。推定口径26.6㎝を測る。焼成は良好で須恵質のものであるが、おそらく亀山焼系と考えられる。N13W 4 出土。

＊瓦質甕＊（第131図、265）

265は口縁部である。口縁は断面四角形を呈し、大きく外反している。亀山焼系と思われる。N12W 5 出土。

＊陶器皿＊（第131図、266）

266は口縁部である。内外面ともに釉が施され、浅黄色（5Y7/3）を呈している。生産地は不明。N12W 6 出土。

＊土師質鍋＊（第132図、267～270）

267の外面には縦方向の荒いハケ目が施され、口縁内面には横方向の幅広いハケ目が、体部内面には横方向の幅の狭いハケ目の後縦方向のハケ目が施されている。推定口径39㎝を測る。頸部内面周辺に煤が付着している。N12W 5 ・N14W 4 出土。

268は口縁部である。内面は横ハケ、外面は縦ハケが施されている。推定口径34㎝を測る。N13W 2 出土。

269は口縁部である。口縁端部の断面形は丸味を帯びた四角形を呈し、上方向へ折り曲げられている。外面には煤の付着がみられる。推定口径49㎝を測る。N13W 5 出土。

270は口縁部である。内面は横ハケ、外面は縦ハケが施されている。推定口径39.7㎝を測る。出土グリット不明。

＊土師質釜＊（第132図、271）

271は口縁部である。口縁端部より2.1㎝下がった位置にやや水平な鍔が貼り付けられている。内外面ともナデが施されている。推定口径26.2㎝を測る。N12W 6 出土。

＊貿易陶磁器＊（第133～137図）

（白磁碗）（第133・134図）

272は白磁碗Ⅱ－1類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。N12W 7 出土。

273は白磁碗Ⅱ類の口縁部である。N14W 4 出土。

274は白磁碗Ⅱ－1類の口縁部である。N12W 7 出土。

275は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径15.4㎝を測る。N14W 5 出土。

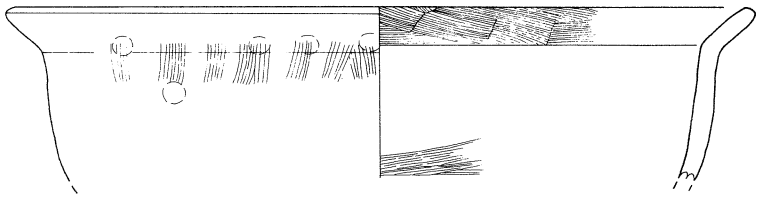
276は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径17.2㎝を測る。出土グリット不明。

277は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。出土グリット不明。

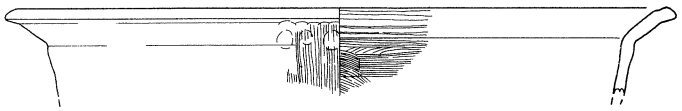
278は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。N14W 2 出土。

279は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径15.2㎝を測る。N13W 2 出土。

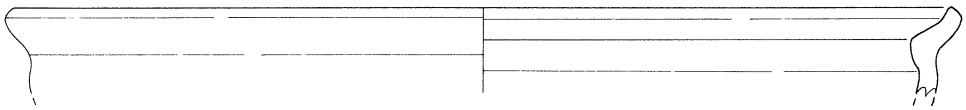
280は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。N12W 6 出土。



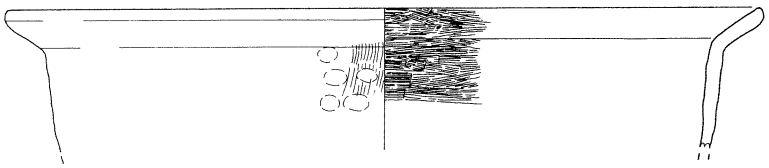
267



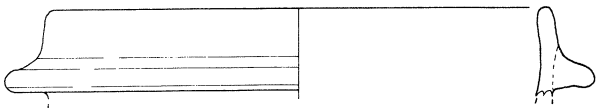
268



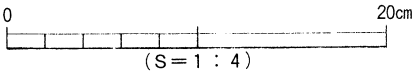
269



270



271



第132図　遺構外出土遺物実測図（9）

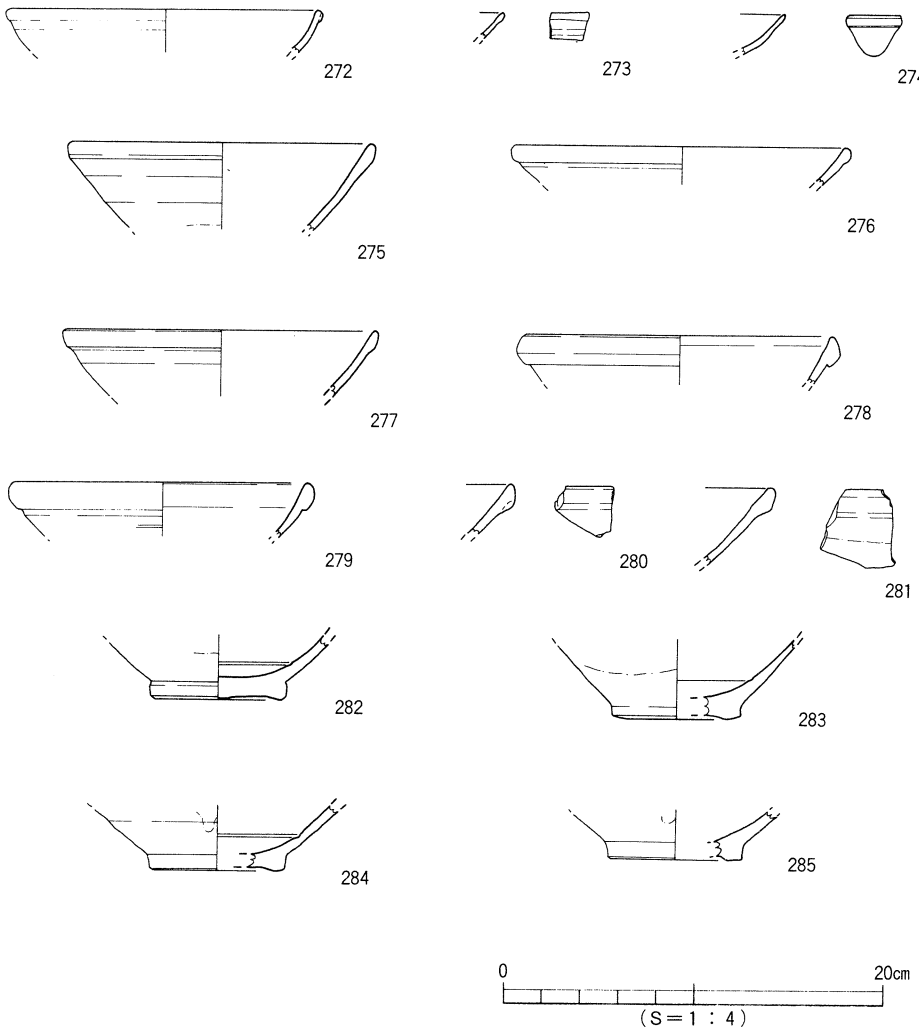
281は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。N14W７出土。

282は白磁碗Ⅳ類の底部である。高台径6.8cm、高台高0.9cmを測る。N12W５・N14W２出土。

283は白磁碗Ⅳ－１ａ類の底部である。推定高台径5.2cm、高台高0.7cmを測る。N12W２出土。

284は白磁碗Ⅳ－１ａ類の底部である。推定高台径6.8cm、高台高0.8cmを測る。N12W６出土。

285は白磁碗Ⅳ－１ａ類？の底部である。推定高台径6.8cm、高台高0.9cmを測る。N12W６出土。



第133図　遺構外出土遺物実測図 (10)

286は白磁碗Ｖ－４類の口縁部である。Ｎ13Ｗ７出土。

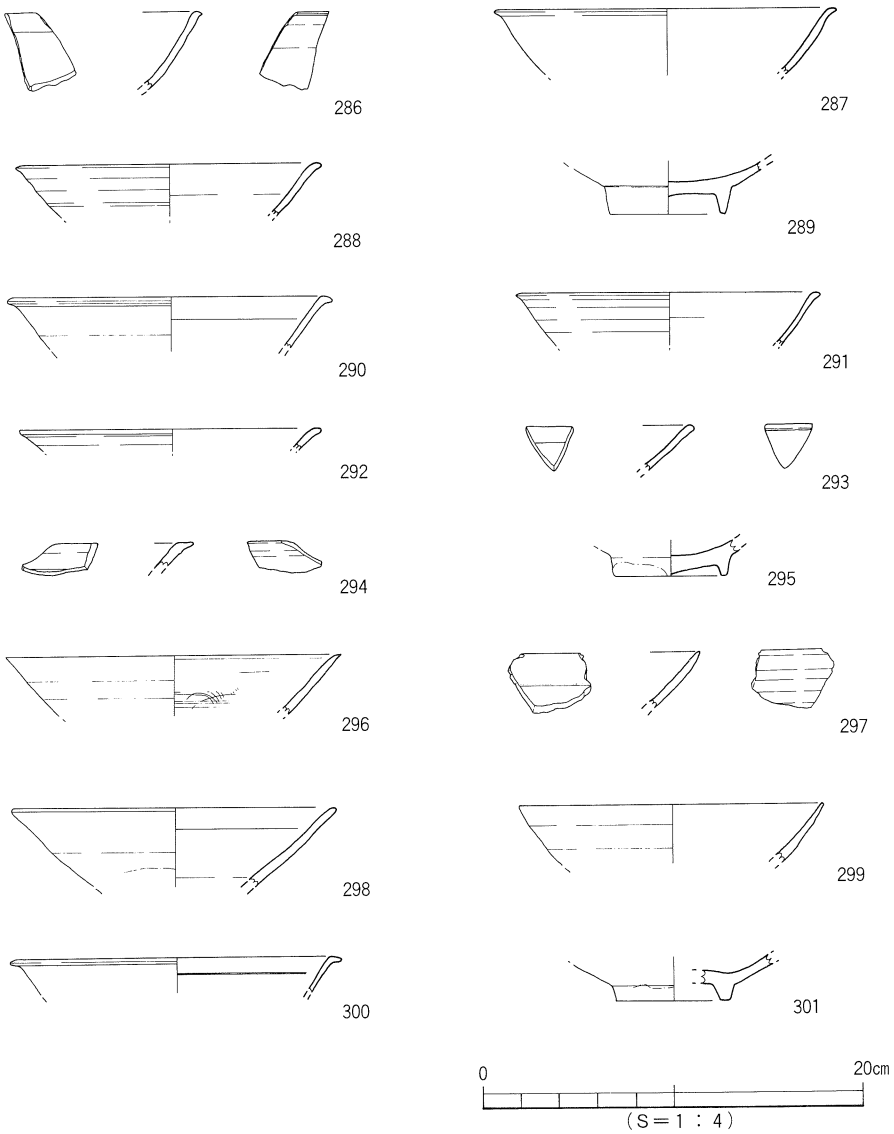
287は白磁碗Ｖ－４類の口縁部である。推定口径17.4cmを測る。Ｎ14Ｗ７出土。

288は白磁碗Ｖ－４類と思われる口縁部である。推定口径15.4cmを測る。Ｎ12Ｗ６・Ｎ15Ｗ５出土。

289は白磁碗Ｖ類の底部である。推定高台径６cm、高台高1.4cmを測る。Ｎ14Ｗ３出土。

290は白磁碗ＶまたはⅧ類の口縁部である。推定口径16cmを測る。Ｎ14Ｗ７出土。

291は白磁碗ＶまたはⅧ類の口縁部である。推定口径15.2cmを測る。Ｎ14Ｗ７出土。



第134図　遺構外出土遺物実測図 (11)

292は白磁碗Ⅴまたは㈧類の口縁部である。推定口径15.8㎝を測る。N13W 6 出土。

293は白磁碗Ⅴまたは㈧類の口縁部である。N14W 7 出土。

294は白磁碗Ⅴまたは㈧類の口縁部である。N12W 7 出土。同一個体片 1 点がN14W 7 からも出土している。

295は白磁碗Ⅵ類の底部である。推定高台径5.8㎝、高台高 1 ㎝を測る。出土グリット不明。

296は白磁碗㈦類の口縁部である。内面にハケ目文様が施されている。推定口径17.4㎝を測る。N12W 6 出土。

297は白磁碗㈧－ 2 類の口縁部である。N12W 6 出土。

298は白磁碗㈧－ 2 類の口縁部である。推定口径16.8㎝を測る。N13W 5 出土。

299は白磁碗㈧－ 2 類と思われる口縁部である。推定口径16㎝を測る。N13W 4 ・N14W 2 出土。

300は白磁碗㈧類と思われる口縁部である。推定口径16㎝を測る。N12W 6 出土。

301は白磁碗㈧類の底部である。推定高台径 6 ㎝、高台高0.8㎝を測る。N12W 6 出土。

（白磁皿）（第135図）

302は白磁皿Ⅰ類の口縁部である。推定口径10㎝を測る。N12W 6 出土。

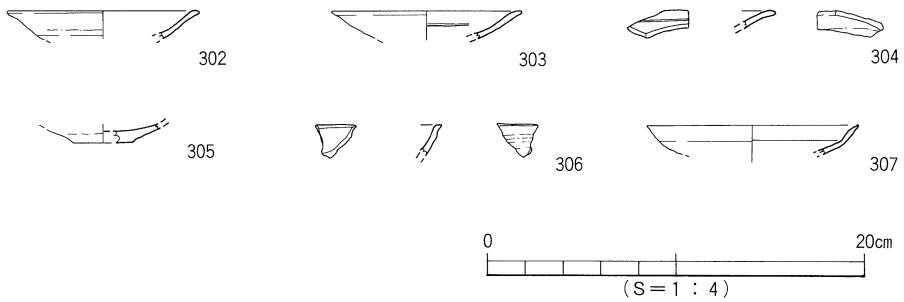
303は白磁皿Ⅱまたは㈢類の口縁部である。推定口径10㎝を測る。N13W 4 出土。

304は白磁皿Ⅱまたは㈢類の口縁部である。N14W 7 出土。

305は白磁皿Ⅳ類の底部である。推定底径3.2㎝を測る。N12W 7 出土。

306は白磁皿Ⅴ－ 2 類（広東産）の口縁部である。N15W 6 出土。

307は白磁皿Ⅵ－ 1 類の口縁部である。推定口径11㎝を測る。N13W 3 出土。



第135図　遺構外出土遺物実測図 ⑫

（青磁碗）（第136図、308～317）

308は龍泉窯系青磁碗０－？類または同安窯系青磁碗Ⅰ－ 1 b類の口縁部である。N12W 5 ・N13W 5 出土。

309は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－ 2 類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。N12W 6 出土。

310は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－ 2 類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。N12W 5 出土。

311は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の口縁部である。N13W 6 出土。

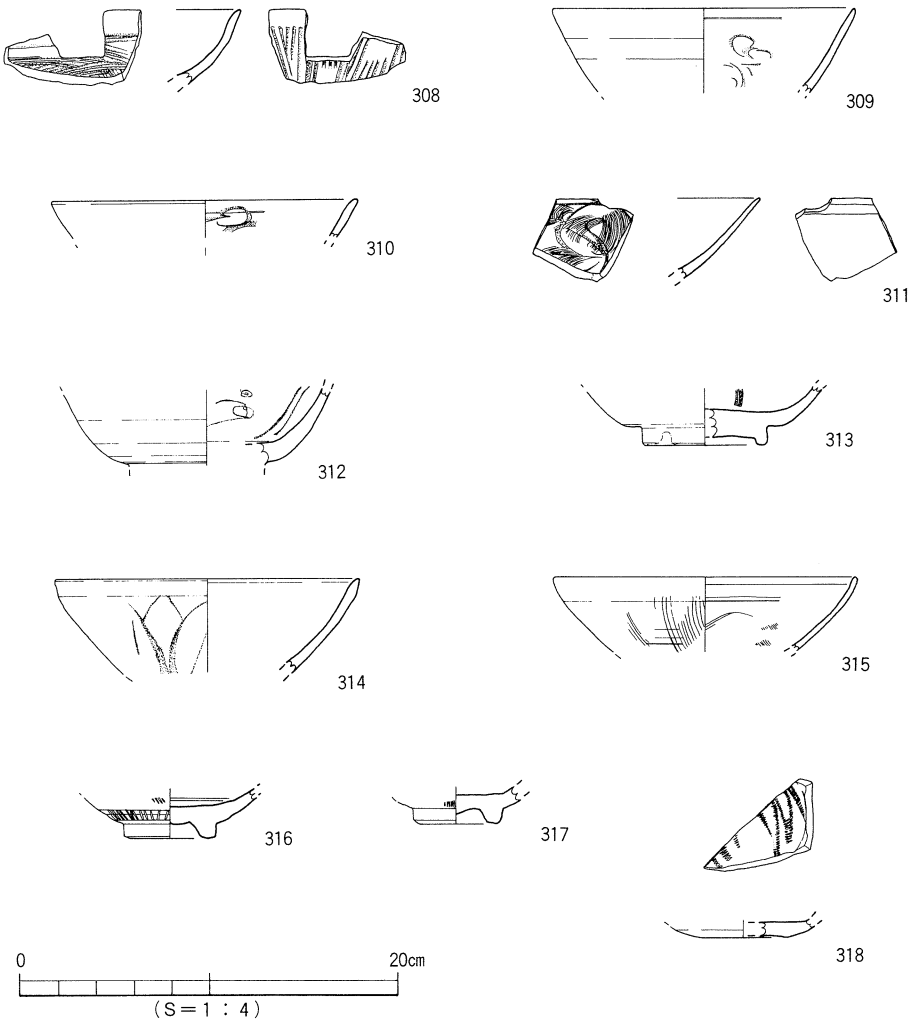
312は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類の体部片である。N12W 6 出土。

313は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類の底部である。高台径6.4㎝、高台高0.9㎝を測る。N12W 5 出土。

314は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。N12W 8 出土。

315は同安窯系青磁碗Ⅰ－1ｂ類の口縁部である。推定口径15.8㎝を測る。N12W 5 出土。

316は同安窯系青磁碗Ⅰ－1ｂ類の底部である。残存している外面には施釉されておらず、内面に浅黄色（5Y7/3）の釉がかかっている。推定高台径4.8㎝、高台高0.8㎝を測る。N12W 7 出土。



第136図　遺構外出土遺物実測図 (13)

317は同安窯系青磁碗Ⅰ－1類の底部である。推定高台径4㎝、高台高0.9㎝を測る。N12W2出土。

（青磁皿）（第136図、318）

318は同安窯系青磁皿Ⅰ－2類の底部である。推定底径4.6㎝を測る。出土グリット不明。

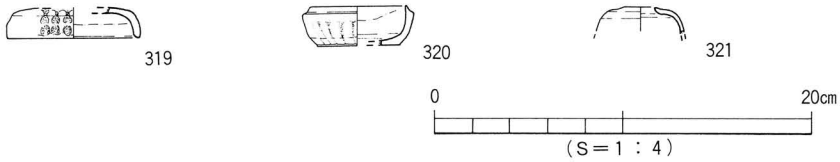
（青白磁合子）（第137図、319・320）

319は蓋である。推定口径7㎝を測る。出土グリット不明。

320は身である。推定口径5㎝を測る。N14W5出土。

（小壺）（第137図、321）

321は白磁小壺Ⅱ類（広東産）である。推定口径1.6㎝を測る。N14W6出土。



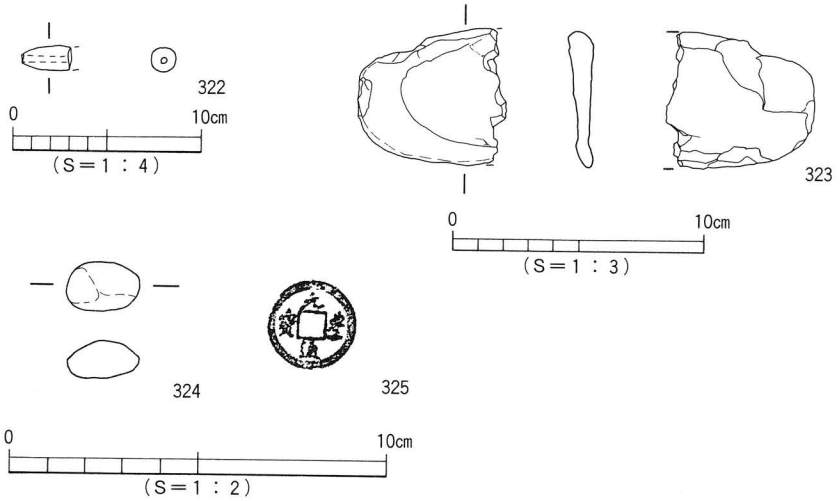
第137図　遺構外出土遺物実測図 (14)

＊土製品＊（第138図）

322は管状土錘である。半分が欠損している。残存長2.7㎝、直径1.2㎝、孔径0.4㎝を測る。N14W3出土。

＊石製品＊（第138図）

323は石庖丁である。緑色泥岩製で、約6㎝分しか遺存していない。弥生時代の遺物で紛れ込みと考えられる。N12W7出土。



第138図　遺構外出土遺物実測図 (15)

324は石英？製の不整形な石で、N12W２の焼土から出土している。長さ1.3㎝、幅1.9㎝、厚さ１㎝、重さ3.5ｇを測る。近年、同種の石が古代の土坑墓から出土している例がある(1)。

＊銭貨＊（第138図）

325は北宋銭「元豊通寶」で、外径2.35～2.37㎝、内径1.83～1.85㎝、孔径0.59～0.60㎝、重さ3.483ｇを測る。初鋳年は1078年である。順読、行書体である。N13W４出土。

[註]

(1)梅木謙一・宮内慎一・武正良浩・加島次郎　「樽味四反地遺跡２・３・４次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994

4　B地区の遺構と遺物

B地区は、調査地の西側にあたり、N13～15W19～34のグリットにおいて調査を行う。検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝22条、土坑9基、池状遺構1基、性格不明遺構6基である。出土遺物には、土師器椀・杯・小皿、和泉型瓦器椀・小皿、甕、土師質鍋、貿易陶磁器などが出土している。これら遺物は、主に13～14世紀にかけてのものである。

このB地区は、検出遺構や出土遺物から第7次調査B地区並びに南江戸闘目遺跡との関連が考えられる遺跡である。

1　土　層

調査区の基本土層は、第Ⅰ層～第ⅩⅡ層に分層できる。第Ⅰ層から第Ⅳ層までは江戸期の土層説明と同じである。第Ⅴ層以下はA地区の基本土層とは異にしている。ここでは、第Ⅴ層以下について説明する。

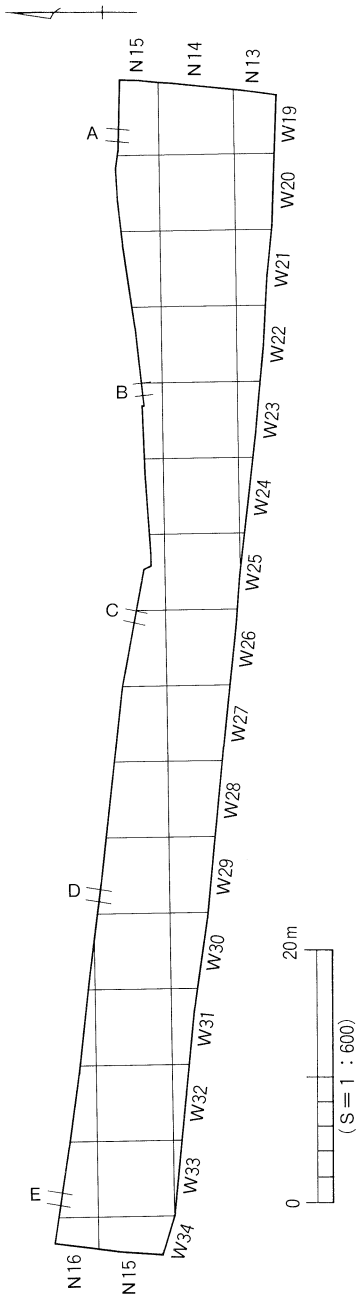
第Ⅴ層は、第Ⅳ層ならびに第Ⅵ層とは異にする土層で、調査区の西側ではみられなくなる。

第Ⅵ層上面には、第Ⅴ層との間に部分的な細砂の堆積がみられる。この細砂は牛などの足跡に堆積しているものである。第Ⅵ層には暈管状斑紋がみられるため、水田土層として認識される。調査地内の特に東側で顕著な足跡がみられた。時期的には中世、特に14世紀以降が考えられる。

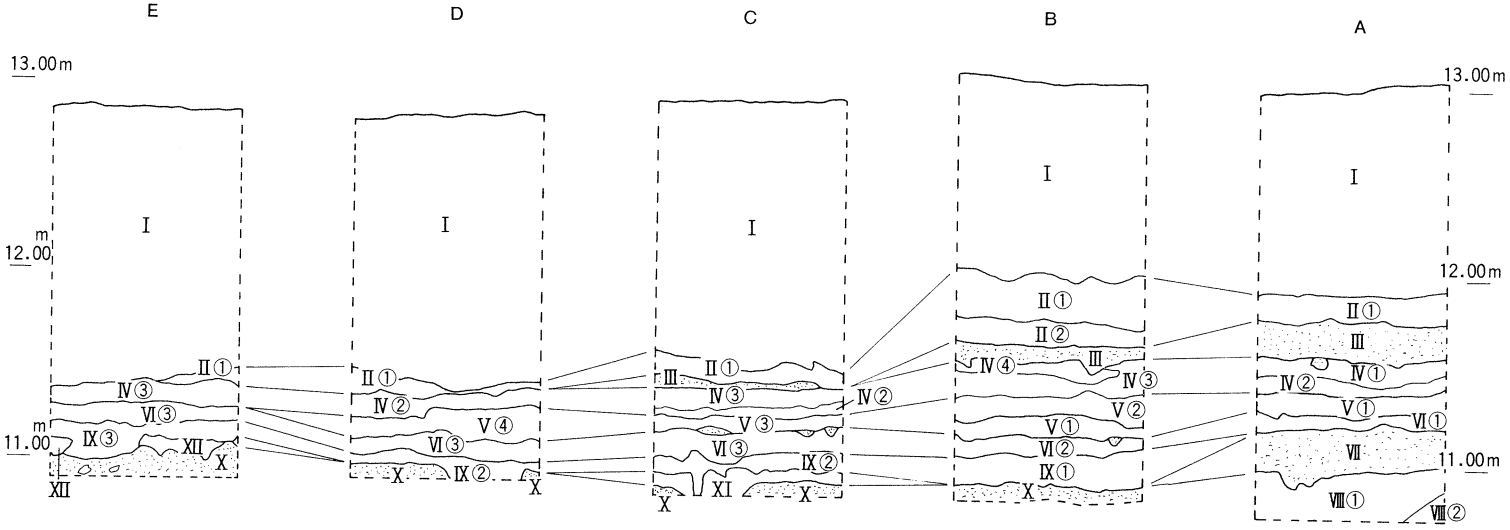
第Ⅶ層は、粗砂や礫を含む層で、洪水によって堆積していると思われる。

第Ⅷ層は、調査区の東側でしか確認されていない土層である。

第Ⅸ層は、中世の遺物を包含する土層である。この土層下で遺構を検出している。遺構は、特に西半分で



第139図　調査地グリット設定図

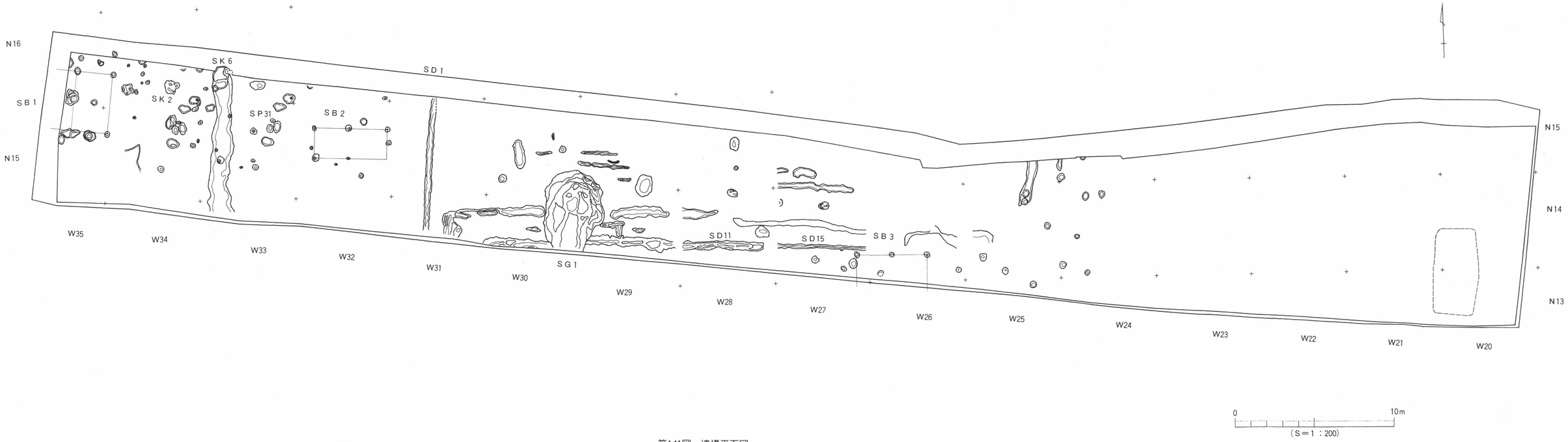


Ⅰ．造成土
Ⅱ①．旧耕作土
Ⅱ②．暗緑灰色（7.5GY 4/1）砂質土
Ⅲ．粗砂・中礫
Ⅳ①．暗褐色（N 3/0）粘土
Ⅳ②．褐色（7.5YR 4/4）粘質土
Ⅳ③．暗オリーブ灰色（2.5GY 4/1）砂質土
Ⅳ④．暗青灰色（5B 4/1）粘質土
Ⅴ①．暗オリーブ灰色（2.5GY 4/1）砂質土、暈管状斑紋あり
Ⅴ②．灰オリーブ灰色（7.5Y 5/2）粘土、　〃
Ⅴ③．黄褐色（2.5Y 5/3）シルト
Ⅴ④．灰黄褐色（10YR 5/2）シルト

Ⅵ①．黄灰色（2.5Y 4/1）粘質土
Ⅵ②．灰色（5Y 4/1）シルト
Ⅵ③．黄褐色（2.5Y 5/3）シルト
Ⅶ．粗砂・細礫
Ⅷ①．黒色（N 2/0）粘質土
Ⅷ②．暗緑灰色（10G 4/1）粘質土
Ⅸ①．黒褐色（2.5Y 3/2）粘質土（包含層）
Ⅸ②．黒色（10YR 2/1）粘質土（　〃　）
Ⅸ③．黒褐色（7.5YR 3/1）粘土（　〃　）
Ⅹ．粗砂・中砂
Ⅺ．青灰色（5B 5/4）粘質土
Ⅻ．黄灰色（2.5Y 5/4）粘質土

0　2 m
（S＝1：40）

第140図　基本柱状土層図


N16
N15
N14
N13
SB1
SK2
SK6
SP31
SB2
SD1
SG1
SD11
SD15
SB3
W35
W34
W33
W32
W31
W30
W29
W28
W27
W26
W25
W24
W23
W22
W21
W20
0
10m
(S＝1：200)

第141図　遺構平面図

検出される。

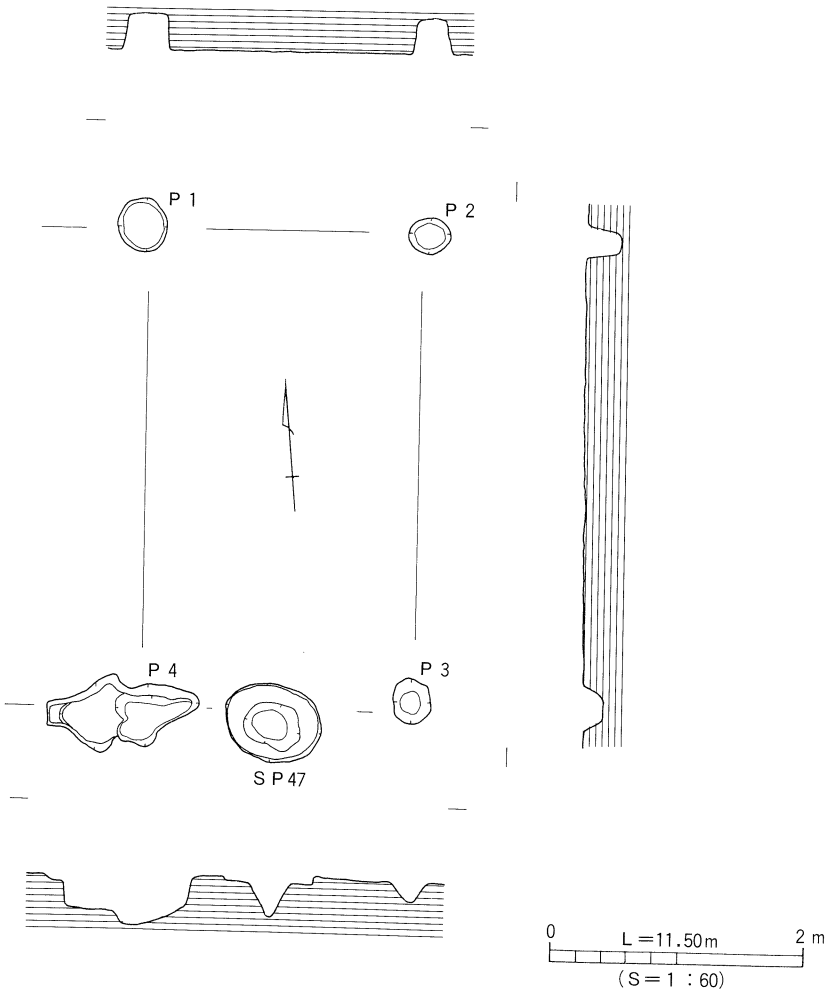
第Ｘ層は、粗砂や礫を含む土層で、洪水によって堆積している土層である。この層は、下層調査の最終沈殿池地区で検出された黒褐色粘土上に厚さ約1.5ｍ以上堆積している砂礫層の上部と考えられる。

Ｂ地区では、第ＸＩ層並びに第ＸＩＩ層の上面から遺構が検出されている。

2　掘立柱建物跡

（1）１号掘立柱建物跡（ＳＢ１）（第142図）

調査区の西側、N15・16W33・34に位置する。１×２間分を検出し、調査区外へ延びる可能性のある建物跡である。検出規模は、南北長約3.8m、東西長約2.16mを測り、床面積は約８㎡である。南北軸は東へ５度振れている。柱穴は、直径約30～40cmの円形プランで、深さ約20～40cmを測る。ただし、ＳＰ４は柱の抜き取りが行われているため平面形は不整形である。ＳＰ１・３・４の埋土は黄褐色(2.5Y5/4)粘質土を主に、ＳＰ２は黒褐色(10YR3/2)

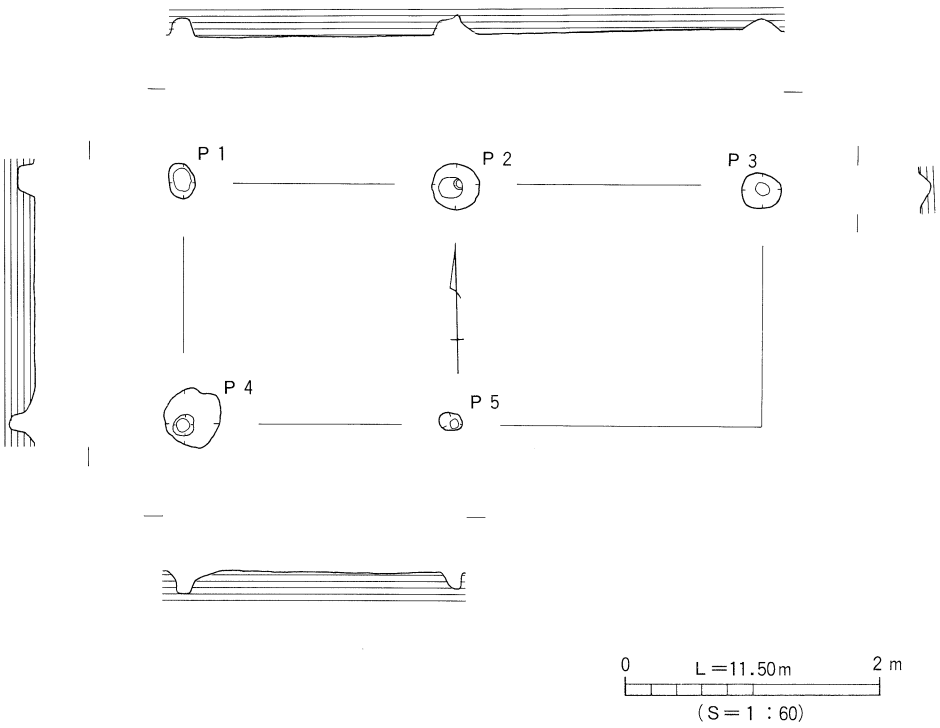


第142図　ＳＢ１測量図

粘質土である。柱穴からは、土師器杯片などが出土しているが、細片のため実測できない。

（2） 2号掘立柱建物跡（ＳＢ２）（第143図）

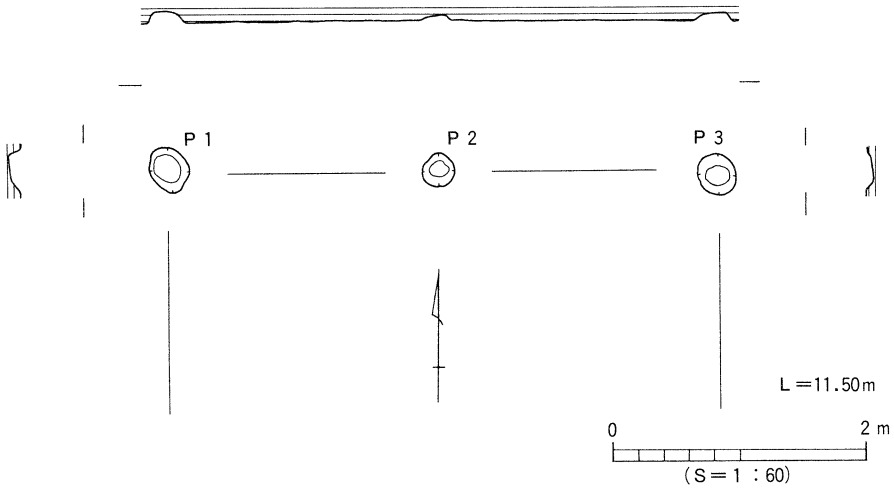
Ｎ15W31に位置する梁行１間×桁行２間の東西棟である。南東角の柱穴は検出できなかった。規模は、梁行約1.9ｍ、桁行約4.6ｍを測り、床面積は約8.74㎡である。主軸は南へ２度振れている。柱穴は、直径約15～50㎝の円形プランで、ＳＰ５のみ小規模である。深さ約10～25㎝を測る。ＳＰ１・２・３の埋土は暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土を主に、ＳＰ４・５は黒褐色（10ＹＲ3/1）粘質土である。柱穴からは、土師器・瓦器などの破片が出土しているが、細片のため実測できない。



第143図　ＳＢ２測量図

（3） 3号掘立柱建物跡（ＳＢ３）（第144図）

N14W25・26に位置している。東西２間分を検出し、調査区外へ延びる可能性がある。規模は、東西長約4.38ｍを測る。東西軸は磁北に直交している。柱穴は、直径約30㎝前後の円形プランで、深さ約10㎝を測る。柱穴の埋土は、灰色（N5/0）シルトである。柱穴からは、土師器片が出土しているが、細片のため実測できない。



第144図　ＳＢ３測量図

3　土坑状遺構

調査区では、９基検出した。その中でも、ＳＫ２とＳＫ６について説明する。

（１）ＳＫ２（第145図）

Ｎ16W33において検出した。東西長約１ｍ、南北長約80㎝、深さ約34㎝を測る。平面形は東側に一部突出しているがやや隅丸長方形に近いものである。埋土は暗灰黄色（2.5Ｙ4/2）粘質土を主にしている。灰が一面に堆積し、その上面から土器、焼土、炭化材などが出土している。検出した灰から試料サンプルを採取し、花粉分析を行っている。その結果は、『古照遺跡－第７次調査－』報告書に掲載している。

出土遺物（第146図）

326は土師器杯でほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。口径13.3㎝、器高3.6㎝、底径８㎝を測る。

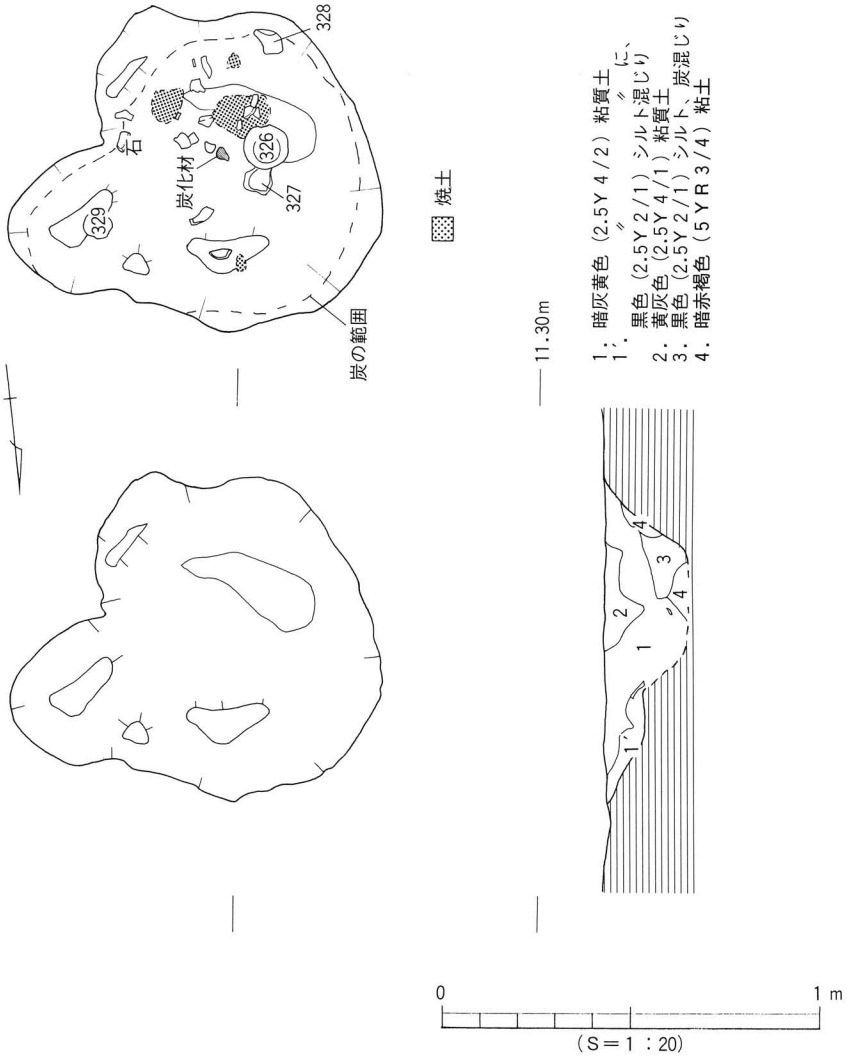
327は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径12.8㎝、器高3.1㎝、底径7.7㎝を測る。

328は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径13㎝、器高3.2㎝、底径7.6㎝を測る。

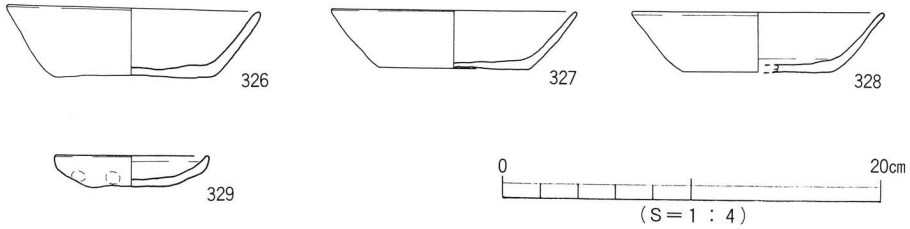
329は土師器小皿の完形品で、手づくね成形されているため指頭圧痕が外底面にみられる。口径7.8㎝、器高1.7㎝を測る。

（２）ＳＫ６（第147図）

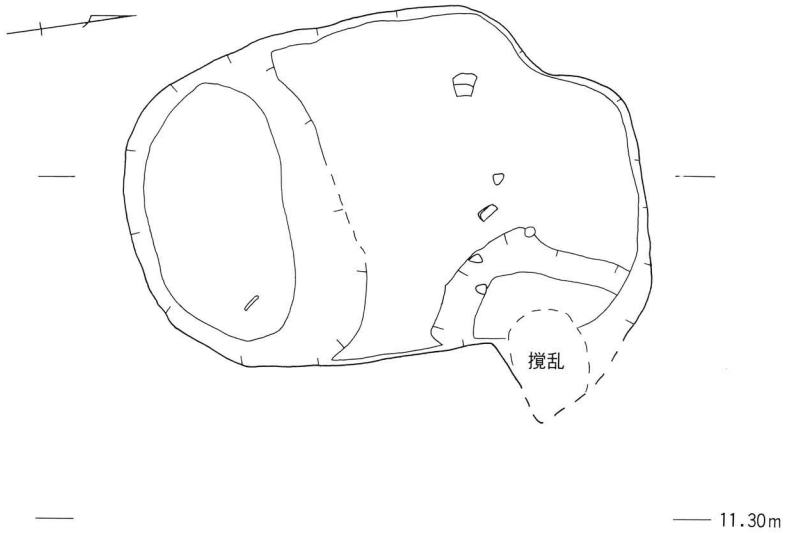
Ｎ16W32においてＳＤ２を切って検出した。長軸約1.35ｍ、短軸約90㎝、深さ約21㎝を測る。北東部は攪乱を受けているが、平面形は隅丸長方形に近い。埋土は上層に明褐色（7.5ＹＲ5/6）土が、下層には粗砂が堆積している。その粗砂層の間層に灰または炭層が堆積している。土坑内からの遺物には土師器片があるが、細片のため実測できない。

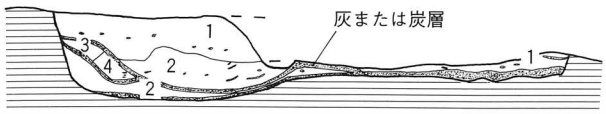


第145図　ＳＫ２測量図



第146図　ＳＫ２出土遺物実測図





1．明褐色（7.5ＹＲ５/６）土
2．明緑灰色（7.5ＧＹ７/１）粗砂（オリーブ灰色（５ＧＹ６/１）土混じり）
3．オリーブ灰色（５ＧＹ６/１）粗砂
4．明紫灰色（５ＰＲ６/１）粗砂

0　1 m
（S＝1：20）

第147図　ＳＫ６測量図

4　溝状遺構

調査区では、22条検出した。ＳＤ１は第Ⅱ層（旧耕作土）直下から掘られている溝である。以下、実測できる遺物を出土したＳＤ11・15についてのみ説明する。

（１）ＳＤ１１（第148図）

Ｎ14Ｗ27において検出した。東西長約5.1ｍ、幅約50㎝、深さ約10～20㎝を測り、断面形は「Ｕ」字またはレンズ状を呈し、底面には凹凸がみられる。このＳＤ11は、ＳＤ15・18などと連続していた可能性もある。ＳＤ11からは、土師器片、白磁碗ＶまたはⅧ類の口縁部片１点、白磁碗の体部片１点などが出土している。

出土遺物（第149図、330）

330は白磁碗Ⅳ－１ａ類の底部である。推定高台径6.6㎝、高台高0.8㎝を測る。

（２）ＳＤ１５（第148図）

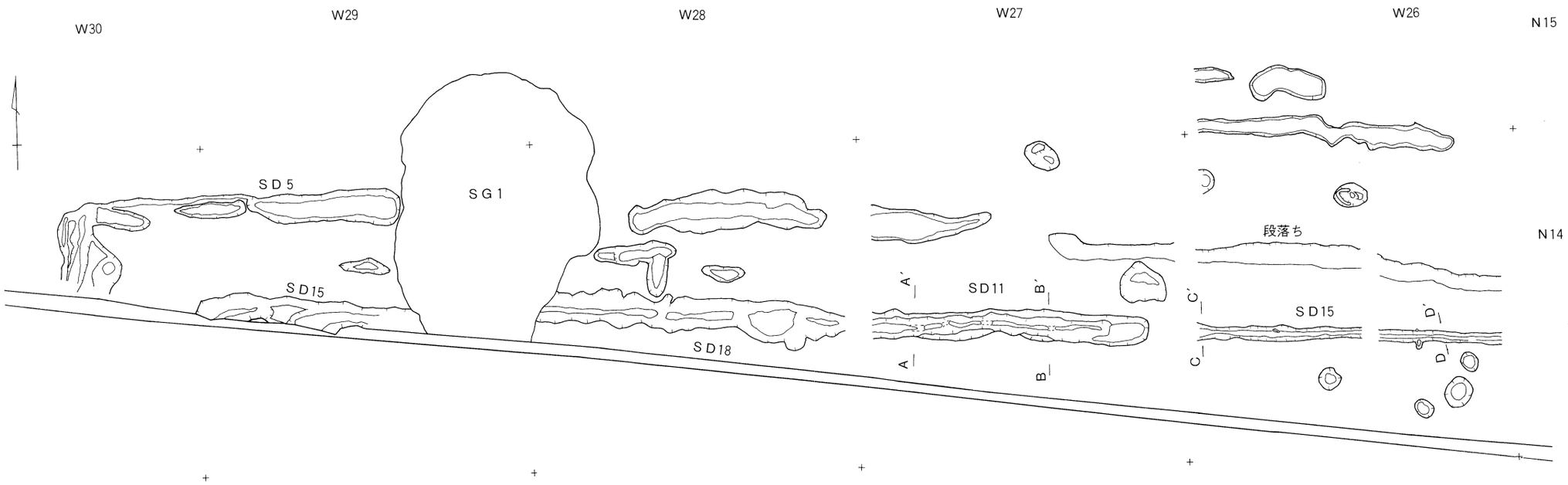
Ｎ14Ｗ26において検出した。東西長約5.5ｍ、幅約30㎝、深さ約10㎝を測り、断面形はレンズ状または逆台形状を呈している。溝からは、土師器片、白磁碗Ⅷ類の底部片１点、白磁皿Ⅵ類の底部片１点、同安窯系青磁碗Ⅰ－１ｂ類の体部片１点、青白磁皿の口縁部片１点などが出土している。

出土遺物（第149図、331～333）

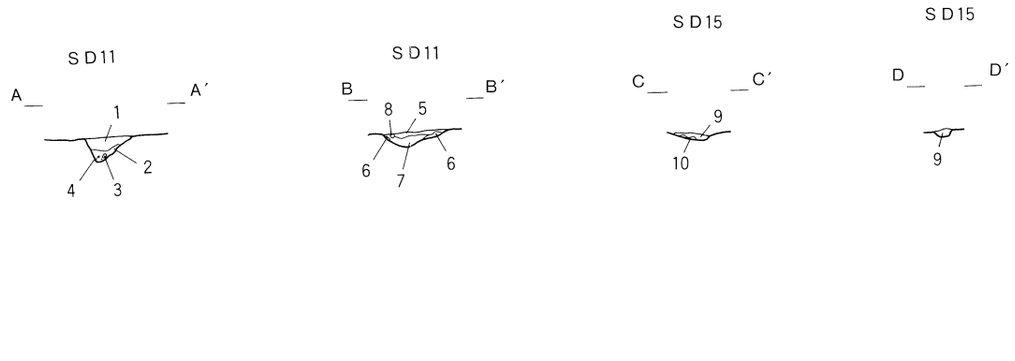
331は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径12㎝、器高2.8㎝、底径７㎝を測る。

332は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕がみられる。推定口径12.6㎝、器高3.9㎝、底径7.3㎝を測る。

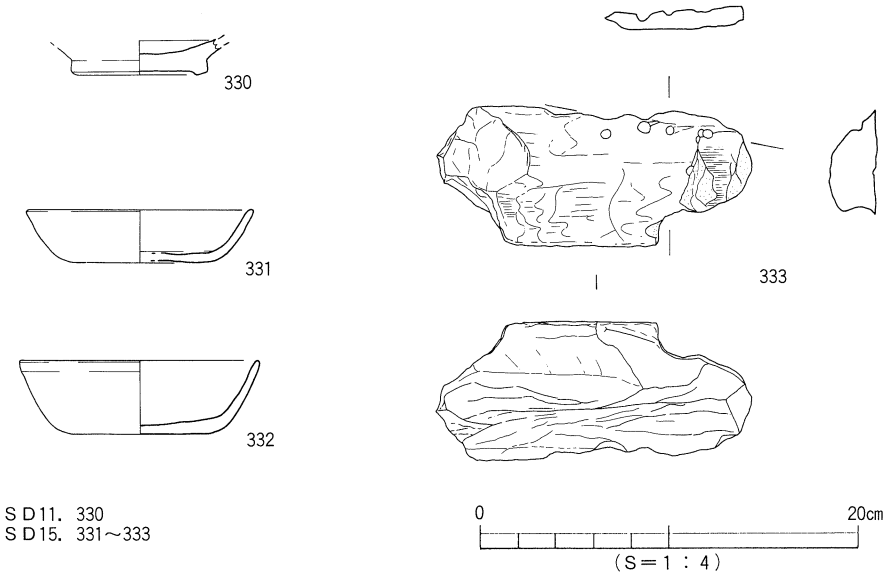
333は緑泥片岩製の石製品である。表面には直径約５㎜の未完孔が４ケ所と剥離している部分に４ケ所、また、別に直径約２㎝の円孔が剥離端にみられる。おそらく、穿孔の練習用製品で、弥生時代のもので紛れ込みである。



1．オリーブ黒色（7.5Y 3/1）粘土～粘質土
2．暗灰色（N 3/0）粘土～粘質土
3．緑灰色（7.5GY 6/1）シルト
4．灰白色（10Y 7/1）中砂～粗砂
5．灰色（7.5Y 4/1）粘質土
6．灰白色（10Y 6/1）中砂
7．オリーブ黒色（10Y 3/1）粘質土
8．灰色（7.5Y 6/1）粘質土
9．灰色（N 4/0）粘質土
10．灰色（N 6/0）砂質土



第148図　SD11・15測量図



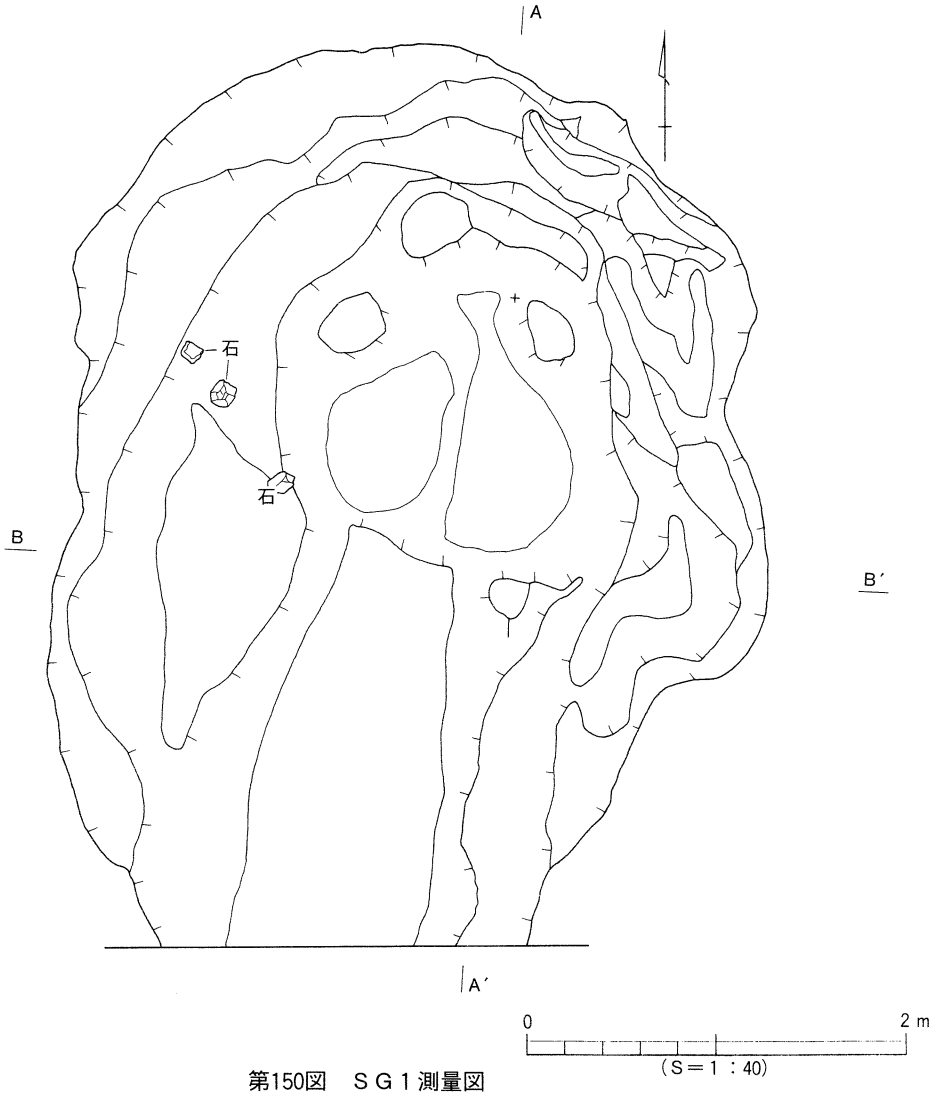
ＳＤ11．330
ＳＤ15．331～333

第149図　ＳＤ11・15出土遺物実測図

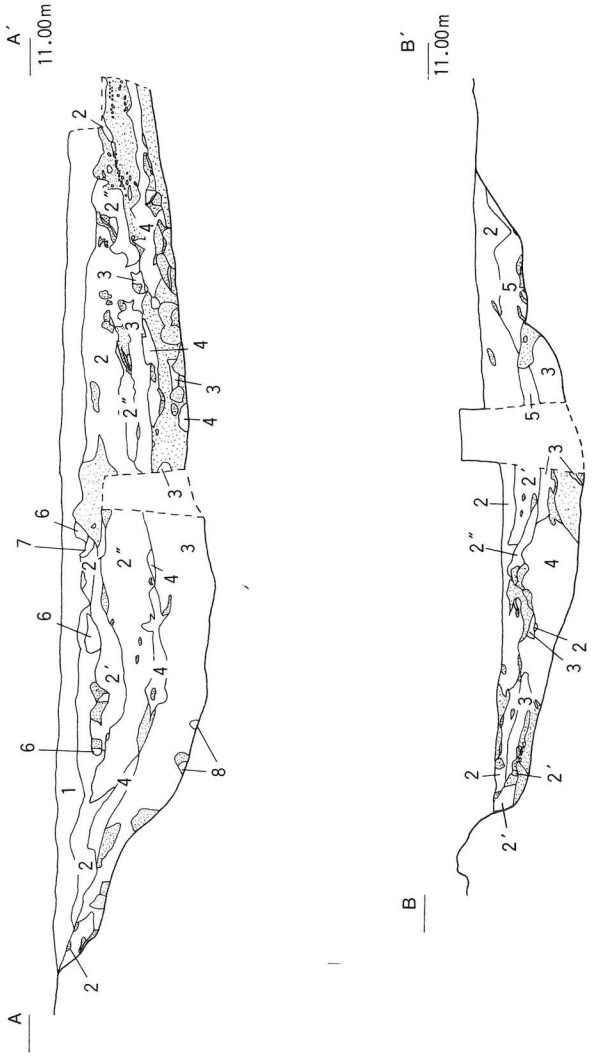
5　池状遺構

（1）ＳＧ１（第150・151図）

Ｎ14・15W28・29において検出した。南側の調査区外へ延びる可能性がある。検出南北長約4.8ｍ、東西長約3.7ｍ、深さ約60～70㎝を測る。埋土からは土師器、瓦器、貿易陶磁器の細片が出土している。特に貿易陶磁器は、白磁皿Ⅳ類の底部片１点、同安窯系青磁碗Ｉ－１ｂ類の体部片２点、同安窯系青磁皿Ｉ類？の口縁部片１点、白磁碗Ⅳ類の体部片１点、白磁碗体部片１点が挙げられる。



第150図　ＳＧ１測量図



1．暗灰黄色（2.5Y 5/2）シルト
2．　〃　（2.5Y 4/2）砂質土
2′．　〃　〃　シルト
2″．　〃　〃　砂質土に、粗砂混じり
3．黒褐色（10YR 2/2）粘質土～粘土
4．黒色（5Y 2/1）粘質土
5．灰色（5Y 4/1）粘質土
6．黒褐色（10YR 3/2）粘質土
7．暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）粘質土
8．灰色（N 4/0）粘質土

砂礫

0　2 m
（S＝1：40）

第151図　ＳＧ１土層図

6　柱穴状遺構

調査区で63基検出した。

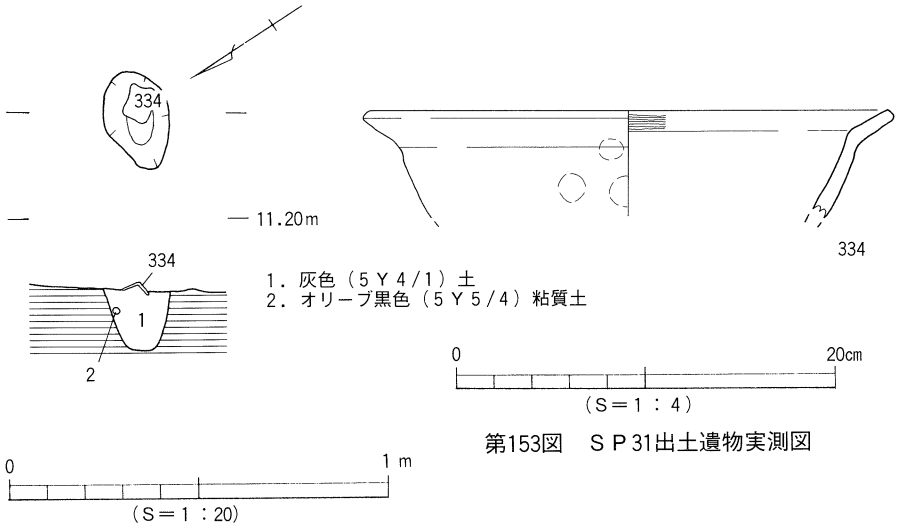
以下、実測できる遺物を出土したＳＰ31についてのみ説明する。

（1）ＳＰ３１（第152図）

Ｎ15Ｗ32において検出した。長軸約26㎝、短軸約18㎝、深さ約15㎝を測り、平面形は楕円形である。埋土は灰色（5Ｙ4/1）シルト～砂質土である。遺物は、遺構検出時に上面から出土している。

出土遺物（第153図）

334は土師質鍋の口縁部である。口縁内面には横方向のハケ目が施されている。推定口径28㎝を測る。



第153図　ＳＰ31出土遺物実測図

第152図　ＳＰ31測量図

7　遺構外出土遺物（第154・155図）

以下、実測できた遺物について説明する。

＊土師器杯＊（第154図、335）

335は中空の円柱状の底部を呈する杯である。孔の直径約2.6㎝、底径6.4㎝、底部高3.1㎝を測る。N15W29出土。

＊土師器小皿＊（第154図、336～339）

336はほぼ完形品である。底部の切り離しは回転糸切りである。外面は二次焼成を受けているためか桃色を呈している。口径8.4㎝、器高1.8㎝、底径5.2㎝を測る。N15W29出土。

337の底部の切り離しは回転糸切りである。推定口径８㎝、器高1.3㎝、底径4.8㎝を測る。N15W31出土。

338は手づくねである。推定口径8.2㎝、器高1.4㎝を測る。N16W31出土。

339は手づくねである。推定口径８㎝、器高1.1㎝を測る。N15W31出土。

＊瓦器椀＊（第154図、340・341）

340は推定口径15㎝を測る。N15W27出土。

341の内面には横方向の磨きが施されている。断面四角形の低い高台が貼り付けられている。推定口径15㎝、器高4.6㎝、高台径5.4㎝を測る。N16W34出土。

＊甕＊（第154図、342～344）

342は口縁部である。焼成は瓦質で、全体に灰色（N5/0）を呈している。外面には斜め方向のハケ目が部分的に施されている。推定口径30㎝を測る。魚住窯のものと思われる。N15W27出土。

343は口縁部である。全体に焼成は不良でやや軟質で瓦質に近いものである。推定口径27㎝を測る。亀山焼系と思われる。N15W31出土。

344は口縁部で須恵質のものである。外面に若干の格子叩きの痕跡がみられる。焼成はやや不良のため灰色(5Y6/1)を呈している。推定口径30㎝を測る。亀山焼系と思われる。N14W30出土。

＊土師質鍋＊（第154図、345）

345は、外面底部近くにハケ目が施されている。推定口径37.1㎝を測る。N15W28出土。

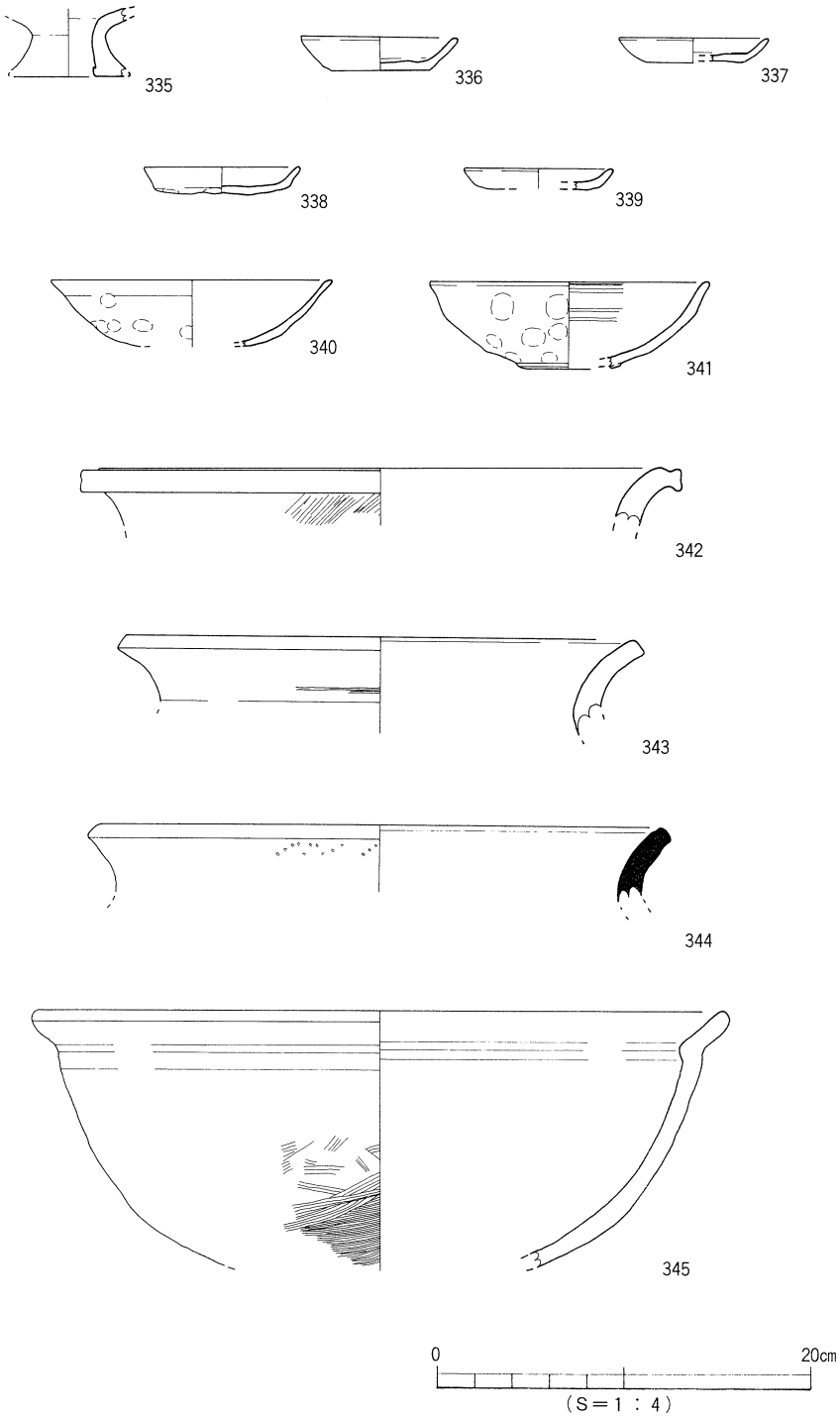
＊貿易陶磁器＊（第155図、346～364）

346は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径16㎝を測る。N15W28出土。

347は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。推定口径17㎝を測る。N15W28出土。

348は白磁碗Ⅴ－２類の口縁部である。推定口径17㎝を測る。N15W28出土。

349は白磁碗Ⅴ－４類またはⅧ類の口縁部である。推定口径18.2㎝を測る。N16W32出土。



第154図　遺構外出土遺物実測図(1)

350は白磁碗Ｖ類の底部である。推定高台径6.2㎝、高台高1.2㎝を測る。N14W27出土。

351は白磁碗ＸＩ類の底部である。推定高台径6.6㎝を測る。N15W28出土。

352は白磁皿Ｖ類（広東産）の底部である。推定底径４㎝を測る。N15W26出土。

353は龍泉窯系青磁碗Ｉ－４ｂ類の口縁部である。推定口径14.8㎝を測る。N14W24出土。

354は龍泉窯系青磁碗Ｉ－２類の口縁部である。N15W28出土。

355は龍泉窯系青磁碗Ｉ類の底部である。内面に３ケ所の目跡がある。推定高台径5.6㎝、高台高0.7㎝を測る。N14W26出土。

356は龍泉窯系青磁杯Ⅲ－１類の口縁部である。推定口径11.2㎝を測る。N14・15W23・24出土。

357は同安窯系青磁碗Ｉ－１ｂ類の口縁部である。N15W28出土。

358は同安窯系青磁碗Ｉ－１ｂ類の底部である。推定高台径4.8㎝、高台高0.7㎝を測る。N15W30出土。

359は同安窯系青磁碗Ｉ－１類の底部である。推定高台径５㎝、高台高0.8㎝を測る。N14W36出土。

360は同安窯系青磁碗Ｉ－１ｂ類の底部である。推定高台径５㎝、高台高0.6㎝を測る。N14W29出土。

361は同安窯系青磁皿Ｉ－２類である。推定口径11㎝、器高2.3㎝、底径５㎝を測る。N15W28出土。

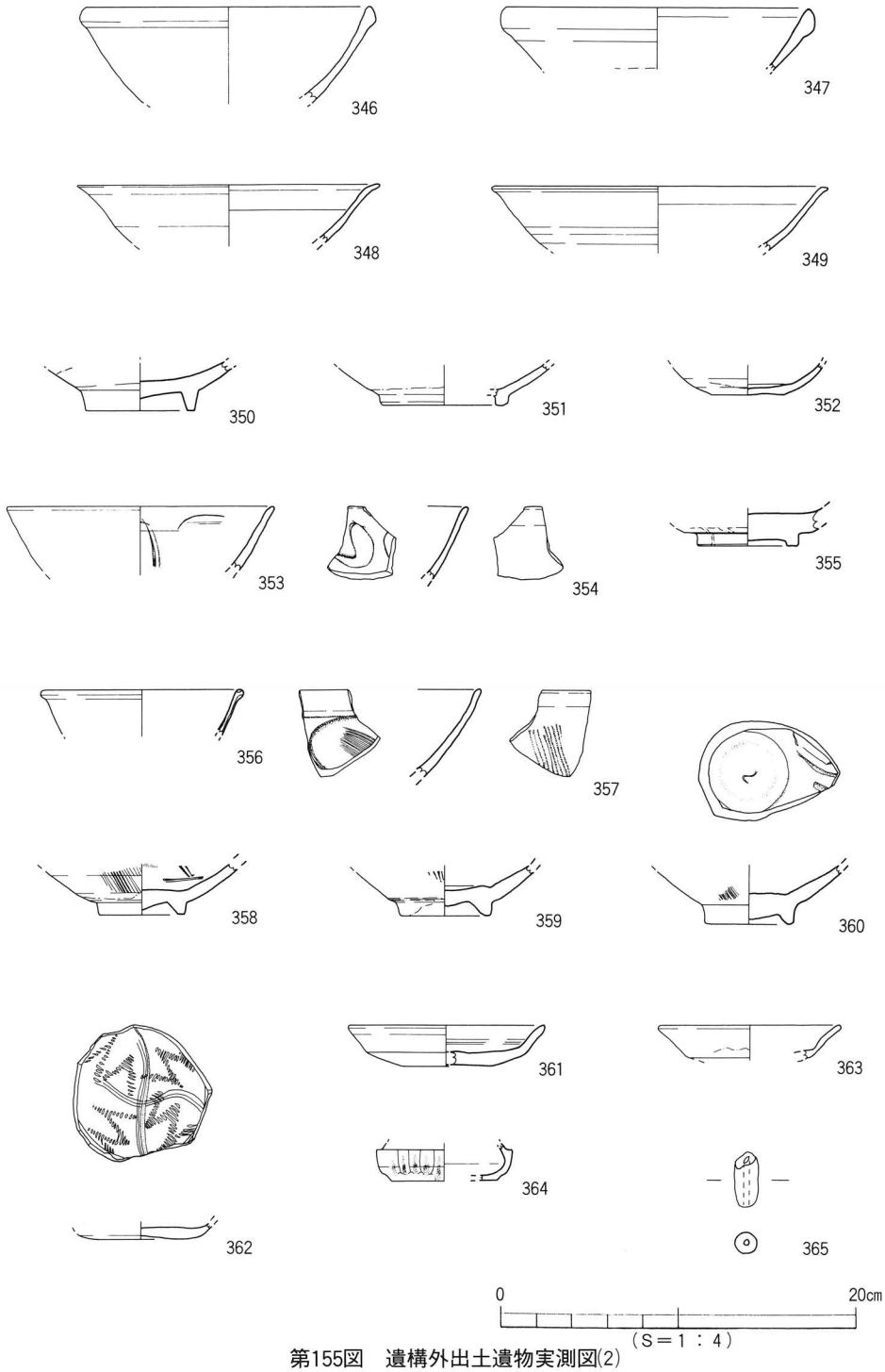
362は同安窯系青磁皿Ｉ－２類の底部である。推定底径5.2㎝を測る。N14W24出土。

363は同安窯系青磁皿Ｉ類の口縁部である。推定口径10㎝を測る。N15W28出土。

364は青白磁合子の身である。推定底径5.2㎝を測る。N15W33出土。

＊土製品＊（第155図、365）

365は管状土錘である。残存長約3.1㎝、径約1.3㎝、孔径0.3㎝、重さ4.3ｇを測る。N16W33出土。



第155図　遺構外出土遺物実測図(2)

Ⅳ　第８次下層調査の概要

１　調査の経過

本調査では、下水処理施設の名称を調査区名称として用い、西側から最終沈殿池地区（略「終沈区」）、エアレーションタンク地区（略「エアタン区」）、最初沈殿池地区（略「初沈区」）とする。

本調査地の堆積土層の測量については、北壁側で矢板が露出しているため、掘削工事の「のり勾配」を残している南壁と西壁を測量・図化する。

調査のためのグリットは、上層と同様の６ｍグリットを使用する（第５図）。

古墳時代前期の「井堰」と同等の深さ（標高約８ｍ）の調査を主目的として、平成４年11月12日から、終沈区西端より掘削を開始する。

（１）最終沈殿池地区

調査区では、標高約9.5ｍ前後で黒褐色粘土を検出し、この粘土上で杭列、植物遺体、人・牛の足跡などを検出する。調査区の東側、この黒褐色粘土の東肩部から東にかけては河川の攻撃斜面として鋭角に粘土が削り取られ、また、ブロック状に粘土の崩落がみられる。

黒褐色粘土を被覆する砂礫層からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。

（２）エアレーションタンク地区

調査区の掘削は、終沈区終了後、続けて行う。調査区西側部分には、終沈区から続くブロック状粘土が堆積し、河川の影響がみられる。この砂礫層の中には、小自然堤防と考えられる帯状の東西に伸びる２列の黒色～黒褐色砂質土層があり、この土層中から弥生時代の壺・支脚が出土している。調査区西側の砂礫層からは、木杭、流木、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。

調査区のほぼ中央から東にかけて緑灰色粘土を標高約8.4～9.6ｍで検出する。この緑灰色粘土は、東につれて高くなっている。粘土上には、溢流痕跡、炭化木片が密集する部分１ケ所などを検出する。

この粘土は、調査区の東側、ちょうど溢流堆積部分から東にかけて急激に落ち込み、河川に伴う自然堤防と想定できる（河川の西岸として）。その東岸は、初沈区へ続くものと考えられる。また、この粘土の東肩部の溢流堆積の砂層から完形の甕２点と鉢５点が出土する。

緑灰色粘土を被覆する砂礫層からは、縄文土器、弥生土器を出土している。

（3）最初沈殿池地区

平成５年１月12日から、初沈区の掘削を始める。この地区の工事基底高は、西端が標高約9.5ｍで東に徐々に傾斜する基底高となる。調査区の東端は東西幅約７ｍ分が管廊部であり標高約８ｍまでが基底高である。

掘削中に黒色粘土から土師器甕が出土したため、この部分を重点的に残す。溝状遺構であることが精査によってわかる。この溝の黒色粘土から東にかけては、徐々に基底高まで掘り下げしながら調査区の中央西寄りで緑灰色粘土を標高約9.4ｍ前後で検出する。この緑灰色粘土上には、破堤痕跡や人の足跡を検出する。緑灰色粘土の東端は、下降して砂礫層が堆積しており、ここに河川が存在していたものと考えられる。

緑灰色粘土を被覆する砂礫層からは、縄文土器、弥生土器を出土する。

＊屋外調査期間：平成４年11月12日～平成５年３月31日

＊実施面積：3,690㎡

2　土　層

南壁で観察された土層は、砂礫層を主体とする河川または洪水氾濫などによる堆積層である。終沈区では、この堆積層に大きな変化は特にみられない。エアタン区西側約104ｍ地点までは、終沈区から連続して細砂層が標高約10ｍ前後に堆積している。

以下、堆積層の中で特徴的に観察し得た層について述べる。

エアタン区の74ｍから80ｍにかけては、標高約９ｍ前後にブロック状の黒褐色粘土の堆積がみられる。

104ｍから116ｍにかけては、標高約９ｍ以下に中砂・粗砂・粘質土などがレンズ状に観察でき河川（河道）の存在が考えられる（河底は標高約7.5ｍ）。この河川以前の砂礫に埋没した自然堤防と考えられる緑灰色（10Ｇ6/1）シルト～粘土が東側にひろがる。埋没させている砂礫は約146ｍ地点で緑灰色粘土の高まりとともに途切れている。

115ｍから120ｍにかけては、標高約10～11ｍにかけてラミナが観察され、ここにも河川が考えられる（河底は標高約7.5ｍ）。

この河川の東約126ｍから古墳時代中期前半の黒褐色（2.5Ｙ3/1）シルト～粘土が堆積している（第９・10次調査の土層と対応している）。この黒褐色粘土上には溢流堆積層（層厚約40㎝）が被覆している。この黒褐色粘土と溢流堆積層は東約198ｍ地点まで連続して堆積している。この198ｍ地点は、古墳時代後期以降の河川によって途切れている。

前述の古墳時代中期の黒褐色粘土は、約134ｍ地点で標高約10.5ｍと高くなり、約145ｍから155ｍ地点は窪み状に下がっている。155ｍ地点から徐々に高まりがみられ、163ｍ～171ｍの間にまた窪み状に下がっている。この二ケ所の窪み状は下層の緑灰色粘土自然堤防の高まりと溢流堆積との関係で捉えられるものと思われる。

163ｍ～171ｍの窪み状の下層に初沈区ＳＤ１が存在している。

146ｍ（緑灰色粘土の東肩）～181ｍまでの間、標高約９ｍ以下には溢流堆積層が厚く堆積している。この溢流堆積層に河川が想定され得るものである。

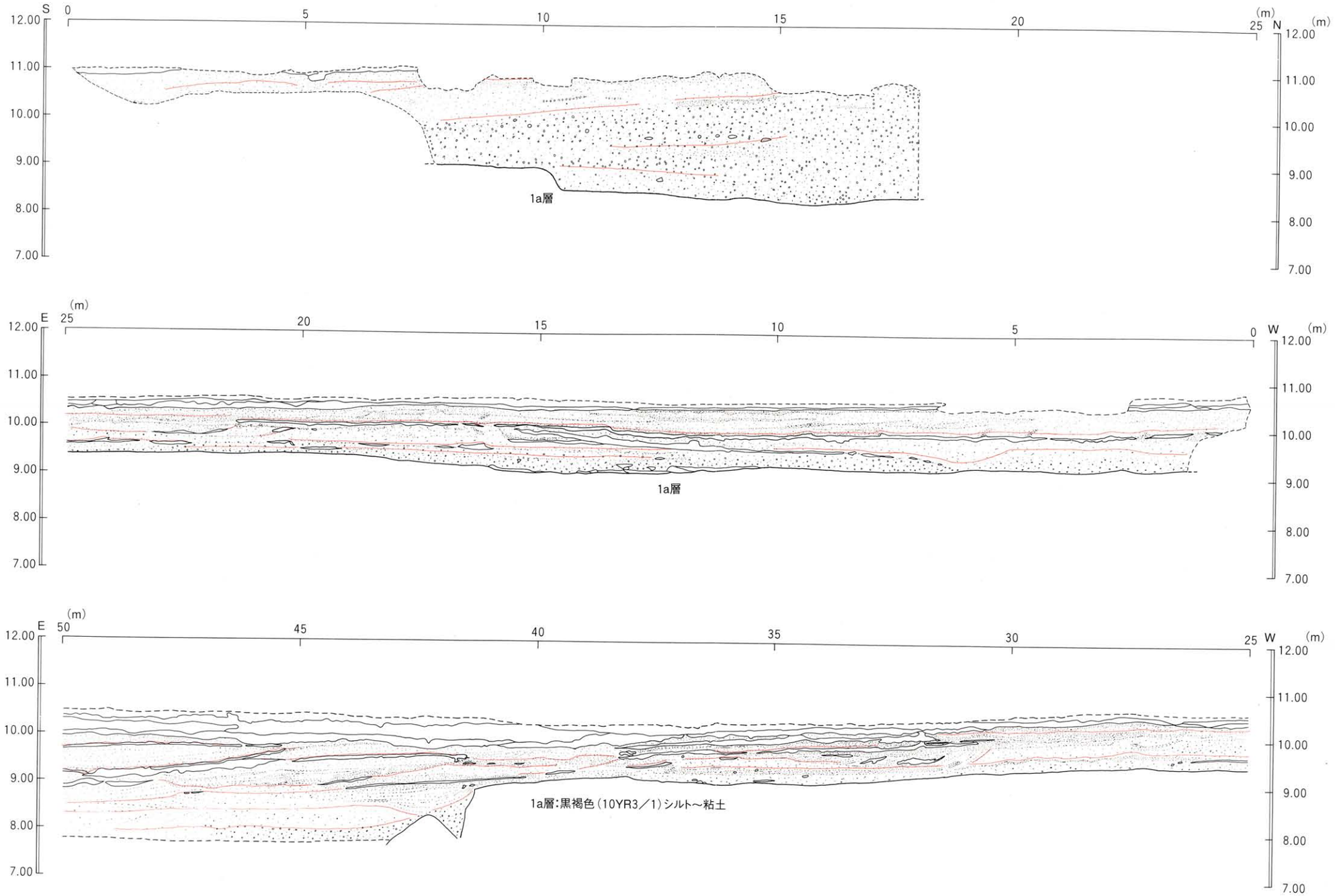
初沈区のＳＤ１（古墳時代前期）と同時期の粘土層は、約183ｍ地点から以東、古墳時代中期前半の黒褐色粘土の下部（標高約10ｍ前後）に堆積し始めている。

古墳時代前期の粘土層と初沈区の緑灰色粘土との間には溢流堆積層と砂礫層が堆積している。

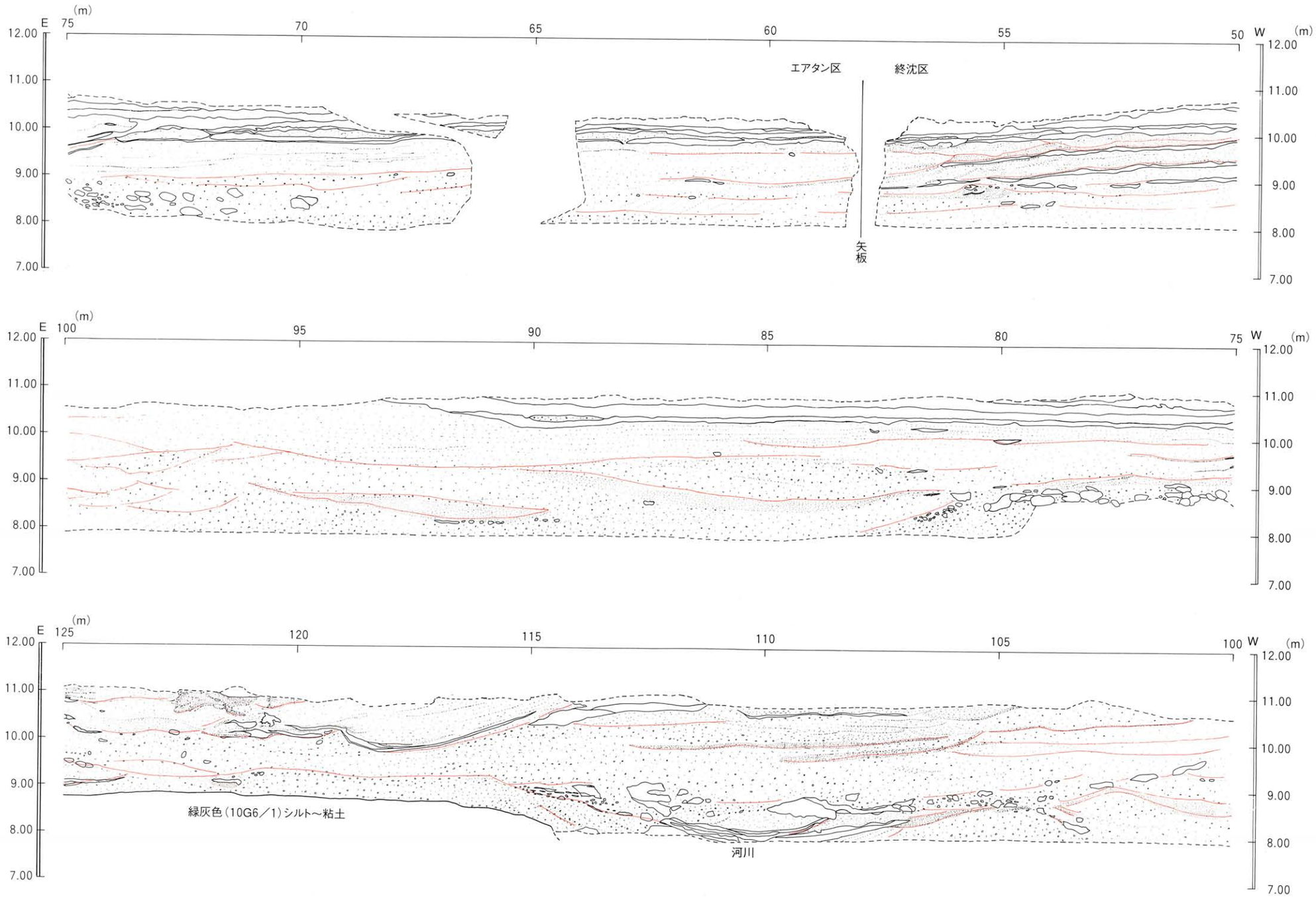
古墳時代中期前半の黒褐色粘土は、171ｍ～200ｍ付近まで約30㎝の高低差をもって若干東へ高くなって堆積している。前述しているが、200ｍ付近から東西6.3ｍ幅の河川がこの粘土と溢流堆積層を切っている（河底標高約9.5ｍ）。また、208ｍ以東にも河川がこの粘土層を切っている（河底標高約9.6ｍ）。この２条の河川は古墳時代後期以降の河川と思われる。

層序から、エアタン区の溢流堆積層（146ｍ～181ｍまでの間）とエアタン区・初沈区の緑灰色粘土を被覆する砂礫層には、若干の時期差をもって堆積していると考えられる。

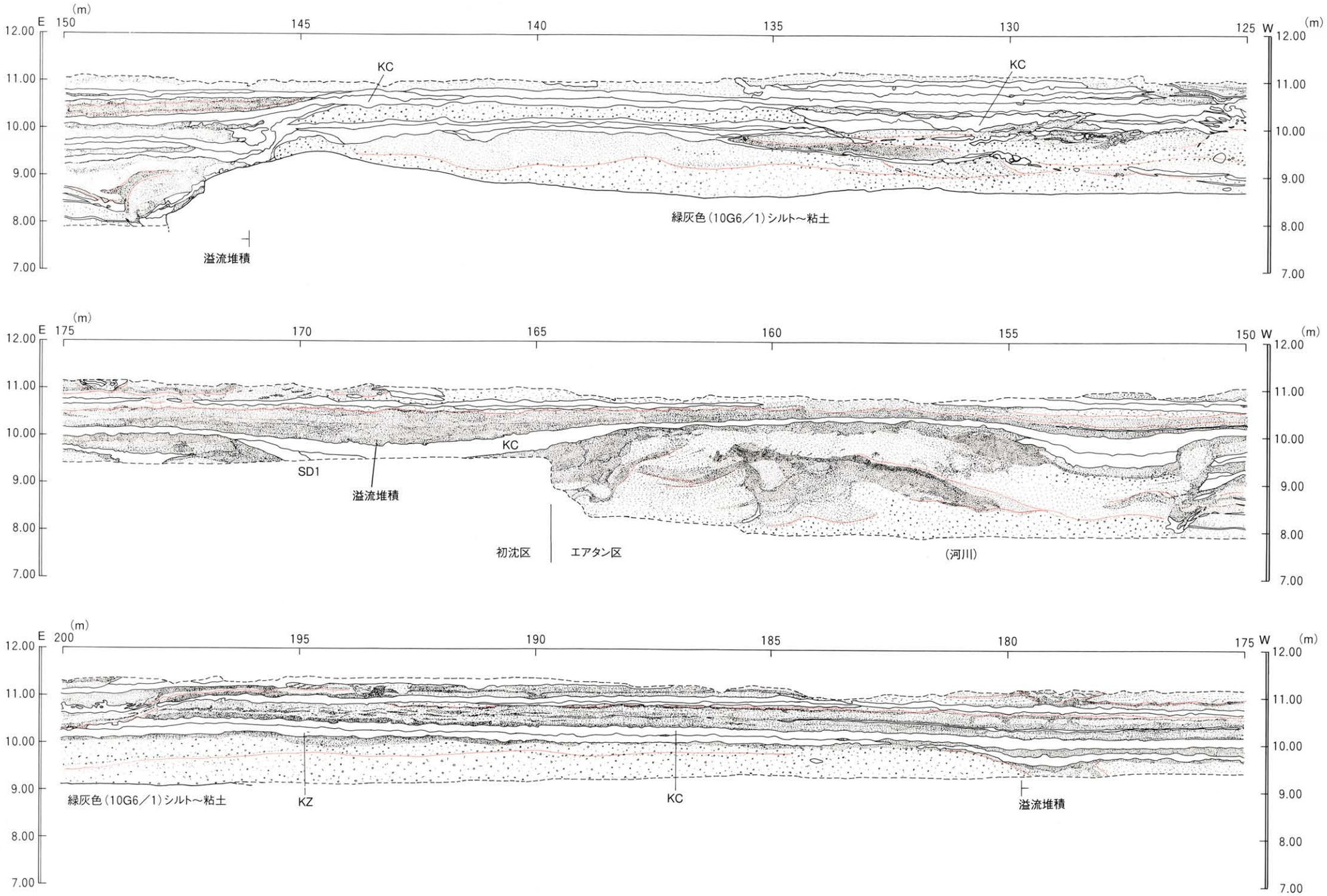
また、エアタン区の溢流堆積層（146ｍ～181ｍまでの間）とＳＤ１には、出土遺物からも時期差があることが確実である。



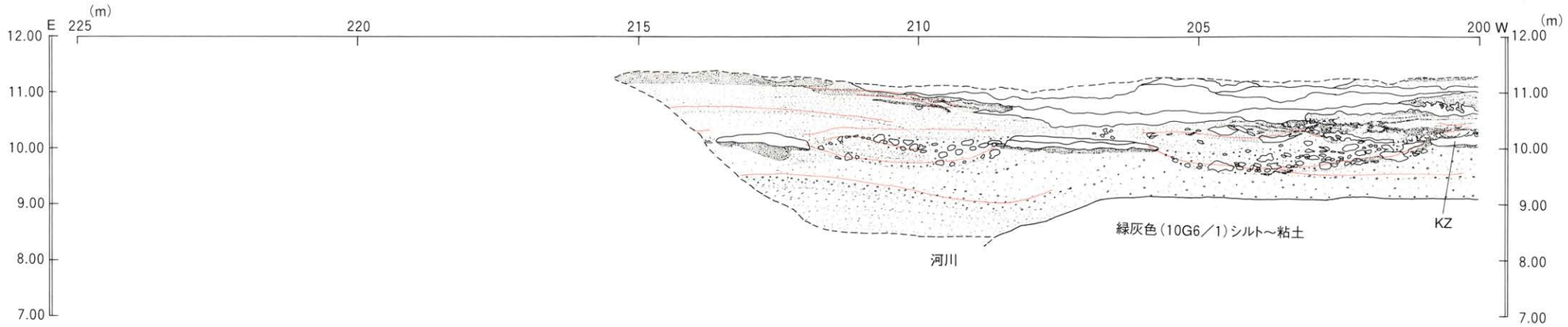
第156図　西壁・南壁土層図(1)



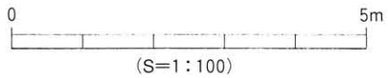
第157図　南壁土層図(2)



第158図　南壁土層図（3）



KC・・・古墳時代中期前半
KZ・・・古墳時代前期
砂礫の表現は『第6次調査報告書』参照



第159図　南壁土層図（4）

3　最終沈殿池地区の遺構と遺物

1　遺　構

調査区では、厚さ約1.3mの砂礫層に被覆される黒褐色粘土（標高9.5m前後、層厚約1m）を調査区の3/4を占めて検出される。この粘土東面は河川による攻撃斜面の様相を呈し、粘土がブロック状に崩落している（第162図）。また、東側には河床として洗掘された跡と考えられる東西方向の小溝が多数検出される。この粘土の西側は北東から南西方向にかけて自然河川によって削り取られている。

粘土上には、南北方向の溝（ＳＤ）１条と東西方向の溝１条（北西部へ曲がる）が検出され、その２条は合流している。合流地点の西側（N14W29）には４本の木杭が打ち込まれており（第163図）、その東側に人の足跡が４ケ所で検出される。南東隅では、牛の足跡を多数検出している。

この粘土は、第６次調査において検出されている粘土と連続するものである。

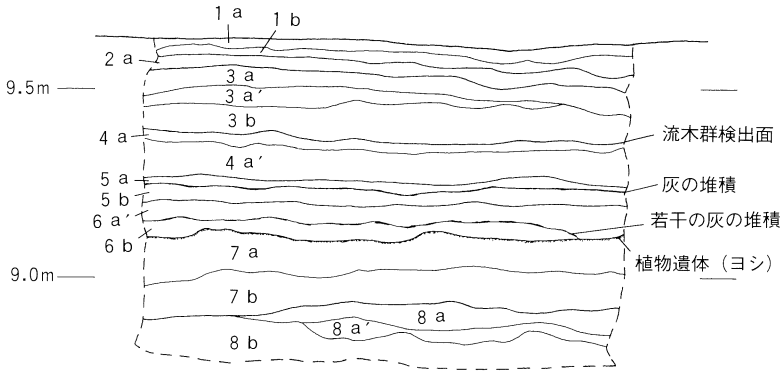
この粘土の北半分は砂礫層に被覆され、この砂礫層から弥生式土器、土師器、須恵器などが出土している。南半分は、この砂礫層を切って10世紀後半の溢流堆積物で被覆され、この堆積物から土師器椀や緑釉碗などが出土し、西から東への堆積方向を呈しているため、当時の河川が調査地の西側にあったものと推測される。この堆積物は第６次調査においても確認されている。

調査区からは、前述のほかに縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代の土師器・須恵器、植物遺体などが出土している。

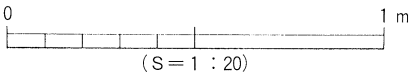
検出された黒褐色粘土の土層堆積状況を第160図に示す。幾たびかの河川影響を受けながら形成・堆積している。１ａ層及び７ａ層上面からはヨシがまとまって出土していたため14Ｃ分析を行い、この黒褐色粘土堆積の年代観を得ることが出来ている（分析編Ⅶ－４）。

また、N13・14W26・27の範囲では、１ａ層から掘り下げを行い、４ａ層上面で多量の流木を検出している（第164図）。この流木の中、北側ほぼ中央で杭１本が検出される。この杭を含め計３点の樹種分析を行う（分析編Ⅶ－７）。流木に混じって出土している土器は、支脚の小破片が３点のみである。

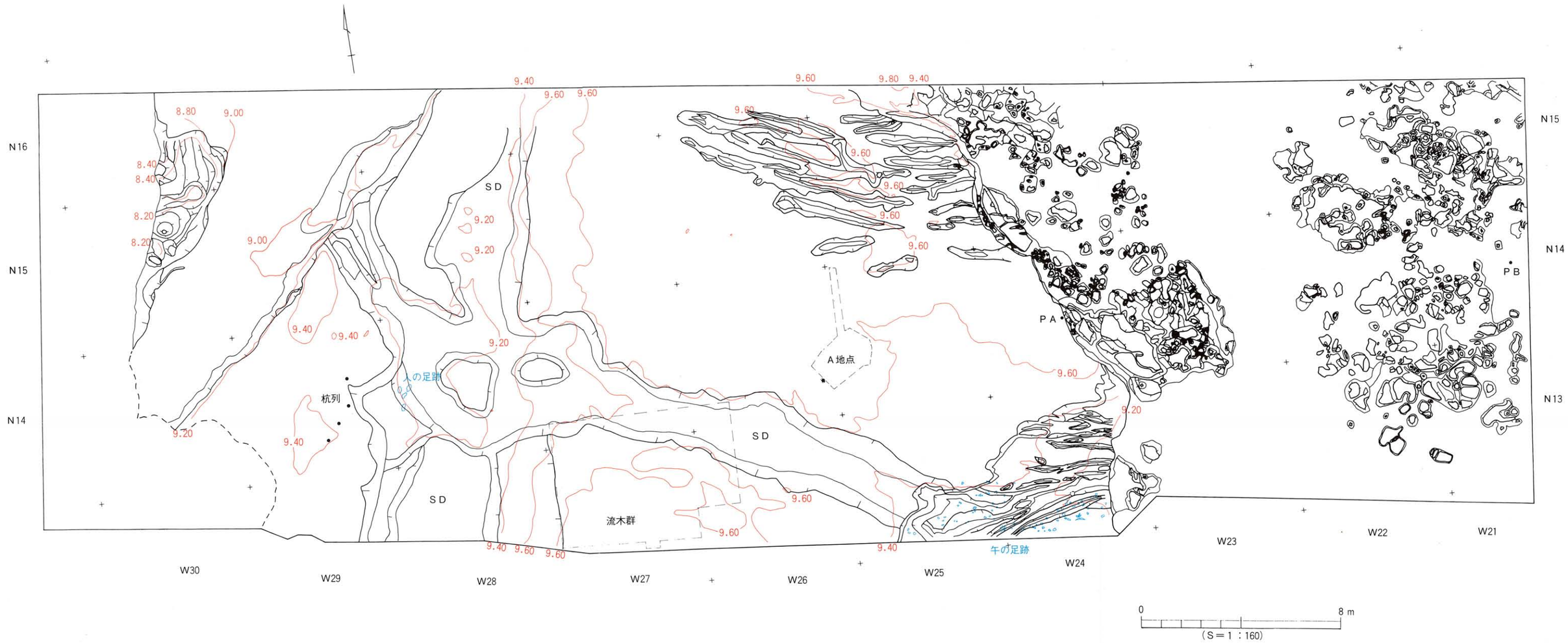
また、粘土上面（１ａ層）で稲作がおこなわれていたかを確認するため、グリットN14・15の東西ラインにあわせて３～６ｍ間隔で９地点（Ａ～Ｉ試料）のプラント・オパール分析を行っている（分析編Ⅶ－３）。



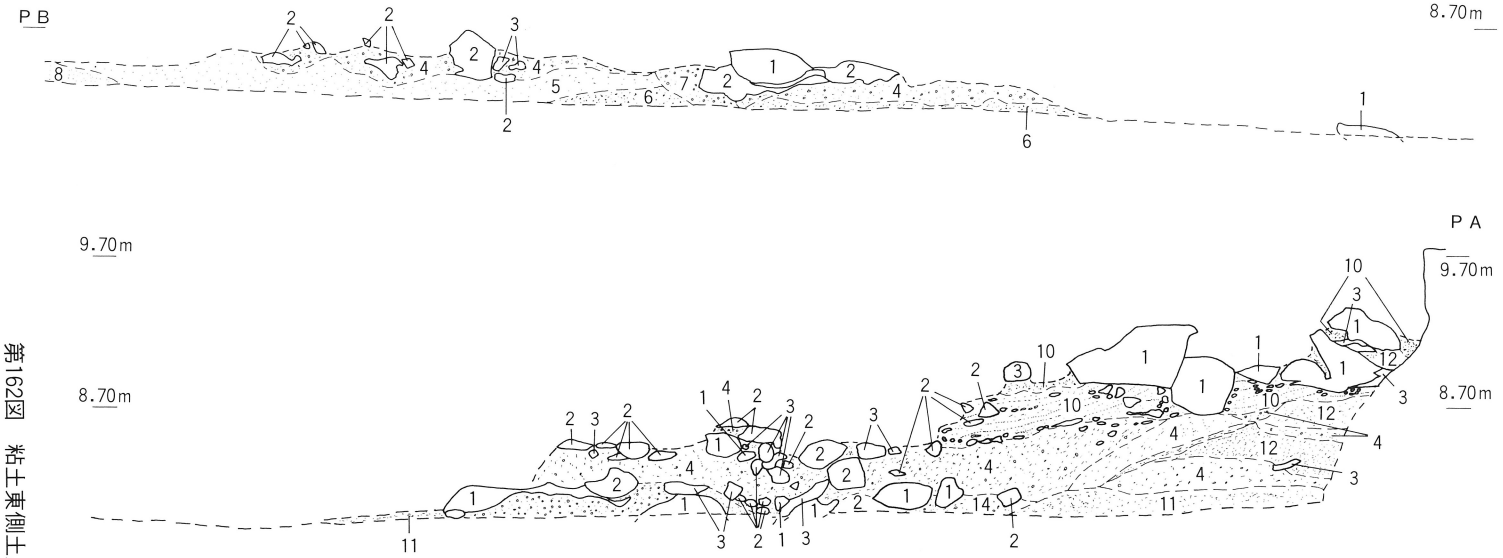
1 a：黒褐色（10Y R 3/1）シルト
1 b：褐灰色（10Y R 4/1）シルト
2 a：黒褐色（10Y R 3/1）シルト
3 a：黒褐色（10Y R 3/2）シルト
3 a′：灰黄褐色（10Y R 5/2）シルト質細砂に浅黄色（5 Y 7/3）細砂がラミナとして混入
3 b：浅黄色（5 Y 7/3）細砂と灰黄褐色（10Y R 5/2）シルト質細砂の混交層（双方がラミナを形成）
4 a：黒褐色（10Y R 3/1）シルト～粘土
4 a′：黒褐色（10Y R 3/1）粘土（一部灰黄褐色（10Y R 5/2）細砂の混交あり）
5 a：黒褐色（10Y R 3/2）シルト～粘土
5 b：黒褐色（2.5Y 3/1）シルト～粘土
6 a′：黒褐色（10Y R 3/1）粘土～シルト
6 b：黒褐色（10Y R 3/1）粘土
7 a：黒色（10Y R1.7/1）粘土
7 b：黒色（10Y R 2/1）粘土
8 a：黒色（10Y R 2/1）粘土
8 a′：暗灰色（N 3/0）粘質土
8 b：にぶい黄色（2.5Y 6/4）中～粗砂



第160図　粘土土層図



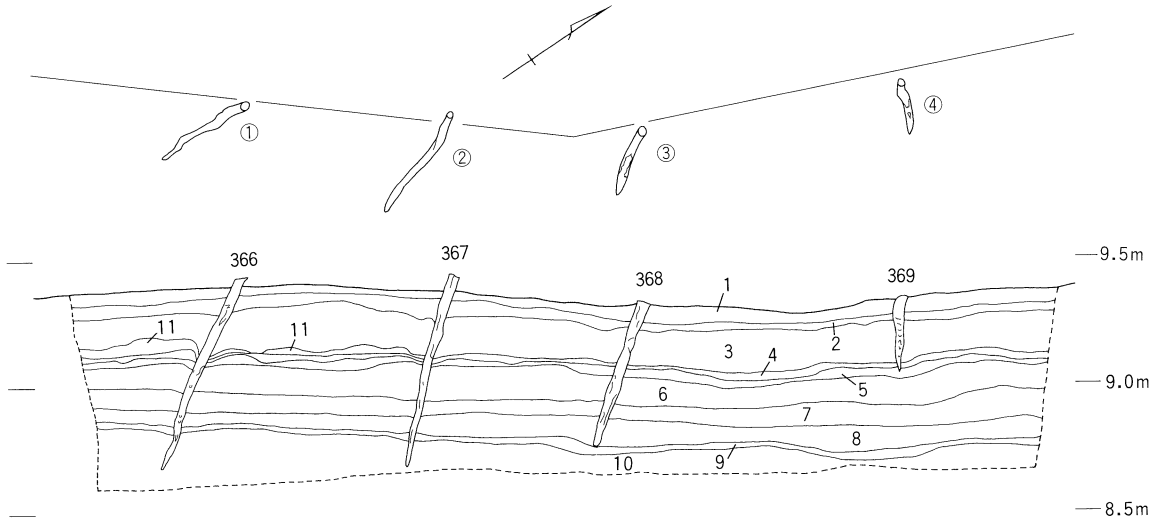
第161図　最終沈殿池地区遺構平面図



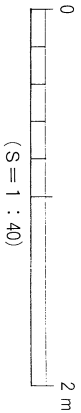
第162図　粘土東側土層図

1．青黒色（5B1.7/1）粘土
2．暗灰色（N2/0）シルト（暗青灰色シルトが混じる）
3．青灰色（5B6/1）シルト
4．灰白色（2.5Y8/1）極粗砂（約1～2㎜大の砂粒に約2～5㎝の礫を多含する。）
5．　〃　〃（2㎝大の礫を希に含む）
6．　〃　細礫（約3㎜大の砂粒を主体に2㎝大の礫を含有する。）
7．黄橙色（7.5YR7/8）中礫（約2～6㎝大の礫を主体に3～4㎜大の細礫を含む。）
8．灰白色（5Y7/1）粗砂（1㎜大の砂粒のみ）
9．暗緑灰色（10GY4/1）微粒砂
10．灰白色（N8／0）砂礫
11．灰白色（N7/0）極砂
12．灰白色（N7/0）細砂
13．暗緑灰色（10G4/1）細礫（やや粘性をおびる）
14．黄橙色（10YR7/8）細礫（約2～3㎝の礫多含）

0　2m
（S＝1：50）



1. 灰色（5Y4／1）シルト＝＝＝1a層
2. オリーブ黒色（7.5Y3／1）シルト＝＝＝2a・3a層
3. 灰白色（5GY8／1）細砂と暗オリーブ灰色（5GY4／1）細砂がラミナ状にみられる＝＝＝3a′・3b層
4. オリーブ黒色（7.5Y3／1）シルト＝＝＝4a・4a′層
5. オリーブ灰色（2.5GY5／1）シルト＝＝＝5a層
6. 灰色（7.5Y4／1）シルト＝＝＝5b層
7. 灰オリーブ色（5Y4／2）シルト＝＝＝6a′層
8. オリーブ黒色（5Y3／2）シルト＝＝＝6b層
9. 灰色（5Y5／1）微砂
10. オリーブ黒色（5Y3／2）シルト＝＝＝7a・7b層
11. 灰白色（5GY8／1）微砂＝＝＝3b′・3b層



（S＝1：40）

第163図　杭列測量図

第164図　流水群測量図

2　出土遺物

（1）杭列出土遺物（第165図）

366は杭材で、取り上げ番号N14W29木杭No 1である。直径約2.8㎝、残存長約90.1㎝を測る。

367は杭材で、取り上げ番号N14W29木杭No 2である。直径約6㎝、残存長約71.5㎝を測る。樹種分析ではタイミンタチバナである（分析編Ⅶ－7）。また、14C年代測定を行っている（分析編Ⅶ－4）。

368は杭材で、取り上げ番号N14W29木杭No 3である。直径約5.2㎝、残存長約64.7㎝を測る。樹種分析ではサカキである（分析編Ⅶ－7）。また、14C年代測定を行っている（分析編Ⅶ－4）。

369は杭材で、取り上げ番号N14W29木杭No 4である。直径約3㎝、残存長約36.4㎝を測る。

（2）流木群出土遺物　（第166図）

370は杭材である。取り上げ番号W－42である。直径約2.6㎝、残存長約21.2㎝を測る。樹種分析ではコナラ属コナラ節である（分析編Ⅶ－7）。

371は板材である。取り上げ番号W－38である。幅約2.7㎝、厚さ約1.1㎝、残存長約18.8㎝を測る。樹種分析ではヒノキ属である（分析編Ⅶ－7）。

（3）黒色粘土上を被覆する砂礫層からの出土遺物（第167・168図）

＊縄文土器＊

372は粗製深鉢の口縁部である。N13W29出土。

373は深鉢の口縁部である。端部と凸帯部に刻みが施されている。晩期の土器である。

374は粗製浅鉢である。内外面とも撫でられている。推定口径30㎝を測る。

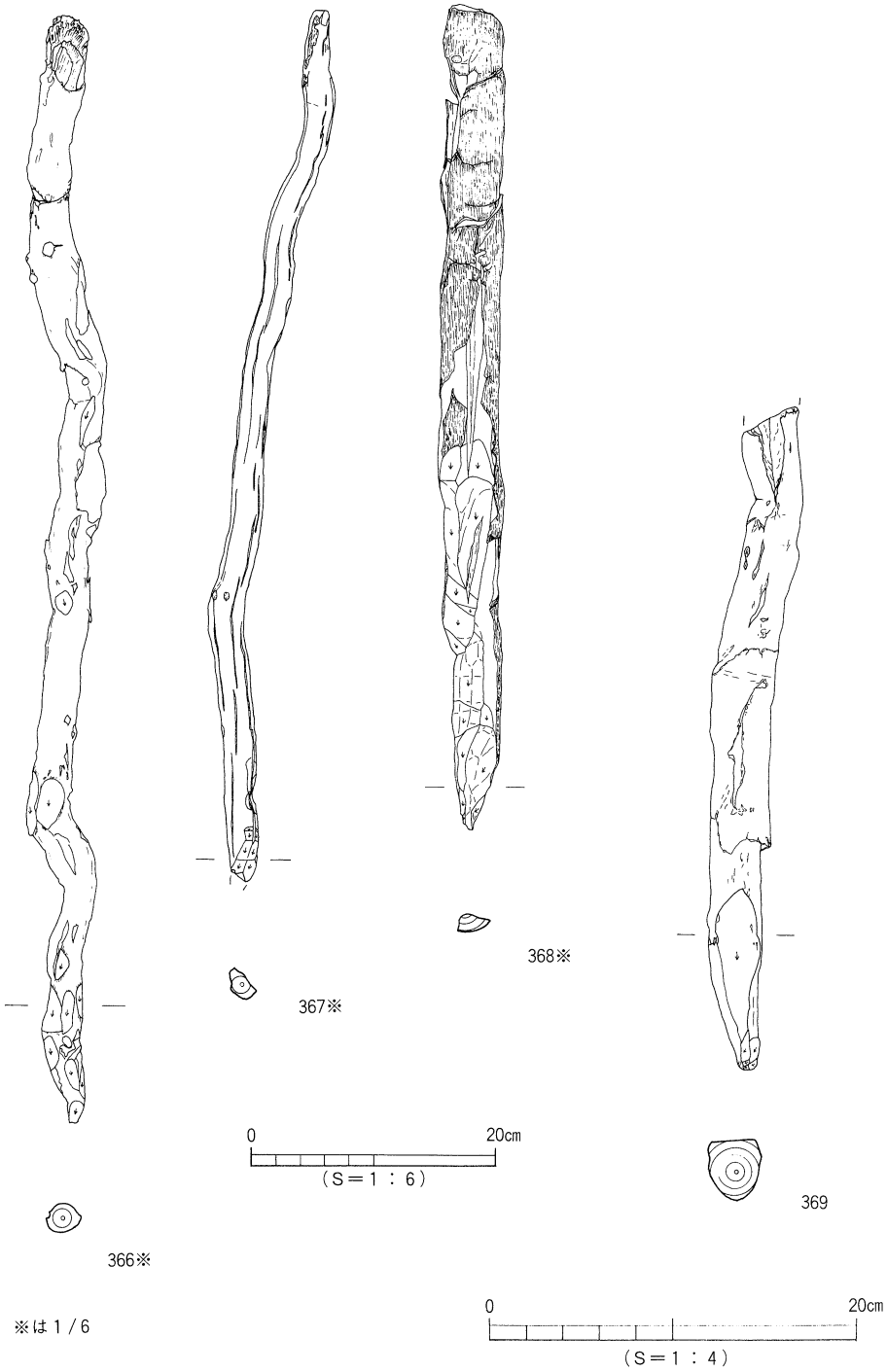
＊弥生土器＊

375は甕の口縁部である。L字に曲がる口縁部をもち、口縁端部には刻みが施され、体部外面には縦方向のハケ目が施されている。推定口径22.4㎝を測る。中期の土器である。

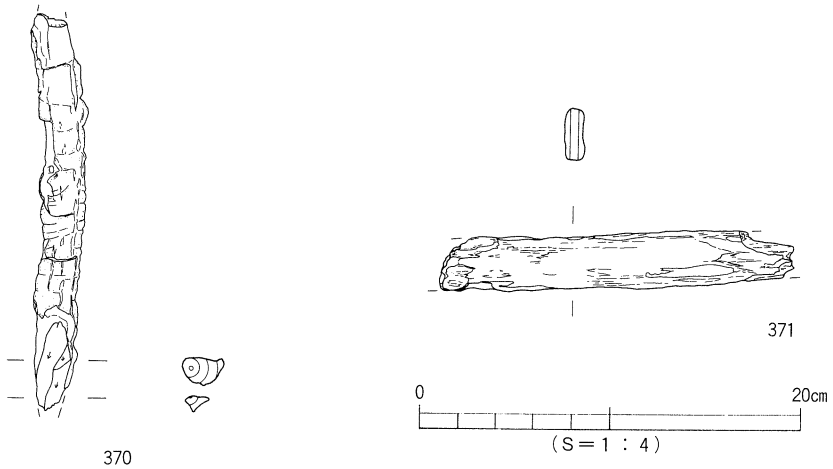
376は甕の底部である。平底を呈している。全体に磨滅している。推定底径6㎝を測る。西壁出土。

377は甕の底部でやや上げ底を呈している。底径6.2㎝を測る。

378は器台の柱部片である。円孔は6ケ所確認される。全体に磨滅しているため、調整は不明である。N13W24出土。



第165図　杭列出土遺物



第166図　流木群出土遺物実測図

＊土師器＊

379は甕の口縁部である。内面にやや斜め方向のハケ目が施されている。外面の調整は磨滅しているため不明。推定口径20㎝を測る。N13W28出土。

380は高坏の口縁部である。坏部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。全体に磨滅している。推定口径14.9㎝を測る。

381は高坏の脚部である。外面は磨滅しているため調整は不明であるが、内面には横方向のケズリがみられる。底径約11.2㎝を測る。

382は甑の握手部である。外面に指頭圧痕が顕著にみられる。

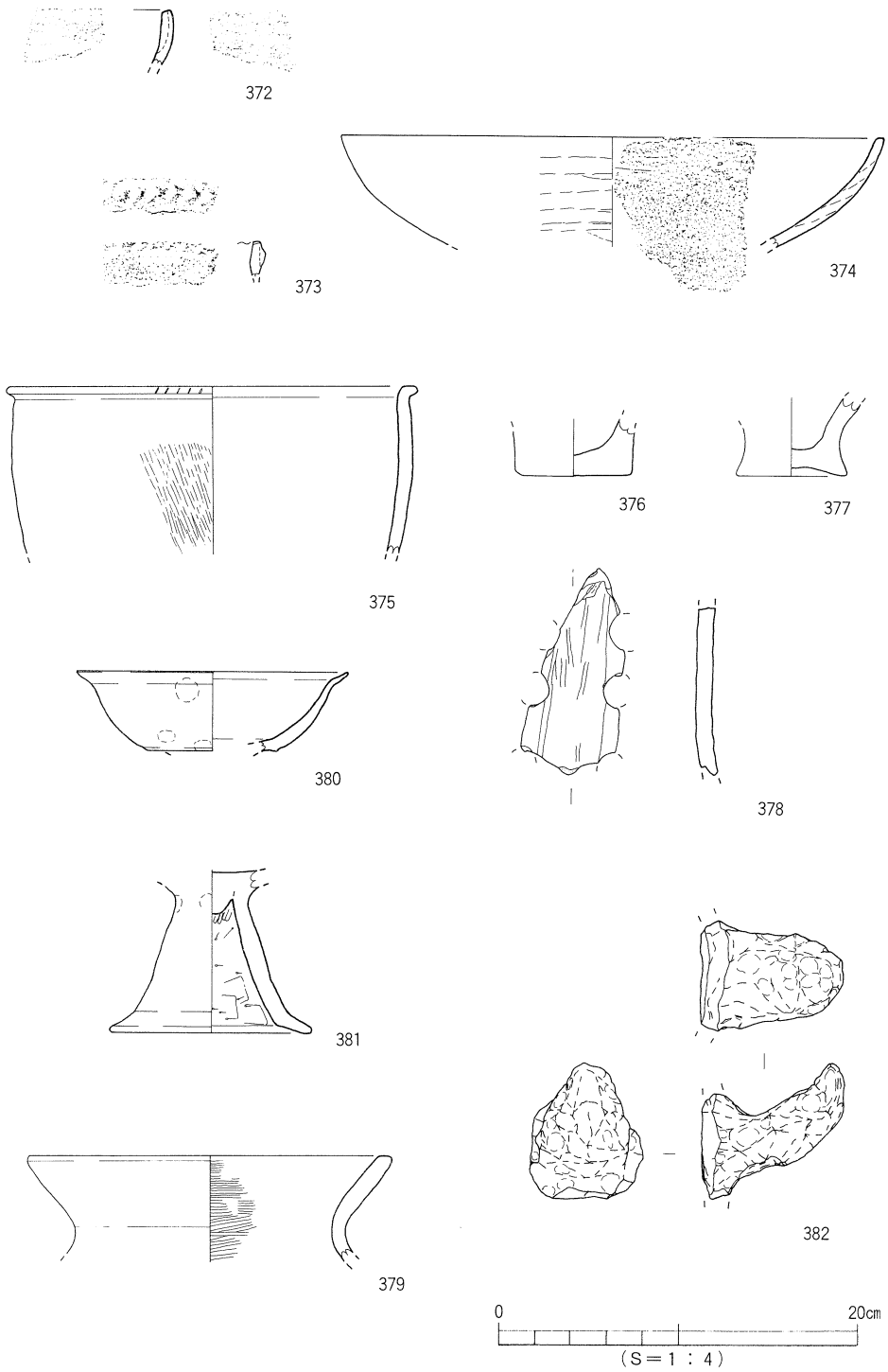
383は皿の底部である。底部の切り離しは、回転ヘラ切りである。推定底径9.4㎝を測る。9～10世紀にかけての土器である。

384は椀の底部である。底部は、回転ヘラ切りされた後に断面四角形の高台が貼り付けられている。全体に磨滅しているため調整は不明。推定高台径８㎝、高台高0.5㎝を測る。11世紀代の土器である。

＊須恵器＊

385は坏蓋で、ほぼ完形品である。口径12.4㎝、器高６㎝を測る。天井部は丸味をおび、天井部と口縁部との稜は短く外方向にのびる。口縁端部は僅かに凹面をなし内傾する。つまみは上面は窪み中心部は少し膨らむ。調整は、つまみとその周辺は回転ナデ調整、のこりの天井部の約半分は回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。陶邑編年のＴＫ47に比定できる。N14W28出土。

386は坏蓋で、ほぼ完形品である。推定口径15㎝、器高4.5㎝を測る。天井部と口縁部との稜は鈍い。口縁端部は僅かに凹面をなし内傾する。天井部のヘラ削りは、稜の上約１㎝まで



第167図　出土遺物実測図（1）

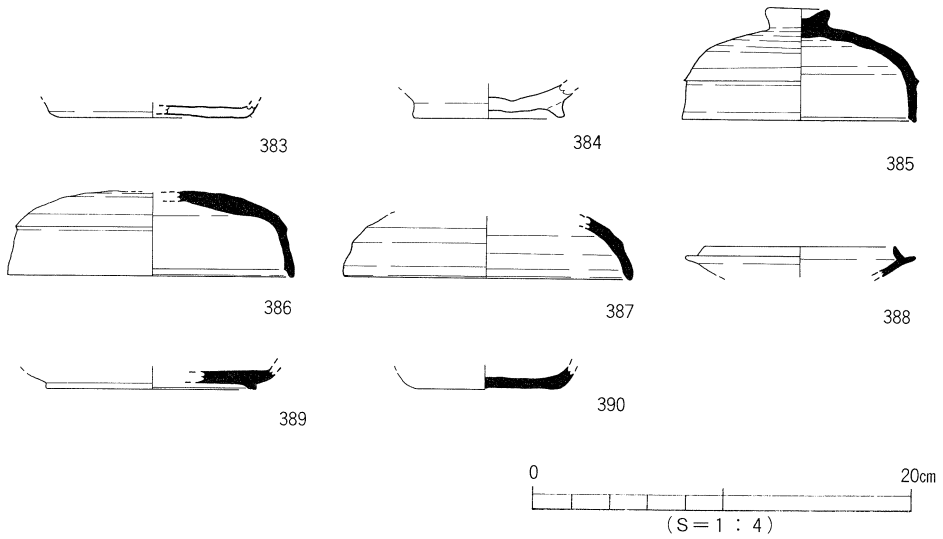
施されている。陶邑編年のＭＴ15またはＭＴ10と思われる。

387は坏蓋の口縁部である。推定口径15㎝を測る。内外面ともに横ナデで、天井部にヘラ削りが残る。陶邑編年のＴＫ209またはＴＫ217と思われる。

388は坏身の口縁部片である。立ち上がりは短く内傾し、推定口径10㎝を測る。端部は丸く、受部はやや水平をなしている。内外面ともに横ナデである。陶邑編年のＴＫ217と思われる。Ｎ14Ｗ29出土。

389は高台付き坏身の底部片である。底部端より内側に断面四角形の高台がついている。内外面ともに横ナデである。推定高台径11㎝を測る。８世紀代の土器である。南壁出土。

390は皿または杯の底部片である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、若干の擦痕がみられる。底径6.8㎝を測る。８世紀以後と思われる。



第168図　出土遺物実測図（2）

（５）黒色粘土の西側（ブロック状粘土堆積）からの出土遺物（第169・170図）

＊弥生土器＊

391は甕の口縁部である。全体に磨滅しているため調整は不明。推定口径22㎝を測る。中期の土器である。

392は甕の底部である。上げ底を呈し、全体に磨滅しているため調整は不明。底径6.9㎝を測る。

393は甕の底部である。平底を呈し、外面には縦方向のハケ目、底部外面にもハケ目が施されている。内面は磨滅しているため調整は不明。底径4.2㎝を測る。

＊土師器＊

394は甕で、推定口径19㎝を測る。口縁部の内外面は横ナデ、口縁部は頸部から内湾しながら立ち上がり、端部の内側が肥厚している。N15W24出土。

395は甕で、推定口径13㎝を測る。口縁部の外面は横ナデ、内面は横方向のハケ目調整が施され、体部内面は横方向のケズリが施されている。口縁部は頸部から斜め方向に立ち上がり、端部の外側が肥厚している。N14W24出土。

396は甕の口縁部である。推定口径14㎝を測る。頸部から内湾しながら立ち上がり、端部は内外に肥厚している。内外面は横ナデが施されている。N14W23出土。

397は壺で、口縁部のみが欠損している。外面にはハケ目が施され、内面はナデ上げされている。N14W23の黒褐色粘土の東端部から出土。

398は小型の壺で、口縁部が欠損している。内面はナデ上げられ、外面は頸部近くに横ナデが施されている。N14W24出土。

399は高坏の口縁部である。推定口径17㎝を測る。口縁部は斜め方向に立ち上がりやや外傾している。口縁内面には横方向のハケ目、外面は横ナデが施されている。

400は高坏の脚部である。裾部は短く外反している。内面には横方向のケズリが施され、外面は磨滅しているため調整は不明。N14W23出土。

401は高坏の脚部である。裾部は短く外反している。内面には横方向のケズリと裾部近くに横ナデが施され、裾部外面にも横ナデが施されている。N15W23出土。

402は手づくねのミニチュア土器でほぼ完形品である。口径4.7㎝、器高2.8㎝を測る。N14W24出土。

403は手づくねのミニチュア土器である。口径4.8㎝を測る。

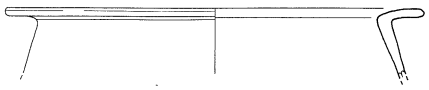
404は台付椀のほぼ完形品である。椀部の外面には縦方向のヘラ削りが若干みられる。底部はやや上げ底を呈している。口径11.6㎝、器高7.4㎝、底径7.2㎝を測る。古墳時代後期と思われる。397と同様にN13W24の黒褐色粘土の東端部から出土。

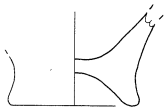
＊須恵器＊

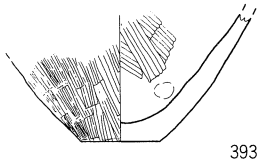
405は坏蓋である。推定口径11.8㎝を測る。天井部は丸味をおび、天井部と口縁部との稜は短く外方向にのびる。口縁端部は僅かに凹面をなし内傾する。口縁部は横ナデ、天井部には回転ヘラ削りが施されている。陶邑編年のＴＫ23またはＴＫ47と思われる。N14W23出土。

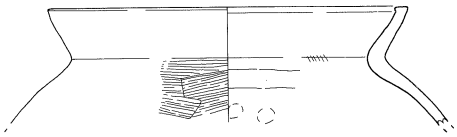
406は坏蓋である。推定口径16㎝を測る。天井部は丸味をおび、天井部と口縁部との稜は短く外方向にのびる。口縁端部は僅かに凹面をなし内傾する。口縁部は横ナデ、天井部には回転ヘラ削りが施されている。陶邑編年のＴＫ10と思われる。

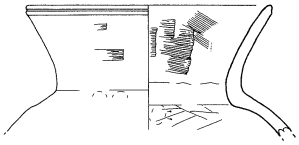
407は坏身の口縁部である。立ち上がりは長く内傾し、推定口径12㎝、器高4,7㎝を測る。端部は若干の凹面をなし、受部はやや上方向にのびる。内外面ともに横ナデで、底部はヘラ削りが施されている。陶邑編年のＴＫ47と思われる。N13W23出土。

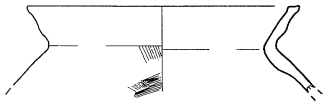

391

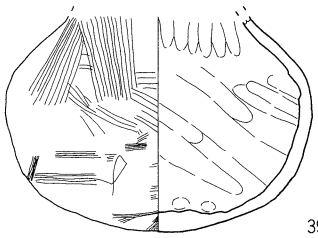

392

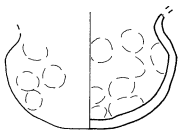

393

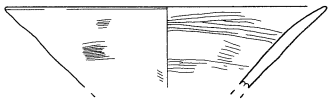

394

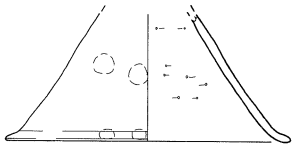

395

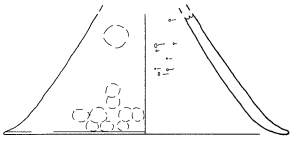

396

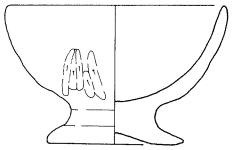

397


398

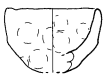

399


400


401


404

402


403

0　20cm
（S＝1：4）

第169図　出土遺物実測図（3）

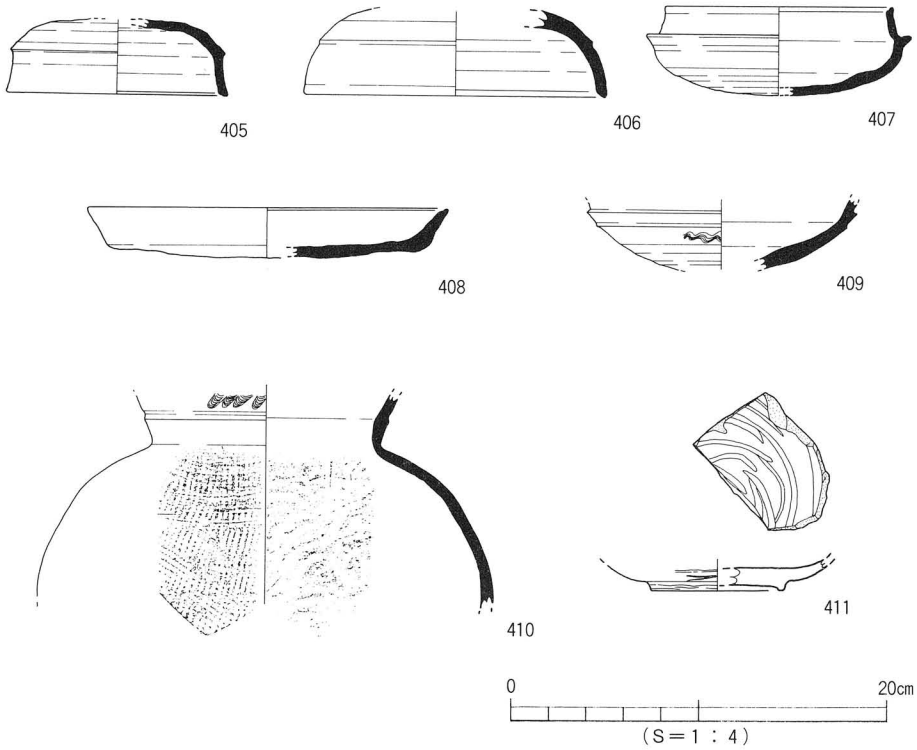
408は皿である。推定口径19㎝、器高2.6㎝、底径16.9㎝を測る。天井部から口縁部にかけては外傾し端部は若干の凹面をなす。内外面とも横ナデが施されている。全体に灰白色（N 8/0）を呈している。８世紀代である。

409は高坏の坏部である。外面には波状文が施されている。陶邑編年のＴＫ23と思われる。

410は甕である。口縁部外面に波状文が施されている。体部外面には格子状の叩きが施され、部分的に回転によるナデ消しがなされている。体部内面には同心円の当具痕がみられ、ナデ消しされている。陶邑編年のＴＫ23またはＴＫ47と思われる。

＊緑釉陶器＊

411は碗の底部である。明オリーブ灰色（5Ｇ Ｙ7/1）の釉がかかっている。内面見込み及び高台外面にミガキが施されている。高台径6.8㎝を測る。京都産と思われる。



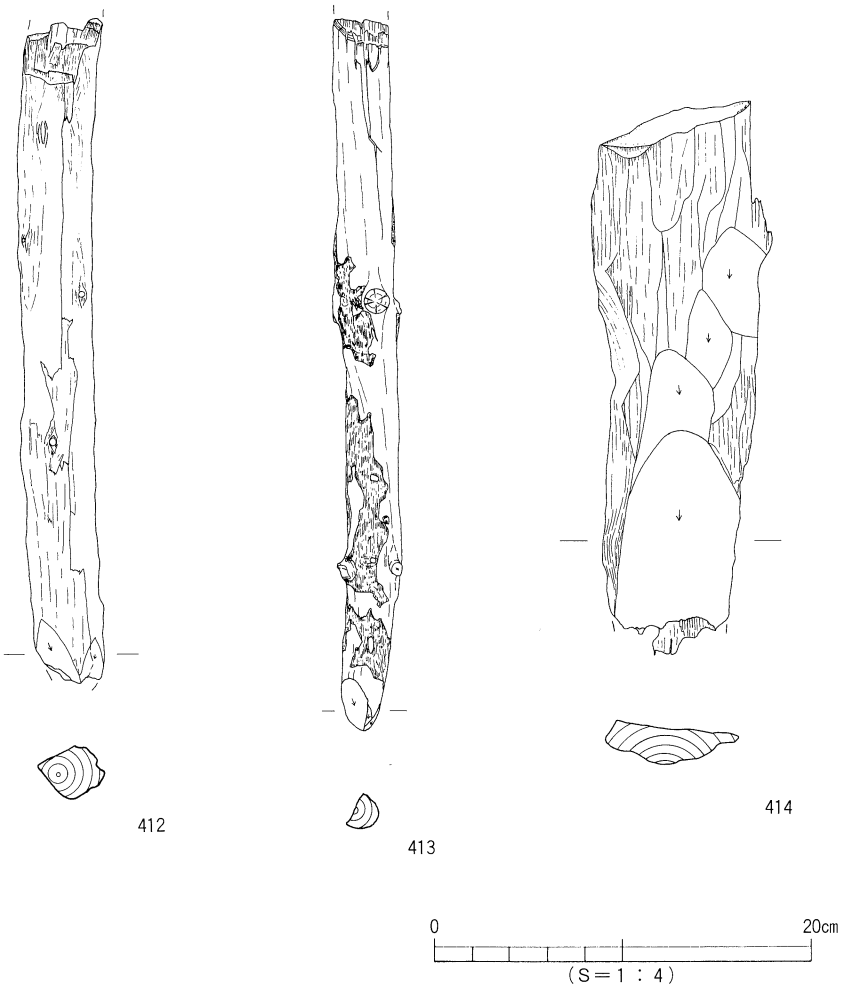
第170図　出土遺物実測図（4）

（6）加工材　（第171図）

412は杭材である。取り上げ番号西端淡黄色砂礫L＝9.5mである。直径約5.3cm、残存長約53cmを測る。樹種分析ではアカマツである（分析編Ⅶ－7）。

413は杭材である。取り上げ番号N14W21W－No1である。直径約5.4cm、残存長約56.8cmを測る。樹種分析ではマツ属である（分析編Ⅶ－7）。

414は板または角材である。取り上げ番号N13W29W－No1である。幅約14cm、厚さ約3cm、残存長約44cmを測る。樹種分析ではモミ属である（分析編Ⅶ－7）。



第171図　出土遺物実測図（5）

4　エアレーションタンク地区の遺構と遺物

1　遺　構

調査区では、調査区東側で緑灰色粘土が検出され、この粘土の西側一帯（終沈区にかけて）には砂礫層が広がり、残塊的なブロック状粘土が検出される。この中に、黒色～黒褐色砂質土から成る小自然堤防の高まりを２カ所で検出し、この砂質土からは弥生時代後期末葉の壷・鉢・支脚などが出土している（第174・176図）。

また、この粘土東端を西岸とする南北方向の河川１条が検出される。東岸は未調査であるが、おそらく初沈区検出の緑灰色粘土を東岸と考えられる。初沈区河川と同時期と考えられる。

検出された緑灰色粘土は、第６次調査で検出されている粘土と連続するもので、自然堤防と考えられる。この自然堤防の東端では、粘土直上の砂礫層よりも上位（溢流堆積層）から、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての鉢・甕などが出土している。この遺物の中には、小型鉢を「入り子」状にする鉢も出土している。遺物の出土状況から水辺祭祀的行為があったものと考えられる（第175・177図）。

砂礫層からは、縄文時代中期から古墳時代にかけての土器が出土し、他に大木や木杭なども出土している。

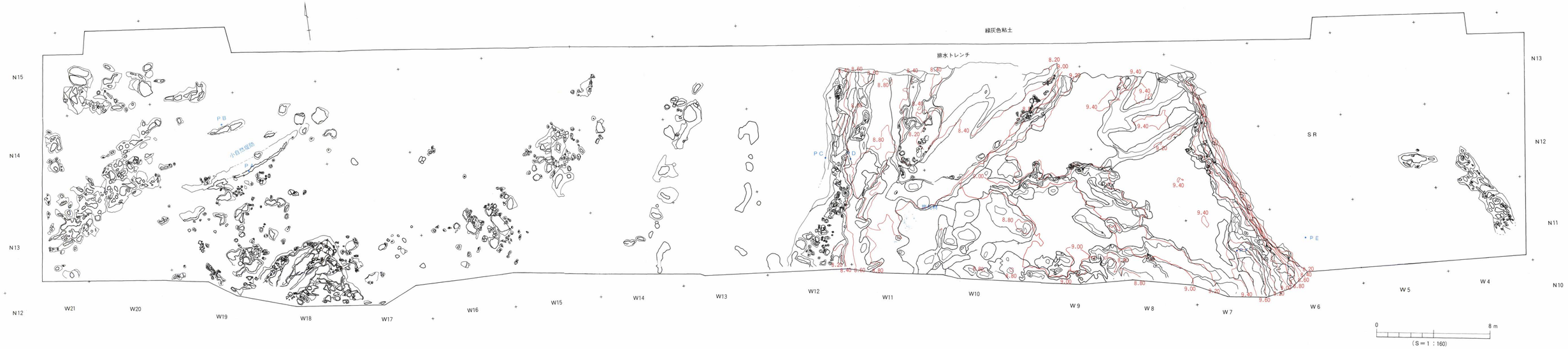
（１）緑灰色粘土

古照遺跡の「井堰」基底部の緑灰色粘土が調査区の中央で検出される。標高は、西側約9.5ｍ、東側約8.4ｍを測り東から西に傾斜している。

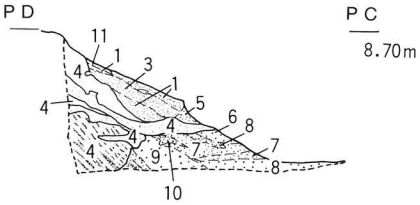
粘土上には河川氾濫による破堤痕跡がみられる。他に、直径10㎝前後、深さ約50㎝前後の円形の穴（埋土は砂礫）や炭化木の細片が密集する箇所などが検出される。

粘土を被覆する砂礫層からは古墳時代の土器は出土していない。

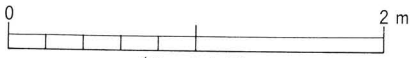
第６次下層調査のエアタン区の緑灰色粘土№２へ連続する自然堤防である。



第172図　エアレーションタンク地区遺構平面図

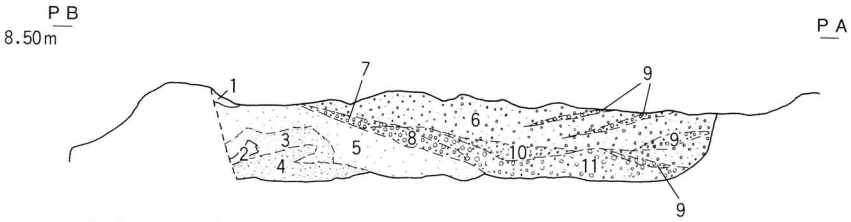


1．青灰色（10GB 6/1）微粒砂
2．灰白色（5Y 8/1）微粒砂
3．緑灰色（10G 6/1）微粒砂（やや粘性あり）
4．緑灰色（10G 6/1）シルト
5．浅青色（5Y 7/4）粗粒砂
6．黄　色（5Y 7/6）粗粒砂
7．灰白色（N 6/0）中粗砂
8．灰白色（N 7/0）粗粒砂
9．　〃　（8より若干暗い）
10．灰白色（2.5GY 8/1）中粒砂
11．灰白色（N 5/0）中粒砂

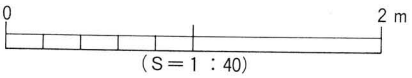


（S＝1：40）

第173図　粘土西側土層図

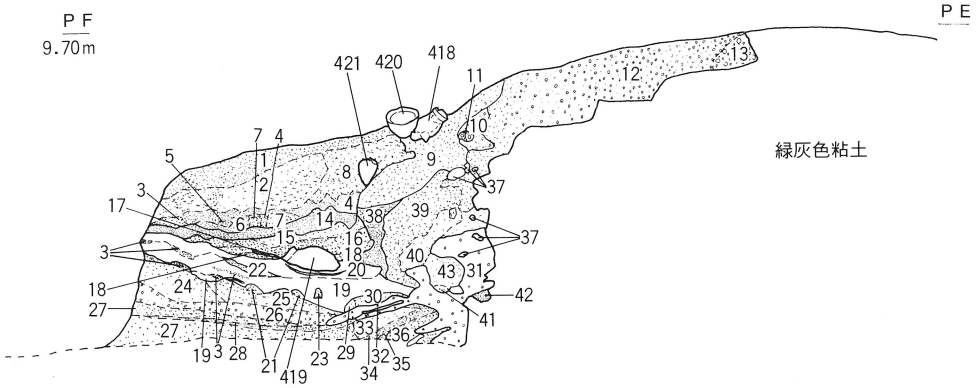


1．黒色（2.5Y 2/1）シルト
2．黒褐色（10YR 3/1）シルト～粘土
3．灰色（N 5/0）粗砂（1㎜以内）
4．灰色（N 5/0）粗砂を主として黒褐色（10YR 3/1）の植物遺体が流紋をなす
5．灰白色（N 7/0）極粗砂礫（1～3㎜）
6．灰白色（2.5Y 7/1）極粗砂～細礫
7．灰白色（5Y 7/1）細～中礫（3～15㎜）
8．明褐色（7.5YR 5／6）細～中礫（3～30㎜）
9．明黄褐色（2.5Y 6/6）細～中礫（3～10㎜）
10．灰白色（5Y 7/1）細礫（3～5㎜）
11．黄褐色（2.5Y 5/3）細～中礫（3～10㎜）



（S＝1：40）

第174図　小自然堤防土層図



1．オリーブ灰色（2.5GY6/1）粗砂
2．オリーブ灰白（2.5GY6/1）粗砂～極粗砂
3．灰白色（N7/0）中～粗砂
4．灰白色（N4/0）中砂
5．灰白色（7.5Y7/2）中砂
6．灰色（N6/0）中砂と灰白色（7.5Y7/2）中砂の混交
7．浅黄色（5Y7/3）中～粗砂
8．オリーブ灰色（2.5GY5/1）粗砂～極粗砂
9．灰色（N4/0）シルト質中砂
10．灰色（N4/0）シルト質中砂を主として灰色（5Y6/1）細礫が混交する
11．灰白色（5Y7/1）細～中礫（3～10mm）
12．灰色（5Y6/1）極粗砂～細礫（3～10mm）
13．灰白（5Y8/1）色細～中礫（3～15mm）
14．黒褐色（2.5Y3/1）シルト質粗砂
15．浅黄色（5Y7/3）粗砂
16．灰色（N4/0）中砂と灰白色（7.5Y7/2）中砂の混交
17．黒褐色（2.5Y3/1）シルト質細砂
18．灰白色（10Y7/1）中砂
19．黒褐色（2.5Y3/1）粘土
20．黒色（10Y2/1）の植物遺体
21．上層と下層の漸移層
22．上層と3の混交層
23．19を主として下層の灰オリーブ色（7.5Y6/2）極粗砂が混入
24．灰白色（7.5Y7/1）極粗砂
25．灰オリーブ色（7.5Y8/2）極粗砂
26．灰白色（5Y8/1）極粗砂～細礫
27．灰色（7.5Y5/1）粗砂
28．灰色（N4/0）中～細砂
29．19と灰オリーブ色（7.5Y6/2）極粗砂の混交層
30．19と灰色（N7/0）中～細砂の混交層
31．暗灰色（N3/0）粘土（細礫あり3～5mm）
32．灰色（N7/0）中～細砂
33．浅黄色（5Y7/3）極粗砂
34．灰色（N5/0）極砂～細砂
35．34と36の混交する
36．灰白色（N7/0）粗砂
37．緑灰色（10G5/1）粘土
38．灰色（5Y4/1）シルト質細砂
39．灰色（N5/0）中砂
40．灰色（N4/0）極粗砂
41．灰白色（7.5Y7/1）極粗砂
42．灰白色（N7/0）中～細砂
43．灰色（N5/0）中～粗砂

0　2m
（S＝1：40）

第175図　粘土東肩土層図

2　出土遺物

（1）小自然堤防からの出土遺物（第176図）

415は若干頸部を残し口縁部が欠損している壺である。おそらく複合口縁をなすものと考えられる。頸部には１条の凸帯が貼り付けられ、格子状の刻みが施されている。体部外面にはハケ目が施されている。底部は平底を呈し、推定底径約６㎝を測る。

416は鉢で口縁部の約1/2が欠損しているだけである。ゆるやかに外反する口縁をもち、やや平底を呈している。内外面ともにハケ目が施されている。口径19.4㎝、器高14.1㎝を測る。

417は支脚の脚部で中空である。胴部より上位の内外面にはハケ目が施されている。脚部の外面には荒い叩きの後、ナデ消されている。また、内面の下半には横方向のハケ目が施されている。底径14.8㎝を測る。

（2）緑灰色粘土東肩（溢流堆積）からの出土遺物（第177図）

（甕）

418はほぼ完形品である。やや平底を呈し、口縁部は外反し端部は平坦に仕上げられている。口径13.4㎝、器高19.4㎝を測る。頸部には縦ハケが、口縁部は横ナデ、体部は底部にまで叩きが施されている。

419はほぼ完形品である。418よりも下位層から出土している。平底を呈し、口縁部は外反し端部は平坦に仕上げられている。口径13.4㎝、器高24.8㎝を測る。外面には口縁部から底部に至るまで叩きが施されているが、頸部と底部近くには縦ハケが施されている。内面にはハケ目が施されている。

（鉢）

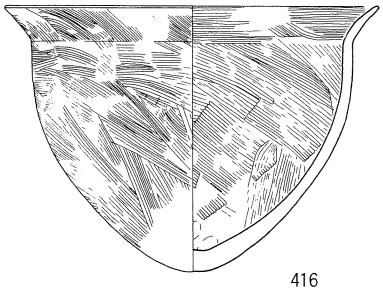
420は完形品である。丸底を呈している。口縁部は外反している。外面には叩きが施され体部の中位にはケズリが施されている。内面全体にハケ目が施され口縁付近はヨコナデである。口径20.8㎝、器高12.9㎝を測る。

421は完形品である。やや丸底を呈している。口径12.6㎝、器高8.6㎝を測る。外面には叩き、内面にはハケ目が施されている。この中に422が入っていた。

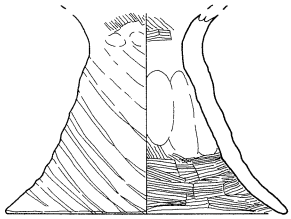
422は尖り底を呈する完形品である。口径9.6㎝、器高5.2㎝を測る。外面には叩きが、内面にはハケ目が施されている。421の中に入っていた。

423は口縁部で、口縁端部は細く仕上げられている。外面に縦方向のハケ目、内面上部には幅の狭いハケ目が、内面下部には幅の広いハケ目が施されている。推定口径12.8㎝を測る。

424は口縁部で、口縁端部は平坦に仕上げられている。推定口径25.8㎝を測る。外面にはハケ目、内面にはハケ目とミガキが施されている。

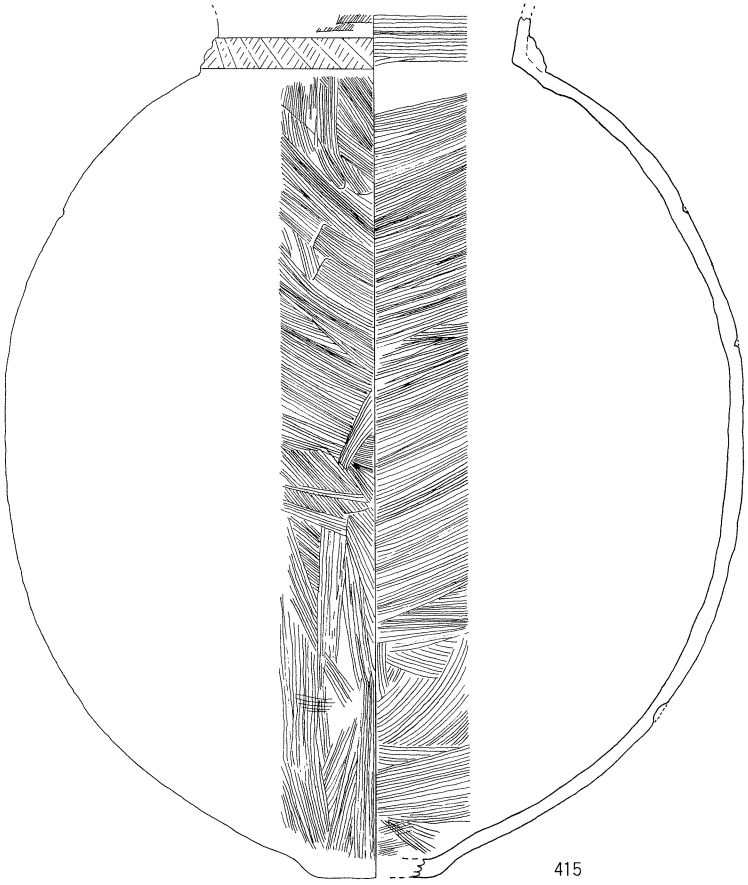


416



417

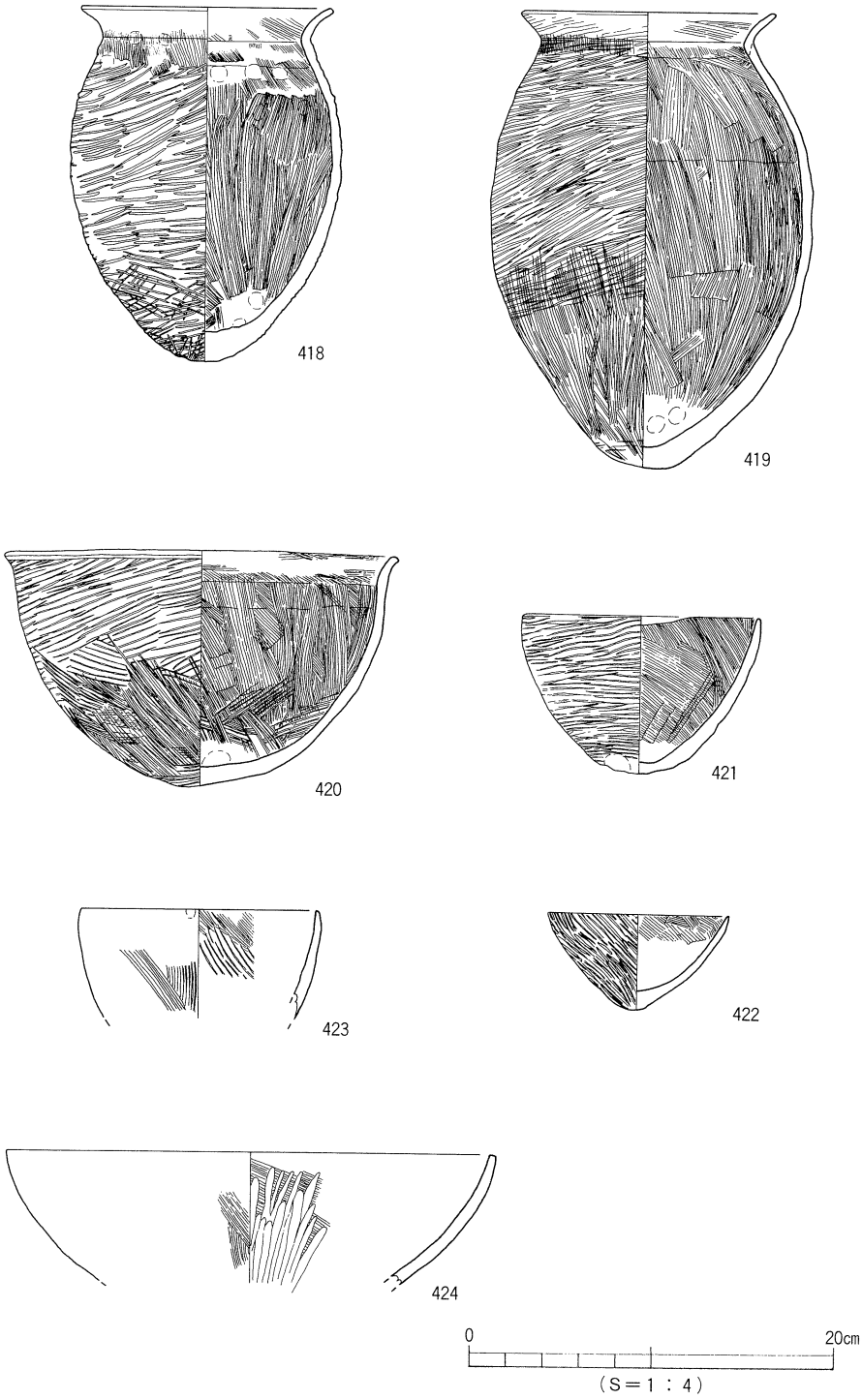
0　20cm
（S＝1：4）



415

0　40cm
（S＝1：8）

第176図　小自然堤防出土遺物実測図



第177図　緑灰色粘土東肩出土遺物実測図

（3）緑灰色粘土西側の砂礫層からの出土遺物（第178～182図）

＊縄文土器＊（第178・179図）

（深鉢）

425は外面にＬＲの縄文が施されている体部片である。N13W19出土。中期と思われる。

426は口縁部が外側に肥厚し、外面にＲＬの擬縄文が施されている。また、焼成後の穿孔がみられる。推定口径39.8㎝を測る。

427は外面に横方向の沈線が４本施されている。

428は口縁部が外側に肥厚し、横方向に２本の沈線が施されている。N12W19出土。

429は口縁部の内側がやや肥厚している。N14W16出土。

430は口縁部の内側が肥厚している。推定口径32.2㎝を測る。

431は口縁端部に刻みが施されている。

432はやや「くの字」状を呈している。全体に磨滅している。N13W20出土。

433はやや外側が肥厚している。N13W18出土。

434は口縁部が外傾している。

435は口縁部がやや外傾し端部の内側が肥厚している。全体に磨滅している。N14W14出土。

436は口縁部がやや内傾し、内外面に巻貝条痕が顕著にみられる。推定口径41.6㎝を測る。N12W15出土。

437は胴部片で、凸帯が貼り付けられ刻み目が施されている。N15W19出土。

438は胴部片で、外面に格子状の沈線が施されている。N12W19出土。

439は底部片で、上げ底を呈し、全体に磨滅している。底径７㎝を測る。

（浅鉢）

440は口縁部がやや肥厚している。N14W21出土。

441は口縁部がやや内傾している。N13W15出土。

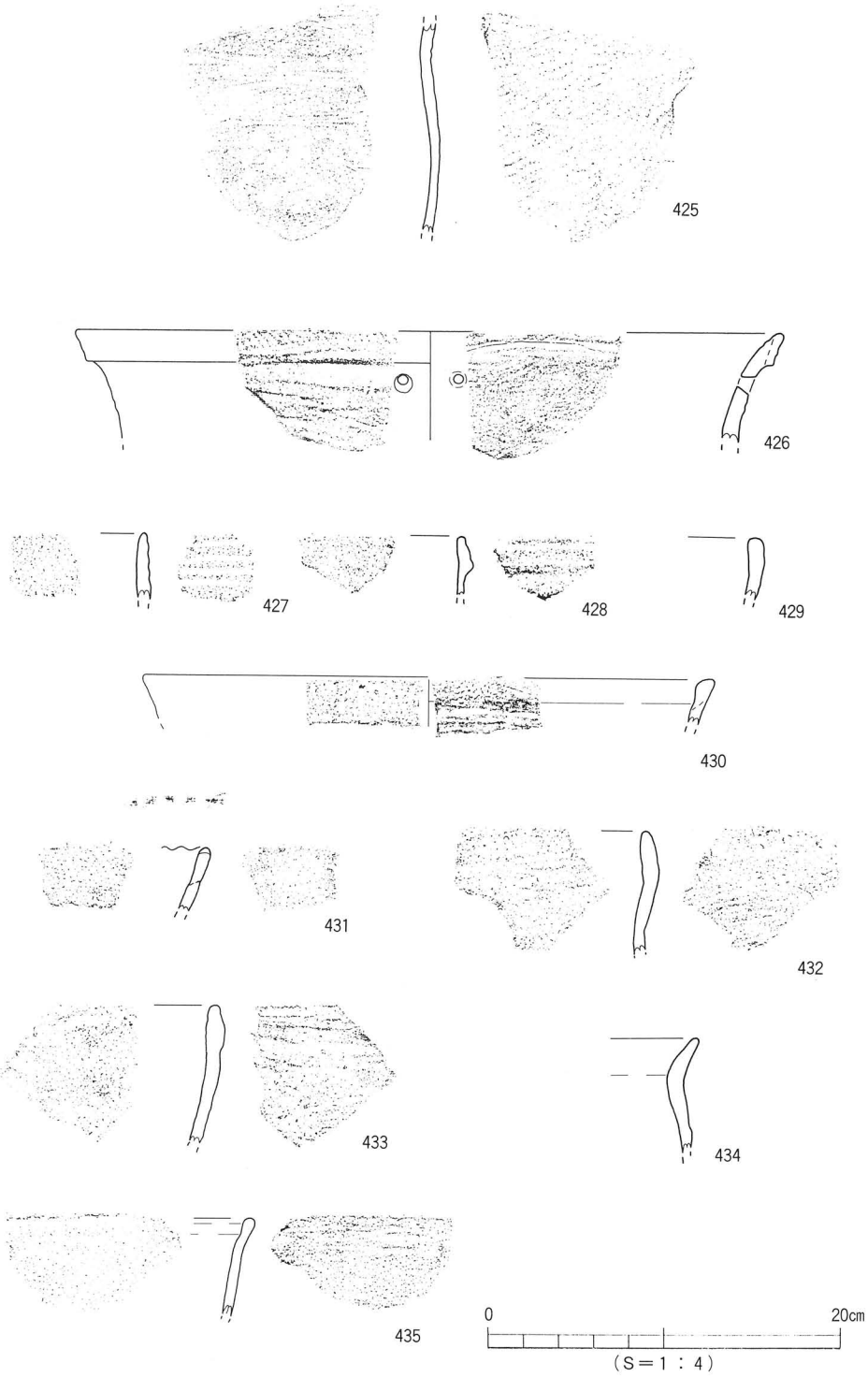
442は口縁部外面に沈線が１条施されている。N14W15出土。

443は肩部の屈曲はなだらかで短い。口縁部は短くて外反している。N14W19出土。

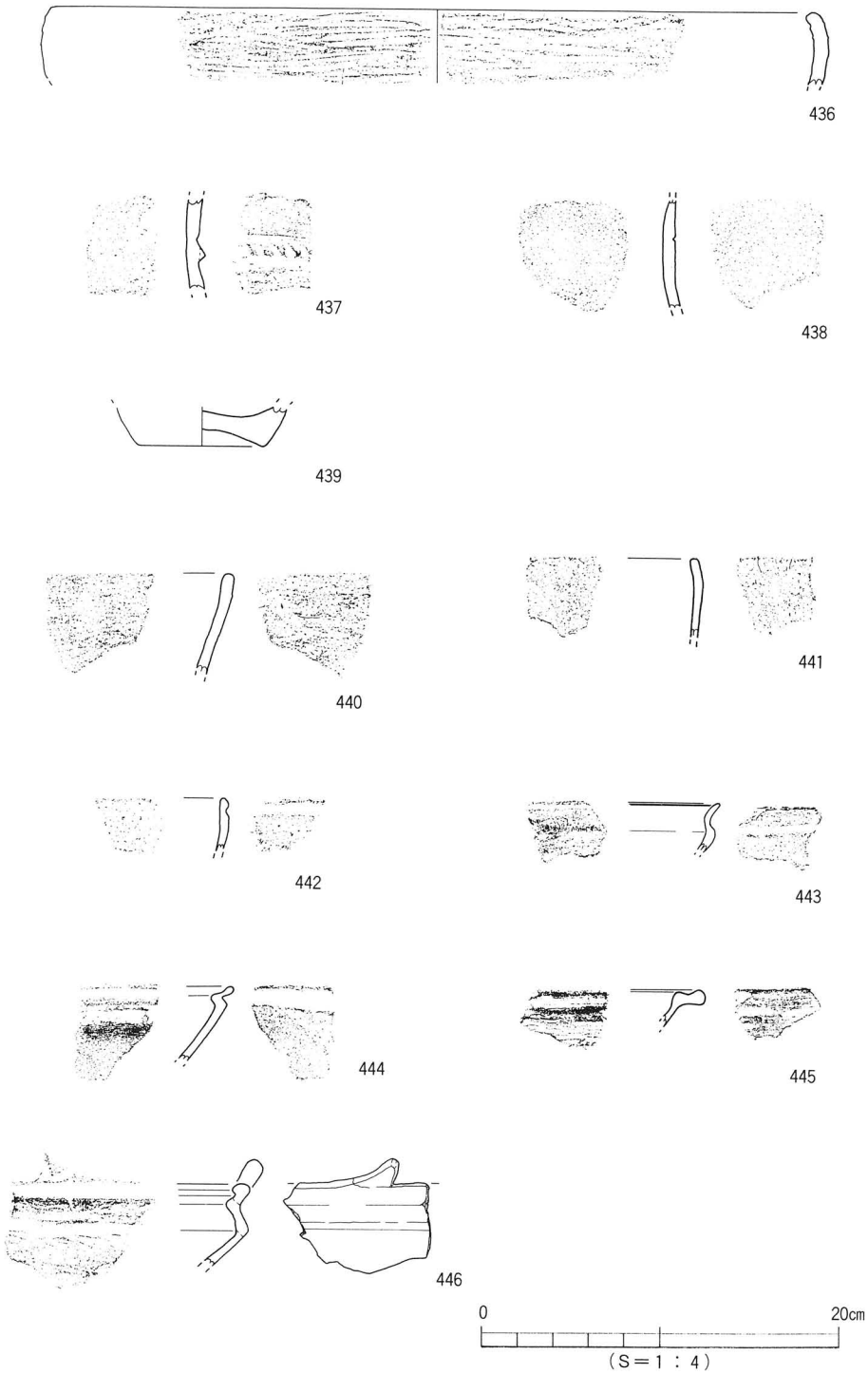
444は肩部の屈曲はシャープで、口縁部は直線的に短く、端部が肥厚している。

445は浅鉢の口縁部である。内外面に貝殻条痕がみられる。晩期の凸帯文系である。

446は肩部の屈曲はややなだらかで、内傾して口縁部が短い。口縁内面に１条の凹線が施されている。端部にリボン状突起をもつ。



第178図　出土遺物実測図（1）



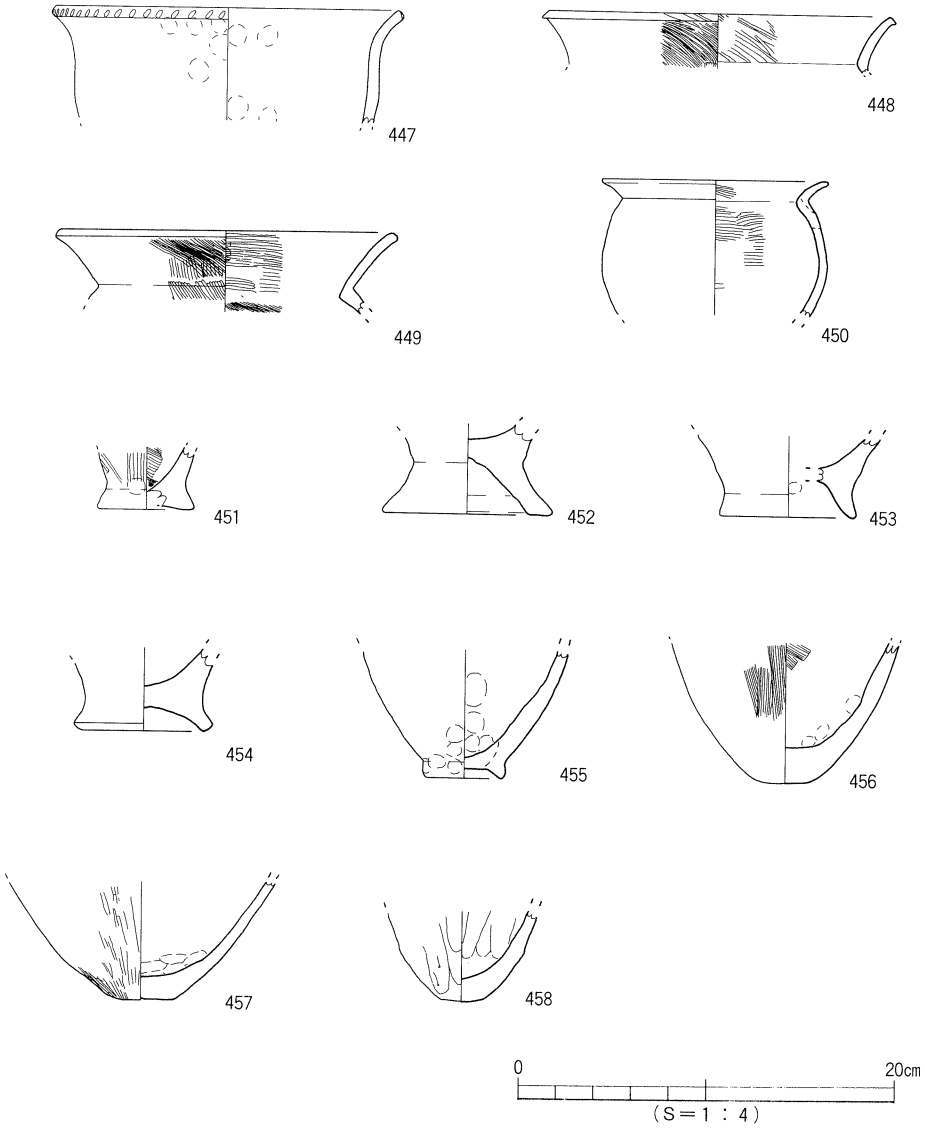
第179図　出土遺物実測図（2）

＊弥生土器＊（第180・181図）

（甕）

447は口縁部で、如意形を呈し、口縁端部に刻み目を施している。内外面ともナデ調整が施されている。推定口径18cmを測る。N13W20出土。前期後半の土器である。

448は口縁部である。内外面ともにハケ目が施されている。推定口径18cmを測る。N14W14出土。後期末の土器である。



第180図　出土遺物実測図（3）

449は口縁部である。内外面ともにハケ目が施されている。推定口径17.4cmを測る。N13W18出土。後期末の土器である。

450は小型品である。球形に近い体部をなし、口縁部は外傾している。外面は磨滅しているが、内面にはハケ目が施されている。推定口径11.4cmを測る。弥生末～古墳時代初頭と思われる。

451はやや上げ底を呈する底部である。内外面ともハケ目が施されている。推定底径5cmを測る。N13W18出土。

452はくびれの上げ底を呈する底部である。内外面ともナデ調整が施されている。底径8.5cmを測る。

453はくびれの上げ底を呈する底部である。内外面ともナデ調整が施されている。推定底径7cmを測る。N13W19出土。

454はくびれの上げ底を呈する底部である。内外面ともナデ調整が施されている。底径8.6cmを測る。

455はくびれの上げ底を呈する底部である。内外面とも磨滅している。底径4cmを測る。N15W20出土。後期の土器である。

456は平底を呈する底部である。体部外面に縦方向のハケ目が施されている。底径2.4cmを測る。

457は平底を呈する底部である。外面には底部にまでハケ目が施されている。内面は磨滅して調整不明。底径3.3cmを測る。

458は若干の平底をなす底部である。外面には縦方向のケズリが施されている。底径2.2cmを測る。N15W20出土。

（壺）

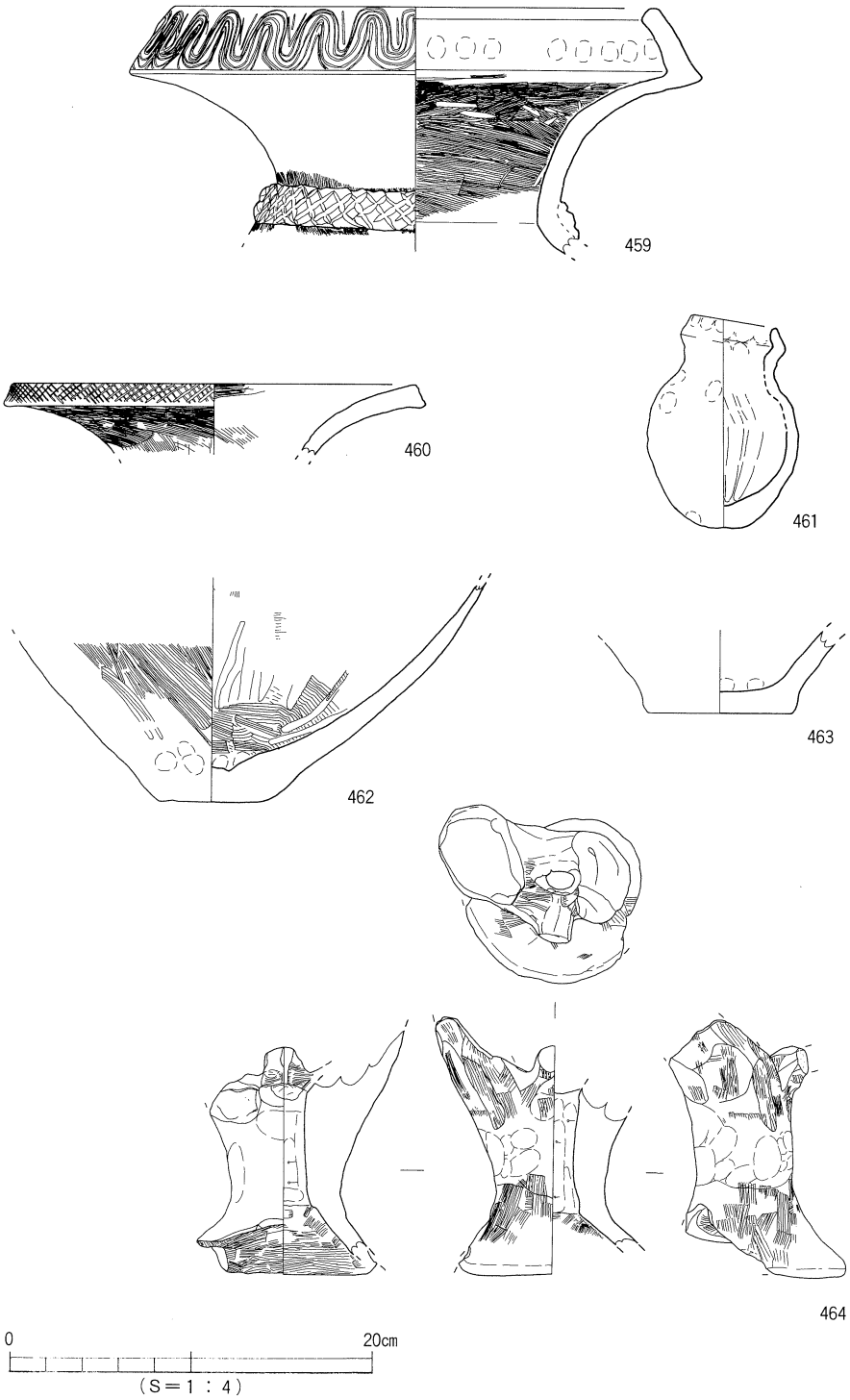
459は複合口縁壺の口縁部でほぼ完形品である。口径25.8cmを測る。口縁接合部は「く」の字状を呈している。口縁拡張部には櫛描波状文が施されている。頸部には凸帯が貼り付けられ、斜格子状の刻みが施されている。頸部および内面にはハケ目が施されている。

460は広口壺の口縁部である。推定口径21.6cmを測る。口縁部が「ラッパ」状に開き、端面には格子状の刻みが施されている。内外面にはハケ目が施されている。N15W20出土。

461は複合口縁壺のミニチュア土器で完形品である。外面は磨滅して調整不明。口径4.2cm、器高11.5cmを測る。N14W14出土。

462は平底を呈する壺の底部である。外面には縦方向のハケ目、内面にはハケ目の後に部分的なナデ消しが見られる。底径6cmを測る。N13W19出土。

463は平底を呈する壺の底部である。摩滅しているため調整は不明。底径8cmを測る。



第181図　出土遺物実測図（4）

（支脚）

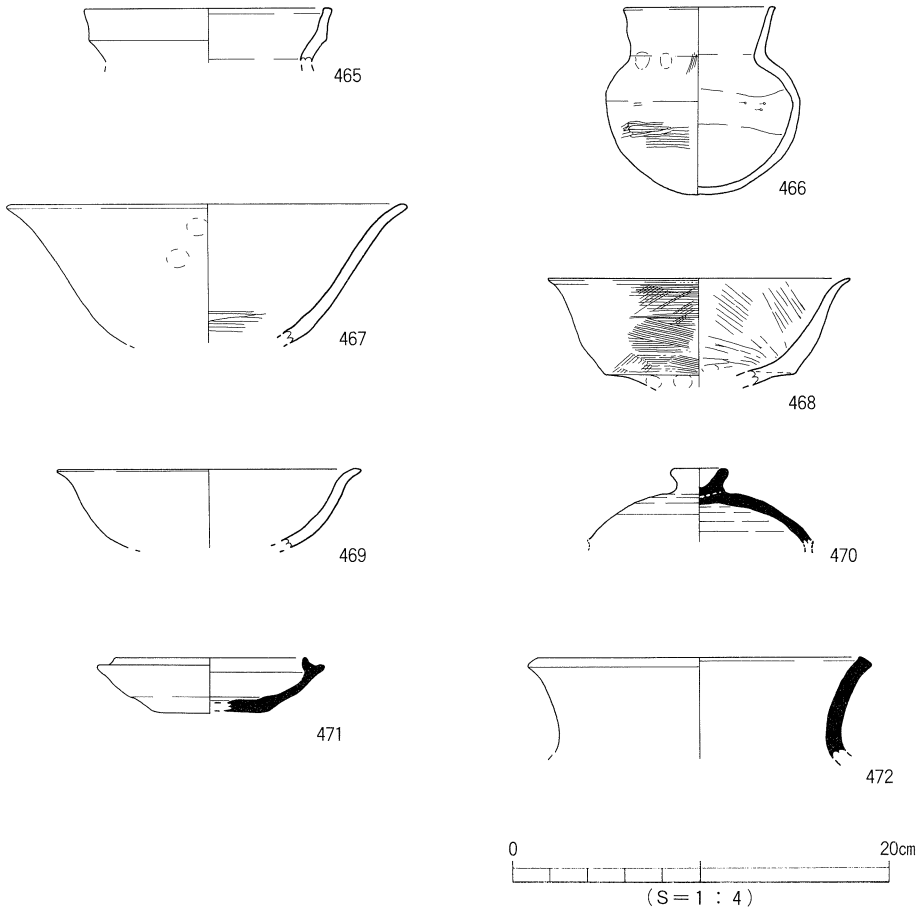
464は中空の支脚である。裾部の内面は横ハケ、外面は縦ハケ、支手部の外面もハケ目が施されている。２支手と小支手がつく。

＊土師器＊（第182図）

（壺）

465は二重口縁壺の口縁部である。推定口径13.2㎝を測り、小型品である。頸部から外反気味に立ち上がり、やや鈍い稜をなして直立気味に外反する口縁にいたる。端部は平坦に仕上げられ、内側に凹面をもつ。内外面とも横ナデが施されている。N14W19出土。

466は小型の丸底壺でほぼ完形品である。口縁部は頸部からやや内湾気味に直立し、端部外側がやや肥厚する。口縁部の内外面は横ナデが施されている。頸部外面には若干の縦方向のハケ目が施され、体部中位下の外面には横ハケが施されている。口径7.4㎝、器高9.9㎝を測る。口縁部並びに体部外面は全体に煤けている。



第182図　出土遺物実測図（5）

（高坏）

467は坏部で、内湾しながら立ち上がり、端部は外反する。推定口径20.4㎝を測る。内外面とも横ナデがされ、内底面に若干のハケ目が施されている。

468は坏部で、明瞭な稜をなし、内湾しながら立ち上がり端部は外反する。内外面ともに横ハケが施されている。推定口径15.4㎝を測る。

469は坏部で、内湾しながら立ち上がり端部は外反する。内外面ともに横ハケが施されている。推定口径15.2㎝を測る。

＊須恵器＊（第182図）

470は坏蓋である。やや丸味のある天井部で、つまみは丸く中央が凹む。外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整である。

471は坏身である。平坦な底部から内湾しながら立ち上がる。推定口径10㎝を測る。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く仕上げられている。

472は壺の口縁部である。内外面とも横ナデが施されている。推定口径16.8㎝を測る。全体がにぶい橙色（7.5ＹＲ7/3）を呈している。

（４）緑灰色粘土上の砂礫層からの出土遺物（第183図）

＊縄文土器＊

473は深鉢で、縄文地に凸帯を貼り付け、頸部にも凸帯を貼り付け、刻みが施されている。波状口縁を呈し、平坦な端部に刻みが施され、内側が肥厚している。頸部は緩やかにまがるキャリパー型である。大歳山併行期が考えられる。

474は深鉢で、端部は平坦に仕上げられ、内側に肥厚している。外面には棒状工具による区画文が見られる。鐘ケ崎式併行と思われる。

475は深鉢で、外面には棒状工具による縦方向の線が刻まれている。

476は深鉢で、やや波状口縁を呈し、端部に刻み目が施されている。

477は深鉢で、肥厚する口縁部である。

478は深鉢の底部で上げ底を呈している。底径5.2㎝を測る。

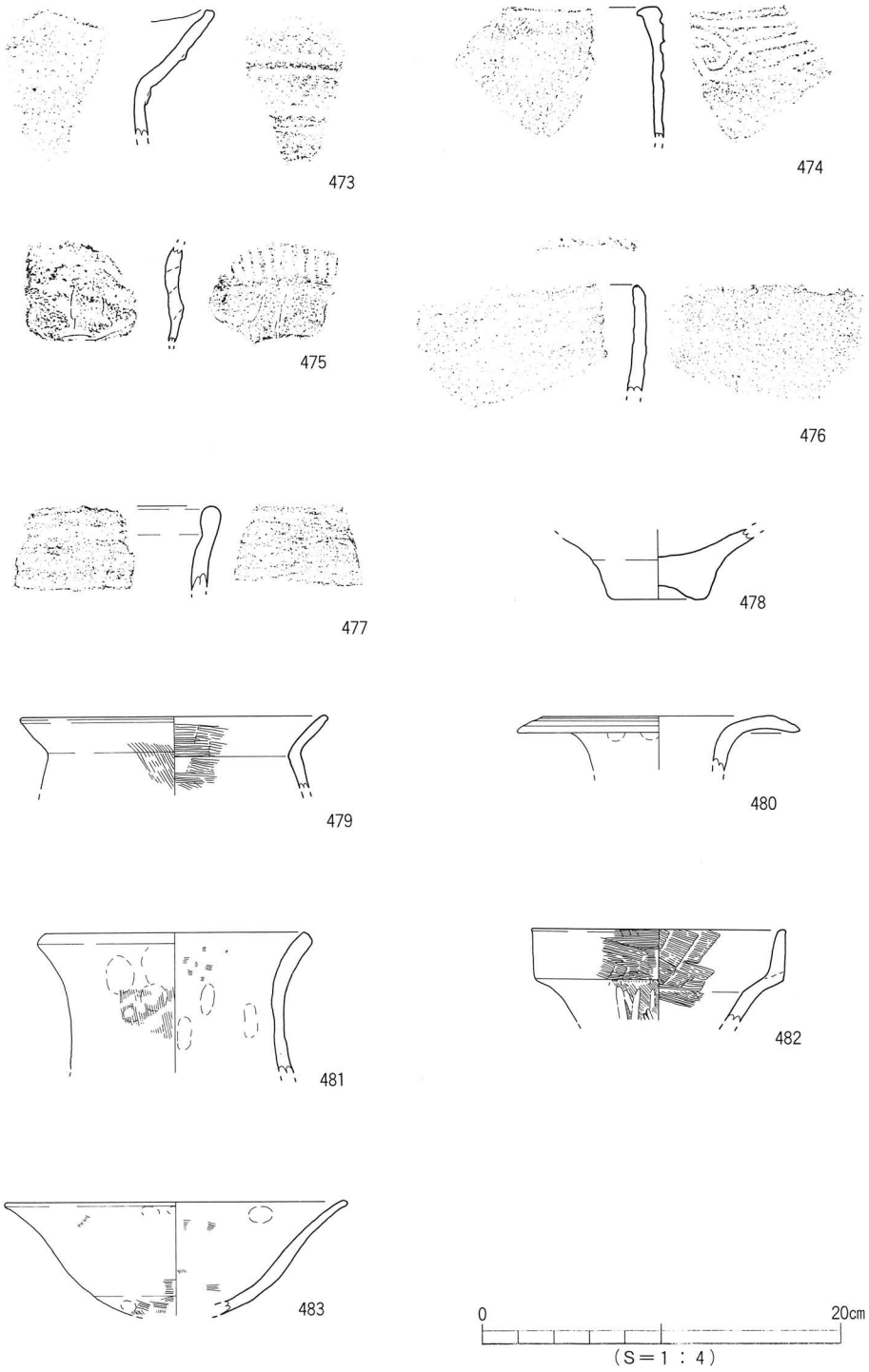
＊弥生土器＊

479は平底を呈する甕の底部である。外面には縦方向のハケ目が施されている。底径3.4㎝を測る。

480は鋤先状の口縁部をもつ壺である。口縁外面には３条の凹線が巡る。全体に磨滅しているため調整は不明。推定口径12.8㎝を測る。

481は長頸壺の口縁部で、全体に磨滅しているため調整は不明。口径14.4㎝を測る。

482は複合口縁壺で、「く」字状を呈している。内外面にハケ目が施されている。推定口径13.4㎝を測る。



第183図　出土遺物実測図（6）

483は高坏の口縁部で外反している。内外面に若干のハケ目が残る。推定口径19㎝を測る。

（5）緑灰色粘土東側の砂礫層からの出土遺物（第184・185図）

＊縄文土器＊（第184図）

484は深鉢で、口縁端部に刻みが施されている。

485は深鉢で、口縁端部に刻みが施されている。N12W 5 出土。

486は浅鉢で、端部は丸く内側に肥厚している。推定口径32㎝を測る大型品である。

＊弥生土器＊（第184・185図）

（甕）

487は外傾する口縁部で、内面にハケ目、体部外面にもハケ目が施されている。推定口径13.4㎝を測る。N12W 4 出土。

488は外反する口縁部で、体部外面にハケ目、口縁内面にもハケ目が施され、頸部以下にはケズリが施されている。推定口径12.6㎝を測る。

489は外傾する口縁部で、端部は細く仕上げている。体部外面に叩き、口縁部内外面にはハケ目が施されている。推定口径13.4㎝を測る。

490は外傾する口縁部で、端部は面取りされ断面四角形に仕上げられている。体部外面並びに口縁内面にはハケ目、体部内面の頸部以下約 2 ㎝下がった位置までケズリが施されている。また、それより上位の口縁端部に至るまでにはハケ目が施されている。推定口径14.8㎝を測る。

491は外面に縦方向のヘラ磨き、内面はハケ目が施されている。N11W 6 出土。

492は平底の底部で、内面に若干のハケ目、外面には底部にまでハケ目が施されている。底径2.6㎝を測る。N11W 6 出土。

493はやや突出する平底で、内面にはハケ目が施され、外面は磨滅のため調整不明。底径 3 ㎝を測る。

494は丸味のある底部で、外面には叩きとハケ目、内面にはハケ目が施されている。底径2.6㎝を測る。N13W 6 出土。

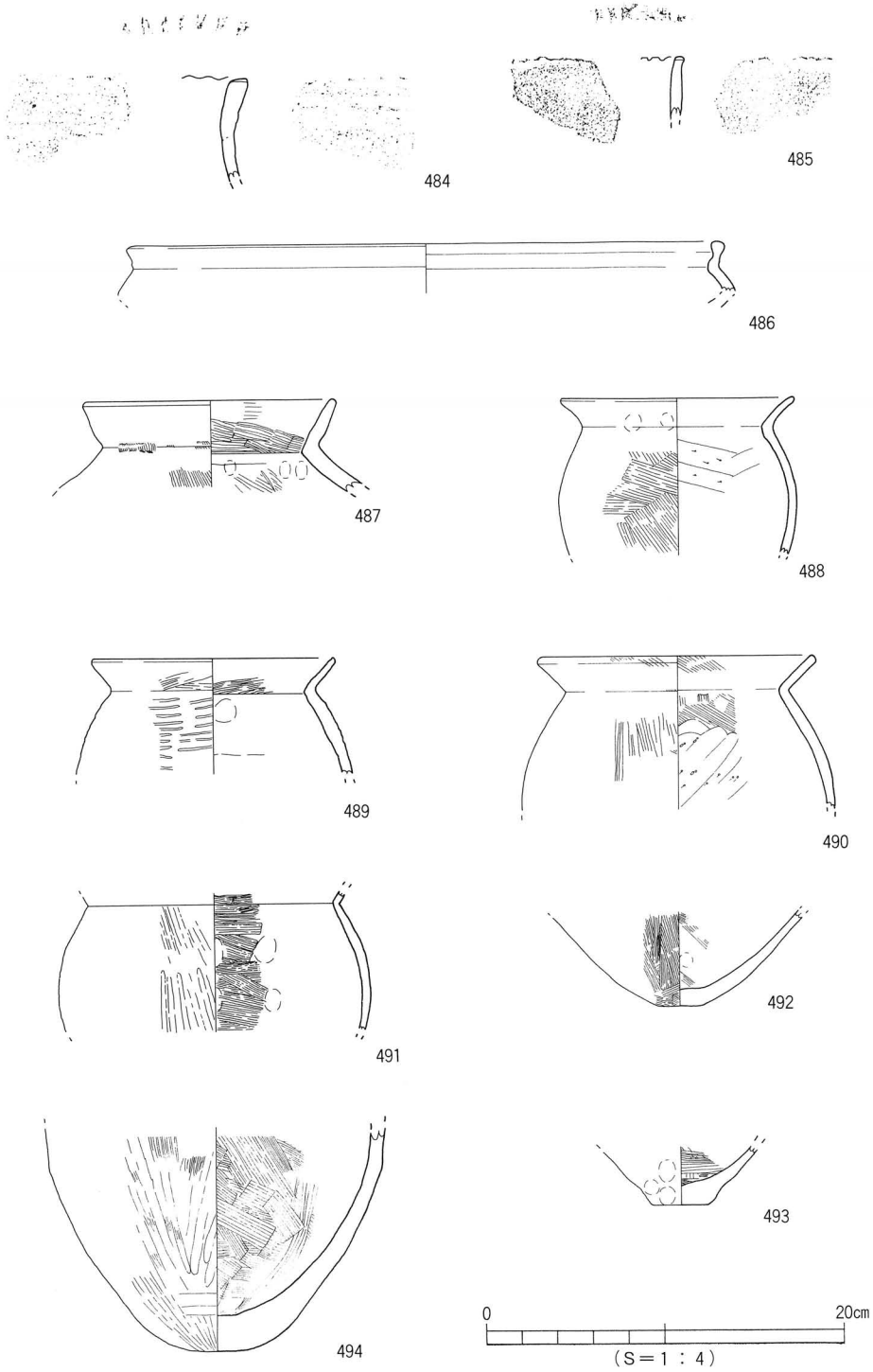
（壺）

495は口縁外面に 3 条の凹線が巡る。全体に磨滅しているため調整は不明。推定口径28㎝を測る。

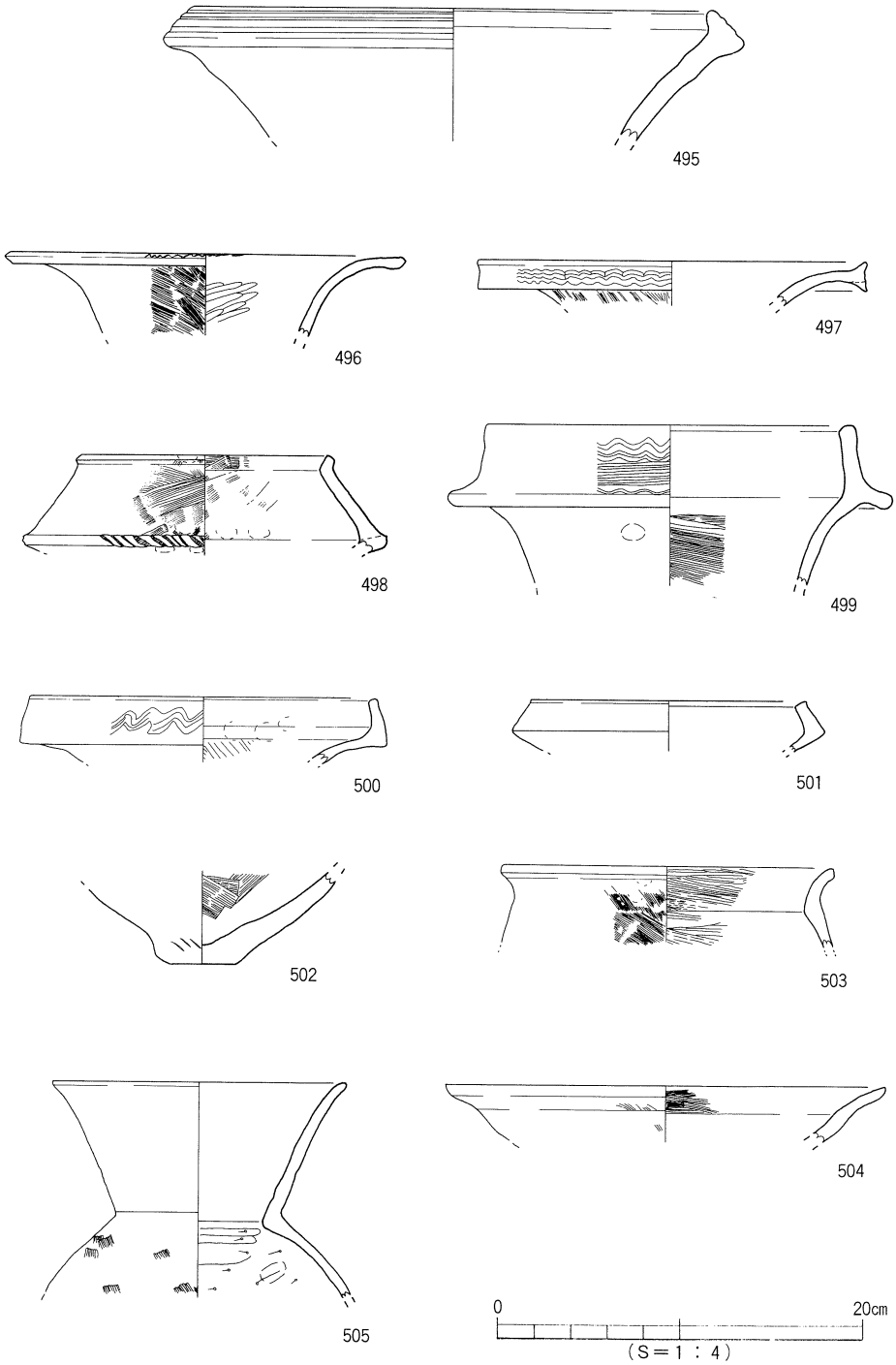
496は広口壺で、口縁端部は内側にやや肥厚している。外面には細かいハケ目が施されている。推定口径21㎝を測る。

497は広口壺の口縁部で、口縁部外面にはクシ画き波状文が施されている。推定口径20.6㎝を測る。

498は複合口縁壺の拡張部である。口縁端部は突出し外傾している。接合部には刻み目が



第184図　出土遺物実測図（7）



第185図　出土遺物実測図 (8)

施され、内外面にはハケ目が施されている。推定口径13.6㎝を測る。

499は複合口縁壺、全体に磨滅しているが、内面にハケ目が施されている。口縁接合部が「コ」の字状に仕上げられている。拡張部外面には横方向のクシ画き沈線とその上下に波状文が施されている。推定口径18.3㎝を測る。

500は複合口縁壺で、拡張部外面にはクシ画き波状文が施され、内面には荒いハケ目が施されている。推定口径16㎝を測る。

501は複合口縁壺で、口縁端部は平坦に仕上げられ、内外面ともナデ調整である。推定口径13.8㎝を測る。

502は底部で、突出する平底である。内面には縦方向のハケ目、外面は磨滅しているが底部近くに若干の叩きの痕跡がみられる。底径3.4㎝を測る。N13W 6 出土。

（鉢）

503は頸部から口縁にかけて外反し、端部は外側に肥厚している。内外面ともにハケ目が施されている。推定口径17.8㎝を測る。N11W 6 出土。

504は口縁部が大きく外傾している。内面にハケ目が施されている。推定口径24㎝を測る。

（壺）

505は直口壺で、口縁端部が外傾している。外面には若干のハケ目が残り、内面はケズリが、口縁部内外面は横ナデが施されている。推定口径15.8㎝を測る。古墳時代初頭と思われる。

（6）掘削中における出土遺物（第186・187図）

＊弥生土器＊

506は完形品の支脚で、台形状を呈する。調整はナデ。幅5.6㎝、底径 8 ㎝、器高5.6㎝を測る。弥生時代の土器である。

507は平底を呈する鉢で口縁部は欠損している。内面にはヘラミガキ、外面は磨滅のため調整不明。底径3.6㎝を測る。

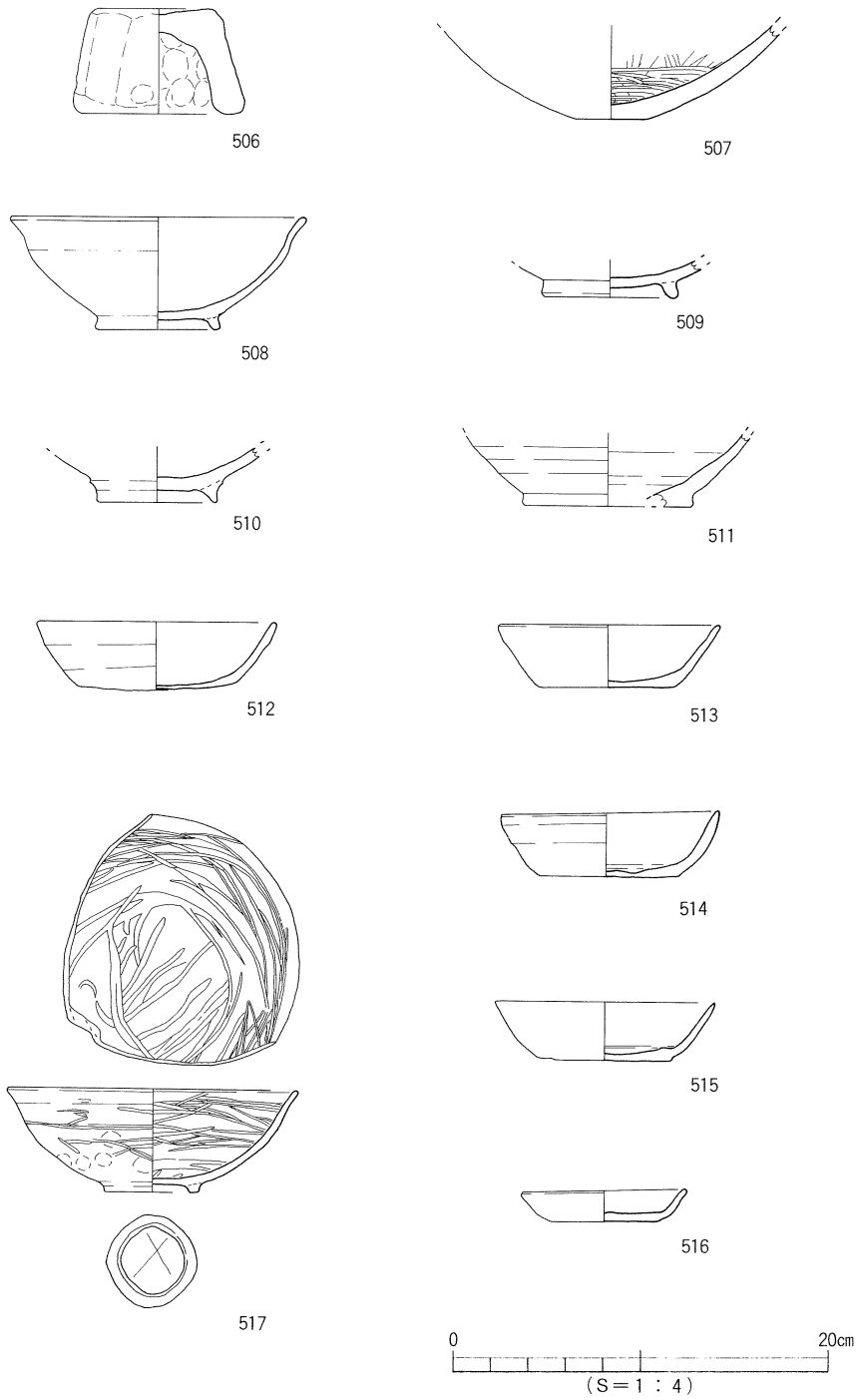
＊古代以降の土器＊

（土師器椀）

508は、非黒色処理の椀である。全体に撫で調整。口縁部は外反している。底部は回転糸切りの後に断面四角形の高台を貼り付けている。推定口径15㎝、器高 6 ㎝、高台径6.7㎝、高台高0.7㎝を測る。

509は非黒色処理の椀底部である。断面四角形の高台が貼り付けられ、内外面ナデが施されている。高台径4.4㎝を測る。

510は非黒色処理の椀底部で、回転糸切りの後に断面三角形の高台が貼り付けられ、内外面ともナデが施されている。高台径6.1㎝を測る。



第186図　出土遺物実測図（9）

（土師器杯）

511は円盤高台を呈している。内外面ともナデが施され、推定高台径8.6㎝を測る。

512はほぼ完形品である。内外面ともナデが施され、底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕がみられる。口径12.2㎝、器高3.6㎝、底径8.2㎝を測る。

513は完形品である。内外面ともナデが施され、底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕がみられる。口径11.4㎝、器高3.3㎝、底径7.2㎝を測る。

514は完形品である。内外面ともナデが施され、底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕がみられる。口径11.4㎝、器高3.4㎝、底径7.2㎝を測る。

515は完形品である。内外面ともナデが施され、底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕がみられる。口径11.2㎝、器高3.1㎝、底径７㎝を測る。

（土師器小皿）

516は完形品である。内外面ともナデが施され、底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕がみられる。口径8.6㎝、器高1.7㎝、底径5.6㎝を測る。

（瓦器椀）

517はほぼ完形品である。底部には断面四角形の高台が貼り付けられている。内外面にはミガキが施されている。高台内面には焼成後に「×」印が刻まれている。口径14.4㎝、器高5.4㎝、高台径５㎝を測る。和泉型瓦器と思われる。

（土師質鍋）

518の内面は横ハケ、体部外面は縦ハケが施され、口縁部は頸部から外方向にやや内湾しながら外傾し肥厚している。推定口径36.6㎝を測る。内外面ともに煤けている。

（置き竈）

519は庇部片である。内面には荒いハケ目が施されている。外面には指頭圧痕が残る。

（須恵器杯）

520は円盤高台を呈する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、全体に橙（5ＹＲ7/6）色を呈している。内外面ともナデ、内面には火だすきの痕跡が見られ、推定高台径7.4㎝を測る。

（須恵器）

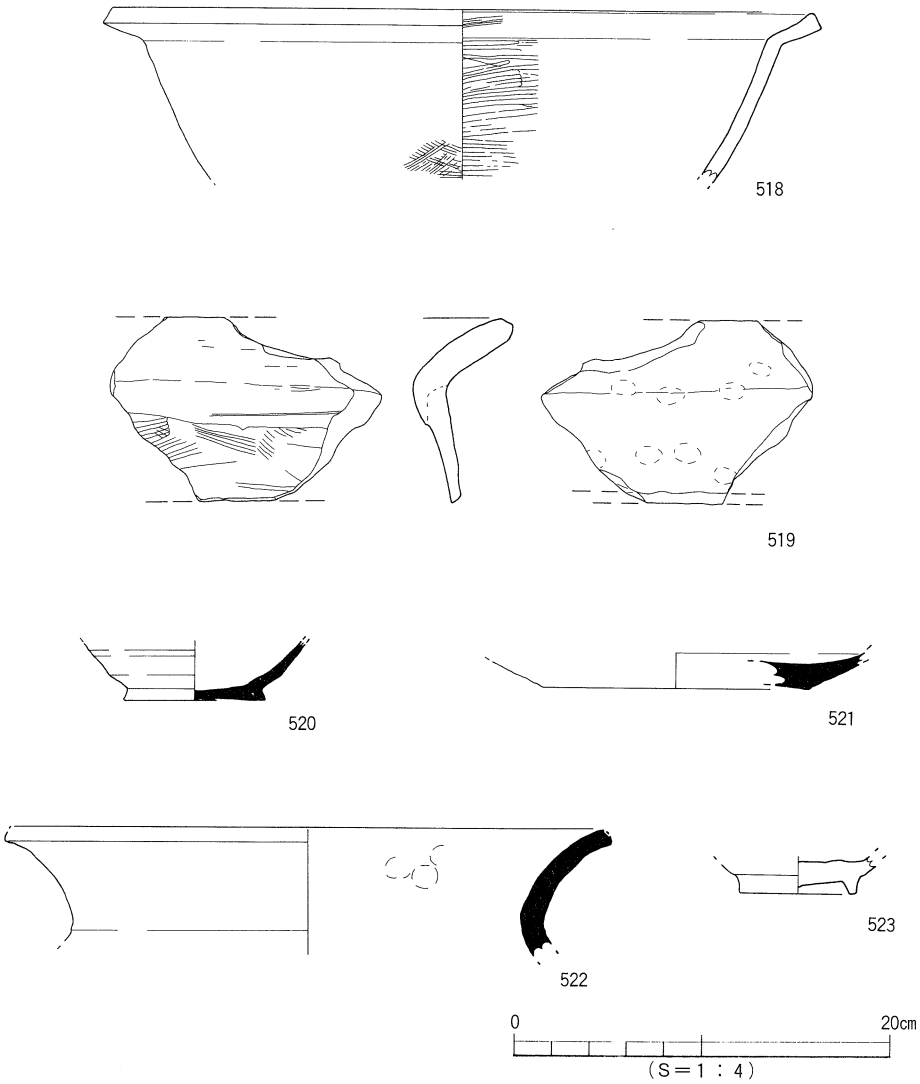
521は底部で上げ底を呈している。内外面ともナデが施されている。推定底径14㎝を測る。器種は不明である。

（須恵器甕）

522は口縁部である。口縁部は、頸部から外反しながら立ち上がる。内外面ともナデ、口縁端部が欠損しているが推定口径31㎝を測る。

（貿易陶磁器）

523は白磁碗Ⅷ類の底部である。内面の釉を輪状に劃き取っている。高台径6.2㎝を測る。



第187図　出土遺物実測図 (10)

＊石製品＊（第188図）

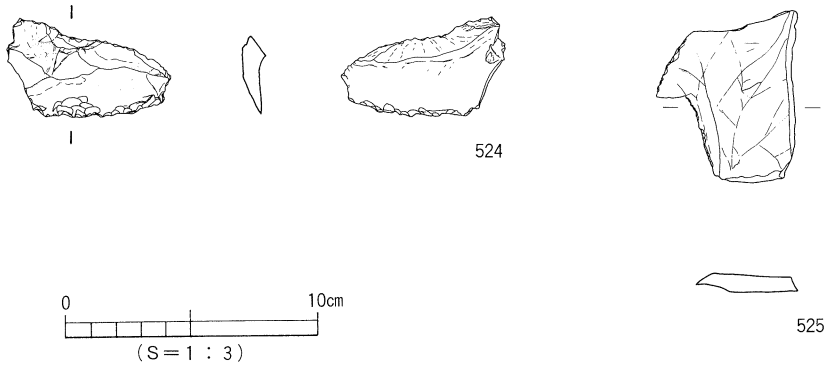
524はサヌカイト製の刃器である。重さ19.9ｇを測る。緑灰色粘土上の砂礫層から出土。

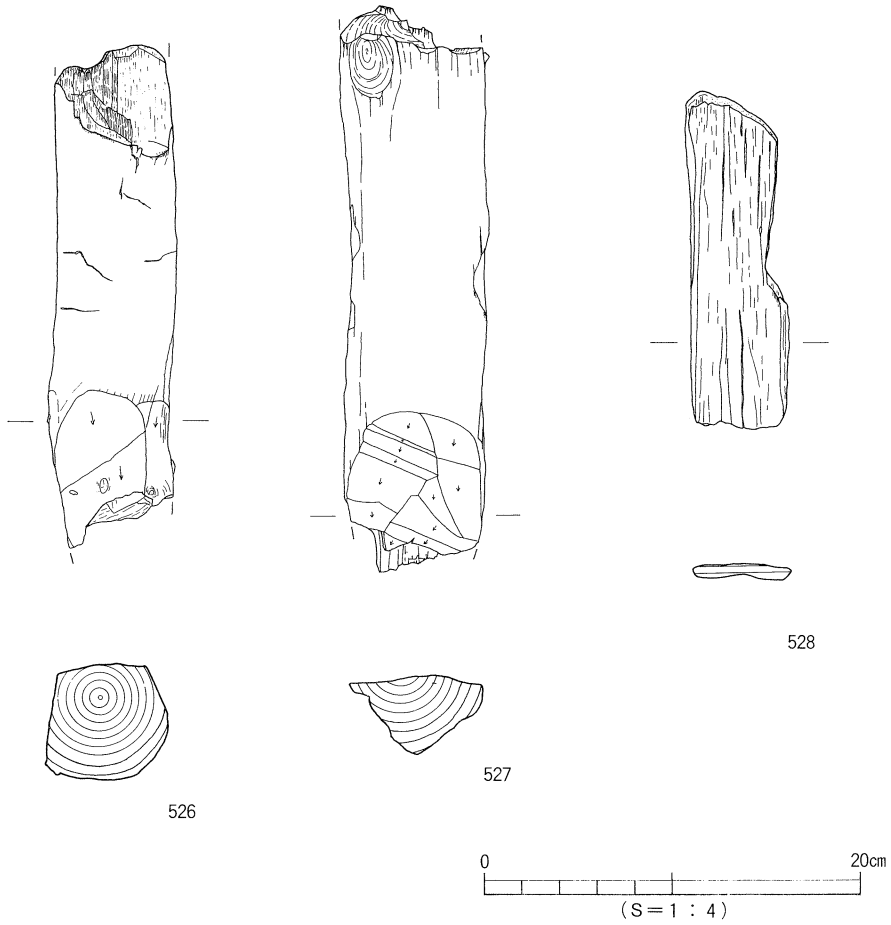
525はサヌカイト製の刃器である。重さ30.2ｇを測る。N12W19出土。

＊加工材＊（第188・189図）

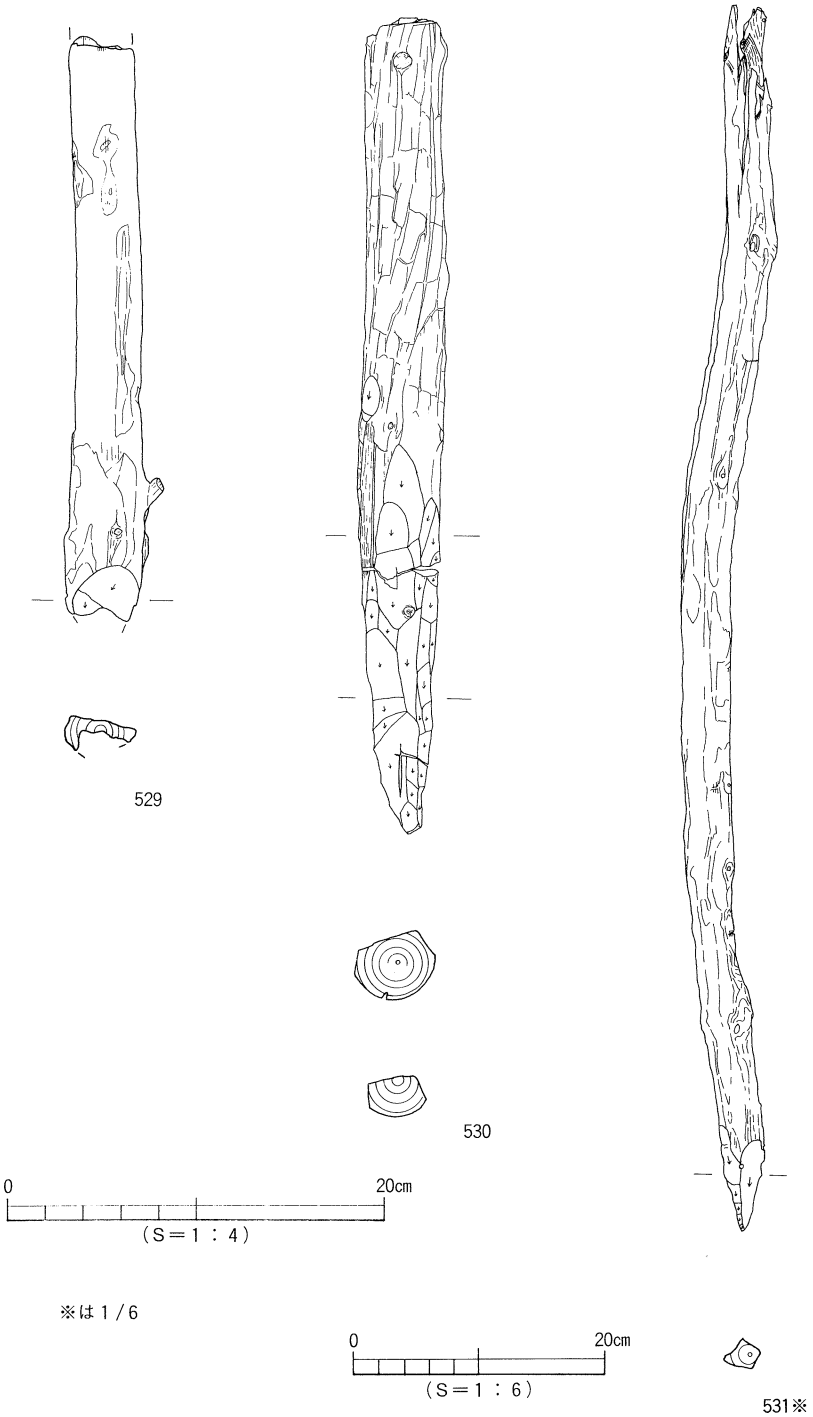
526は杭材である。取り上げ番号N13W12粘土混じり砂層L＝10.0ｍ。残存長約25.5㎝、直径約6.4㎝を測る。樹種分析ではクロマツである（分析編Ⅶ－７）。

527は杭材である。掘削中に出土。残存長約30㎝、直径約7.4㎝を測る。





第188図　出土遺物実測図 (11)



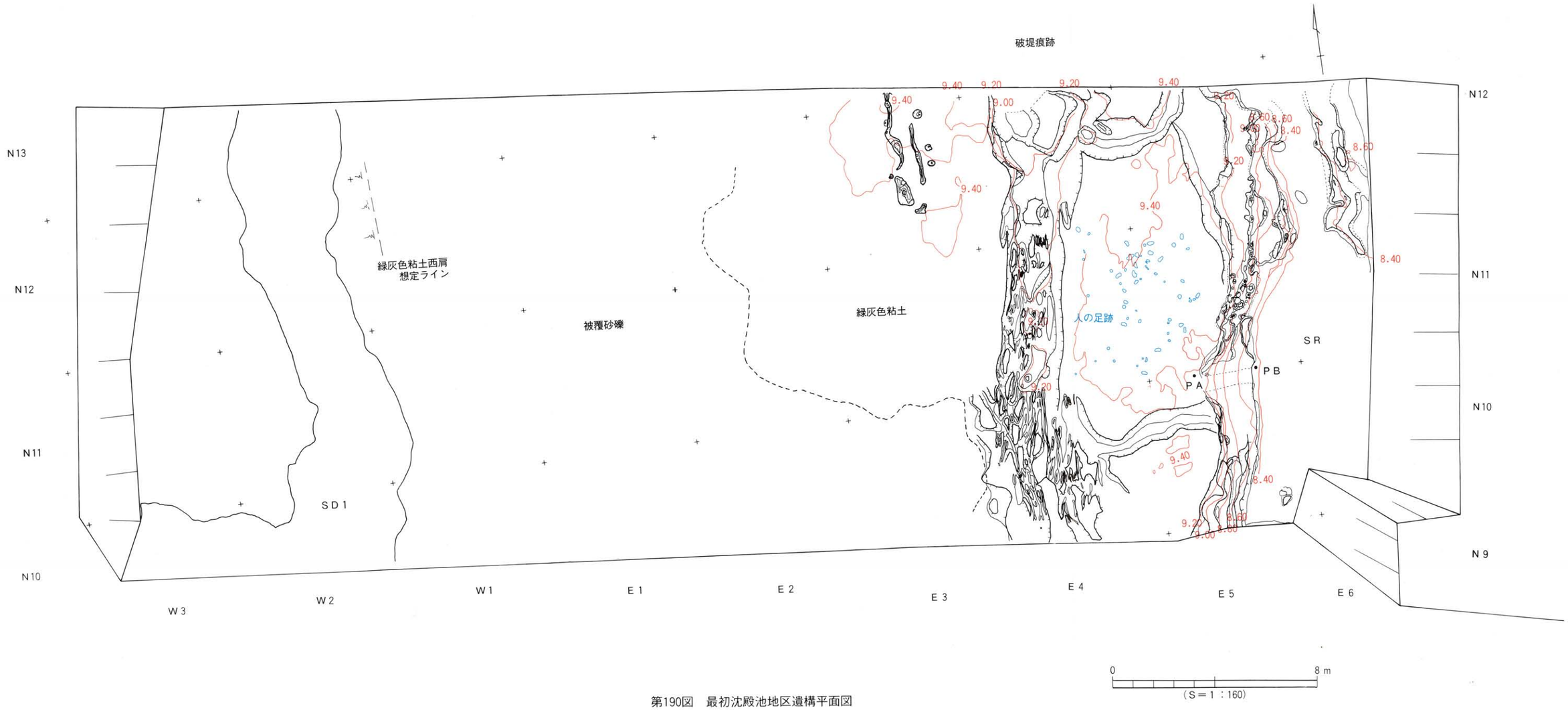
第189図　出土遺物実測図 (12)

528は板材である。取り上げ番号緑灰色シルト、東側Ｌ＝8.0ｍ。残存長約17.8㎝、幅約5.3㎝、厚さ約0.5㎝を測る。樹種分析ではヒノキである（分析編Ⅶ－７）。

529は杭材である。掘削中に出土。残存長約46.8㎝、直径約7.3㎝を測る。

530は杭材である。取り上げ番号Ｎ13W12粘土混じり砂層。残存長約65㎝、直径約６㎝を測る。

531は杭材である。取り上げ番号Ｎ13Ｗ７№３。残存長約1.75ｍ、直径約３㎝を測る。樹種分析ではマツ属である（分析編Ⅶ－７）。



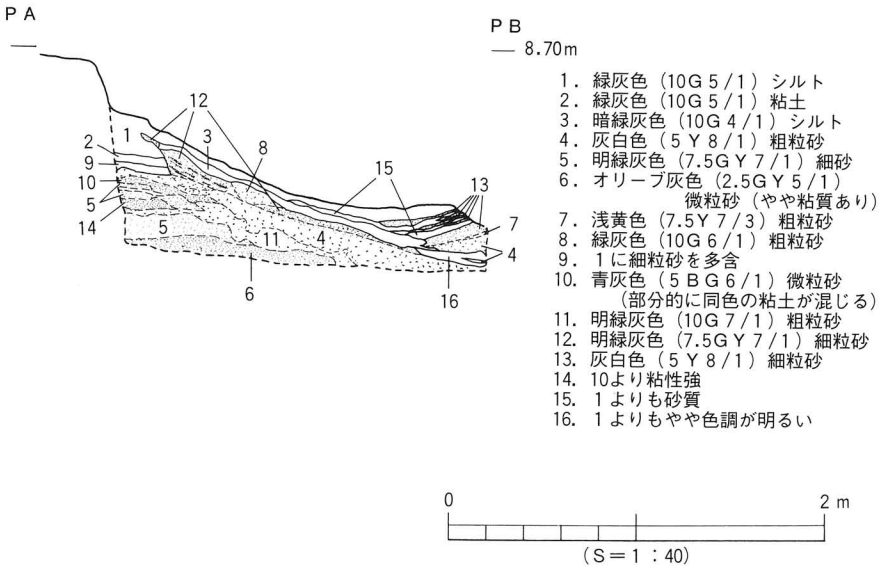
第190図　最初沈殿池地区遺構平面図

3　最初沈殿池地区の遺構と遺物

調査区では、東側において、安定する緑灰色粘土が標高約9.4ｍで検出される。この粘土の東端は、この粘土を西岸とする南北方向の河川１条が検出される。この河川の東岸は調査区外である。この粘土は、第６次調査で検出されている粘土№６と連続するものである。この粘土上には、北から南への破堤痕跡があり、また、人の足跡などが検出される。

調査区西側において、緑灰色粘土を被覆する砂礫層からＬ字状の溝１条（ＳＤ１）が検出される。埋土は黒色粘土である。このＳＤ１のコーナー部から南西にかけて小型精製三種、甕、壺、高坏、椀、土垂などが出土している。

緑灰色粘土を被覆する砂礫層や東側の河川からは、縄文時代後期から弥生時代後期末にかけての土器が出土している。



第191図　粘土東側土層図

1　溝状遺構（ＳＤ）

ＳＤ１は、掘削中のＮ11Ｗ２において遺物の出土をみたため、その遺物の周辺を精査し、黒色粘土（2.5Ｙ5/1）を検出する。この黒色粘土は、北へ延びるとともに南西部へも広がることが確認される。この溝は、幅約1.8ｍ前後、深さ約10～20㎝を測る。コーナー部から南西にかけて土師器が出土している。出土遺物は古墳時代前期（４世紀）が考えられる。

また、炭化材が出土しているため、その樹種分析を行う。その結果はヤブニッケイである（分析編Ⅶ－７）。

出土遺物（第192～200図）

＊甕＊（第192～196図）

口縁部の形態は、直口タイプ（532～559）と二重口縁タイプ（560・561）に分かれる。二重口縁甕は掲載した２点のみで、直口タイプの点数が多い。また、大型品（559）や小型品（556）の数は少ない。いずれの甕の体部はやや球形に近く丸底を呈している。二重口縁甕は、おそらく山陰系のもと思われる。

調整方法は、外面にはハケ目、内面の頸部下には若干の指頭圧痕がみられ、その下から全体にヘラ削りが施され、内底面には指頭痕が残る。口縁部の内外面には横ナデが施されている。ただし、556の体部下半には削りが施されている。また、549の体部外面には成型時の叩き痕が看取れる。

ほとんどの甕の外面は、全体的または部分的に黒色または赤褐色を呈しているが、556にはみられない。

536・540・541の体部外面には工具（ハケ？）による刺突状の痕跡が意図的につけられている。536と541には４段、540には５段の痕跡がある。この様な痕跡の施されている甕は、古照遺跡より西方、宮前川の下流域「宮前川遺跡」から出土している(1)。

直口タイプには、頸部からの立ち上がり方が直線的に斜め外方向に立ち上がるものとやや内湾しながら立ち上がるものがある。また、口縁部中位が横ナデによって肥厚している特徴のものがある。しかし、ここでは口縁端部の断面の形態的特徴から、Ⅰ）四角形を呈するもの、Ⅱ）やや丸味（丸く仕上げている）を呈するもの、Ⅲ）三角形（先細く仕上げている）を呈するもの、の三形態に大別できる。また、Ⅰ）形態のものは更に、Ⅰ－１）端部内側が肥厚するもの、Ⅰ－２）端部外側が肥厚するもの、Ⅰ－３）肥厚しないものに小分類できる。

これら分類に属する遺物番号は、

Ⅰ－１）・・532、535、536、538、541、542、543、544、545、546、547、548

Ⅰ－２）・・533、534、549、550、551、552、553

Ⅰ－３）・・539　　Ⅱ）・・537、540、554　　Ⅲ）・・555、556

となり、数値的にⅠ－１）分類に属する個体数が多い。二重口縁甕の２点は、この分類ではⅠ－１）分類に属する。

532は口径14.4㎝、器高23㎝を測る。533は口径14.8㎝、器高21.5㎝を測る。534は口径14㎝、器高19.5㎝を測る。535は口径12.6㎝を測る。536は口径13.6㎝を測る。537は口径14.4㎝、器高21㎝を測る。538は口径15㎝、器高24.4㎝を測る。539は口径13㎝を測る。541は口径14.2㎝、器高21.7㎝を測る。542は口径12.1㎝、器高15.7㎝を測る。543は口径16.8㎝を測る。544は推定口径14.6㎝を測る。545は推定口径14㎝を測る。

548は口径14.8㎝、器高19.8㎝を測り、頸部以下体部外面には縦方向のヘラ状工具の痕跡が深く刻まれている。549は口径14.2㎝、器高20.7㎝を測る。550は口径13.4㎝を測る。551は口径15.5㎝を測る。

553は口径11.4㎝を測り、口縁部外面に縦方向のハケ目の後に横ナデが施されナデ消されている。体部内面は、頸部以下中位まで成型時の絞りの痕跡が顕著でその後に横ナデが施され、下半はヘラ削りが施されている。554は推定口径10.6㎝を測り、体部内面の頸部直下からヘラ削りが施されている。555は推定口径11.4㎝を測る。556は口径8.6㎝、器高10㎝を測り、体部内面にはナデが施されている。559の体部外面頸部近くに548と同様のヘラ状工具の痕跡がみられる。560は口径26㎝、器高30㎝を測る。体部内面の頸部直下からケズリが施されている。

561は口径24.8㎝を測り、体部内面の頸部よりやや下がる位置から縦方向のヘラ削りが施されている。

＊壺＊（第197～199図）

大型の壺（562～572）と小型丸底壺（573・574）がある。

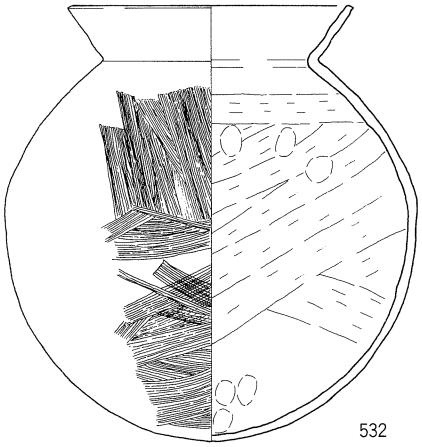
大型の壺の口縁部形態は、直口タイプ（562～567、568・569？）と二重口縁タイプ（570～572）に分かれる。体部はやや球形に近く丸底を呈している。二重口縁壺は、おそらく山陰系と思われる。

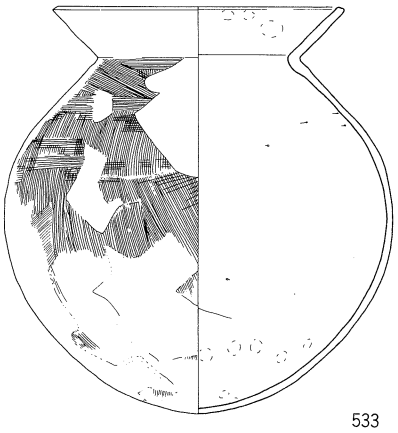
大型の壺の調整方法は、外面にはハケ目、内面は頸部下に若干の指頭圧痕がみられ、その下から全体にヘラ削りが施され、内底面には指頭痕が残る。口縁部の内外面には横ナデが施されている。

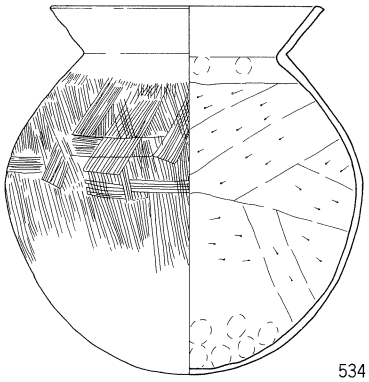
566・568の肩部には竹管文が施されている。566は５ケ所、568は破片のため３ケ所確認できる。569は体部径が一番大きい大型品である。

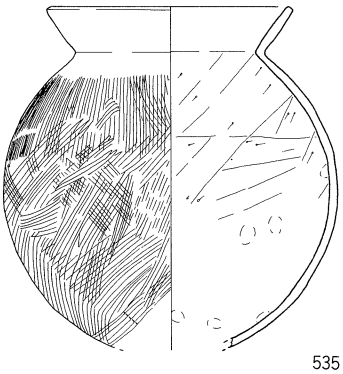
562は頸部周辺の外面に横ナデが施され、口縁部内外面に若干のハケ目がみられる。口縁部は斜め方向に立ち上がり端部近くで外反し、若干肥厚している。口径16.8㎝、器高33.2㎝を測る。

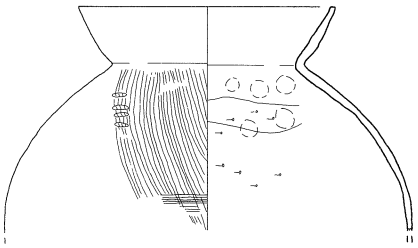
563は口縁部が斜め方向に立ち上がり、中位がナデによりやや肥厚している。端部近くで外反し、内側に肥厚している。口径17.3㎝、器高34.3㎝を測る。

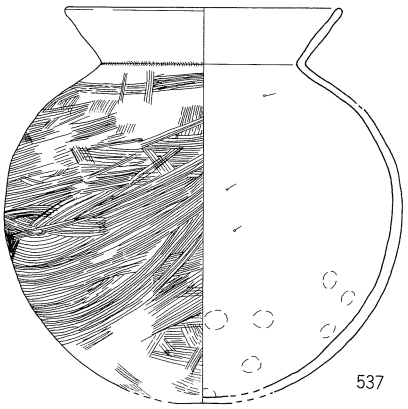


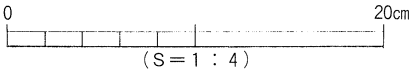




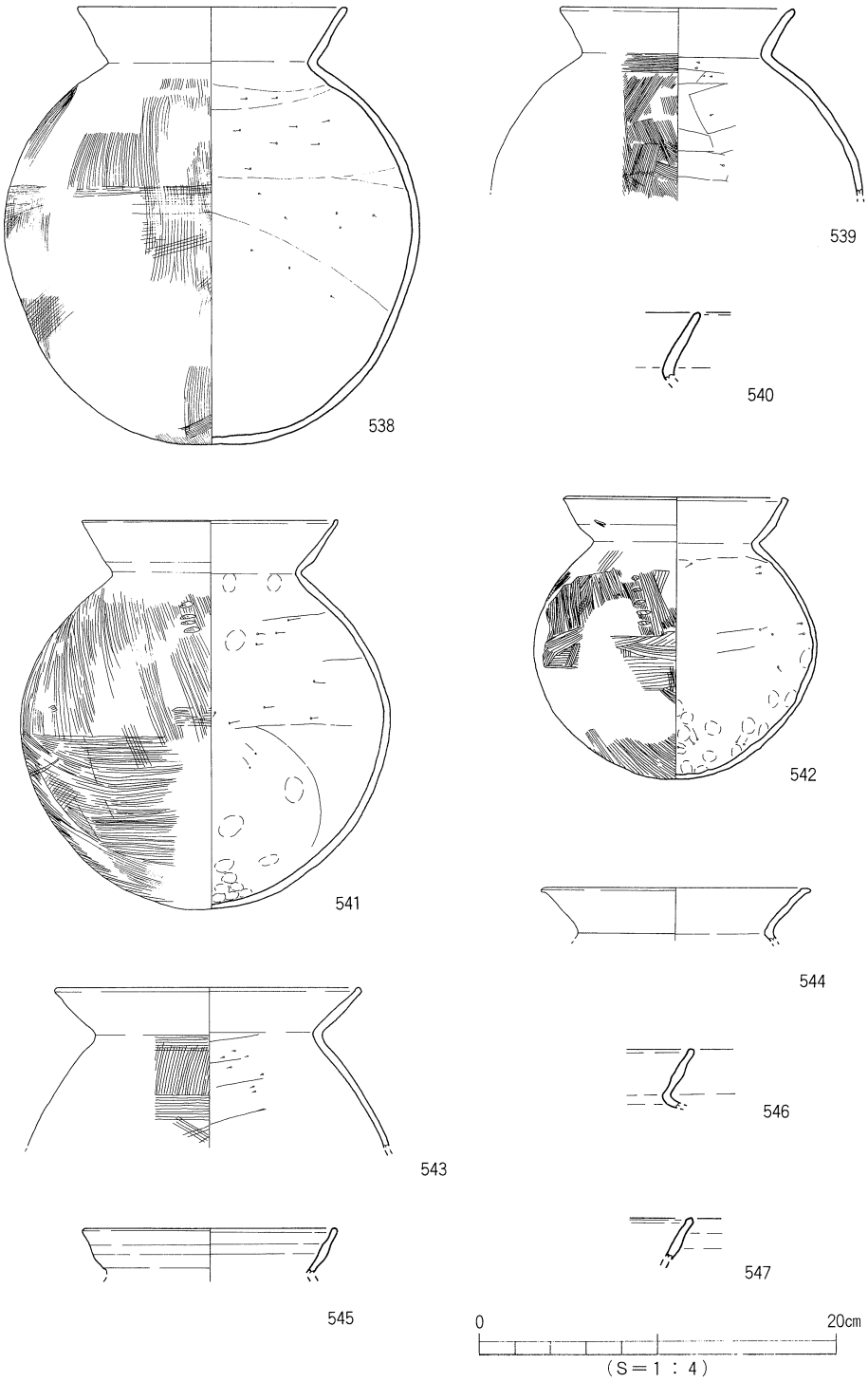




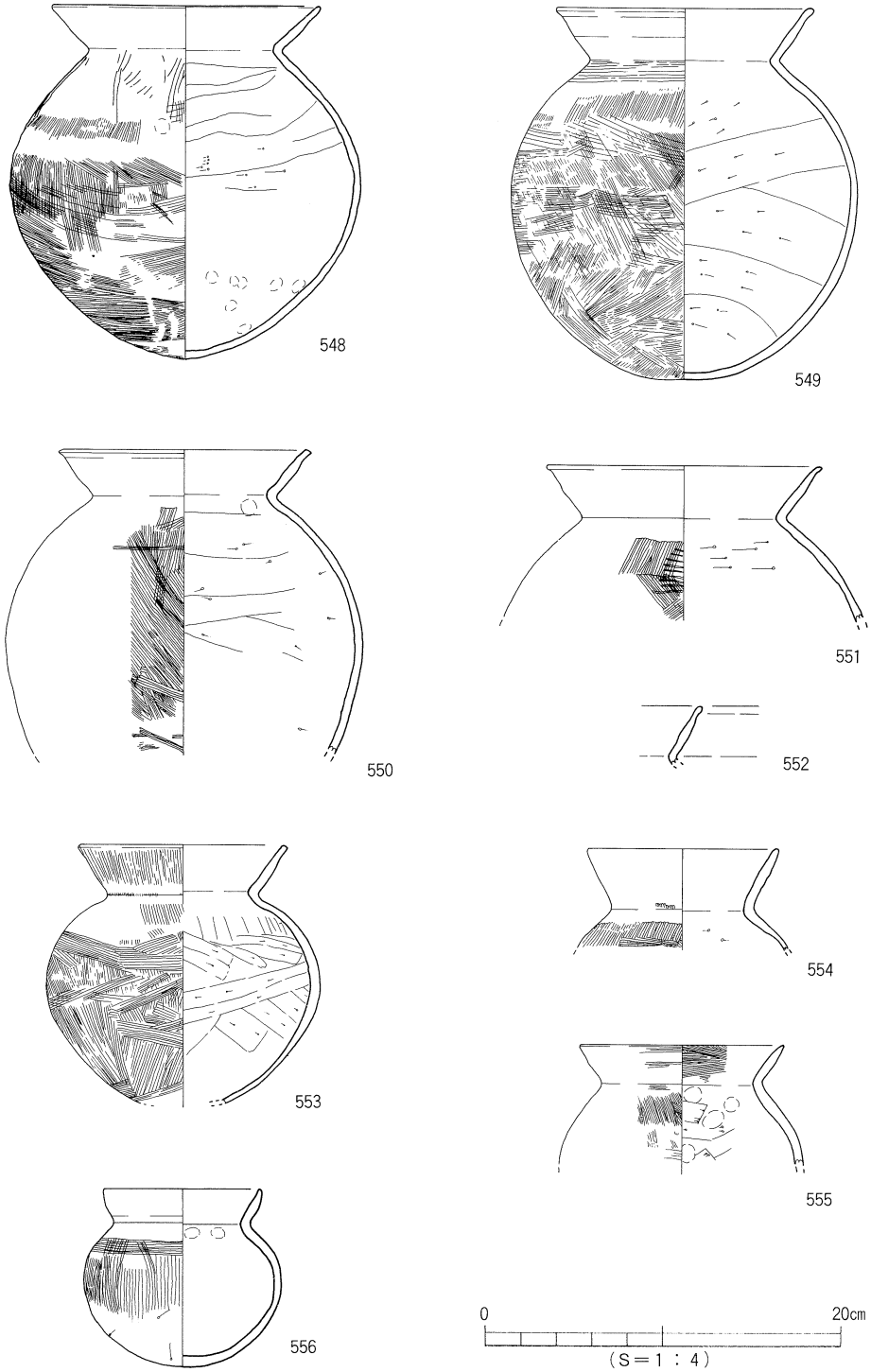




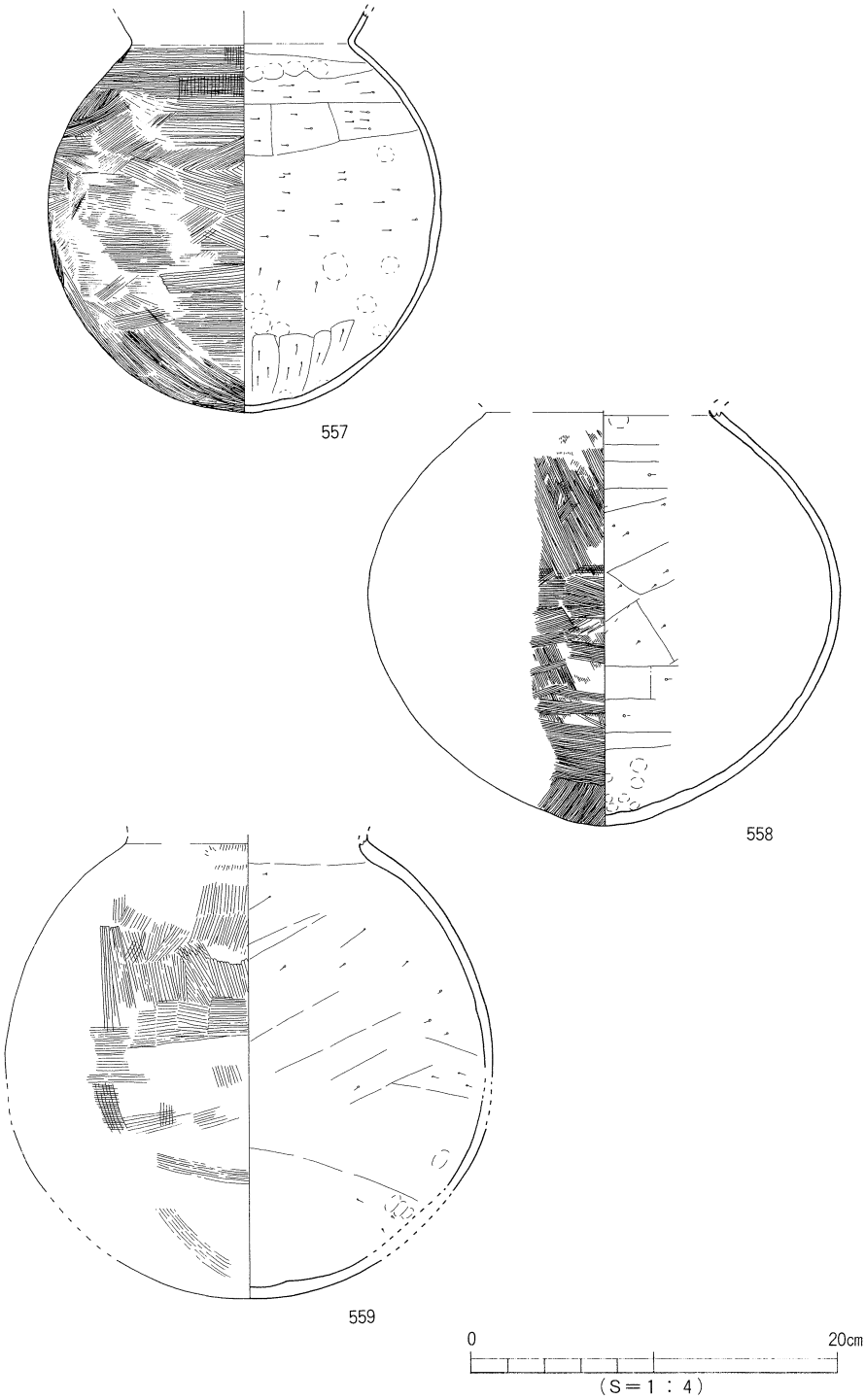
第192図　ＳＤ１出土遺物実測図（1）



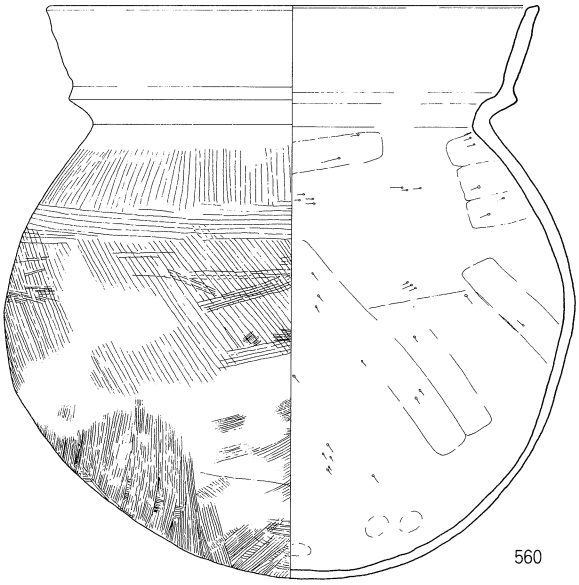
第193図　ＳＤ１出土遺物実測図（2）



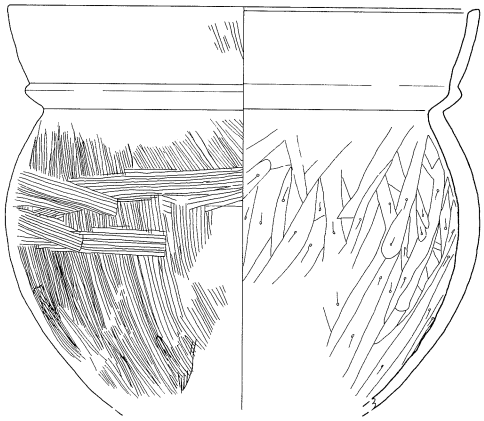
第194図　ＳＤ１出土遺物実測図（3）



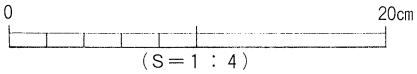
第195図　ＳＤ１出土遺物実測図 (4)



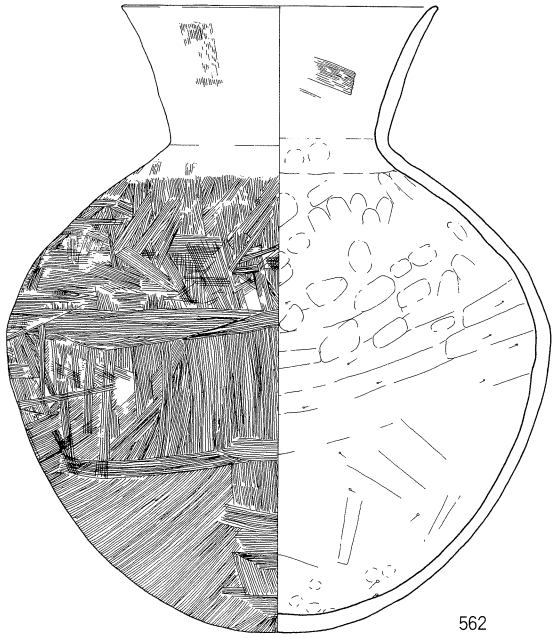
560

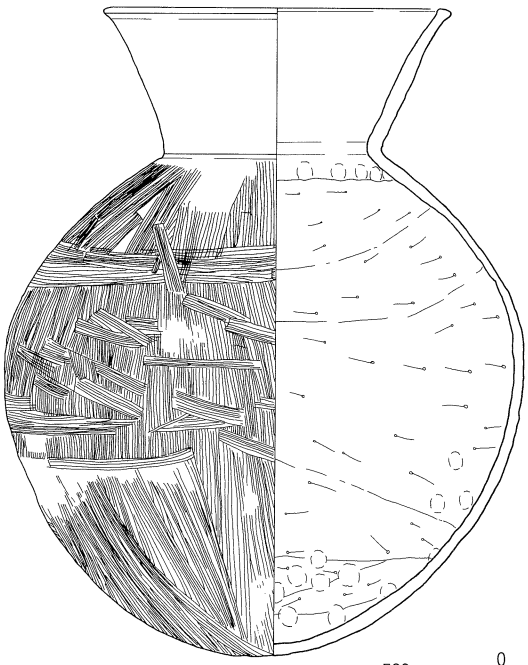


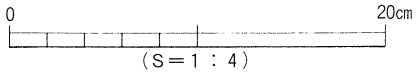
561



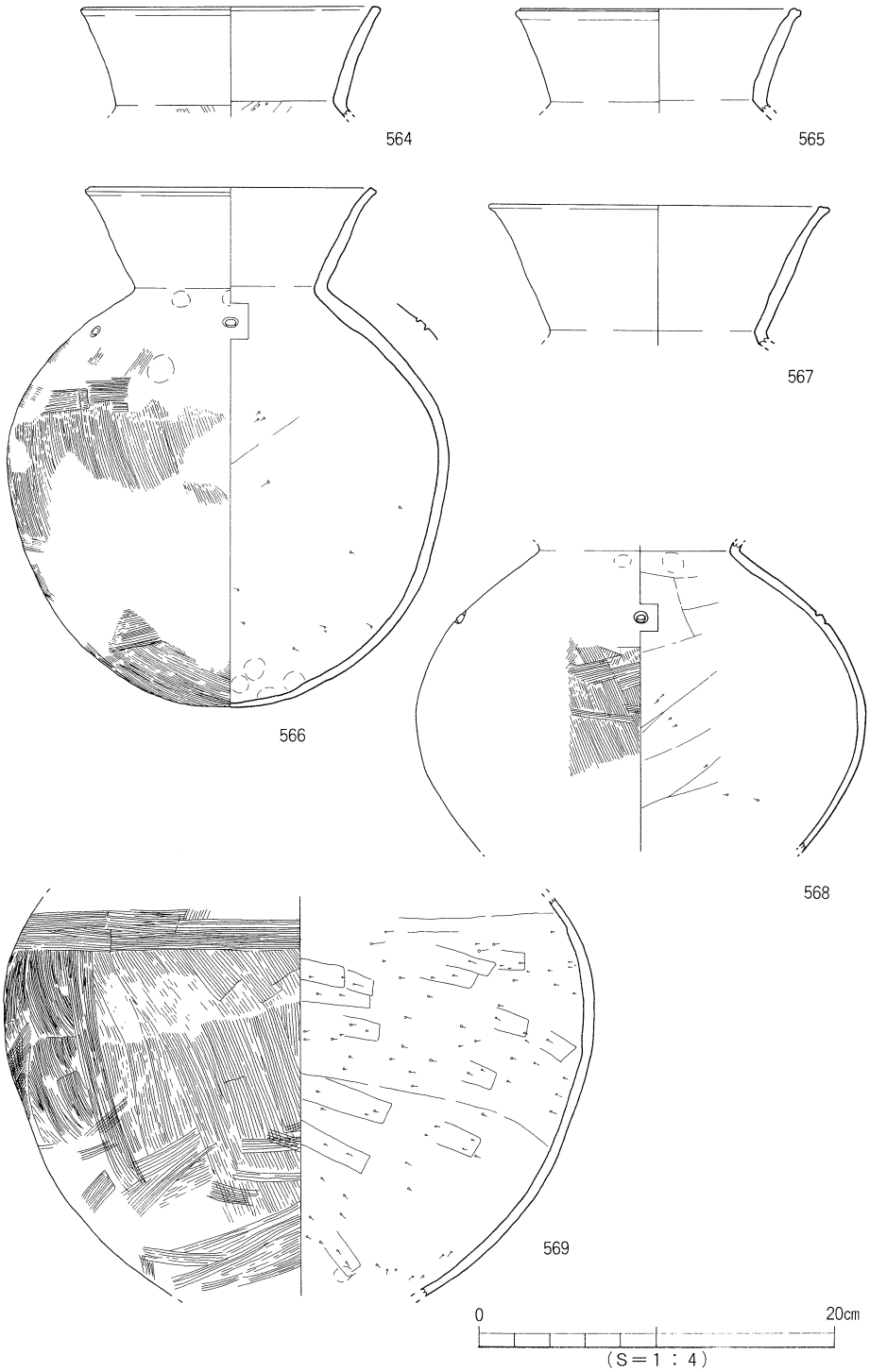
第196図　ＳＤ１出土遺物実測図（5）







第197図　ＳＤ１出土遺物実測図 (6)



第198図　ＳＤ１出土遺物実測図 (7)

564は口縁部が斜め方向に立ち上がり、端部近くからやや外反気味になる。また、端部周辺がやや肥厚している。内面には頸部直下からヘラ削りが施されている。推定口径17㎝を測る。

565は口縁部が斜め方向に立ち上がり、端部近くがやや外反気味になる。また、端部周辺がやや肥厚し、端面に浅い沈線状の窪みが１条巡る。推定口径16㎝を測る。

566は口縁部が斜め方向に立ち上がり、中位がナデによりやや肥厚している。端部近くで外反し、内外にやや肥厚している。口径16.2㎝、器高29.2㎝を測る。

567は口縁部が斜め方向に立ち上がり、端部近くがやや外反気味になる。内外にやや肥厚している。推定口径19㎝を測る。

570は口縁部が直に上方に立ち上がり、端部周辺がやや肥厚している。推定口径13㎝を測る。

571は口縁部がやや外方向に立ち上がり、端部周辺で外反している。二重口縁の段は鋭い綾である。推定口径14.6㎝を測る。

572は口縁部が直に上方に立ち上がり、端部周辺がやや肥厚している。

573は口縁部が外方向に立ち上がり、口縁端部を細く仕上げている。体部外面にはヘラ削り、その他はナデが施されている。口縁部外面の一部が煤けている。口径11㎝、器高7.2㎝を測る。

574は口縁部が外方向に立ち上がる。口縁部の外面は横ナデ、内面はハケ目が施されている。体部外面にはヘラ削り、内面には工具によるコテあてらしき痕跡がみられる。口径10.8㎝、器高7.4㎝を測る。

＊鉢＊（第199図）

575は手づくねによる小型の鉢である。内外面に指頭圧痕が残る。推定口径９㎝を測る。

576は屈曲する口縁をもつ小型の丸底の鉢である。体部外面にはヘラ削り、内面はナデが施され若干指頭圧痕が残る。口縁部内外面は横ナデが施されている。内底面は部分的に黒色で煤けていると思われる。推定口径16.6㎝、器高7.1㎝を測る。

577は大型の鉢で、やや扁平な底部をもち内湾しながら立ち上がる体部である。外面には細かいハケ目とミガキ、内面には細かいヘラ削りとハケ目が施されている。外面には、赤色顔料が塗られている。本田光子氏にこの顔料の分析をしていただき、「水銀朱」が使用されていることが解った。

＊高坏＊（第200図）

578は坏部である。やや内湾しながら立ち上がり、口縁端部周辺で外反し、細く仕上げている。内外面ともに横ナデが施されている。推定口径14.8㎝を測る。口縁端部の一部と欠損面は、黒褐色（5ＹＲ3/1）を呈している。

579は坏部である。外方向に立ち上がり、口縁端部を細く仕上げている。内外面ともに横ナデが施されている。推定口径15.4㎝を測る。

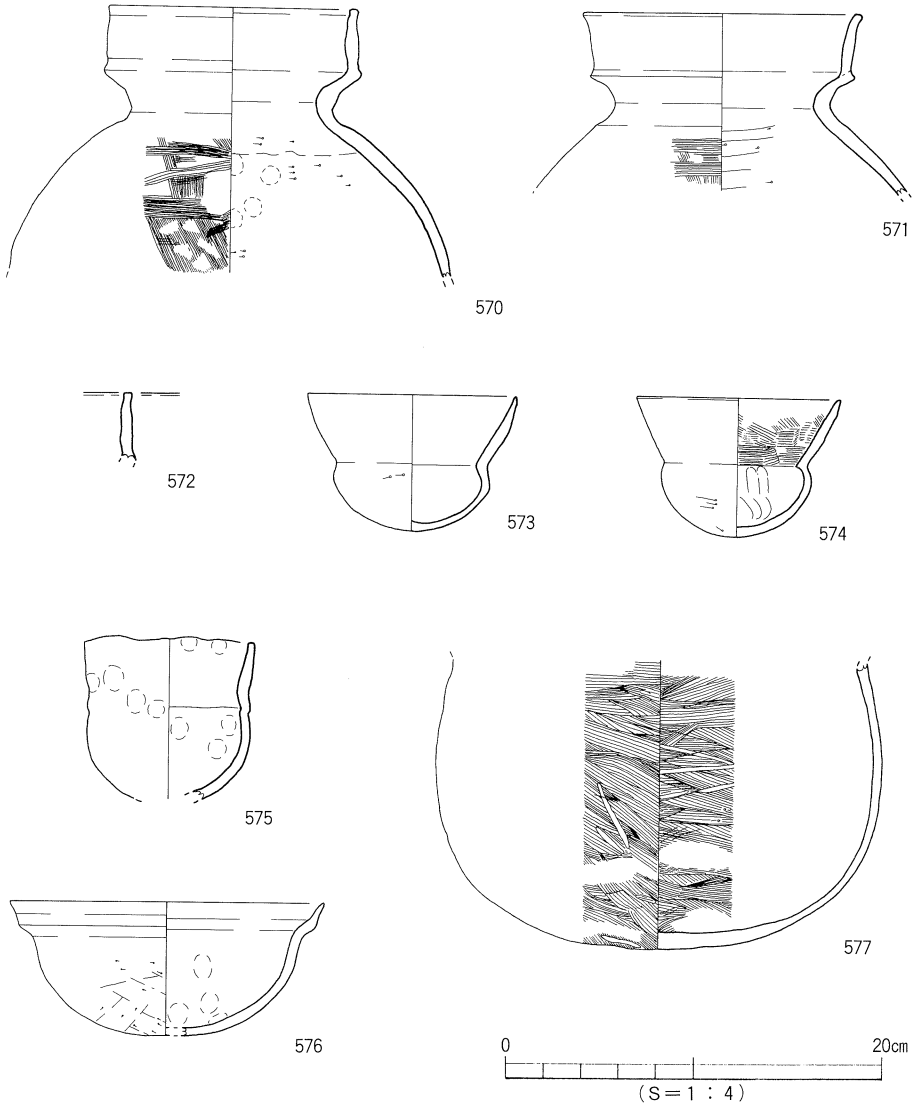
580は湾曲する脚部である。脚柱部外面の受部近くには横方向のミガキ、脚柱部から裾部

にかけて縦方向のハケ目が施されている。内面はナデが施され、受部近くにはヘラ削りが施されている。推定底径13.8cmを測る。

581は脚部の完形品である。脚柱部外面には横方向のミガキ、屈曲部から裾部にかけては縦方向のハケ目の後横ナデが施されている。内面は脚柱部の屈曲近くに横方向のミガキ、外はナデが施されている。底径12.4cmを測る。

＊椀＊（第200図）

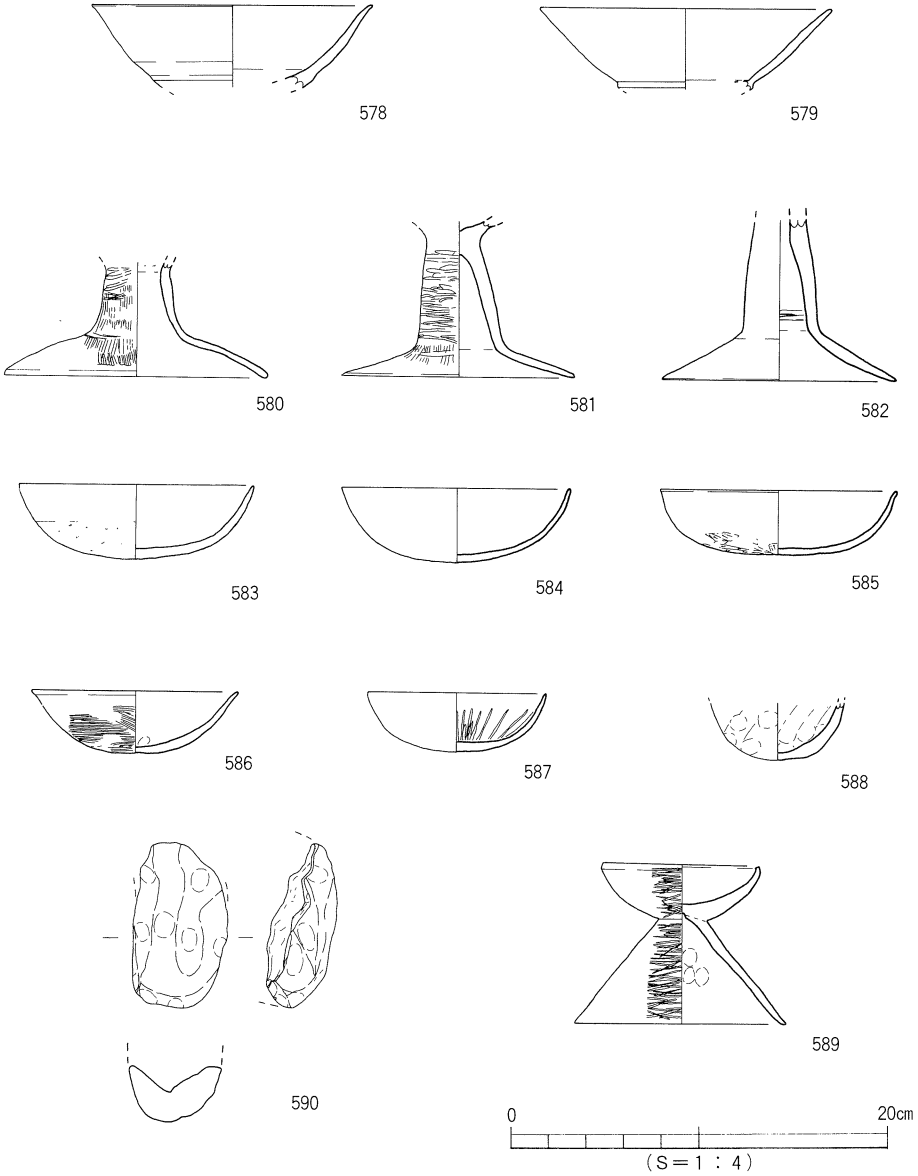
583はやや扁平な底部から内湾しながら立ち上がる。外面は口縁部周辺が横ナデ、その下半はヘラ削り、内面はナデが施されている。推定口径12.4cm、器高４cmを測る。



第199図　ＳＤ１出土遺物実測図（8）

584はほぼ完形品である。やや扁平な底部から内湾しながら立ち上がる。外面は口縁部周辺が横ナデで、その下半はヘラ削りの後ナデ、内面はナデが施されている。口径12.1㎝、器高４㎝を測る。

585はほぼ完形品である。やや扁平な底部から内湾しながら立ち上がる。外面は口縁部周辺が横ナデ、その下半はヘラ削り、内面にはナデが施されている。口径12.4㎝、器高3.4㎝



第200図　ＳＤ１出土遺物実測図（9）

を測る。

586はやや扁平な底部から内湾しなが立ち上がり口縁部が若干外反している。外面は口縁部周辺が横ナデで、その下半はハケ目、内面はナデが施されている。推定口径10.8㎝、器高3.3㎝を測る。

587はやや扁平な底部から内湾しながら立ち上がる。外面は口縁部周辺が横ナデで、その下半にヘラ削りが施されている。内面はナデの後放射状のミガキが施されている。推定口径9.4㎝、器高3.1㎝を測る。

＊手づくね土器＊（第200図）

588は底部で、内外面に指頭圧痕が顕著にみられる。

＊小型器台＊（第200図）

589は受部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部が小さく上方に立ち上がる。台部外面には横方向のミガキが施され、受部の外面にはヘラ削りの後ミガキ、口縁部内外面にはナデが施されている。台部内面は横ナデが施され、成型時の指頭圧痕がみられる。口径8.5㎝、器高8.5㎝、底径11㎝を測る。

＊土錘＊（第200図）

590は外面に指頭圧痕が顕著にみられる。外面及び欠損面は、黒褐色（5ＹＲ3/1）を呈している。

［註］

（1）西尾幸則・栗田茂敏　『宮前川遺跡調査報告書－津田第Ｉ地区（第１調査地～第２調査地）－』松山市教育委員会　1986 に掲載されていないが、実見できた。

2　出土遺物

（1）緑灰色粘土を被覆する砂礫層及び東側河川からの出土遺物（第201～206図）

＊縄文土器＊（第201図）

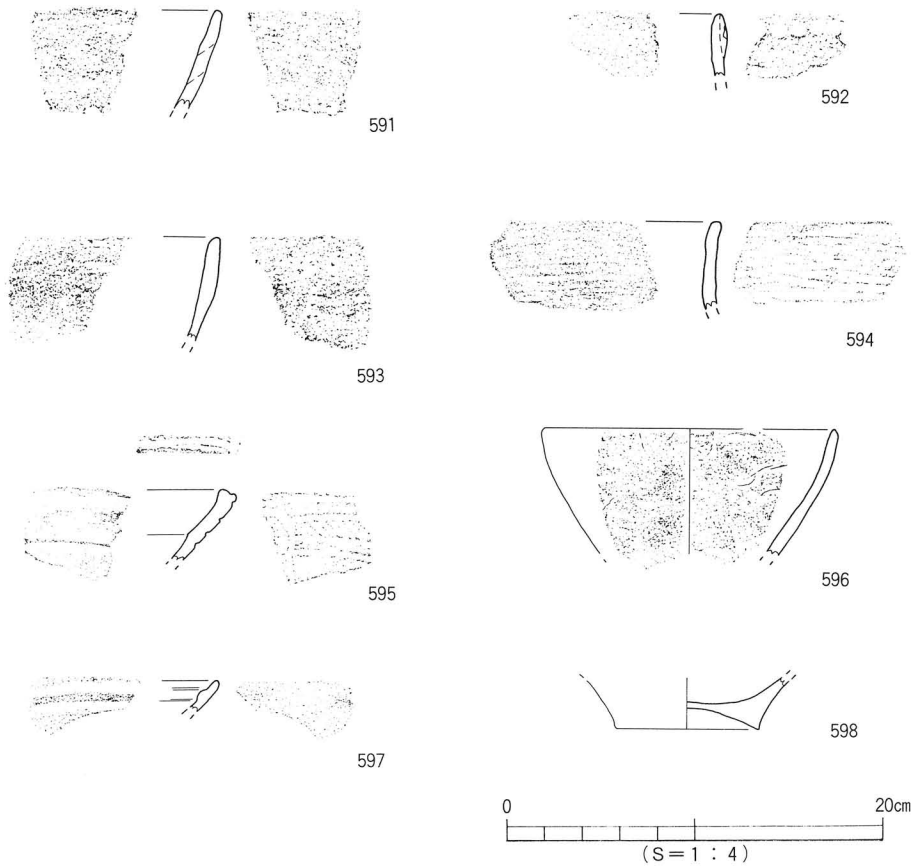
591は深鉢の口縁部である。内外面とも貝殻条痕が見られる。

592は深鉢の口縁部で、外側が肥厚している。巻き貝による円形の刺突文が連続して施されている。全体に磨滅しているため調整は不明。

593は深鉢の口縁部で、口縁部中位がやや肥厚している。

594は深鉢の口縁部で、内外面ともに貝殻条痕がみられる。N12E５出土。

595は浅鉢の口縁部で、やや波状を呈する。口縁端部に沈線と、外面には円孔され同心円状の沈線及び３本の沈線とその内側に縄文が施されている。口縁近くに１本の沈線、同心円沈線下にも縦方向の沈線が施されている。



第201図　出土遺物実測図（1）

596は粗製の浅鉢の口縁部で、推定口径15.2㎝を測る。

597は浅鉢の口縁部で、内側が肥厚している。全体に磨滅している。

598は浅鉢の底部である。上げ底を呈し、内外面とも磨滅しているため調整は不明。

＊弥生土器＊（第202～205図）

（甕）

599はやや外反する口縁部で、内外面ともハケ目が施されている。推定口径16.4㎝を測る。

600は外傾する口縁部で、体部外面は叩き、頸部はハケ目、口縁部はヨコナデが施されている。内面はハケ目が施され、頸部に明瞭な稜がみられる。推定口径22.8㎝を測る。

601は外傾する口縁部で、外面にハケ目、内面はハケ目の後にミガキが施されている。推定口径21.6㎝を測る。

602は外反する口縁部で端部を細く仕上げている。口縁部内外面ともハケ目、体部外面には叩きが施されている。推定口径15㎝を測る。

603は上げ底の底部である。底径6.6㎝を測る。中期の土器と思われる。

604は平底の底部で、外面は縦方向のハケ目が施されている。底部から外方向に直線的に立ち上がる。推定底径3.4㎝を測る。

605は平底を呈している。内面はケズリで、外面には底部にまでハケ目が施されている。底径3.4㎝を測る。N11E２出土。

606はやや小型の甕の底部である。平底を呈し、内外面ともハケ目である。底径２㎝を測る。

（壺）

607は肩部片で、木葉文が看取れる。前期の土器である。

608は口縁部である。口縁端部には擬凹線が巡り、内外面ともナデ調整が施されている。推定口径11㎝を測る。後期前葉の土器である。

610は広口壺の口縁部である。推定口径19.6㎝を測る。外面の一部と内面にハケ目が施されている。口縁端部は平坦に仕上げられている。

610は広口壺の口縁部である。外面の一部と内面にハケ目が施されている。口縁端部は平坦に仕上げられている。推定口径22㎝を測る。

611は口縁部が欠損している。丸底を呈し、外面にはハケ目が施され、内面にはナデ上げされている。

612は広口壺の口縁部で、垂下となる。口縁部外面に櫛書き波状文、頸部近くの外面にハケ目が施されている。推定口径23.4㎝を測る。

613は複合口縁壺の口縁部である。口縁拡張部には櫛書き波状文、外面にはハケ目が施されている。推定口径17㎝を測る。

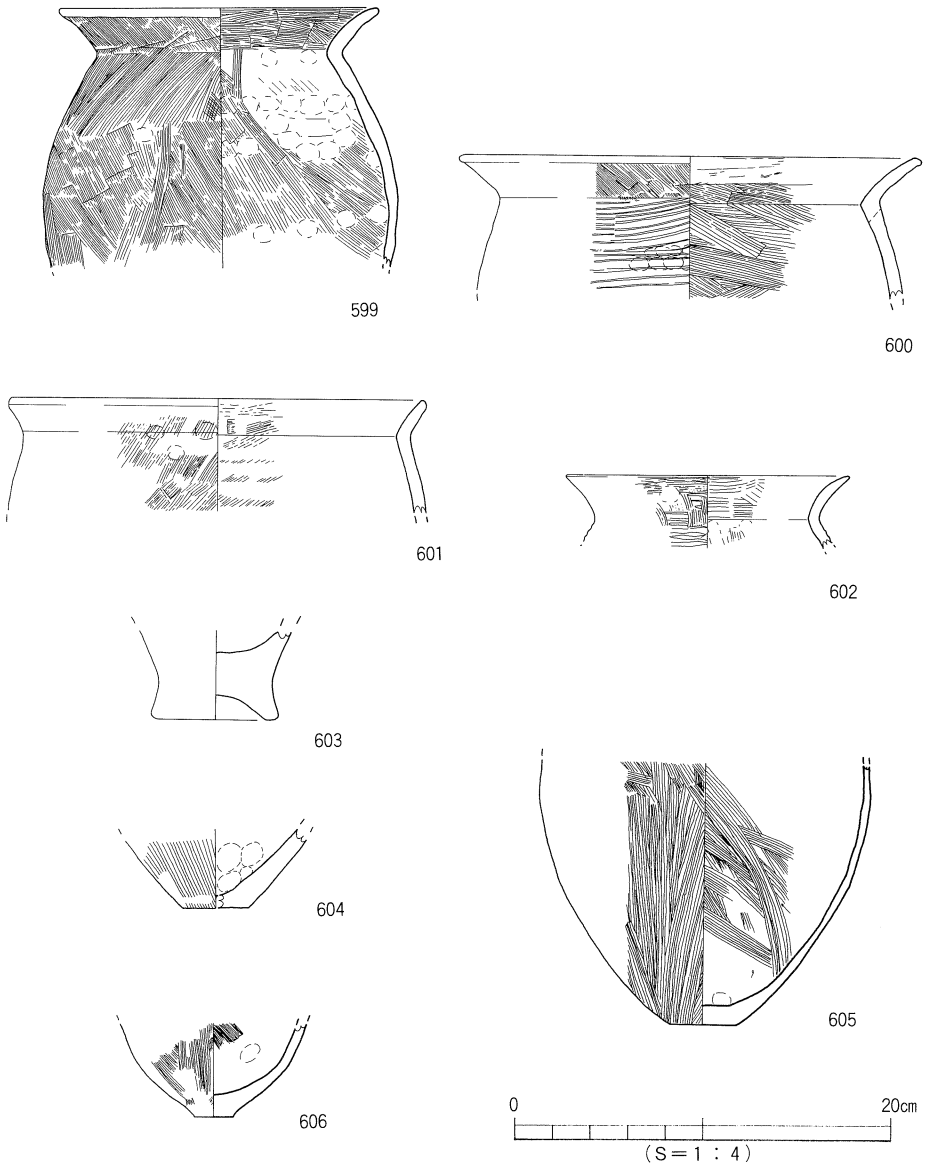
614は複合口縁壺である。口縁外面には鋸歯文が施されている。頸部以下外面にはハケ目、口縁部外面はナデが施され、口縁部内面にはミガキ、体部外面にハケ目が施されている。推

定口径18cmを測る。

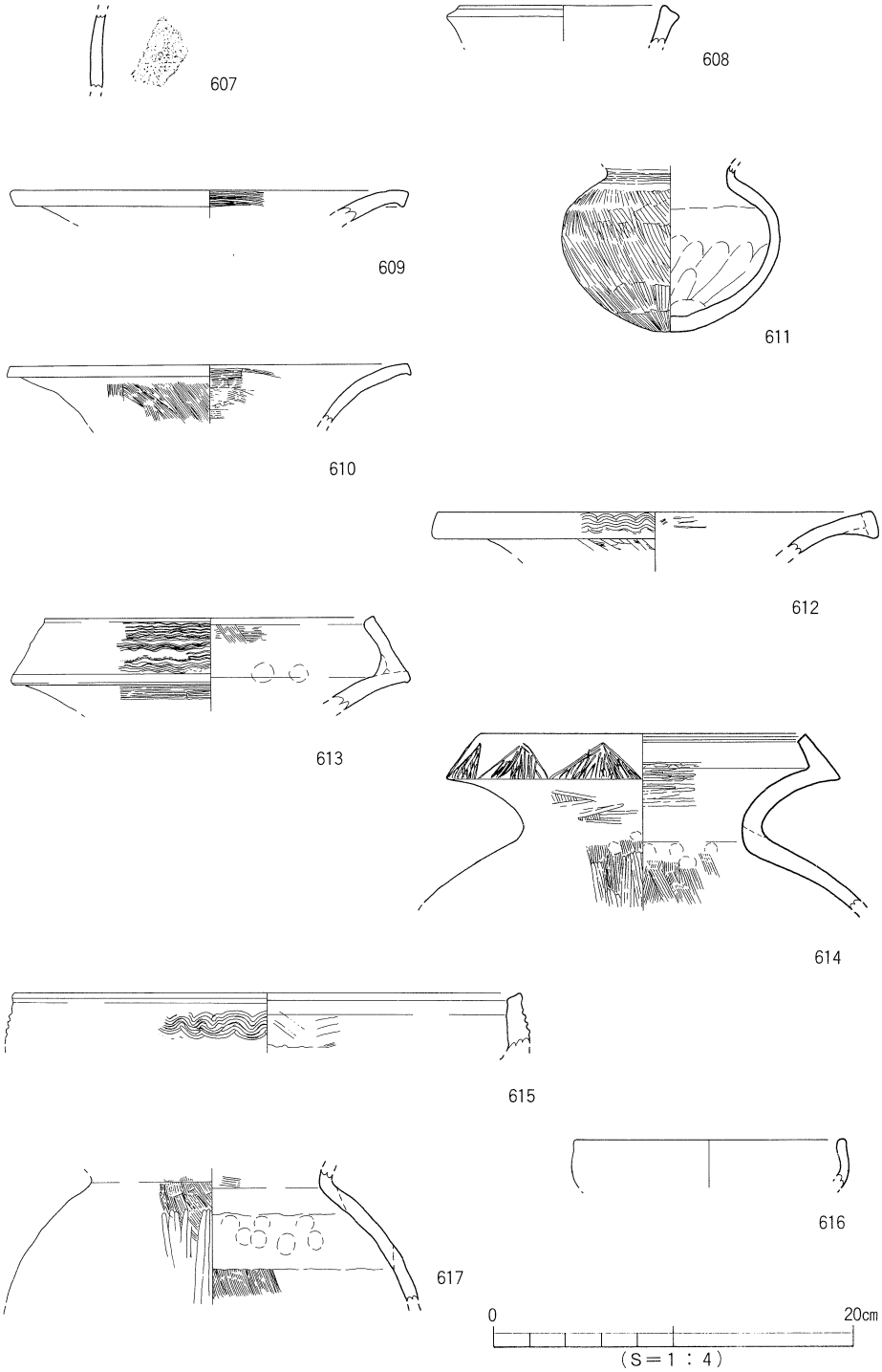
615は複合口縁壺の口縁部で、櫛書き波状文が施されている。推定口径28cmを測る。

616は複合口縁壺の口縁部である。全体にヨコナデが施されている。推定口径14.2cmを測る。

617は肩部で、外面にはハケ目とミガキが施されている。内面には接合痕がみられ指頭圧痕が残る。その下からハケ目が施されている。



第202図　出土遺物実測図 (2)



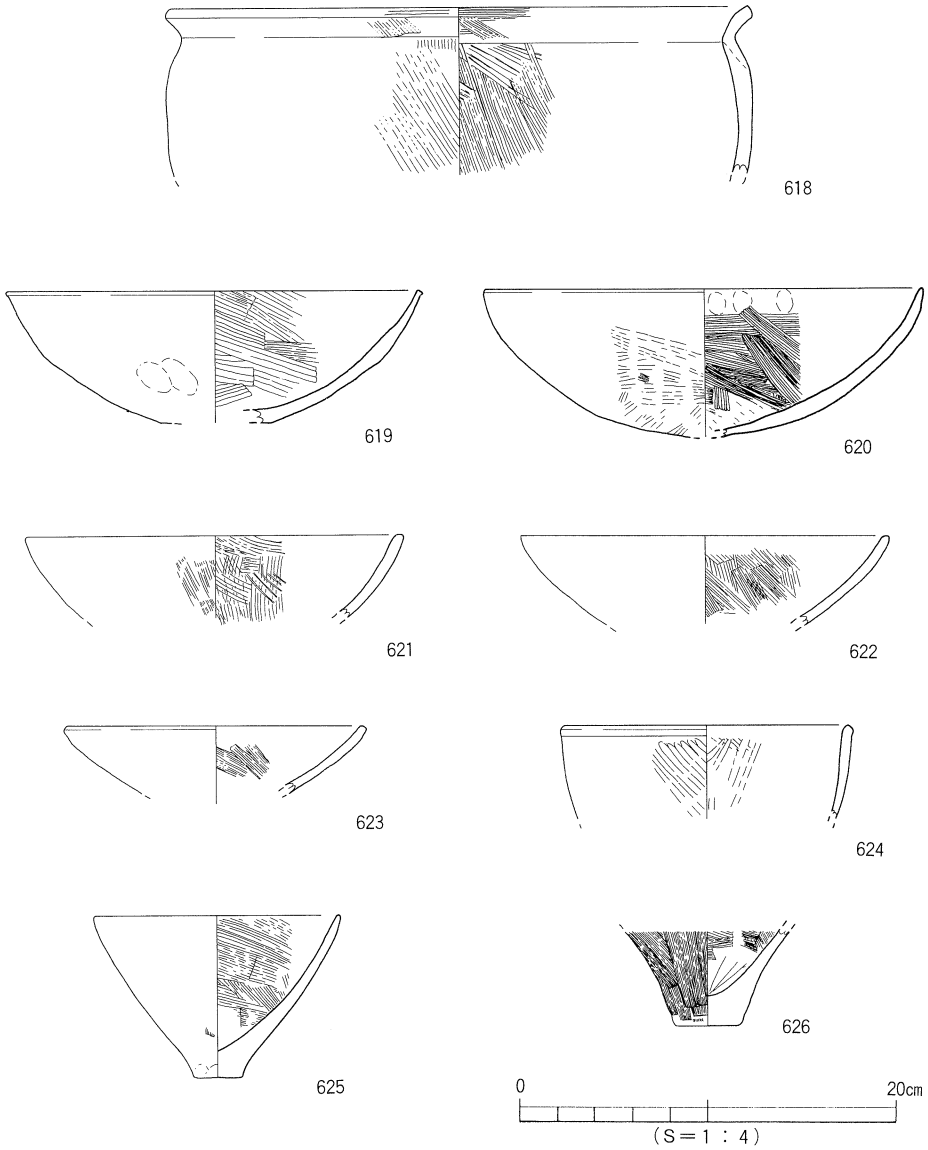
第203図　出土遺物実測図 (3)

（鉢）

618は「く」字状の口縁で、内外面ともハケ目が施されている。推定口径31㎝を測る。

619は口縁端部を平坦に仕上げ、平底を呈していると思われる。内面にはハケ目、外面はナデが施されている。推定口径21.6㎝を測る。N12E１出土。

620は口縁端部を平坦に仕上げている。内外面にはハケ目が、口縁近くはヨコナデが施されている。推定口径23㎝を測る。N11E１出土。



第204図　出土遺物実測図（4）

621は口縁端部を平坦に仕上げている。内面にはハケ目が施されている。推定口径19.6㎝を測る。

622は口縁端部を平坦に仕上げている。内面にはハケ目が、口縁近くはヨコナデが施されている。推定口径18.8㎝を測る。

623は口縁端部を平坦に仕上げている。内面にはハケ目が施されている。推定口径15.4㎝を測る。

624は口縁端部が外側にやや肥厚するもので、内外面にミガキが施され、推定口径15㎝を測る。

625は突出する平底を呈している。口縁端部は細く平坦に仕上げられている。推定口径12.8㎝、器高8.6㎝、底径2.6㎝を測る。内面にはハケ目、外面はナデが施されている。

626は突出する平底を呈している。内外面にはハケ目が施されている。底径3.5㎝を測る。

（高坏）

627は外反する口縁部である。内外面ともにミガキが施されている。推定口径27㎝を測る。

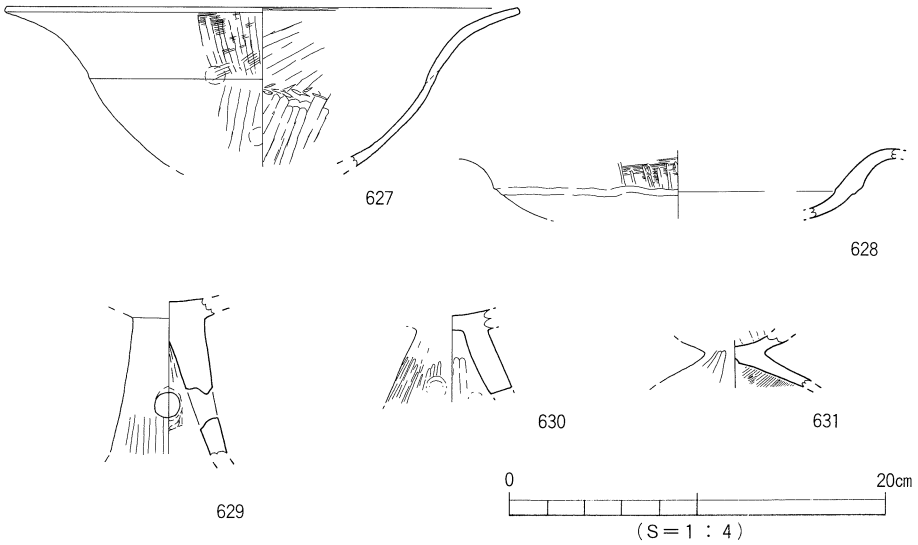
628は外反する口縁の中位部分である。内面は磨滅しているが外面にはミガキが施されている。

629は脚部で、４ケ所に円孔されている。外面にはミガキが施されている。

630は脚部で、３ケ所に円孔されている。

（台付椀）

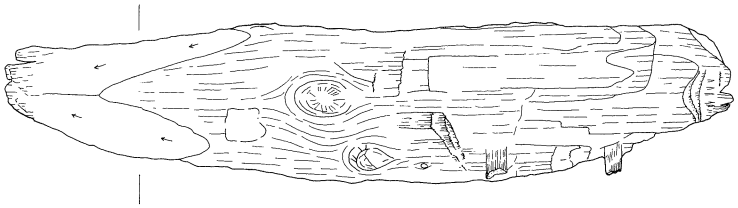
631は内面にミガキが施されている。



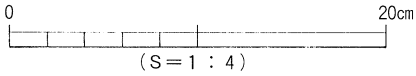
第205図　出土遺物実測図（5）

＊加工材＊（第206図）

632は杭材である。取り上げ番号緑灰色粘土の上Ｌ＝11.2ｍ。幅約８㎝、残存長約37.5㎝を測る。



632



第206図　出土遺物実測図（6）

（２）掘削中に出土した遺物（第207図）

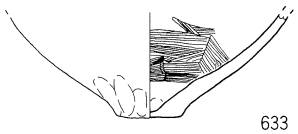
＊弥生土器＊

633は甕の底部である。突出する平底を呈している。外面は磨滅しているため調整は不明で、内面にはハケ目が施されている。推定底径3.5㎝を測る。

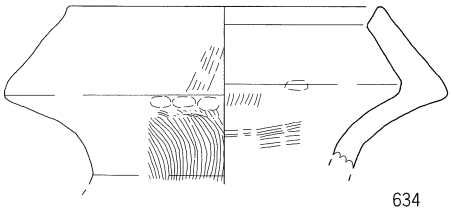
634は複合口縁壺の口縁部で完形品である。内外面ともハケ目が施され、口縁部周辺にはヨコナデが施されている。口径16.3㎝を測る。

＊土師器＊

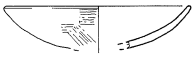
635は椀の口縁部で、内外面ともナデで、推定口径9.6㎝を測る。古墳時代の土器である。



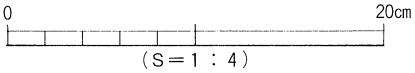
633



634



635



第207図　出土遺物実測図（7）

松山市文化財調査報告書　第53集

古照遺跡—第8・9次調査—（第1分冊）

平成8年3月31日　　発行

編　集　松山市教育委員会
〒790 松山市二番町4丁目7－2
TEL (089) 948－6605

発　行　財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923－6363

印　刷　岡田印刷株式会社
〒790 松山市湊町7丁目1－8
TEL (089) 941－9111